

目次

はじめに	3
(1) 恩赦とは何か	3
(2) 恩赦の研究史	8
第1章 古代ローマから中世にかけての恩赦	13
(1) 古代ローマにおける恩赦	13
(2) 中世の権力秩序と恩赦	16
(3) 正義と慈悲の対立？	20
第2章 アンシャン・レジーム期の恩赦	25
第1節 王令における恩赦	25
(1) 1670 年刑事王令のテキストの問題	25
(2) 1670 年刑事王令における恩赦	33
(3) 恩赦獲得までの手続き	41
(4) すべての慈悲は王より来る	48
第2節 神の赦しから王の恩赦へ	52
(1) 冤罪と恩赦	52
(2) 儀礼と恩赦	60
(3) ジャン・ボダン『国家論』における恩赦	63
第3節 フランス王国の形成と恩赦	69
(1) 恩赦権を与える国王	69
(2) 支配の道具としての恩赦	72
(3) 条件付きの恩赦	78
(4) 国王によらない恩赦	81
第3章 啓蒙の時代と恩赦	87
第1節 王権の翳りとパルルマン法院の抵抗	87
(1) パルルマン法院の建言と恩赦	87
(2) ラモワニョンの改革における恩赦	91
第2節 恩赦廃止をめぐる対立とイデオロギー	97
(1) 恩赦不要・廃止論の登場	97
(2) 恩赦をめぐる言説の交錯	104
第3節 社会の変化と恩赦	112
(1) 恩赦嘆願における変化	112
(2) 人々による恩赦権の篡奪	117

(3) 国王への「悪しき言説」と恩赦	120
第4章 フランス革命からナポレオン期にかけての恩赦	124
第1節 恩赦の廃止と復活	124
(1) 恩赦の廃止	124
(2) 恩赦復活の企て	130
(3) 恩赦の復活	133
(4) 恩赦の廃止と復権	137
第2節 恩赦制度の変化とイデオロギー	140
(1) 恩赦の廃止と王権	140
(2) 恩赦される国王	143
(3) 人民の恩赦から議会の恩赦へ	148
(4) 恩赦と君主制	150
第3節 新たな秩序の誕生と赦し	154
(1) 恩赦の廃止？	154
(2) 恩赦と大赦	157
(3) 革命を終わらせるための大赦とその失敗	160
(4) 立法府は恩赦権をもつのか？	166
(5) ボナパルト体制の成立と赦し	170
第5章 恩赦の近代史	174
第1節 法令に見る近代の恩赦	174
(1) 憲法に規定される恩赦権	174
(2) 19世紀の恩赦制度	177
第2節 19世紀の恩赦をめぐる思想	182
(1) 恩赦の脱君主化？	182
(2) 刑事政策としての恩赦	185
(3) 19世紀末の恩赦廃止論	187
第3節 政体の変遷と恩赦	190
(1) 統計からみる恩赦	190
(2) 「改革の世紀」における恩赦	202
(3) 共和制と恩赦	205
おわりに	208
 資料一覧	 212
主要参考文献	244
フランス語目次・レジュメ	260

はじめに

(1) 恩赦とは何か

「これをしたためたのは 1461 年、
時しも王がこの私を、
マンの過酷な牢獄から解き放し、
命を取り戻させてくださった折だ。
それゆえわたしは、この心臓の動く限り、
王には一切服従の他はない。
これは王ご崩御の時まで続くであろう。
ご恩(Bienfait)を忘れるわけにいくものではない。」

これは、15 世紀フランスの詩人、フランソワ・ヴィヨンが、1461 年 10 月 2 日に恩赦を獲得した際の様子を描いた作品である¹。よく知られていることであるが、ヴィヨンはパリで学士の資格を得た秀才でありながらも、素行に問題があり、1455 年から 1462 年までの間に、少なくとも 4 回逮捕されている。しかしながら、彼は 3 回ばかり、恩赦により危難を逃れている。彼のような幸運は、当時珍しいものではなかった。たとえば、新国王の即位や王妃の出産といった慶事には、監獄が開放された。ヴィヨンもまた、1457 年の王女マリー＝ドルレアンの誕生や²、1461 年の新国王の即位の際に刑を免れてきたのである³。

恩赦により救われた罪人が、国王に強い恩義を感じたことは想像に難くない。したがって、恩赦には、赦す者と赦される者を、愛着という絆により結びつけるという側面があったと言える。それゆえ、恩赦は個人的・主観的行為、あるいは、君主制的な行為であるように見える。実際、モンテスキューは『法の精神』（1748 年）で、恩赦は君主制と親和的であり、共和制においてはそれほど必要でないと述べた⁴。それに、現在の共和制下のフランスでは、新大統領が就任しても、刑務所が開放されることはない。このことは、

¹ 『遺言書』（執筆年不明）より。 *Œuvres de François Villon, préface, esquisse biographique, et bibliographie par Jean Dufournet ; établissement du texte, gloses et notices sur tous les personnages cités et sur les particularités du temps, par André Mary, Paris, 1970, p. 20.* 訳文は、宮下志朗『神をも騙す—中世・ルネサンスの笑いと嘲笑文学』岩波書店、2011 年、150、152 - 153 ページを主としているが、福田により若干変更されている。なお、「マン」とは現在のムン・シュル・ロワールである。

² デュパルクによると、恩赦は、1460 年 7 月 17 日の、王女のオルレアン入市の際に行われた。しかしながら、宮下によると、この時ヴィヨンが釈放されたという証拠はない。Duparc, Pierre, *Origines de la grâce dans le droit pénal romain et français du Bas-Empire à la Renaissance. thèse pour le doctorat en droit, Paris, 1942, pp. 113-114.* 宮下前掲書、149 ページ。

³ 宮下前掲書、153 ページ。

⁴ *Œuvres complètes de Montesquieu, t. 1, Paris, 1758 ; réimpression et publiée sous la direction de M. André Masson, Paris, 1950, t. 1, p. 126.* モンテスキュー『法の精神（上）』野田良之ほか訳、岩波文庫、2008 年、194 ページ。

恩赦と国王との結びつきを裏付けているように思われる。ところが、第3共和制期の1879年から2002年のシラク大統領の選出の時まで、フランスでは、大統領が就任するたびに大規模な恩赦が行われ、それは「共和国的伝統」とさえ呼ばれていた⁵。革命記念日の7月14日にも、同様な恩赦が実施されていた⁶。この「伝統」は人々の間に深く根付いていたようで、2012年の大統領選でも、それが行われるか否かが議論となった。結局、恩赦は行われなかったが、オランド新大統領の当選直後の5月22日には、ドラリュウ刑務所総監(contrôleur général des lieux de privation de liberté)が、収監者の超過に対応するため、新大統領による恩赦を復活させるよう求めた⁷。すなわち、2年以上前に、6ヶ月未満の拘禁刑を言い渡された者を釈放すべきだということである⁸。

大統領選後の恩赦が行われなくなったことは、恩赦それ自体が廃止されたことを意味するわけではない。現行のフランス第5共和制憲法第17条によると⁹、「共和国大統領は、個人にたいして恩赦を与える権利を有する」¹⁰。個別的恩赦は、通常、大統領が受益者を指名するのではなく、嘆願者の側が大統領に働きかけることで与えられる。嘆願を受けると、大統領は、まず司法官職高等評議会に見解を求める。その後、大統領は司法大臣、破棄院長などに諮り、最終的には、自らの良心に従って決定を下すのである¹¹。

刑を取り除くことができるのは大統領だけではない。第5共和制憲法第34条は、議会の大赦権を規定しているのである¹²。大赦は、集団的にも個別的にも与えることができ、法律

⁵ Conan, Matthieu, Amnistie présidentielle et tradition, *Revue du droit public*, n. 5, 2001, p. 1316 ; *Journal officiel de la République Française, débat Assemblée Nationale*, 28 juin 1995, p. 636. 大統領選の際の恩赦は、ある一定の枠を設け、それに該当する受刑者の刑を免除した。

⁶ Renaut, Marie-Hélène, Le droit de grâce doit-il disparaître?, *Revue de science criminelle et de droit pénal comparé*, Nouvelle édition, juillet-sept 1996, p. 600 ; Danet, Jean et al. *Prescription, amnistie et grâce en France*, Paris, 2008, pp. 316-319. ルノーが、大統領選出時や7月14日の恩赦を、「アンシャン・レジーム期と同様」、法により認められているとしていることは示唆的である。

⁷ *Journal officiel de la République Française*, n. 0136 du 13 juin 2012, p. 9962.

⁸ 6月13日に、日刊誌『20 ミニユート』電子版に掲載されたインタビューによる。20 *Minutes*, 13 juin 2012. 同日の『ル・モンド』誌によると、釈放の対象は2012年以前に言い渡され、未だ執行されていない「非常に軽い」刑罰である。Le monde, 13 juin 2012.

⁹ 本稿では、フランスの現行法はすべて政府の法令検索サイト *legifrance*

(<http://www.legifrance.gouv.fr/>) (2012年12月月訪問) から引用しており、とくに、刑法典は法務大臣官房司法法制調査部編『フランス新刑法典』法曹会、1995年を参考に訳出した。

¹⁰ 個別的恩赦は、官報には掲載されない。また、集団的恩赦も掲載されないことがある。

Renaut, art. cit., p. 598. なお、以下、本稿における強調部分は、すべて福田による。

¹¹ Jeanclos, Yves, *Droit pénal européen : dimension historique*, Paris, 2009, p. 524.

¹² 現代フランスにおける大赦の例としては、1953年のレジスタンス参加者にたいする大赦や、1959年や1964年などの、アルジェリアでの政治犯罪にたいする大赦がある。Ibid., pp. 530-531. 一般的傾向として、ヨーロッパ諸国では、大赦は頻繁には行われない。また、イギリス、ベルギー、デンマーク、スペイン、オランダには、そもそも大赦の制度自体が存在しない。イタリアでは、1992年の憲法改正により、大赦は、議会の承認を経て大統領により与えられるようになった。Les documents de travail du Sénat, Série législation comparée, L'amnistie et la grâce, 2007, pp. 7-8.

により定められた一定の範囲の者の刑罰だけでなく、公訴自体も消滅させる¹³。これより、フランスでは、大統領と議会が、同じ権限を競合して有しているような印象を受ける。実際、恩赦と大赦はしばしば混同されている。たとえば、大統領選後の恩赦にかんするニュースをインターネットでざっと検索してみても、これを「恩赦」としている記事もあれば、「大赦」としている記事もある。行う主体が異なるにもかかわらず、なぜ、このような混乱が生ずるのだろうか。その理由は、この「恩赦」が、厳密に言えば、恩赦でも大赦でもないからである。それでは、大統領の就任後に行われるのは何だったのだろうか。正確に言えば、これは、*grâce amnistiante*（大赦としての恩赦）と呼ばれるものである。この制度は、憲法に規定されているわけではないが、大統領の命により大赦法が制定されることを意味している¹⁴。

恩赦と大赦には、行う主体だけでなく、意義においても違いが見られる¹⁵。わが国においては、大赦は単に集団的恩赦を意味するに過ぎないが、語源的に考えてみると、恩赦と大赦を同視することはできない。恩赦は、フランス語では*grâce*すなわち「恩寵」という。これは、同情(*pitié*)であり、赦しを与えることを意味する¹⁶。一方、大赦は、*amnistie*といい、ギリシア語の*amnestia*、すなわち「無」を意味する*a*と「記憶」を意味する*mnesitia*からなる語に由来する¹⁷。つまり、大赦とは、行為自体を忘れることを意味する。これより、恩赦は、本質的に罪人にしか与えられないが、大赦は、犯罪の存在を前提としておらず、被疑者にも与えうるとい違いが生ずる。また、効果を見ても、恩赦は刑罰を免除するにとどまる一方、大赦は訴追自体を消滅させるという点が異なっている¹⁸。つまり、恩赦の場合に

¹³ 刑法典第 133-9 条「大赦は、刑の言い渡しの効力を失わせる。それは、還付を生ぜしめることはないが〔主刑として言い渡された没収刑がすでに執行されている場合は、大赦によってもその没収物は返還されない〕、すべての刑の取り消しをもたらす。それは、犯罪の正犯または共犯を、先の有罪判決の際に享受することのできた執行猶予の利益の享受に復帰させる。」などを参照。

¹⁴ 大赦としての恩赦が初めて行われた 1879 年の議論を見る限り、大赦としての側面よりも、大統領の恩赦としての側面に重きが置かれていたことから、本稿ではこれを恩赦の一種とした。Conan, art. cit., pp. 1308-1309 ; Duvergier, J.-B. (éd.), *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements, et avis du Conseil d'État*, t. 79, Paris, 1879, pp. 37-48. また、第 5 章第 2 節(1)も参照。

¹⁵ Soen, Violet, *La réitération de pardons collectifs à finalités politiques pendant la Révolte des Pays-Bas (1565-1598). Un cas d'espèce dans les rapports de force aux Temps Modernes?* dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice. Pratiques de la grâce (XIII^e-XVII^e siècles)*, édité par Bernard Dauven et al., Louvain, 2012, p. 98 には、集団的恩赦と大赦との違いが説明されている。

¹⁶ De Peyonnet, *Pensées d'un prisonnier*, Paris, 1834, cité dans Sermet, Ernst, *Le droit de grâce*, thèse pour le doctorat ès-science politique et économique de l'Université de Toulouse, Toulouse, 1901, p. 18.

¹⁷ Merle, Louis, *Des causes de cessation des peines : de l'"Amnestia", de l'"In integrum restitutio damnatorum" et de l'"Indulgentia", en droit romain. De l'amnistie, de la grâce, de la libération conditionnelle et de la réhabilitation en droit français*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Poitiers, Poitiers, 1889, p. 114.

¹⁸ 1839 年 7 月 19 日の判例を参照。ただし、現代の通説は、大赦により行為の有罪性が取

は、犯罪の存在はそのまま残るが、大赦であれば、犯罪の存在は遡及的に消滅する¹⁹。恩赦は未来を、大赦は過去を見ているのである。

しかし、恩赦と大赦の違いがはっきりと意識されるようになったのは、フランス革命期以降のことに過ぎない。アンシャン・レジーム期には、すべての正義は国王に由来すると考えられていた。正義は、後期中世以来、国王の本質的な使命であると同時に、その権力の基盤でもあり、目的でもあった²⁰。したがって、その行使を意味する裁判権が国王の手にあることは、当然の帰結であった。ただ、そのことは、国王がすべての裁判に自ら関与したことを意味するわけではない。通常は、各地の裁判官が、国王から委任された正義を行使していた。このような裁判権を、委任裁判権という。他方、国王自ら行使する裁判権を、留保裁判権という。恩赦権は国王の専権であるから、留保裁判権に属するものとして理解されることが多い。ところが、セルメは、恩赦権は裁判権というよりも、むしろ主権者による法律の免除の権限（*jus dispensandi*）であると言う²¹。たしかに、セルメの言うことにも一理あるだろう。刑罰が確定した後に恩赦が与えられた場合、それは裁判権の作用とはいえない。しかし、もし裁判の途中で恩赦が与えられたなら、それはある意味で裁きを下している。ともあれ、重要なのは、恩赦権が裁判権に属するのか否かよりも、恩赦権が第一に国王大権だったということであろう。実際、アンシャン・レジームの王たちは、頻繁に恩赦を行ってきた。しかし、なぜ、彼らは赦しを与えたのだろうか。フーコーは、『監獄の誕生』（1975年）で、罪人の身体に直接作用する過酷な刑罰が、王権の強化を促したと述べたが²²、恩赦は、こうして作り上げた服従の体系を破壊するのではないだろうか。

恩赦の存在意義にかんする疑問を解決するひとつの糸口として、恩赦の法的な意義に注目できるかもしれない。アンシャン・レジーム期には、実体法としての「刑法典」が存在しなかったため、それによって生じうる法律上の不備を補うために恩赦があると考えられてきた。しかし、刑法の不存在に起因する不都合は、刑法典を制定すれば解決することができる。実際、18世紀後半の啓蒙期には、ベッカリーアをはじめとする刑法改革論者が罪刑法定主義を掲げる一方で、これに矛盾するとして、恩赦の廃止を主張している。ベッカリーアによると、確実に緩和された刑罰こそが正義であって、誰かひとりの者にだけ特別に例外を設ける恩赦は不要であり、有害でさえある²³。この主張は革命期の議会に受容され、

り除かれるとしている。*Recueil général des lois et des arrêts, en matière civile, criminelle, administrative et de droit public*, rédigé depuis 1831 par L.-M. Devilleneuve et al., t. 39, Paris, 1839, pp. 984-985 ; Danet et al., *op. cit.*, p. 200.

¹⁹ ただ、フランスでは、2002年8月6日の法律により、大赦後にも警察の情報ファイルは残されることが定められた。Danet et al., *op. cit.*, p. 256.

²⁰ Krynen, Jacques, *L'idéologie de la magistrature ancienne*, Paris, 2009, p. 17.

²¹ Sermet, *op. cit.*, pp. 12-13.

²² Foucault, Michel, *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, Paris, 1975. ミシェル・フーコー『監獄の誕生—監視と処罰—』田村淑訳、新潮社、1977年。

²³ ただし、ウィットマンによる、刑事司法システムの「穏和」あるいは「過酷」にかんする10項目の基準によれば、運用しだいでベッカリーアの主張するシステムが「過酷」とな

フランス初の刑法典、1791 年刑法典は、重罪にたいする恩赦を全面的に廃止した。しかし、刑の個別化などの観点から、恩赦の復活が求められるようになり、共和暦 10 年（1802 年）に、再び恩赦制度が設けられた。19 世紀には、恩赦は、刑期の調整のために積極的に用いられることになる。恩赦は、法規定の一般性に伴う不都合を是正する側面ももっているのである。

しかしながら、個々の事情への対応は、恩赦以外の方法によっても可能である。したがって、刑法の補完という役割をもって、恩赦の存在を説明することはできない。しかも、恩赦は、本来科されるはずの刑罰を免除するがゆえに、犯罪を誘発する恐れがある。それゆえ、2006 年、当時のサルコジ内務大臣は、自分が大統領になった暁には恩赦を廃止すると述べ、翌年の大統領就任の際に、その言葉を現実のものとした²⁴。ただ、フランス革命期とは異なり、今回の恩赦の「廃止」は法改正を伴わず、したがって、刑法典などの条文には、「恩赦」の文字は存続した²⁵。さらに、2008 年 7 月 23 日の憲法改正により、憲法第 17 条に、「個人にたいして」との言葉が挿入された。つまり、不特定多数への恩赦は認められないが、誰か特定の人への恩赦には問題がないというのである。というのも、当時の大統領官邸によると、集団的恩赦が廃止されるのであれば、個別的恩赦により、模範的行為の教訓を示す必要があるからである。こうして、この年の 12 月 23 日、サルコジ大統領は、27 名にたいし個別的恩赦を与えた²⁶。その 27 人の中には、汚職の罪に問われていたかつてのヴァール県知事で、1988 年のレバノン捕虜の解放にかかわった、ジャン＝シャルル・マルシアニも含まれていた。実は、この恩赦のきっかけとなったのは、彼の破棄申立が棄却されてからわずか 1 ヶ月後の、レバノン捕虜の解放 20 周年を祝う式典であった。したがって、今回の恩赦は明らかに彼をターゲットとしている。大統領の判断により、マルシアニは減刑されたのである²⁷。しかも、クリスマスの 2 日前に。まさにこの行いは、キリスト教の權威を統治に利用したアンシャン・レジームの国王を思わせるものであった。実際、12 月 25 日の『フィガロ』誌電子版は、「社会党はマルシアニの恩赦に「君主の行い」を見た」と掲げている。この「君主の行い」にたいし、当時の社会党書記長マルティヌ・オブリは「すべての人に同じ規範が適用されないで、正義といえるのか」との批判をぶつけてい

り、刑罰を個別化し、事情に応じて恩赦を与える方が、むしろ「穏和」と言える可能性がある。ジェイムズ・Q・ウィットマン『過酷な司法—比較史で読み解くアメリカの厳罰化—』伊藤茂訳、雄松堂出版、2007 年、45 - 48 ページ。

²⁴ Garnot, Benoît, *Histoire de la justice. France, XVI^e -XXI^e siècle*, Paris, 2009, pp. 440-441.

²⁵ たとえば、刑法典第 133-7 条「恩赦は刑罰の執行の免除のみをもたらす。」同第 133-8 条「恩赦は、被害者にたいしては、違法行為を原因とする損害の賠償を得る権利の妨げとはならない。」

²⁶ うち 22 人が部分的恩赦、残りの 5 人が即時釈放である。 *Le Monde*, 25 décembre 2008.

²⁷ このような、政治的意図の透けて見える恩赦は、現代のアメリカでしばしば問題とされている。アメリカにおける事例については、大林啓吾「統治原理と権力分立原理（2）—憲法秩序の構成要素としての恩赦権—」『帝京法学』第 26 巻第 2 号、2010 年、135 - 143 ページを参照。

る²⁸。さらに、サルコジ自身、内務大臣時代に、大統領選後の恩赦の廃止は「より君主的で
ない」大統領を目指すために行われると述べているのである²⁹。

わが国を見ても、天皇の即位や崩御、さらには、皇太子成婚に際して恩赦や大赦が与え
られてきた。その理由には、1989年の昭和天皇崩御による恩赦を例にとれば、「天皇陛下の
崩御という国家的大事なのだから、ある程度罪人たちにも恩恵を与えるのがよいだろう」
といった、君主としての天皇をイメージさせるものが見られる³⁰。日仏のこれらの事例から
すると、恩赦は、現代国家における前近代的残滓とすることができるかもしれない。しか
し、それだけで、歴史を通じて恩赦が存在することを説明できるのだろうか。仮に、恩赦
の存在意義が君主制の名残に尽きるのであれば、フランスの大統領選後の恩赦は、「共和国
的伝統」として、140年近くも生き続けることができたであろうか。

(2) 恩赦の研究史

恩赦は、近代刑事法との関連でも重要な意義をもつが、わが国では、これまで、以下の
ような成果が上げられてきた。戦前には、穂積八束や美濃部達吉の研究があった³¹。現代に
は、法務省保護局恩赦課などによる実務的な見地からの文献も比較的多く見られる。一例
を挙げると、1989年には複数の法律雑誌が恩赦を扱っており³²、2004年にも、恩赦の特集
を組んだ雑誌が出されている³³。研究論文では、本稿との関係でいうと、2009年、2010年
の、大林啓吾による英米の恩赦の歴史についての研究や³⁴、2007年の佐々木高雄「恩赦令
の成立経緯」が重要である³⁵。また、佐々木は、2006年にも関連する論文を発表している³⁶。
日本法制史分野には、寺崎修の明治憲法発布時の大赦にかんする資料などもある³⁷。前近代
の日本における恩赦については、古くは戦前の高柳論文や1944年の中村論文などがあるが
³⁸、1990年代以降を見ると、佐竹昭や磯部隆が古代における恩赦について明らかにしてお

²⁸ *Le Figaro*, 25 décembre 2008.

²⁹ *Le Monde*, 18 juillet 2006.

³⁰ 植松正「恩赦随想」『法律のひろば』第44巻第4号、1989年4月、4ページ。

³¹ 穂積八束「憲法上ノ赦免大権ト新刑法案ノ刑ノ執行ノ猶予及免除」『法学新報』第13巻
第1号、1903年、美濃部達吉「恩赦ニ就テ」『法学協会雑誌』第30巻第11号、1912年。

³² 『法律のひろば』第44巻第4号、1989年4月や、『ジュリスト』第934号、1989年6
月など。

³³ 『更生保護と犯罪予防』第142号、2004年3月。

³⁴ 大林前掲論文。(1)は『帝京法学』第26巻第1号、2009年に掲載されている。

³⁵ 佐々木高雄「恩赦令の成立経緯」『法政理論』第39巻第4号、2007年。

³⁶ 佐々木高雄「日本国憲法下での恩赦制度」『青山法学論集』第48巻第1・2合併号、2006
年。

³⁷ 寺崎修「明治憲法発布の大赦令関係資料—裁判所別未決犯罪表と赦免者名簿—」『政治学
論集』第34巻、1991年。この大赦の対象は、「皇室ニ対スル罪」「内乱ニ関スル罪」など
の重大犯罪であった。

³⁸ 高柳の研究は、戦後のものとともに高柳真三『江戸時代の罪と刑罰抄説』、有斐閣、1988
年、に収録されている。また、中村哲「恩赦権の史的基礎」(中村哲『国法学の史的研究』、

り³⁹、遠山佳治、神保文夫による江戸時代研究なども見られる⁴⁰。江戸期については、最近でも、谷口眞子、安高啓明、野口朋隆らにより成果が出されている⁴¹。東洋法制史の分野では、佐立春彦、石岡浩の古代東アジア研究などがある⁴²。しかし、西洋の恩赦の歴史については、池田利昭による、15・16世紀のドイツ・ニュルンベルクの犯罪と刑罰を取り巻く研究や、栗原眞人による、18世紀イギリスの刑事裁判にかんする研究などで言及されている程度である⁴³。また、フランス関係では、近江吉昭の、中世フランスにおける農民一揆の研究に恩赦状が用いられているくらいで、恩赦そのものを扱った文献はほとんどない⁴⁴。

フランス刑法史全体に視野を広げると、アンシャン・レジーム期からナポレオン期にかけての研究が多く見られる。重要なものを一部挙げると、埴浩、中村義孝、沢登佳人、鈴木教司らにより、翻訳資料が多く出されている⁴⁵。また、石井三記は、啓蒙期の刑法改革運

日本評論社、1949年、所収）も参照。

³⁹ 佐竹昭『古代王権と恩赦』雄山閣出版、1998年、磯部隆『東大寺大仏と日本思想史—大仏造立・再興の意味を問う—』大学教育出版、2010年。

⁴⁰ 遠山佳治「尾張藩における恩赦制と寺院—尾張東照宮別当院の尊寿院をめぐる—」『名古屋女子大紀要（人文・社会編）』第46号、2000年、神保文夫「福井藩の追放赦免制度」『法史学研究会会報』第10号、2005年。

⁴¹ 谷口眞子「恩赦をめぐる幕府権威と仏教世界」（井上智勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会2 国家権力と宗教』吉川弘文館、2008年、所収）同「岡山藩における将軍回忌法要の恩赦」『史観』第165冊、2011年、安高啓明「江戸幕府裁判制度に関する一考察—長崎奉行所を事例として」（鈴木秀光ほか編『法制史学会六〇周年記念若手論文集 法の流通』慈学社、2009年、所収）、野口朋隆「佐賀藩鍋島家における恩赦の構造と変容」『歴史学研究』第862号、2010年。

⁴² 佐立春人「高句麗新大王二年の赦書について」『古代文化』第44巻第4号、1992年。同「新羅文武王九年の赦書について（一）（二・完）」『法学論叢』第131巻第1号、第5号、1992年。石岡浩「漢代刑罰制度における赦の効用——弛刑による刑罰の緩和——」『史観』第143号、2000年。

⁴³ 池田俊昭『中世後期ドイツの犯罪と刑罰—ニュルンベルクの暴力紛争を中心に—』北海道大学出版会、2010年、栗原眞人『一八世紀イギリスの刑事裁判』成文堂、2012年。

⁴⁴ 近江吉明「ジャックリー蜂起における蜂起衆の成立とその展開——「特赦状」の分析から——」『専修人文論集』第56号、1995年。

⁴⁵ 埴の翻訳書は数多くみられるが、本稿との関係で最も重要なのは、19世紀フランスの公法学者エスマンの著作などを集めた『フランス刑事法史』信山社、2000年、である。中村は、1971年に内田博文との共訳で「資料 フランス一七九一年刑法典」を『立命館法学』第96巻に発表している他、1999年には「資料 ルイ—四世一六七〇年刑事王令」を『立命館法学』第236号に掲載し、さらに、『フランス憲法史集成』法律文化社、2003年、『ナポレオン刑事法典資料集成』法律文化社、2006年といった資料集を出版している。沢登は、フランス革命期の刑事法や、それに関連する議会での議論の翻訳を発表している。その一例として、「邦訳・大革命期フランスの刑事訴訟立法（その一）治安警察、刑事司法および陪審制の設置にかんするデクレ（一七九一年九月一六日—二九日）（資料）」『法政理論』第17巻第1号・第2号、1984年がある。鈴木は、アンシャン・レジーム期の刑法を中心に翻訳や法学書の解説を行っている。たとえば、『フランス刑事諸王令』2008年、「中近世フランスの刑罰について（一）（二）」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科』第8号、第9号、2000年がある。

動を中心に、アンシャン・レジームから革命期までの刑法の変容を明らかにした⁴⁶。しかし、これらの研究も、恩赦の問題に正面から取り組んでいるわけではない。

フランスでは、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、恩赦の歴史にかんする学位論文がいくつ提出された⁴⁷。しかし、当時の研究は、主に制度史的なものにとどまっていた。1970 年には、フォヴィオにより、古代から現代に至るまでの、フランスにおける恩赦の歴史が明らかにされたが⁴⁸、この研究にも同様な問題があった。一方、この時期から盛んに行われるようになった社会史的研究は、実際の恩赦状を手掛かりに、人々の生活やクリミナリテ（犯罪の数量的考察）を明らかにした。デイヨン『監獄の時代』（1975 年）の第 7 章には、リール大学の修士課程の学生のうち、何人かがこの種の研究を行ったことが書かれている⁴⁹、80 年代にはデーヴィスの『古文書の中のフィクション』（1987 年）、ミュシャンブレッドの『村の暴力』（1989 年）なども登場した⁵⁰。現在でも、ポッターらによる成果が見られる⁵¹。しかしながら、これらの社会史的研究の多くは、恩赦状を道具として用いるにとどまり、恩赦そのものにたいする考察を十分に行っているとはいえない。

恩赦そのものに焦点を当てた研究を、ごく最近のものを中心に見てみると、まず、2011 年のアバドの大著を挙げることができる⁵²。彼は、膨大な一次資料を用いて、18 世紀の恩赦嘆願にかかわる諸アクターの行為などを明らかにした。18 世紀の恩赦については、2007 年にも、コーエンが、実際の嘆願やそれが認められた数などから、訴訟手続きの職権化を背景とする、世紀前半と後半の傾向の違いを分析した⁵³。書状の内容の変遷にかんして言うと、15 世紀から 18 世紀のアンジューを扱ったミュザンらの研究もある⁵⁴。17 世紀であれば、フェルナンデス＝ラコートが、世紀前半の、ルイ 13 世時代の政治裁判と恩赦との関係

⁴⁶ 石井三記『18 世紀フランスの法と正義』名古屋大学出版会、1999 年。

⁴⁷ たとえば、Sermet, *op. cit.* ; Viaud, Jean, *Le droit de grâce à la fin de l'Ancien Régime et son abolition pendant la Révolution*, thèse pour doctrat ès droit de l'Université de Paris, Paris, 1906 ; Rulleau, Charles, *De la grâce en droit constitutionnel*, Thèse pour le doctorat de droit, Bordeaux, 1911 など。

⁴⁸ Foviaux, Jacques, *La rémission des peines et des condamnations. Droit monarchique et droit moderne*, Paris, 1970.

⁴⁹ ピエール・デイヨン『監獄の時代〔近代フランスにおける犯罪の歴史と徴治監獄体制の起源に関する試論〕』福井憲彦訳、新評論、1982 年。

⁵⁰ Davis, Natalie Zemon, *Fiction in the Archives : Pardon Tales and Their Tellers in Sixteenth-Century France*, Stanford, 1987 （邦訳『古文書のなかのフィクション——六世紀フランスの恩赦嘆願の物語——』成瀬駒男ほか訳、平凡社、1990 年）；Muchembled, Robert, *La violence au village. XV^e-XVII^e siècle*, Turnhout, 1989.

⁵¹ Potter, David, 'Rigueur de justice' : Crime, Murder and the Law in Picardy, Fifteenth to Sixteenth Centuries, *French History*, v. 11, n. 3, 1997.

⁵² Abad, Raynald, *La grâce du roi*, Paris, 2011.

⁵³ Cohen, Déborah, La procédure de grâce au XVIII^e siècle : restaurer un ordre ou reconnaître l'innocence?, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 54, n. 2, 2007.

⁵⁴ Musin, Aude et al., Les récit de rémission dans la longue durée de l'Anjou XV^e au XVIII^e siècle, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 57, n. 4bis, 2010.

について言及している⁵⁵。16 世紀についての成果を見てみると、2003 年と 2010 年に、ナシエが、国王の王国巡回時の恩赦を研究した⁵⁶。後期中世の恩赦についていえば、2010 年に、1991 年のゴヴァールの 2 巻本が 1 巻本として再出版された⁵⁷。2011 年にも、スマジュが 14 世紀から 15 世紀にかけての、フランドル地方における反乱の際のディスクールから、恩赦と刑罰との関係を考察している⁵⁸。また、2012 年には、ボシャナらにより、15 世紀の、ボルドー市の反乱にたいする恩赦について議論がなされている⁵⁹。さらに、同年には、13 世紀から 17 世紀にかけてのフランスとオランダにおける恩赦について、裁判外手続や地方権力との関係を主眼とした論文集出版された⁶⁰。加えて、2007 年と 2011 年に、古代ローマにおける恩赦の概念に焦点を当てた学位論文などが出された⁶¹。

ところが、フランス革命期以降の恩赦にかんする研究は、2012 年の、ブールによる 19 世紀の「若者」にたいする恩赦の研究と⁶²、2007 年の、コルテルによる 20 世紀初頭の復権にかんする論文以外にはほとんど見当たらない⁶³。さらにいえば、最近の研究の中には、恩赦の実態に注目するあまり、その背景にある法的な側面や思想的な側面、さらにいえば、恩赦権の根拠とされる主権や国家の存在といった、より大局的な視点をおろそかにする傾向が見られるものも少なくはない。また、その他の研究も、恩赦と権力との関係を認識してはいたが、権力の時代的な変遷との関連を明らかにしてはこなかった。

以上より、本稿では、古代から 19 世紀に至るまでの恩赦の歴史を、アンシャン・レジーム期、啓蒙期、革命期およびナポレオン期、そして 19 世紀を中心に、法制・思想・実態の

⁵⁵ Frenandez-Lacôte, Hélène, *Le procès du Cardinal de Richelieu. droit, grâce et politique sous Louis le Juste*, Paris, 2011.

⁵⁶ Nassiet, Michel, Brittany and the French Monarchy in the Sixteenth Century : the Evidence of the Letters of Remission, *French History*, v. 17, n. 4, 2003 ; Id. *Les lettres de pardon du voyage de Charles IX (1565-1566)*, Paris, 2010.

⁵⁷ Gauvard, Claude, « De grace especial. » *Crime, état et la société en France à la fin du Moyen Age*, Paris, 2010.

⁵⁸ Smagghe, Laurent, Plaisir de châtier, joie de pardonner : discours amoureux du prince aux villes rebelles du pays de Frandre à l'époque bourguignonne (XIV^e-XV^e siècle), dans Barbier, Josiène et al., *Amour et d.samor du prince du haute moyen âge à la Révolution française*, Paris, 2011.

⁵⁹ Bochana, Michael et al., Entre châtement et grâce royale : l'entrée de bordeaux dans la mouvance française (1453-1463), dans *Le châtement des villes dans les espaces méditerranéens (Antiquité. Moyen Âge, Époque moderne)*, sous la direction de Patrick Gilli et al., Turnhout, 2012,

⁶⁰ *Préférant miséricorde à rigueur de justice*.

⁶¹ Meyer, Julie, *Les mesures de grâce dans l'histoire du droit répressif romain. Réflexions sur les rapports entre la peine, la politique et la religion*, Thèse pour le doctorat en droit, Paris, 2007 ; Flamerie de Lachapelle, Guillaume, *Clementia. Recherches sur la notion de la clémence à Rome, du début du I^{er} siècle A.C. à la mort d'Auguste*, Paris, 2011.

⁶² Boer, Edwig de, Gracier les jeunes au XIX^e siècle, dans *Le droit de punir du siècle des Lumières à nos jours*, sous la direction de Frédéric Chauvaud, Rennes, 2012.

⁶³ Coltel, Antony, Le pardon ou l'oubli? La réhabilitation judiciaire en France sous la III^e République : le cas d'Angers, *Crime, Histoire & Sociétés*, v. 11, n. 2, 2007.

3つの側面から考察する⁶⁴。その際、恩赦と主権とのかかわりを中心に議論を行う。構成としては、第1章で、本論にたいする前史として、古代ローマから中世までの恩赦を概観する。続いて、第2章でアンシャン・レジーム期の王権論における恩赦の意義を、第3章で啓蒙期における王権の衰退と恩赦とのかかわりを考察し、第4章では革命期からナポレオン期にかけての国制上の変化と、それとほぼ同時に生じた恩赦の廃止・復活を背景に、恩赦と君主制との結びつきを問い直す。そして、第5章では、19世紀のフランスにおいて、王制、帝制、共和制とさまざまな政体が相次いで登場したことを踏まえ、政体の変遷と恩赦、とりわけ近代の共和制と恩赦の関係を考える。

⁶⁴ 以下、本稿で挙げる法令は、アンシャン・レジーム期については『イザンベールの法令集(Isambert et al. (éd.), *Recueil général des anciennes lois françaises : depuis l'an 420 jusqu'à la révolution de 1789*, Paris, 1821-1833.)』、革命期以降は「デュヴェルジェの法令集(Duvergier, *op. cit.*)」からの引用である。イザンベールの法令集は、420年から1789年までの法令を収めた29巻本で、最後の29巻は索引である。それに加え、第10巻までは、約2巻毎に巻末に索引が掲載されている。しかし、しばしば言われるように、この法令集には不備が多く、実際に制定された法令のすべてが網羅されているというわけではない。さらに、表題しか記載されていないものや、収録はされているが、索引からは抜け落ちているものもある。また、デュヴェルジェの法令集も同様に、すべての法令を網羅しているわけではない。したがって、その点には予め注意が必要である。

第1章 古代ローマから中世にかけての恩赦

(1) 古代ローマの恩赦

恩赦の歴史は古代にまでさかのぼる¹。しかしながら、権利としての恩赦は、ローマ帝制期の2世紀ごろまで明確には存在しなかった²。古代ローマにおいては、裁判とは神の裁きを意味し、実際に法廷に立って裁きを下す人間は神を代理しているだけで、彼らが実際に判断をしているわけではないと考えられていたのである。したがって、彼らにとっては、赦しも神から賜うものであった³。

このことは、当時の用語からも見て取ることができる。たとえば、共和制の時期には、キケロが、罪責を認めたうえで赦しを求めることを「嘆願(*deprecatio*)」と呼んだという⁴。この語の動詞形、*deprecor*には「厄払いをする」「加持祈祷をする」という意味があり、ここから、恩赦が本質的に宗教と強い結びつきをもっていたことがわかる。一方、正当防衛など、有責性を否定したうえで赦しを求めることは、「弁明(*purgatio*)」といった⁵。この言葉には、贖罪や罪の浄化という意味もあり、中世以後はキリスト教の文脈で用いられることになる。キケロによると、このように、犯罪の意図がなかった時に与えられる赦しは「容赦(*venia*)」といった⁶。しかしながら、キケロの分類は、広く共有されていたわけではないようである。たとえば、彼より少し後の歴史家ティトゥス=リウィウスは、有罪がすでに決定した場合でも、容赦の語を用いている。そもそも、当時の赦しの概念は、体系的に分類されているわけではなかった。おそらくそのため、近代以降の研究においても、異なる見解が見られる。たとえば、プジョーによると、共和制ローマには、「大赦(*amnestia*)」と「公の(一般的)訴追の免除(*abolitio publica/generalis*)」、「異議申立(*intercessio*)」、そして、「元の権利への復帰(*restitutio in integrum*)」の4種類の恩赦が存在した。大赦は、訴追の前に、政治犯に向けて行われる。これは、元老院議決と民会の批准を経て発せられた。そ

¹ たとえば、古代ギリシアには、前述の *amnestia* の他に、法的地位の回復を意味する *epitimoi* があり、エジプトにも、君主の好意によりさまざまな法の効果を消失させる *philanthrôpa* が存在した。Foviaux, *op. cit.*, pp. 16-18.

² Meyer, *op. cit.*, p. 622.

³ ただ、ルローによれば、エトルリア王政時代からすでに、恩赦は世俗化され始めていた。当時、恩赦の最終決定は民会に委ねられていたのである。Rulleau, *op. cit.*, p. 7; Mommsen, Theodor, *Histoire romaine*, traduit par C. A. Alexandre, t. 1, Paris, 1863, p. 88. モムゼン『ローマの歴史 I ローマの成立』長谷川博隆訳、2005年、138ページ。

⁴ Muyart de Vouglans, Pierre-François, *Institutes au droit criminel, ou Principes généraux sur ces matières, suivant le droit civil, canonique, et la jurisprudence du royaume, avec un traité particulier des crimes*, Paris, 1757, p. 107.

⁵ Cicéron, *De l'invention*; traduction nouvelle de Henri Borneque, Paris, 1932, p. 23. 『キケロー選集 6』片山英男訳、岩波書店、2006年、15ページ。

⁶ フォヴィオによると、キケロは、この場合以外にも、酌量情状(*circonstance atténuante*)が発見された時に容赦が行われるとしている。しかしながら、キケロは「情状酌量」に相当する言葉を用いているわけではない。Foviaux, *op. cit.*, p. 21; Cicéron, *op. cit.*, p. 211. 『キケロー選集 6』29ページ。

の効果は、犯罪の存在それ自体を消し去ることであった。訴追の免除も、元老院により決定されたが、政治的な局面で行われる大赦とは異なり、宗教的性格を強く有していた。訴追の免除は、外敵の侵略や祝祭など、多くの人を動員する必要がある場合に行われた。また、これが行われるのは、訴追から判決までの間で、効果は刑事手続きのみの免除であった。したがって、前科は存続し、さらに、将来同じ訴えを起こされる可能性も否定できなかった。異議申立もまた、訴追から判決までの間に行われる。これは、護民官による訴訟手続きの停止を意味した。ただ、護民官が交代した際には、新たな護民官の追認がなければ、その効力は失われた。そして、元の権利への復帰は、追放刑などの刑期の間に、民会により決定される。これは、罪を悔い、罰金を支払った者の有罪判決およびその効果を消滅させ、それ以前の状態に復帰させることを意味した⁷。

一方、フォヴィオは、「寛恕(indulgentia)」と「容赦」という、まったく別の区別を採用する。寛恕は、帝政期に頻繁に用いられることになるのだが、共和制期には、恩赦というよりは、単なる善良さの表現であった。これにたいし、容赦は比較的早い時期から法的な文脈で用いられていた。これは、キケロの述べた意義だけでなく、有罪か否かにかかわらず、訴追から判決までの間に、個人が介入して刑罰を免れさせるという意味も有していた⁸。

用語の不一致は、同じ故事が、別の研究では、違う種類の恩赦の事例として紹介されていることにも表れている。たとえば、プジョーは、訴追の免除は「神々の宴(lectisternia)」と呼ばれる祭典で、元老院議決により行われることもあったとしているが⁹、ゴヴァールは、この祭典で行われたのは寛恕であり、それは、太陽の神ユピテルの神官と、竈の女神ウェスタの巫女たちによって与えられていたとしている¹⁰。また、プジョーやメルルが元の権利への復帰の一例として挙げている故事が¹¹、メイエによっては、容赦の事例として引用されている¹²。

以上のように、古代ローマにおける恩赦の概念は、体系的整理とは程遠い状態にあった。帝制期になってもこのような混乱は続いた。この時期、大赦は「寛恕」や「容赦」等とも呼ばれた¹³。訴追の免除も「寛恕」や「容赦」とされることがあったが、「異議申立」、「恩寵(gratia)」とさえ表現された¹⁴。元の権利への復帰も、理論上は寛恕と区別されていたようではあるが、実務の上ではほとんど違いはなかった¹⁵。本稿では、便宜上、「寛恕」「容赦」

⁷ Poujaud, Paul, *Des diverses formes du droit de grâce dans la législation criminelle de Rome, De l'amnistie en droit français*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Paris, Paris, 1885, pp. 14-41. メルルは、「restitutio per omnia (あらゆることにかんする復帰)」の語を用いている。Merle, *op. cit.*, p. 25.

⁸ Foviaux, *op. cit.*, p. 21.

⁹ Poujaud, *op. cit.*, p. 23.

¹⁰ Gauvard, *op. cit.*, p. 904.

¹¹ Poujaud, *op. cit.*, p. 31 ; Merle, *op. cit.*, p. 25.

¹² Mayer, *op. cit.*, p. 111.

¹³ Poujaud, *op. cit.*, p. 44.

¹⁴ *Ibid.*, p. 46.

¹⁵ *Ibid.*, p. 55.

「訴追の免除」の 3 つの概念について議論する。というのも、これらの概念は、後の恩赦制度への影響を考察するうえで、重要な意義を有しているからである。

帝制期には、恩赦の諸概念に変化が生ずる。この時代、帝権の確立に従い、かつて赦しを与えていた民会や元老院などが、徐々にその権利を失っていった¹⁶。ティベリウス帝（在位 14～37 年）の時期には、皇帝はあらゆる恩赦を行うことができるようになり¹⁷、彼は、起訴が行われる前や判決後など、好きな時にそれを与えた。また、皇帝の即位の際にも、恩赦が発せられるようになった。その背景には、帝制初期に、「仁慈(clementia)」が君主の枢要徳の中に含まれるようになったことがある。フラメリー・ド・ラシャペルによると、仁慈とは、上に立つ者が下々の者たちの過ちを赦してやることを意味した¹⁸。また、この言葉には、国を導くこと、より具体的にいえば、ローマの支配に屈した敵にたいする刑の緩和(modération)と、帝権の支持者にたいする個人的行為という側面があった。したがって、皇帝の仁慈は、本質的に政治的な意味を含んでいた。また、それは、国父(pater patriae)としての皇帝が、暴君と思われなくするための方策でもあった¹⁹。仁慈がさらに個人的な色合いを帯びたものが寛恕である。寛恕には、誰か特定の人にたいする好意という意味があり、皇帝は、これを通じて、赦しを与えられる人々との上下関係を構築した²⁰。こうして、寛恕は皇帝から臣民への「生命の恵み(don de la vie)」となった。ところで、これと類似する概念として、神から人間への「生命の恵み」である恩寵が存在した。この共通する意味を媒介に、皇帝の恩赦は神の赦しと融合し、恩赦権という概念が誕生した²¹。容赦も、神の赦しという意味を含み²²、恩寵と同視されることもあった。また、容赦は、自分が受けた攻撃を忘れてやるという性格も有していた²³。ただ、セネカによると、容赦は、酩酊や忠誠など、酌量可能な理由のために過ちを犯した者を救済する場合、あるいは、単に刑罰を免除してやる場合を意味し²⁴、上下関係を構築するというよりは、平等な二者の結びつきにおいて行われた²⁵。

帝制後期には、公の訴追の免除は、大赦と同様の効果をもち、寛恕と同視されるように

¹⁶ 元老院による恩赦は、紀元後 3 世紀まで行われていた。Duparc, *op. cit.*, pp. 25-26.

¹⁷ Poujaud, *op. cit.*, p. 53.

¹⁸ Flammerie de Lachapelle, *op. cit.*, p. 16.

¹⁹ Meyer, *op. cit.*, pp. 404-407. 同様の意図は、後の国王即位時の恩赦にも共通して確認される。また、国王は、この恩赦により「法としての王(rex judex)」サロモンや「善き羊飼ひ(キリスト)」、「地上における神の代理人(vicarious Dei)」としての性格も打ち出した。Soen, *art. cit.*, p. 99.

²⁰ *Ibid.*, pp. 431-432.

²¹ *Ibid.*, p. 622.

²² Flammerie de Lachapelle, *op. cit.*, p. 20.

²³ Meyer, *op. cit.*, p. 110.

²⁴ Seneca, *De la clémentia*, texte établi et traduit par François Préchac, Paris, 1967, pp. 14-15. 大西英文ほか訳『セネカ哲学全集 2』岩波書店、2006 年、160 - 162 ページ。フォヴィオはセネカの議論を引用し、「情状酌量」の言葉を再び用いている。Foviaux, *op. cit.*, p. 24.

²⁵ Flammerie de Lachapelle, *op. cit.*, p. 21.

なった²⁶。また、この時期には、法的概念としての、個別的訴追の免除が登場した (*abolitio privata*)²⁷。これは、一般的な訴追の免除とは異なり、原告の利益のために行われた。すなわち、個別的な訴追の免除は、間違いや軽率さ、情熱といった宥恕可能な理由により、誤って訴えを提起した原告が、讒訴にたいする刑罰を免れるために嘆願するもので、司法官により与えられた²⁸。

このようなローマ法の伝統は、その後の恩赦に影響を与えることになるが、ローマの人々の考えていた恩赦が、後の時代にもそのまま用いられたというわけではない。恩赦の宗教性という点から、忘れてはならないのが、キリスト教の影響である。キリスト教は、成立するとたちまち人々に受け入れられ、皇帝即位時の恩赦でさえ、3世紀末には、キリスト教の祝日である復活祭のときに与えられるようになった。さらに、その根拠は贖いの秘蹟 (*mysterium redemptionis*)、すなわち贖罪と考えられるようになり、容赦も、「宗教上の罪 (*péché*)の赦し」というニュアンスを含むようになった²⁹。聖職者が赦しに干渉することも珍しくなく、4世紀頃には、彼らの指示により死刑囚が奪い去られるという事件まで生じた。そのため、初めは聖職者の介入にさして抵抗を見せなかった皇帝も、彼らの活動を抑えなければならなくなった³⁰。それでも、聖職者の口出しを全面的に禁止するには至らず、続くメロヴィング朝 (500年ごろ～751年)の時代には、ほとんどの場合、恩赦に聖職者が干渉することになる³¹。こうして、皇帝が神から奪いとった赦しの権限は再び神に、しかし、かつてとは全く異なる神に委ねられることになったのである。

(2) 中世の権力秩序と恩赦

キリスト教は、イエスの磔刑に象徴されるように、罪にたいする赦しを教義の根幹に据えている。それゆえに、中世には、教会により多くの罪人に赦しが与えられた³²。その背景のひとつとして、赦しが、自白を媒介として、贖罪や告解と結び付けられていたことが挙げられる。つまり、懺悔をすることで神の怒りを抑え、魂の浄化を得るのである。また、恩赦は、罪の告白の、共同体による受け入れをよりどころとしており、その点でも宗教的

²⁶ Poujaud, *op. cit.*, pp. 46-48.

²⁷ Foviaux, *op. cit.*, p. 25.

²⁸ Merle, *op. cit.*, pp. 9-11.

²⁹ Meyer, *op. cit.*, p. 110.

³⁰ *Ibid.*, pp. 603-605.

³¹ カロリング朝時代になると、聖職者の介入は減少するが、それでも、ローマに直接出向いて教皇にとりなしを求める人々は、後を絶たなかった。Duparc, *op. cit.*, pp. 42, 44.なお、オルレアン市立図書館のミシェル・マリオン司書長兼インターネット部長 (2009年当時)の協力により得られた情報によると、344年のサルディニア公会議(*concile de Sardique*)では、聖職者にたいし、世俗の裁判に介入し、恩赦を通じて悔悛を促すようにする義務が課されている。

³² 当時の世俗法についていえば、サリカ法やリプアリア法には恩赦は存在しなかった。Duparc, *op. cit.*, p. 39.

な贖罪と結びついていた³³。赦しの増加の背景には、教皇だけでなく、司教によっても恩赦が行われたこともあっただろう。おそらく、この赦しのインフレは、それにより恩赦嘆願の定型を少しずつ形成していくという側面を有していた。その結果、赦しを乞う方法は「職業的告解者」である修道士が、修行生活の初期に教えられるものとなった³⁴。

しかし、赦しを与えることができたのは、教会だけではなかった。ローマ帝国崩壊後、勢いを失っていた世俗権力は、しばらくの後に勢力を取り戻し、教会としのぎを削るようになった。さらに、この「新興勢力」は、あえて従来の秩序を揺さぶろうとさえした³⁵。もちろん、恩赦権もこの争いの中に巻き込まれた。ではなぜ、これらの権力は恩赦権を奪い合ったのだろうか。おそらく、その理由は、神の権限である恩赦を嘆願されるということは、神に最も近い人間であることを意味したからだろう。それと同時に、刑罰を科した者を差し置いて赦しを乞われるということは、彼がその人物よりも上位にあると認識されていたことを意味するという点も重要だと思われる。つまり、恩赦を求められるということは、あらゆる秩序の頂点にあると認められることを意味するのである³⁶。ゆえに、世俗権力は、教皇を頂点とするヒエラルキーに取り込まれることを拒むかのように、自らの恩赦権を主張した一方、教会権力は、頑なにそれを否定した。しかしながら、6世紀には、聖職者の介入のない、国王単独での恩赦が行われるようになり³⁷、636年には、ついに教会が国王の恩赦権を明示的に認めたのであった。

カロリング朝の時代（751年～987年）になると、中央集権的な裁判所組織が再建されるとともに、諸侯の恩赦権が国王に集約された。言うまでもなく、その先鞭をつけたのは「西ローマ皇帝」シャルルマーニュであった。たとえば、彼は常任の裁判官を設置し、そこで死刑判決が下された後に、諸侯が刑を免除することを禁じた³⁸。ところが、シャルルマーニュの死後、帝権は弱体化し、諸侯はたちまち恩赦権を取り戻した。また、司法制度はふたたび多元化し、復讐が横行して、9世紀のうちに恩赦は姿を消した³⁹。そのうえ、10世紀ごろには教皇権がもう一度台頭し、教皇の恩赦権が幅を利かせることになる。ここから、権力と恩赦には密接なかかわりがあったことがわかる⁴⁰。

³³ Guyon, Gérard, *Justice de Dieu, justice des hommes. Christianisme et histoire du droit pénal*, Bouère, 2009, p. 242.

³⁴ Koziol, Geoffrey, *Begging Pardon and Favor : Ritual and Political Order in Early Medieval France*, Ithaca, 1992, p. 183.

³⁵ *Ibid.*, p. 194.

³⁶ *Ibid.*, pp. 8-9.

³⁷ Duparc, *op. cit.*, p. 46. この頃、国王により、破門への恩赦が行われていた。一見、このことは、王権が教会を完全に従属させたことを示しているように思われるが、教会もまた、アジール権の行使の際に恩赦を求めるなど、国王に干渉し続けた。*Ibid.*, pp. 44-45.

³⁸ *Ibid.*, p. 53.

³⁹ Le Poulichet, Guy-François, *Le droit de grâce dans les trois derniers siècles de l'Ancien Régime*, thèse présentée en vue de l'obtention du doctorat en droit, Paris, 1956, p. 6.

⁴⁰ 恩赦は、このような「上からの秩序維持」という側面だけでなく、当事者間の和解による紛争解決を促す側面ももっている。Gauvard, Claude, *Grâce et exécution capitale : les deux visages de la justice royale française à la fin du Moyen Âge*, *Bibliothèque de l'École*

裁判権についても、全く同様の構図が展開された。権力構造が多元的であったこの時代、国王を含む各地の領主は、自分たちの領地で排他的に裁判権を行使し、教会もまた、独自の裁判管轄を有していた。このような状況の中、優位に立とうとする権力は、裁判権を通じて他の権力を侵食した。というのも、裁判権を有するということは、管轄区内における善悪の価値判断を担うということであり、場合によっては、共同体構成員の身体に傷を与えたり、生命を左右したりすることも意味したからである。さらにいえば、裁判権を有する者は、共同体の構成員に、そのような権威を認められていなければならない。したがって、時の権力は、他の権力を押しのけて、自らの裁判権を拡大しようとする。たとえば、教会は、本来キリスト教や聖職者にかんする事件のみを管轄するはずであったにもかかわらず、10世紀ごろから深刻化した世俗裁判権の衰退に乗じて⁴¹、できる限り多くの事件について、聖職者の関与や宗教性を主張し、教皇を頂点とするヒエラルキーを拡大しようとした。以上のことから、恩赦権が裁判権の一種とされるゆえんが、また、裁判権や恩赦権のありかの変遷をたどることが、権力の変遷をたどることに等しいということが明らかとなる。

ただ、裁判で下される「正義」の内容をも、権力をもつ者が取り決めていたわけではない。たしかに、1215年の第4回ラテラノ公会議において神判は廃止されたが、依然として正義は、最終的には神のものであった。もちろん、恩赦も同様であった。だからこそ、恩赦は *grâce* すなわち恩寵と呼ばれた。

もちろん、このことは、赦しと権力との結びつきを否定するわけではない。12世紀末に国家の概念が復活するとほぼ同時に、恩赦の言葉が世俗法に再び姿を現した⁴²。ただ、世俗権力がいくら力を取り戻したとはいえ、教会と同じような赦しを与えては、彼らではなく教会が赦しを与えているように思われるかもしれない。おそらくそのため、領主たちは、かつての形式にとらわれない嘆願方法を認めはじめた⁴³。また、封建制との関連により、恩赦の権威的側面よりも、君臣の親密さに重きが置かれるようになった⁴⁴。これらのことは、教会の支配が少しずつほころびはじめたことを示しているだろう。

des chartes, t. 153, 1995, pp. 280-281. クロード・ゴヴァール「恩赦と死刑」轟木広太郎訳（服部良久編訳『紛争のなかのヨーロッパ中世』京都大学学術出版会、2006年、所収）264ページ。15世紀から16世紀にかけてのドイツ・ニュルンベルクにおける恩赦にも、同様の性格が見られる。その一方で、市参事会は、外部権力による自らの裁判権への介入を防ぐため、条例により、参事会の許可のない恩赦嘆願を禁じた。池田前掲書、169 - 171、182 - 188ページ。恩赦の、上からの秩序維持と当事者による紛争解決の促進という二つの側面は、一見対極的であるが、フランス北部、フランドル地方の都市ドゥエでは、14世紀に、恩赦を求めることで当事者間の和解が補強された事例も見られた。Nikichine, Marie, *Entre rémission du prince et conciliation. L'exemple de la ville de Douai à la fin du Moyen Age*, dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice*, pp. 26-27.

⁴¹ Duparc, *op. cit.*, p.56.

⁴² *Ibid.*, p. 60. この頃、神聖ローマ帝国やイギリスでも恩赦の概念が復活した。

⁴³ Koziol, *op. cit.*, p. 271, 273-274.

⁴⁴ *Ibid.*, pp. 286- 287.

さらに時代を下ると、フランスでは、国王裁判権が領主や教会などの裁判権を侵食し、絶対王政の完成とともに、国王裁判権のヒエラルキーが完成することになる。制度を外側から概観する限り、ここには神は存在しない。もはや神は、裁きの場から姿を消してしまったのだろうか。そうではない。アンシャン・レジーム期の法廷の壁を見てみると、キリスト磔刑図がかかっている。さらに、裁判所の敷地内に礼拝室まで見られる。つまり、「王の裁き」は「神の裁き」により正当性を担保されることで初めて、自らの名において正義を取り決めることができたのである。

先に述べたように、中世フランスにおいては、王権は弱く、各地に強い権力を持った諸侯が散らばっていた。彼らは独自の硬貨さえ作っていたものの、お互いに完全に独立していたわけではなく、互いに封建的主従関係を結んでいた。この関係の頂点に位置していたのが国王であったが、権力間の上下関係は明確ではなく、12世紀ごろまでは、国王でさえ、決闘裁判で命を懸ける状況にまで追い込まれることもあった⁴⁵。おそらく、このように複雑で多元的な権力構造は、当時の人々が、裁判よりも和解による紛争解決を望んだことにも表れている⁴⁶。しかし、王権が伸長し、権力の構造が定まるにつれて、国王裁判権は人々の信用を得るようになる。このような、領主から国王へという流れは、恩赦権にかんしても同様であった⁴⁷。諸侯らから国王に正義の源泉が変わったということは、人々が、領主ではなく国王の臣民となったということと同じ意義を有している。こうして、国王は、臣民の生殺与奪の権を一手に握ることになったのである。

ここで大きな役割を果たしたのが、国王と皇帝の同視であった。クリネンによれば、カペー朝（987年～1328年）期の理論家たちは、国王が「西ローマ皇帝」シャルルマーニュの後継者であることを強調し、国王を「フランス皇帝」と呼んだ⁴⁸。カペー朝の初代国王、ユーグ・カペー（在位 987年～996年）は、肉屋の息子だと信じられていたと言われるが⁴⁹、この疑惑を払拭し、王朝の正当性を主張するために、シャルルマーニュが引き合いに出されたのであろう。さらに、12世紀にローマ法が復活すると、少なくとも13世紀半ばには、

⁴⁵ 轟木広太郎『戦うことと裁くこと—中世フランスの紛争・権力・真理』昭和堂、2011年、5、114 - 118 ページ。

⁴⁶ 中世フランスにおいては、裁判による紛争解決よりも仲裁による和解が好まれていた。南フランスについては Cheyette, Fredric, L., 'Suum cuique tribuere', *French Historical Studies*, Spring 1970.（邦訳「各人にその取り分を」図師宣忠訳（服部良久編訳『紛争のなかのヨーロッパ中世』京都大学学術出版会、2006年、所収））、西フランスについては White, Stephen D., 'Pactum ... Legem Vincit Amor Judicium': The Settlement of Disputes by Eleventh Century Compromise in Western France, *The American Journal of Legal History*, vol. 22, no. 4, 1978.（邦訳「合意は法に勝り、和解は判決に勝る」轟木広太郎訳（服部前掲書、所収））を参照。

⁴⁷ ただ、地方の人々に恩赦を行うためには、地方権力の協力が必要だったことを忘れてはならない。Dauven, Bernard et al., Introduction. « Préférant miséricorde à rigueur de justice », dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice*, p. 11.

⁴⁸ Krynen, Jacques, *L'empire du roi. Idées et croyance politiques en France XIII^e-XV^e siècle*, Paris, 1993, p. 384.

⁴⁹ 宮下前掲書、171 - 172 ページ。

法理論の分野でも、ローマ法諺を用いて、国王にローマ皇帝の支配権であるインペリウムを結びつける動きが生じた。ここでも、国王と皇帝の媒介役となったのは、シャルルマーニュであった。こうして、国王は「彼の国における皇帝」とされ、それを根拠として、レジストと呼ばれる法学者たちにより、恩赦権を含む数々の国王大権がリストアップされた。国王大権は、国王ただひとりが行使することができ、その他の人々とは分かちあうことのできない「主権的権利」である。そして、1464年になると、「王国にはひとりの国王、ひとつの王冠、ひとつの主権」との表現が登場するのである⁵⁰。

国王が自らをシャルルマーニュの後継者と位置づけることは、教会との関係においても有用であったろう⁵¹。というのも、シャルルマーニュは「西ローマ皇帝」であると同時に、「ローマ教会の守護者」でもあったからである。実際、後期中世の王権のプロパガンダは、教会の言説にも多くを負っていた。たとえば、恩赦権を含む国王の絶対的権利を意味し、14世紀初頭以来、「王権(auctoritas regia / autorité royale)」の言葉とともに国王公開状に登場する「全権(plenitudo potestatis / pleine puissance)」という言葉は、もともと、教皇が裁判や政治の場面において、あらゆる規範や慣習、あるいは法令による制限を免れていることを示すために用いられていた。また、カノン法における神と教皇の同視も、バルドゥスら法学者により君主の文脈に転用され、国王は「地上における神(princeps-Deus in terris)」あるいは「受肉した神(princeps-Deus corporalis)」と表現されるに至った⁵²。さらに、王権は、聖別戴冠式をはじめとするキリスト教的な儀式を用いて、国王が「いとキリスト教的」であることを視覚的にも印象付けた。

したがって、王権の伸長と恩赦が密接なかかわりをもつことは、いたって自然であった。ローマ皇帝と教皇の威光を利用し、あらゆる秩序の頂点に立とうとした王権にとって、君主の枢要徳であり、神の権利でもある恩赦は、ぜひとも手にすべき権利だったはずである。こうして力をつけた国王は、諸侯や教会の力を奪い、何物にも並ばれることのない権力を手にすることになるのである。

(3) 正義と慈悲の対立？

恩赦の概念が最も大きな発展を見せたのは、14世紀であった。1304年5月に赦免の書状が初めて記録に登場すると⁵³、その発行数は増え続け、世紀末には、有効な証書の5分の4

⁵⁰ Krynen, *L'empire du roi*, pp. 386-388, 404-407.

⁵¹ 教会の側も国王の攻勢に抵抗している。15世紀になっても、教皇は、その他の聖職者や世俗権力によっては恩赦しえない犯罪にこれを与えることで、キリスト教秩序全体の長になることをもくろんでいた。Rosenblieh, Émilie, *Entre grâce et peine de mort. Le cas d'une supplique enregistrée à la Pénitencerie apostolique sous le pontificat de Nicolas V (1447-1455), dans Préférant miséricorde à rigueur de justice*, pp. 146-147

⁵² Krynen, *L'empire du roi*, pp. 391-393, 397.

⁵³ Gauvard, « *De grace especial* », p. 64.

近くが恩赦状となった⁵⁴。翌世紀には、王国のほぼ全域で、国王による恩赦が認められるようになり⁵⁵、国王の行幸の道すがら、あるいは礼拝の直後に飛び込んできた罪人に、その場で赦しが与えられる場面さえ見られた⁵⁶。恩赦の由来となる「慈愛」は、カロリング朝期の『君主鏡』以来、君主の 8 つの枢要徳のひとつとして、肯定的に捉えられていたようである⁵⁷。たとえば、ピエール・サルモンは、君主は人々を優しく統治することで愛されると説き⁵⁸、クリスティーヌ・ド・ピザンも、善き君主には人間性と寛容が必要であり、これらの徳は臣民の「心(cuers)をさらに大きな愛に結びつけ、それを揺るぎないものにする(confermer)」ことができると記したのである⁵⁹。

しかしながら、ローマの伝統は、国王の慈悲深さを重視する一方で、「国家に関係する場合には、犯罪は罰せられないままであってはならない」との法諺を掲げ、また、法に基づいた刑罰による見せしめを王の裁きの原則としていた。さらに、法学者の中には、行き過ぎた恩赦は犯罪を助長するとの意見も見られた。しかも、ピザンは、善き君主とみなされるためには、公平な裁きにより悪人を罰し、悔い改めさせることで、王国に平和と発展をもたらすという、神の命に従わなければならないと述べている⁶⁰。これ以前に遡っても、ランスのヒンクマル大司教は、前述の『君主鏡』にたいし、慈愛、すなわち恩赦は、善き統治を害しうるとして、その範囲にかんする懸念を示していたのである⁶¹。

ところで、カントーロヴィチによると、中世の法学者たちにとって、「善き統治」は「正義」と対になるものであった⁶²。したがって、ヒンクマルは、恩赦と正義を相反するものと考えていたと言うことができる。しかしながら、もし、恩赦が正義と対立するのであれば、国王がその権利をもつはずはない。というのも、当時国王は「正義の体現者」であり、「正義の源泉」と位置付けられていたからである。国王のこの地位は、ローマ法諺「君主は法から解放されている」「君主の望むことが法となる」などに由来している。これらの格言を

⁵⁴ François, Michel, Notes sur les lettres de rémission transcrites dans les registres de Trésor des chartes, *Bibliothèque des l'École des chartes*, t. 103, 1942, pp. 317-318, voir aussi pp. 321-324 ; Gauvard, « *De grace especial* », p. 65, tableau 3.

⁵⁵ Duparc, *op. cit.*, p. 80.

⁵⁶ Gauvard, *grâce et exécution capitale*, pp. 279-280. ゴヴァール「恩赦と死刑」、263 ページ。

⁵⁷ Gauvard, « *De grace especial* », p. 907.

⁵⁸ Salmon, Pierre, *Les demandes faites par le Roi Charles VI et les réponses*, 1833, p. 24.

⁵⁹ Pizan, Christine de, *Le livre du corps de policie*, Édition critique avec introduction, notes et glossaire par Angeus J. Kennedy, Paris, 1998, pp. 26-28. また、クロード・ゴヴァール「中世後期のフランス王のイメージ 至高の裁判官—理論と実践」渡辺節夫・青山由美子訳（渡辺節夫編『王の表象』山川出版社、2007年、所収）、212 ページも参照。

⁶⁰ ゴヴァール「中世後期のフランス王のイメージ」、203 - 204 ページ。引用部分の原文は「cum intersit rei publicae ne maleficia sint impunita.」である。

⁶¹ Gouvard, « *De grace especial* », p. 907.

⁶² Kantorowicz, Ernst H., *The King's Two Bodies : A study of Medieval Poilitical Theology*, Princeton, 1957, pp. 112-113. エルンスト・H・カントーロヴィチ『王の二つの身体（上）』小林公訳、ちくま学芸文庫、166 - 167 ページ。

通じ、国王は「生ける法」の座を占め、最終的には「生ける正義」と位置付けられるに至ったのである⁶³。では、なぜ「生ける正義」が恩赦を行うことができるのだろうか。しかしながら、正義と慈悲の関係は単純ではない。

当時、罪人を厳しく罰する狭義の「正義」と、赦しを与える「慈悲」という、一見相容れない二つの概念は、コインの裏表のように、広義の「正義」を形成していた。このことは、1328 年ごろのニコラ・ド・リールの言葉に反映されている。彼によると、「慈悲 (misericordia) と真理、すなわち正義は、王を守る。というのは、正義なき慈悲は臆病であるが、慈悲なき正義は残酷であって、これは王と王国を破壊するからである。しかし、慈悲としての正義が刺激し、正義としての慈悲が緩和することは、王と王国を守る」が、この二重の性格こそが、「正義の源泉」としての王権の本質をなすというのである⁶⁴。

王国の統治における慈悲の重要性は、14 世紀初頭に描かれた、シエナ市庁舎のフレスコ画からも理解されるだろう。『善き統治』と題されたこの作品においては、皇帝の姿により表象された「善き統治」の頭の上を、慈愛が舞っているのである⁶⁵。また、国王フィリップ 4 世 (在位 1285～1314 年) も、慈悲は「正義をより大きくする」ものであると述べている⁶⁶。王のこの態度は、実際の恩赦にも反映されていたようである。この頃、正当防衛や過失致死の場合の赦免が頻繁に与えられ、その範囲はますます拡大した。はじめ、赦免は当時最も頻繁に科されていた刑罰の、追放刑を中心に与えられていたが、12 世紀には罰金刑も対象となり、13 世紀になると、あらゆる種類の刑罰にたいし行われるようになったと言われる⁶⁷。これらのことから、当時は、「正義」の二つの側面のうち、「慈悲」が好まれる傾向にあったとすることができるだろう。このことは、後の恩赦状に必ず登場するようになる定型句、「正義の厳しさよりも慈悲を好むことを望んで」が、この時期に登場したことからも見て取れる⁶⁸。また、ゴヴァールによれば、この頃の赦免の書状のうち、60% 近くが厳しい正義と慈悲を対置させていた⁶⁹。

ただ、このようにあまり「慈悲」を積極的に与えずぎては、臣民に示しがつかず、犯罪を抑止できなくなる可能性がある。当時は、戦争の影響で、軍人による残忍な犯罪が増加し、社会不安が深刻化していた。また、役人たちは腐敗しており、彼らの知り合いであれ

⁶³ *Ibid.*, p. 127. カントーロヴィチ前掲訳書 (上)、182 ページ。

⁶⁴ ニコラ・ド・リールの言葉の原文は« Misericordia et veritas, id est iustitia, custodiunt regem quia misericordia sine iustitia est pusillanimitas, et iustitia sine misericordia est crudelitas, quae destruunt regem et regnum. Sed misericordia iustitia stimulata, et iustitia misericordia temperata, custodiunt regem et regnum »である。Lyre, Nicolas de, *Postillae literalis et moralis, Biblia sacra sum Glossa ordinaria*, v. 6, Anvers, 1617, prov. 20 (III, 1694) cité dans Gauvard, « *De grace especial* », p. 908.

⁶⁵ vide Kantorowicz, *op. cit.*, Figure 18. カントーロヴィチ前掲訳書 (下)、図 18 を参照。

⁶⁶ Boissy, Gabriel, *Les pensées des rois de France*, Paris, 1955, p. 55.

⁶⁷ Duparc, *op. cit.*, p. 61. 1392 年 6 月には、聖体の祝日のために用意された、ばらの花を摘んだ罪に問われた男性が、赦免を得ている。Gauvard, « *De grace especial* », p. 60, note 5.

⁶⁸ ゴヴァール「中世後期のフランス王のイメージ」213 ページ。

⁶⁹ voir Gauvard, « *De grace especial* », p. 918, Tableau 49.

ば、たとえ重い罪を犯したとしても、軽い刑罰で済んでしまうこともあった。さらに、恩赦は一度下された判決を覆したり、訴追を中断したりするものであったので、繰り返し行われることで裁判の権威は低下した。そのうえ、刑罰は罪を贖い、罪人の病んだ魂を治療するものだとも考えられていたため、罪人を痛めつけているだけのように見える刑罰も、これこそが本当の慈悲であって、恩赦はそのチャンスを奪う、「常軌を逸した慈悲」なのだという声もあがった⁷⁰。この見解を述べた法学者のジェルソンにとって、慈悲は神が与えるものであって、王の仕事ではなかった⁷¹。1355年の三部会でも、恩赦の濫用を問題視する陳情書が出された。これらの意見もあり、後期中世の国王は、自ら恩赦権に法的制限を設けている⁷²。

国王の恩赦権にたいする制限は、大きく 3 種類に分けることができる。ひとつめに、副署の必要。二つめに、対象外となる犯罪の指定。そして最後に、恩赦の条件として、私訴原告人への損害賠償支払いの義務である⁷³。まず、副署の必要について述べる。管見の限りでは、このような制限が初めて法定されたのは、1302年3月23日のことであった。当時の国王フィリップ4世が、1名ないし2名の評定官による副署がなければ、恩赦状に押印することはできないとの王令を出したのである。さらに、1356年には、摂政シャルルにより、恩赦にはグラン・コンセイユ構成員3名の副署が必要と定められた⁷⁴。百年戦争中の当時、国王ジャン2世（在位1350年～1364年）はロンドンに囚われの身であったため、恩赦は摂政により与えられていた。なお、この摂政は、後に国王シャルル5世となる。

次に、対象外となる犯罪の指定について言うと、このような制限は古代ローマから存在し⁷⁵、フランスでも、1190年には、殺人や放火などにたいする恩赦が禁止された⁷⁶。また、1349年には、シャンパーニュおよびブリーの大市に通う商人による犯罪が恩赦の対象外とされ⁷⁷、1354年にも、国王の債務者が犯した罪にたいする恩赦が禁止された⁷⁸。2年後の1356年には、摂政シャルルが殺人、四肢の切断、誘拐、強姦、教会への放火、休戦もしくは保護(*sauves-gardes*)の違反を対象から除外した⁷⁹。その後も、1571年に、これらの犯罪

⁷⁰ Gontier, Nicole, *Le châtement du crime au moyen âge XII^e-XVI^e siècles*, Rennes, 1998, pp. 192-194.

⁷¹ Gauvard, « *De grace especial* », pp. 912-913.

⁷² Sermet, *op. cit.*, pp. 77-80. ほぼ同時期のイギリスでも、議会制定法により国王の恩赦権に制限が設けられた。また、17世紀後半から18世紀初頭にかけても、人身保護法、権利章典、王位継承法により恩赦権の行使に拘束がかけられている。大林前掲論文(1)、140 - 141、143 - 144 ページ。

⁷³ Sermet, *op. cit.*, p. 80, voir aussi pp. 77-79.

⁷⁴ Duparc, *op. cit.*, p. 133.

⁷⁵ 古代ローマの時点で、大逆罪、殺人、姦通、強姦、政治犯、通貨偽造など、一部の犯罪が恩赦の対象外になることが明らかにされていた。Ibid., pp. 34-35.

⁷⁶ Ibid., p. 128.

⁷⁷ Isambert et al, *op. cit.*, t. 4, pp. 547-548. このような禁止が行われるようになったことの背景には、商業の発展と外国人の保護という課題があった。Duparc, *op. cit.*, p. 130.

⁷⁸ Isambert et al, *op. cit.*, t. 4, p. 698.

⁷⁹ Ibid., pp. 819-820 ; Sermet, *op. cit.*, p. 78.

に加え、決闘、大逆罪、司法官や憲兵(*agents de la force publique*)にたいする暴行(*excès*)もしくは侮辱(*outrages*)が恩赦の対象から外された。さらに、1579 年にも、最高諸法院による判決にたいする恩赦が禁止されている⁸⁰。また、王令には書かれていないが、再犯者にたいしては、基本的に恩赦は認められなかったし、判例により恩赦が認められないとされた罪もいくつかあった。

最後に、私訴原告人への賠償は、法令により義務付けられていたわけではないが、ほとんどの恩赦状には、損害賠償への言及がなされていた。そのうえ、弁済が確認できていなければ、恩赦状が認可されない場合もあった⁸¹。

このような制限が功を奏したのか、15 世紀前半には、赦免の数は減少した。ところが、国王はしばしば自ら定めた王令を無視した。その結果、恩赦の対象外となる犯罪を特定する試みは頓挫し、15 世紀後半になると、再び赦免の数が増加した⁸²。それでも、15 世紀末に、赦免の対象は殺人のみに限定された⁸³。とはいえ、それ以外の犯罪にたいする恩赦への道が閉ざされたわけではない。イザンベールの法令集によると、1353 年 3 月 4 日以降、「罪刑消滅(*abolition*)」なるものが行われているのである。この恩赦は、殺人から暴動まで、さまざまな犯罪にたいし与えられた。しかしながら、当時、その内容を規定した法令は存在しなかった。罪刑消滅について初めて言及したのは、ルイ 14 世時代の 1670 年刑事王令であった。この王令は、罪刑消滅や赦免以外にも、6 種類の恩赦の行為について規定しており、フランスで初めて、この制度を体系的に立法化した。次章ではまず、この王令の規定を中心に、アンシャン・レジーム期の恩赦を概観したい。

⁸⁰ Sermet, *op. cit.*, p. 78. これらの犯罪の場合であっても、恩赦が認められることがあった。また、大法官は、恩赦の可能性のある罪人がいるかどうかを常に気につけ、地方長官や検事に恩赦の案を送ったり、事件の情報について尋ねたりしていた。Foviaux, *op. cit.*, p. 60, note 5. 一方、パルルマン法院は、1585 年 8 月 30 日の法院判決で、夫を毒殺したとして火刑を言い渡された妻にたいする恩赦状の認可を拒んでいる。国王の側は、登録敕命の書状(*jussion*)を 4 度出したが、法院は、被告人がこれ以上恩赦状を得られないことを確認するまで、書状を認可しなかった。Sermet, *op. cit.*, p. 120.

⁸¹ Duparc, *op. cit.*, pp. 108-109.

⁸² Gauvard, « *De grace especial* », p. 65, Tableau 3 ; François, art. cit., pp. 322-324.

⁸³ Gauvard, *Grâce et exécution capitale*, p. 279. ゴヴァール「恩赦と死刑」、262 ページ。

第2章 アンシャン・レジーム期の恩赦

第1節 王令における恩赦

(1) 1670年刑事王令のテキストの問題

フランスで初めて恩赦を体系化したのは、1670年刑事王令であった。それ以前には、国王以外の恩赦権を認めないという法令が出されたと思えば、別の法令では大貴族など他の主体に恩赦権が与えられており、特に大きな見通しもなく法令が出されていたように見える¹。

ここから、1670年刑事王令の重要性が明らかとなるが、この王令には複数のテキストが存在する。わが国の図書館が所蔵するものに限っても、イザンベールの法令集の他に²、1670年当時のテキストやその新版があり³、リプリント版にも、1981年にベルギーで出されたものや⁴、1996年にミラノで出されたものが見られる⁵。さらに、王令起草の際の審議録や注釈書『ルイ 14 世の諸王令の検討会議』（以下、『会議』と表記する）などもある⁶。翻訳には、中村義孝、埴浩、鈴木教司によるものがある⁷。これらの底本はイザンベールの

¹ ルグーの作成したリストによれば、1349年から1670年刑事王令までに与えられた王令、国王公開状、国王宣言、勅令、裁決、パルルマン法院判決は全部で65を数える。ただ、このリストは、王令の変遷をたどるためには有用であるものの、イザンベールの法令集と照らし合わせてみた限りでも、そこから抜け落ちているものが多数あることには注意が必要である。Legoux, Jules, *Du droit de grâce en France comparé avec les législations étrangères : commenté par les lois, ordonnances, décrets, lettres patentes, déclarations, édits royaux, arrêts de parlements, de la Cour de cassation et de cours impériales, avis du conseil d'état, décisions et circulaires ministérielles, instructions de l'administration de l'enregistrement, etc., depuis 1349 jusqu'en 1865*, Cotillon, 1865. 1670年以前には、学説においても、恩赦の用語法が一致していなかった。たとえば、17世紀の法学者カルダン・ル・ブレは、後述する赦免を指す言葉として、*rémission*ではなく*grâce*を用い、*rémission*を、加害者が誰なのか、あるいは、当該犯罪が偶発的であるのか予謀を伴ったものなのかといった疑問が生じた場合に与えられるものと位置づけている。Le Bret, *Les œuvres de messire C. Le Bret, conseiller ordinaire du Roy en son Conseils d'Etat et Privé*, Paris, 1643, p. 296.

² Isambert et al., *op. cit.*, t. 18, pp. 403-407.

³ *Ordonnance de Louis XIV. roy de France et de Navarre : donnée à Saint Germain et Laye au mois d'aoust 1670 : pour les matieres criminelles*, Paris, 1670. 新版の出版年は、1738年と1751年である。

⁴ *Ibid.*; réimpression, Bruxelles, 1981. この版にはオリジナル版の言及がない。

NACSIS-Webcat 上では1671年となっているが、目録作成者による記述である。

⁵ *Code Louis*, t. 2, Louvain, 1700; réimpression, Milano, 1996. これは1667年民事王令も収録する2巻本である。

⁶ *Procès-verbal des conférences tenues par ordre du roi, pour l'examen des articles de l'Ordonnance civile du mois d'avril 1667; et de l'Ordonnance criminelle du mois d'aoust 1670*, Paris, 1776; Bornier, Philippe, *Conférences des ordonnances de Louis XIV, roy de France et de Navarre, avec les anciennes ordonnances du royaume, le droit écrit & les arrêts. enrichies d'annotations et de décisions importantes*, t. 2, Paris, 1737.

⁷ 中村「一六七〇年刑事王令」、298 - 302 ページ、埴浩「ルイー四世「刑事王令」（一六七

法令集であるが、しばしば指摘されるように、この法令集には誤記が時々見られる。数あるテキストのうち、われわれは 1981 年と 1996 年のリプリント版、審議録、『会議』、18 世紀の法学者ジュースによる『1670 年 8 月の刑事王令にかんする新注釈』⁸、同時期の法学者セルピヨンの注釈書『刑事法典』⁹、そしてイザンベールの法令集を参照することができた。これらの間には、少しずつではあるが、違いが見られる。そこで、本稿では、1670 年刑事王令における恩赦の規定の中身に入る前に、まず諸テキスト間の差異を検討する。

1670 年刑事王令第 16 章の表題は、「罪刑消滅、赦免、容赦、出廷許可、追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し、減刑、復権および再審の書状について」であるが、審議録では出廷許可以下が省略されており、また、『会議』は、「追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し」を挟むようにセミコロンを置いている。そのすぐ下に書かれている注釈には、これらの書状は全く同じ法律に従うわけではなく、それぞれにかんして別の規定が定められているので、混同してはならないと書かれている。ゆえに、『会議』の著者ボルニエは、8 種類の恩赦の行為を、3 つのグループに分けて考えていたと考えられる。すなわち、「罪刑消滅・赦免・容赦・出廷許可」と、「追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し」と、「減刑・復権・再審」である。ただ、彼はこれ以上のことを何も述べておらず、後述する恩赦の効果や手続きに注目しても、このグループ分けには疑問が残る。

審議録によれば、草案の第 1 条から第 3 条は、審議段階で削除されている。草案第 1 条は、罪刑消滅の書状が死刑に相当し、赦免の書状を伴う犯罪のみに与えられることを規定している。同第 2 条は、国王の命令、尚書局秘書官による署名を経なければ、書状の押印は行われなことを定めている。そして同第 3 条は、罪刑消滅の書状には、事件をめぐるあらゆる状況が説明される(*Toutes les circonstances du fait y feront déduites*)のであって、「それが生じた何らかの仕方と方法において(*en quelque forte & maniere qu'il soit arrivé*)¹⁰、事件が容赦され(*pardonné*)、罪刑が消滅した(*aboli*)」というくだりで済ませてはならないことを規定していた¹¹。これらの条文が削除された理由は、書状を与える国王は、以上の点を当然理解しており、書く必要がないということであった¹²。

続いて、草案第 4 条、つまり、完成した王令の第 1 条を見てみよう。審議録と『会議』

○年) 訳」(塙前掲書、所収)、鈴木『フランス刑事諸王令』、110 - 112 ページ。

⁸ Jousse, Daniel, *Nouveau commentaire sur l'Ordonnance criminelle du mois d'Août 1670*, Paris, 1763, pp. 321-348.

⁹ Serpillon, François, *Code criminel, ou commentaire sur l'Ordonnance de 1670*, Lyon, 1767, pp. 745-805.

¹⁰ 以下、原則として、条文原文の引用は 1981 年版による。

¹¹ 第 1 条(草案第 4 条)にかんする議論の中で、タロンは、このくだりを書くことで、事件の内容と恩赦状の記述の不一致を理由とする棄却が、状況の変化を口実に妨げられてしまうと述べている。*Procès-verbal*, p. 187.

¹² 国王は、初め草案第 1 条から第 3 条に手を加えるつもりはなかったが、結局は大法官による削除の決定に従っている。*Ibid.*, p. 191.

にだけは、それぞれの条文に、独自の見出しがつけられている¹³。たとえば、この条文について言えば、審議録に書かれている見出しは、「いかにしてそれら[罪刑消滅の書状]は認可されるのか」であり、『会議』の見出しは、「裁判官らが、罪刑消滅の書状を認可する際の義務(l'obligation dans laquelle les Juges font d'enteriner les Lettres d'Abolition)について」である。ここから、第1条が罪刑消滅の書状について規定していることがわかる。パリ・パルルマン法院長ラモワニョンによると、この王令は、罪刑消滅の書状について初めて規定した法令であった。彼によれば、それ以前から、この書状と赦免の書状は区別されていたが、その違いは実務上のものでしかなかった。この違いは、国王國務會議評定官ピュソールが明らかにしている。彼によると、赦免の書状は裁判上の書状であるが、罪刑消滅の書状は国王による純粋な恩赦である。裁判上の書状とは、その名の通り、裁判所により与えられる書状で、国王による恩恵というよりは、法律の欠缺の是正という性格を有していた。したがって、罪刑消滅と赦免には大きな違いがあったとすることができる。

草案では、アンシャン・レジーム期の最高裁判所であり、現在のフランスでは控訴院に相当する、パルルマン法院の建言について何も規定されていなかったが、ラモワニョンは、パルルマン法院が、罪刑消滅の書状にかんしていつも建言を行ってきたとして、法院の建言権を求めた。彼によれば、法院の建言は、犯罪が残虐で恩赦に値しない場合と、書状の内容が有罪証拠に合致しない場合に可能である。これにたいし、大法官セギエは、前者の場合には建言が行われうるが、後者の場合は、恩赦状を無視して判決に移ればよいと答えた。次長検事タロンは、基本的には法院長の意見を認めつつ、犯罪が重大すぎる場合には、裁判官は国王に犯罪の残虐さを提示し、政治社会(fociété civile)を傷つけるため、刑罰による見せしめに値する犯罪を赦すことで、正義が受ける害悪について考えさせるのだと言う。書状の内容が有罪証拠と矛盾する場合には、建言の根拠は、恩赦は書状の内容に与えられるのであって、その内容と異なる事実には与えられていないという点にある。裁判所は赦しよりも厳しい裁きを重視するが¹⁴、国王の正義と仁慈は神の正義と仁慈の模倣であり、人々が真摯にそれを告白した場合にのみ、彼らの罪を消滅させるのである。こうして、前述の二つの場合における建言権が認められた。

第2条と第3条には、草案から変更を加えられていない。ただ、第3条にかんしては、『会議』のみ、その他のテキストではefquelsとされている箇所にあufquelsの語が用いられている¹⁵。efquelsは「…における」を意味するenと関係代名詞lesquelsからなるが、

¹³ 1670年刑事王令第16章を訳出した資料1では、審議録と『会議』を参照し、各条文にタイトルをつけた。そのため、本稿では、これ以降、必要がない限り、審議録などの表題を紹介しない。

¹⁴ ここでタロンは「裁判官たちは、君主が罪刑消滅の書状により赦した者に、正当な理由なく(injustement)有罪を言い渡すことを決して恐れてはならない」と述べている。*Procès-verbal*, p.187.

¹⁵ この部分は、原文では« Les lettre de pardon feront feellées pour le cas, efquels il n'écheoit peine de mort, & qui neantmois ne peuvent efre excufez. »となっている。

aufquelsはàとlesquelsからなり、文脈上、このàは空間を意味している。したがって、意味上の違いは大きくはないものの、別の単語を用いた理由について、『会議』は何も述べていない。また、セルピヨンの注釈書は、この部分に場所を意味する前置詞oùを用いているが、その理由も明らかではない。

第4条は、草案から大きく修正が加えられた条文のひとつである。草案では、この条文が適用されるのは「赦免もしくは容赦」の場合とされていたが、成立後のテキストでは、それらに代えて、「罪刑消滅」の場合と書かれている。なぜ、このように重大な変更が生じたのだろうか。審議録によれば、議論では、まずラモワニオンが、その条文に罪刑消滅を含め忘れてしていると指摘し、ピュソールも、罪刑消滅にかんする条文に赦免の文字があることは間違っていると説いた。ここから、草案の文言にもかかわらず、この規定は、罪刑消滅に適用されるものと考えられていたことがわかる。彼によれば、この誤りは、1566年のムーラン王令が、赦免に、1670年刑事王令でいう罪刑消滅と同様な効力を与えたためであった¹⁶。したがって、「罪刑消滅」の言葉自体を、王令から排除することで修正をしなければならぬと彼は主張する。これにたいしタロンは、「赦免」や「容赦」の言葉をすべての条文から排して、「罪刑消滅」に統一せよと述べた。

結局、ピュソールやタロンの意見は採用されなかったが、第4条には別の修正点も見られた。まずひとつは、この条文では、恩赦の対象外となる犯罪が列挙されているが、それらの罪の中に、暴力による誘拐も加えられたことがある¹⁷。1639年の王令を引き合いに出してこれを提案したタロンに加え、ピュソールは、恩赦の対象外となるのは、誘惑による誘拐と暴力による誘拐のうち、後者のみであると主張した。成立したテキストには、ピュソールの意見が反映された。このような犯罪を「恩赦不可能の(irrémissible)犯罪」というが¹⁸、1981年版のみ、第4条に規定されている「決闘および予謀を伴う殺人」、「一定の犯罪のために雇われること」、「そのような犯罪のために人を雇いもしくはそそのかすこと」、「誘拐」、「司法官などへの暴行および侮辱」のうち、「誘拐」の前でピリオドが打たれ、そこから新しい文がはじまっている。また、ジュースの注釈書やイザンバールの法令集、1996年のテキストも、同じ部分にコロンを置き、文章に一度区切りをつけている。そのため、これらのテキストは、誘拐と司法官などへの傷害および侮辱を、前の3つの犯罪とは別のものと考えていたようにも見える。たしかに、ジュース自身、『フランス刑事司法論』(1771

¹⁶ Isambert et al., *op. cit.*, t. 14, p. 198. この王令の第35条は、1670年刑事王令における分類に従えば、罪刑消滅が行われるはずの入市式で、赦免が与えられると規定している。

¹⁷ 法文の上では、上述の犯罪には罪刑消滅と赦免が認められないとされているが、その他の恩赦にも一般化することができる。Bornier, *op. cit.*, p. 236.

¹⁸ 語の正確な意味を考慮すると「赦免不可能の犯罪」とすべきではあるが、赦免以外の恩赦にかんしても同様な禁止が認められるため、「恩赦不可能の犯罪」とした。ただ、これらの犯罪が恩赦された場合でも、直ちにそれが無効となるわけではない。実際、ルイ14世はこのような犯罪にも、断りを入れてはいるが、赦しを与えている。Ibid., p.236 ; Le Poulichet, *op. cit.*, p. 17.

年)の中で、決闘を故殺(homicide)の一種と考え、また、1498年のプロワ王令第195条を根拠に、謀殺(affaffinat)と、1670年刑事王令第16章第4条が定めるような形で雇われ、あるいは人を雇うことを同列に論じている。しかしながら、彼の犯罪論は、誘拐と司法官などへの傷害および侮辱を同種のものとは考えていない¹⁹。セルピヨンも、セミコロンを用いて、誘拐以下の2つの犯罪を、前の3つの犯罪とは別個のものとしているが、先に述べた3つのテキストとは逆に、彼は、後半の2つの犯罪に限り、未遂などの場合も恩赦の対象外となるとしている。一方、『会議』は、「誘拐」の後にコロンを置き、司法官などへの傷害および侮辱のみを別個に扱っている。なお、些細な点ではあるが、「il n'y ait que la feul machination ou attentat (陰謀もしくは未遂だけの場合)」という部分は、1981年版以外のどのテキストでも、過去形(il n'y ait eu...)が用いられている。

第3の修正点は、恩赦不可能の犯罪に恩赦が与えられた場合の、下級裁判所の建言権についてである。パルルマン法院よりも一段下位にある、上座裁判所による建言を認めたピュソールにたいし、ラモワニオンは、上座裁判所の建言権を否定したうえで、この裁判所による検事長への問い合わせは可能だと述べた。ピュソールは、この場合、大法官に問い合わせた方が自然であると答え、下級裁判所による大法官への意見の提示が認められた²⁰。完成したテキストでは、セルピヨンだけが、この部分にeftimerontではなく、ほぼ同義であるが、jugerontの語を用いている²¹。

最後に、草案では、建言の期間や方法については、1667年民事王令第1章の規定に従い、1週間(huitaine)以内に建言がなければ、自動的に書状が認可されることになっていたが、審議の結果、適用が排除された。ラモワニオンが、恩赦状の認可には時間がかかるとしてこれに反対し、ピュソールも、私人を対象とする恩赦状には、この規定は適用されないとしたのである。

第5条は、恩赦状のうち、大尚書局で玉璽が押されるものについて規定している。ここでは、草案の最後にあった「この章の第2条と第3条により規定された形において」という、書状の交付の際の条件にかんする記述が、草案第2条、第3条の削除に伴い、削除された。なお、完成した条文には、罪刑消滅など、対象となる書状の名称が列挙されているが、セルピヨンだけが、後半の *réhabilitation du condamné* (受刑者の復権) で、文を一度終わらせている。しかし、このすぐ後には、*en les biens & sa bonne renommée* (受刑者の財産と評判の) と、*réhabilitation* の内容が書かれており、文法的にここで文章を切ることにはできないので、誤植だと思われる。

第6条から第8条は、草案そのままの形で成立した。第6条の見出しは、審議録と『会

¹⁹ Jousse, Daniel, *Traité de la justice criminelle en France*, t. 3, Paris, 1771, pp. 248, 320.

²⁰ 審議録の解説部分には、「下級裁判官は、彼らの建言を行うために大法官に問い合わせる」と書かれている。 *Procès-verbal*, p. 190.

²¹ この部分は、1981年版では « ...nos autres Iuges reprefenter à noftre Chancelier ce qu'ils eftimeront à propos. » となっている。

議』で大きく異なっている。審議録は「呼戻しの書状の副署の下に添付される判決」としているのに対し、『会議』は「呼戻し、減刑、復権の書状が与えられるべき形式」と書いているのである。しかしながら、実際に完成した条文を見ると、減刑や復権の書状については言及されていない。また、イザンベールの法令集と1996年のリプリント版のみ、第8条の後半のenfuite estreという部分の順番が、être ensuiteと、逆になっている²²。同じ条文では、セルピヨンが、rapportée en nostre Confeil（朕の「國務会議で報告される」）という部分に、enではなくàを用いており、また、書状の送付と押印の決定を誰がするのかを明らかにしていないが、これらの点の理由は詳らかにされていない。

第9条には、『会議』では、なぜか見出しが付けられていない。見出しのない条文は他にも、第10条、第11条、第13条、第14条、第16条から第21条、第25条があるが、その理由は何も書かれていない。第9条は、草案段階では、再審の書状は、原審で判決を下した裁判官に送付されると書かれていたが、採択されたテキストでは、判決を下した法院に送付されると修正されている。原案に異議を唱えたのはラモワニオンで、彼は二つの点を指摘した。まず、再審は刑事事件にかかわるものであるから、民事事件における錯誤の申し立てのように、全く同じ裁判官である必要はない。次に、この規定では、上座裁判所やマレショセのプレヴォ裁判官に再審の書状が送付されてしまう可能性があるが²³、これらの下級裁判所においては、上訴が可能なので、再審はできないのである。

第10条から第14条も、審議録は草案がそのまま採択されたとしている。第10条は、1981年版などでは「嘆願状に添付された書類(pieces qui feront attachées)」と、受動態が用いられているのに、草案では「嘆願状に添付する書類(pieces qu'elles [= les parties] attacheront)」と、能動体で書かれていた。また、セルピヨンの注釈のみ、冒頭のLes parties pourront devantの箇所、ほぼ同義のpardevantが用いられており、書類の提出期間について述べた、後半部分のdans le delay qui fera ordonné : paffé lequel（定められた期間内に…。この期間が満了し）の後に「時間」を意味するtempsが付けられている。ただ、意味としては、ほとんど違いはない。第13条では、草案ではefquellesと préfidialと書かれている部分が、それぞれ、成立後のテキストではoùと Siege Prefidialとなっている²⁴。この違いにかんしても、efquellesもoùも場所を現す関係詞として働いており、また、préfidialと Siege Prefidialの意味は、ともに上座裁判所であることから、取り立てて注目する必要

²² この部分の原文は、「...le Condamné fera tenu d'exposer le fait...par requête qui fera rapportée...renvoyée...pour avoir avis...enfuite estre rapporté...」である。

²³ マレショセとは田園地帯や幹線道路の治安維持を行う軍隊組織であるが、乞食、幹線道路での窃盗など、一部の事件の最終審としての裁判機能も有していた。この組織の長がマレショセのプレヴォ裁判官である。正本忍「一七二〇年のマレショセ改革：フランス絶対王政の統治構造との関連から」『史学雑誌』第110巻第2号、2001年、176ページを参照。

²⁴ 第13条の冒頭部分は、原文では「L'ADRESSE des Lettres outenuës... fera faite...dans les provinces efquelles il n'y a point de Siege Prefidial...」となっている。

はないだろう。なお、草案段階では、この第 13 条と次の第 14 条の順番が逆であり、審議録にもそのことが明記されているが、変更の理由は明らかにされていない。第 14 条では、草案以外のすべてのテキストの冒頭部分が *Pourront neantmois* とされ、草案では見られなかった、否定の *neantmois* の語が加えられている。この語が挿入された理由は、おそらく、第 12 条と第 13 条が、貴族と平民それぞれについて、書状の送付場所を規定しており、第 14 条は、そこで示された原則にたいする、貴族の場合のみの例外を規定しているからであろう。また、第 13 条と第 14 条が入れ替えられたのも、同じ理由によるのではないだろうか。ところで、第 14 条は、貴族の場合も、上座裁判所で書状の認可がされうることを規定しているが、審議録の見出しには「諸制限」とだけ書かれているし、第 12 条も同様に、貴族に与えられた書状にかんする規定であるにもかかわらず、審議録も『会議』もそのことを説明しておらず、一般的な規定であるようなイメージを抱かせる。しかしながら、完成した法令には見出しが付けられなかったからか、審議の際にこのことは問題とされていない。

ところで、ラモワニョンによれば、第 12 条と第 14 条の規定は、貴族の名誉になるように見えるが、実際は、パルルマン法院に管轄させることで、貴族たちが裁判官を自分で選ぶことを禁じている。彼によると、第 12 条が上座裁判所による管轄を否定しているのは、パルルマン法院よりも貴族に親和的な、小さな上座裁判所に事件が委ねられることを防ぐためである。一方、ピュソールは、パルルマン法院に認可を限定したのは、貴族が彼らの信用と権威を濫用しないためであったが、上座裁判所による被告人の保護が保障されているならば、被告人にとってより安全となるし、認可を求めるためには、危険な迂回路を経て恩赦を得るよりも、最初の判決で放免する方が適当であるとして、上座裁判所による管轄の利点を主張する。結局ピュソールの意見が支持されたようで、この規定にも、文面の変化は加えられなかった。

第 15 条は、認可の際に受益者が投獄されるべきことを規定している。草案では、投獄期間は「当該書状にたいする終局判決が下されるまで (*jufqu'au jugement définitif des lettres*)」とされていたが、審議の中で、これに「審理の間ずっと (*pendant toute l'instruction*)」という言葉が加えられた。審議録は、これ以外の修正はないと述べているが、その他のテキストでは、書状の提出者を示す指示代名詞 *iceux* の部分に、代名詞 *eux* が用いられており、若干ニュアンスが変わっている²⁵。

第 16 条から第 21 章は、どれも修正なしで成立している。ただ、認可の際に用いる書類が書記に渡されることを規定した第 18 条では、草案のみ「手続き (*procédure*)」の語が単数形になっている。また、セルピヨンの注釈のみ、前半の「訴訟手続きの書類 (*pieces du procès*)」という言葉が「手続き」と言い換えられている。第 21 条は、イザンベールの法

²⁵ 王令成立後のテキストでは、「...*eux* contraints de demeurer en prison pendant toute l'instruction & jufque au jugement diffinitif...」となっている。

令集と 1996 年版、そしてセルピヨンの注釈のみ、*après quoy feront renvoyez en prison*（「この後、嘆願者は監獄へ送り戻される」）の *après* と *quoy* の後に、省略されていた主語の *ils* が挿入されている。

第 22 条は、草案では、書状提示後の証人尋問を認める一方で、通常の重罪裁判であれば、尋問に続いて行われるはずの、検真・対質を禁じていた。これにはまず、ラモワニョンが、もし、追加の証人尋問があったのに検真・対質がなければ、訴訟は正常ではなくなるので、検事にも私訴原告人にも、それを求める権利があると述べた。部長評定官ノヴィオンも、この規定に従うなら、書状の却下あるいは中間判決と、裁判の終局判決を同時に下さなければならなくなってしまうと言う。さらに、タロンは、刑事裁判においては、追加の証人尋問から重要な証拠が得られることが多いとして、そのような証拠にかんする検真・対質を求める。ピュソールは、追加を認めるかどうかは裁判官の裁量によればよしとし、ラモワニョンも、軽微な事件なら免除は可能であるが、死刑などの重要な事件では、裁判官の裁量によると述べる。さらに、タロンは、この条文の規定では、書状の取得者が証人尋問だけで判決を求め、検真・対質を免れてしまうかもしれないうえ、書状についてと事件についての 2 回判決を下さなければならないと受け取られると言う。彼によれば、この条文の意図は、被告人が提出した尋問について決定を下す際に、より重大な証拠調べをする余地がないか調査することであるので、被告人が証人尋問により、検事長が自白により判決を求めるとき、追加で証人尋問や検真・対質をすることができるとすべきである。また、彼は、草案では認められていた、領主の検事による検真・対質の請求権を否定した。というのは、赦免の書状は、国王の裁判所にしか送付されないからである。最後に、検真・対質は、恩赦不可能な犯罪や、書状の内容が有罪証拠もしくは証人尋問と矛盾する場合を除き、書状の判決が下されてから行われるという部分が削除された。なお、セルピヨンの注釈書のみ、「証人尋問を…行^う(*informer*)」という部分が「証人尋問を行^{わせ}(*faire informer*)」となっている。

第 23 条からは、すべての草案が修正なしで成立している。ただ、第 25 条について言えば、草案の「すべての証人尋問と有罪証拠が…持参され(*portées*)」という部分が、その他のテキストでは「…もたらされ(*apportées*)」となっており、また、イザンベールの法令集と 1996 年の 2 巻本のみ、最後の *contre les greffiers qui feront en demeure*（「遅滞している書記に」）の *qui feront* の間に代名詞 *en* が入れられている。しかし、挿入された *en* を受ける語がはっきりしないので、これは誤植であろう。また、第 27 条は、認可が拒否される場合のひとつに、書状が有罪証拠と一致していなかった場合を挙げているが、草案では *elles ne font point conformes* と、強い否定が用いられているのにたいし、他のテキストでは *elles ne font pas conformes* と、少し弱い表現になっている。その理由は明らかにされていないが、その後、有罪証拠と書状の内容との一致の判断が緩やかになっていくことがほのめかされていると言えるかもしれない。最後の第 28 条は、再審の書状が否認された場合についてであるが、草案では、「再審の書状」の語が間違って「赦免の書状」と書かれて

いる。

以上のように、諸テキスト間には誤植にとどまらない違いが見られた。にもかかわらず、いくつかの箇所では変更の理由が明らかにされていなかった。このことから、全体の意味さえ損ねなければ、言葉の小さな違いはあまり気にされなかったとすることができるであろう。

(2) 1670 年刑事王令における恩赦

1670 年刑事王令第 16 章は、再審を含めて 8 種類の恩赦の行為について規定している。18 世紀の法学者によれば、次の①から③の、罪刑消滅・赦免・容赦は、判決前に嘆願しなければならない²⁶。一方、④以下は判決後に行われる。

①罪刑消滅(abolition)。この恩赦は、原則的には、死刑に相当する罪を対象とする。ラモワニョンによると、罪刑消滅は「法律に揺さぶりをかけ、公的復讐の効果を停止させる絶対的権力」であった²⁷。これは古代ローマのabolitioとは違い、犯罪を消滅させる。ゆえに、受益者が再び訴追されることはない。また、罪刑消滅は、刑や罰金を免れさせるだけではなく、失われた権利や名誉も回復させた²⁸。さらに、この恩赦は、実際には終局判決後でも行われることがあった²⁹。ただ、判決前の場合であれば、財産没収がすでに執行されていたとしても、それを取り戻すことができた³⁰。罪刑消滅には、一般的効果を生ぜしめるもの（一般的罪刑消滅）と、ある特定の個人のみにたいするもの（個別的罪刑消滅）の 2 種類がある。一般的罪刑消滅は、主に、新王の聖別戴冠式や入市式などに、これらの儀礼の舞台となる町の監獄にいる囚人に与えられたり、王子や王女の誕生を祝って行われたりした³¹。これは、あらゆる犯罪に適用することができ³²、過去にこの恩赦により解放

²⁶ そのため、19 世紀以降の学位論文の多くは、これらの恩赦はいつでも獲得されうると述べている。たとえば、Sermet, *op. cit.*, p. 81 を参照。

²⁷ *Procès-verbal*, p. 186.

²⁸ ただ、セルピヨンによれば、罪刑消滅は必ずしも名誉と財産を回復させるのではなく、回復の可否は国王の裁量に委ねられた。Serpillon, *op. cit.*, p. 746.

²⁹ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 406.

³⁰ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 108.

³¹ その一例として、Archives Nationales（以下、AN と表記する）BB³⁰ 54 を参照。このカートンには、1770 年の王太子（後のルイ 16 世）の婚姻や、1775 年の聖別戴冠式などでの恩赦にかんする資料が収められている。なお、ほぼ同時期に相当する、江戸時代のわが国でも、慶事の際の集団的恩赦（「祝儀の赦」）が行われていたが、フランスとは異なり、将軍の死去や回忌法要などの際にも、寺院を経由した恩赦（「法事の赦」）がなされていた。これらの集団的恩赦については、谷口「恩赦をめぐる幕府権威と仏教世界」などを参照。

³² ただ、パルルマン法院判決は、1610 年 8 月 30 日に、大逆罪、通貨偽造、男色、親族殺(parricide)、強姦、陰謀、公金横領、汚職(peculat)、文書偽造(fauffetez)などを、王妃の入市式での恩赦の対象外とし、1612 年にも、通貨偽造、謀殺など、一部の重罪は、入市式における恩赦の対象とならないと宣言した。Bornier, *op. cit.*, p. 236 ; Sermet, *op. cit.*, p.

された者も対象となった。このような不特定多数への赦しは、反乱の平定に際して与えられることもあり、ジュースはこのような罪刑消滅のことを「大赦」とも呼ぶとしている³³。なお、一部の文献は、聖別戴冠式などで与えられる恩赦を罪刑消滅ではなく赦免としているが、この点については後述する。

個別的罪刑消滅は、国王の好意の表れであった。そのため、この恩赦は本質的に政治的であり、国王の気まぐれにかなり左右されたようである。本来であれば、たとえ恩赦状が発行されても、裁判所による認可手続きを経なければ効力が生じなかったのだが、罪刑消滅の書状の認可が拒否されることは、ほとんどなかった(1670年刑事王令第16章第1条)³⁴。また、国王は、決闘、予謀を伴う殺人など、恩赦不可能とされた罪にも赦しを与えた(第4条参照)。ゆえに、『百科全書』は、罪刑消滅は恩赦不可能な犯罪に与えられるものであり、恩赦ではないと述べている³⁵。

ところで、1670年刑事王令の規定の上では、国王弑逆への恩赦は禁止されていない。言うまでもなく、国王弑逆は重罪であり、攻撃を企てるだけで第一級の大逆罪に問われるはずであるにもかかわらず³⁶、この王令に従えば、恩赦されうるのである³⁷。他方、第二級の大逆罪とされている司法官への攻撃は、1566年2月のムーラン王令第34条により、恩赦の対象外となっている³⁸。ボルニエによると、司法官への攻撃が重大視されたのは、国王が、人々にたいする彼らの優位を認めたからであった。したがって、彼らに与えられた

83.

³³ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 409. 一方、フォヴィオは、宗教的平和の構築などのために、法令により行われるものが「大赦」と述べている。実際、フロンドの乱の時期などに「大赦」の文字を掲げた法令が制定された。Foviaux, *op. cit.*, pp. 69-76. フロンドの乱後の大赦にかんする最近の研究としては、たとえば、Brière, Nina, *La douceur du roi*, Paris, 2012 がある。大赦は集団的なイメージをもたれるが、少なくとも15世紀後半には、個別的な大赦も行われていた。フォヴィオによると、1576年のポワティエの勅令第34条は、コリニー総督を名指しして大赦を行っている。アンシャン・レジーム期の大赦については、本章第2節(1)注171も参照。

³⁴ 以下、本節における、かっこ内の条文数は1670年刑事王令第16章を指す。

³⁵ *Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres, mis en ordre & publié par M. Diderot ; quant à la partie mathématique par M. D'Alembert*, Paris, 1751-1752 ; réimpression, New York, 1969. 第1巻、30ページのabolitionの項目(著者トゥッサン)には、罪刑消滅の書状は恩赦状ではないと書かれているが第7巻、803ページのgrâce(著者ブシェ・ダルジス)の項目は、罪刑消滅を恩赦のひとつとしている。ただ、トゥッサンは、罪刑消滅では、恩赦のように名誉の回復は生じないと述べており、この点には注意が必要である。

³⁶ 第一級の大逆罪には、王、王子と王女(nos Enfants)、および王の子孫(Postérité)もしくは王国(République de notre Royaume)にたいして陰謀を企てること、反政府的な結社を結成し、または加盟することなどがある。*Code pénal, ou Recueil des principales ordonnances, édits et déclarations, sur les crimes et délits*, 2e éd., Paris, 1755, pp. 43-48.

³⁷ ジュースは、1670年刑事王令第16章第4章の規定する犯罪以外にも、神と王にたいする大逆罪、男色、親族殺、毒殺への恩赦は認められないとしている。Jousse, *Traité*, t. 2, p. 406.

³⁸ Isambert al. *op. cit.*, t. 14, p. 198.

損害は国王の権威をも損ねる。それゆえ、司法官への攻撃は、王自身への攻撃を意味するとして、「大逆罪」と位置づけられた³⁹。では、なぜ、1670 年刑事王令は、国王自身への攻撃を恩赦の対象としなかったのだろうか。この点については、後に考察することにする。

②赦免(rémission)。現代に行われた、恩赦の歴史にかんする研究は、主にこれを扱っている。しかし、それらの研究においては、時にrémissionがgrâceと言いかえられており、また、その訳語も「恩赦」で統一されているため、これこそがアンシャン・レジームの「恩赦」であったと思われる可能性がある⁴⁰。しかしながら、赦免と、次の③で述べる容赦は、純粋な意味での恩赦ではない。というのも、これらは国王の恩恵により行われるわけではないからである。1670 年刑事王令第 16 章第 2 条が、赦免の対象を過失致死(homicide involontaire)や正当防衛による殺人という、犯罪とは言えない場合に限定していることから推測できるように⁴¹、赦免の書状は裁判上の書状である。また、この王令によれば、赦免と容赦の書状は、その他の恩赦とは違って、大尚書局では作成されない(第 5 条参照)。では、これらの書状はどこで作成されたのかというと、パルルマン法院にある小尚書局であった。さらに、フォヴィオによれば、国王は、これらの恩赦を与える権限を、小尚書局の裁判官に委任してさえいた⁴²。したがって、赦免を「恩赦」と思わせるような表現には問題があると言わざるをえない。しかし、矛盾するようであるが、この表現はあながち間違いではない。というのも、ジュースによれば、赦免はしばしばgrâceとも呼ばれていたからである⁴³。ジュースは、grâceという言葉は、主権に由来するあらゆる書状を意味すると述べているが、恩赦とされる行為のうち、最も頻繁に用いられたのが赦免であるので、これが「恩赦」を代表するようになったのだろう。

赦免を与えられると、刑罰が免除される。しかし、罪刑消滅とは異なり、失われた名誉は回復しない。ただ、多くの場合、書状の中で名誉の回復が宣言されていた。没収された財産について言えば、赦免が判決前に与えられた場合は返還された。

ところで、赦免は、具体的にはどのような場合に与えられるのだろうか、まずは、過失

³⁹ Bornier, *op. cit.*, pp. 240-241.

⁴⁰ たとえば、Gauvard, *Grâce et exécution capitale*。したがって、轟木による邦訳でも、grâce と rémission に区別は設けられていない。また、デーヴィス前掲訳書も rémission を「恩赦」と訳している。

⁴¹ このような場合に恩赦が行われる慣行は、ローマ時代にも存在した。Duparc, *op. cit.*, p.34。ただ、6 世紀に書かれたトゥールのグレゴリウス『歴史十巻』には、裁判の場で正当防衛が認定され、無罪が与えられる事例が登場する。岩野英夫「グレゴリウス『歴史十巻』の中の紛争と紛争解決の仕方」『同志社法学』第 64 巻第 1 号、2012 年、42 ページ。また、神聖ローマ帝国では、1532 年のカロリナ刑事法典第 139 条、第 140 条、第 146 条により、過失致死や正当防衛の場合には刑が科されないことが規定されていた。塙浩『フランス・ドイツ刑事法史』、信山社、1992 年、202 - 203、206 - 207 ページ。

⁴² Foviaux, *op. cit.*, p. 76.

⁴³ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 377.

致死について見てみよう。『会議』で参照されている、14 世紀の慣習法学者ボマノワールの『ボーヴェジ慣習法書』によると、殺人の行為には、*meurtre*と*homicide*の2種類があり、*meurtre*は予謀や裏切りを本質的に伴う一方、*homicide*は乱闘(*en chaude mellee*)の末に殺してしまうことを指す⁴⁴。したがって、*homicide involontaire*とは、*homicide*よりもさらに殺意がない場合、たとえば、かっとして我を忘れて乱闘となり、勢い余って、誤って相手を殺してしまった場合であると考えられる。つまり、赦免は、有責性の低い殺人行為に、計画的に行われた殺人行為と同じ刑罰が与えられるのを防ぐという意義を有していた⁴⁵。では、過失致死はいつ成立したのだろうか。『会議』によると、(1) 意思に反して当該殺人行為を行った者が、合法的な活動に専念していたこと、(2) なすべきことをしながら、勤勉にそれを行っていたこと、(3) 時や場所が当該行為にふさわしいこと(*convenables à action*)という要件を満たせば、赦免可能とされた。また、殺害の意思は、行為の性質や使った手段から判断された⁴⁶。

次に、正当防衛による殺人についてだが、ローマ法では、他に防衛の方法があった場合には、裁判官の裁量により刑罰が与えられるとされていた。現代では、このような場合は過剰防衛に分類されるだろう。しかし、ローマでは、防衛ではなく復讐とみなされるとして⁴⁷、刑罰が与えられていた。『会議』によれば、正当防衛は、生命だけでなく、財産や名誉の防衛であっても認められた。財産の正当防衛が認められるための要件は、侵害行為が夜間であったか昼間であったかによって異なった。まず、夜間の場合には、(ア) 盗人が財物を手にし、それを持ち去ろうとしている時で、(イ) 持ち主が大声を上げて知らせたものの、(ウ) 捕まえることができなかったため、犯行に及んだ場合に認められる⁴⁸。日中の場合には、(a) 盗人が武器で身を守っており、(b) 当該財物を持ち去ったり、返却を拒否したりし、(c) その財物が安物ではない時に限って認められる。名誉を守るための場合は、

⁴⁴ Bornier, *op. cit.*, p. 237 ; Beaumanoir, Philippe de, *Coutumes de Beauvaisis*, texte critique publié avec une introduction, un glossaire, et une table analytique par Am. Salmon, t. 1, Paris, 1899-1900, pp. 429-430. ボマノワール『ボーヴェジ慣習法書』塙浩訳、信山社、1992 年、321 ページ。なお、厳密に言うと、*meurtre*は夜間の謀殺のことである。傷害を含む、これ以外の憎しみによる加害行為は*trahison*と呼ばれる。

⁴⁵ 誰かを殺害しようとして、人違いにより別人を殺害してしまった場合は、赦免の対象とならないが、狩などで動物を殺そうとして、誤って人間を殺してしまった場合は赦免の対象となる。Jousse, *Traité*, t. 2, p. 378. また、妻や娘の姦通により、名誉を棄損されて苦痛が耐えがたい場合や、夫が密通の現場を押さえ、妻や愛人を殺害した場合にも赦免は認められる。しかし、妻が同様に夫の姦通に復讐した場合は、赦免が認められず、妻は死刑に処せられる。Jousse, *Traité*, t. 3, p. 492 ; Davis, *op. cit.*, p. 95. デーヴィス前掲訳書、179 ページ。

⁴⁶ Bornier, *op. cit.*, p. 234.

⁴⁷ この部分の原文は、「non ad defensionem, sed ad vindictam homicidium perpetratum cenfetur」である。Bornier, *op. cit.*, p. 234.

⁴⁸ ジュースは、夜盗が家に侵入した場合には、その夜盗を殺害することが認められており、したがって恩赦を求める必要もないと言う。Jousse, *Traité*, t. 3, pp. 500-501.

(い) 名誉を守るための当然の配慮の故に行われたものであって、(ろ) 証人がいれば、赦免の対象となる⁴⁹。

しかしながら、1678年6月の勅令によると、財産や名誉の正当防衛にたいする赦免は、1670年刑事王令が想定している赦免には含まれない。実は、1539年8月のヴィレル・コトレの王令第168条によれば、赦免には、裁判上の赦免以外にもう一種類存在した⁵⁰。このような赦免を、恩恵による赦免(*rémission de grâce*)という。ル・プリシェによれば、恩恵による赦免は、罪刑消滅と裁判上の赦免の中間に位置し、財産や名誉の正当防衛による殺人の他に、怒りによる殺人や酩酊状態の殺人、あるいは喧嘩の結果としての殺人に与えられた⁵¹。再び1678年6月の勅令を見ると、財産や名誉の正当防衛による殺人は、主権者による赦しの対象であり、これらにたいする赦免の書状は、大尚書局で押印される⁵²。さらに、1683年11月22日の国王宣言は、裁判上の赦免は、過失致死と正当防衛による殺人に限定されることを確認すると同時に、恩恵による赦免には、罪刑消滅と同じように、1670年刑事王令第16章第1条が適用され、書状の内容が、有罪証拠や証人尋問と大きく異なる場合でなければ、認可をするよう求めている⁵³。その後も、何度かこの分類を前提とする法令が出されたが、アンシャン・レジーム末期には、過失致死や正当防衛による殺人は、もはや有罪であるとは考えられなくなり、裁判上の赦免の重要性は低下した⁵⁴。おそらく、1683年11月22日の国王宣言以来、罪刑消滅と恩恵による赦免は同視されるようになったのではないだろうか。そうだとすれば、18世紀以降についても、一部の文献で、国王の聖別戴冠式などで与えられる恩赦が、赦免とされていることにも納得がいく。

③容赦(*pardon*)。これは、死刑には相当しないが、宥恕されえない犯罪を対象としている(第3条)⁵⁵。具体的には、被害者を攻撃していないうえ、予謀なくして殺人犯の一同の中にただけであるのに、殺人の罪に問われた時や、父親が息子の人殺しの場面に居合わせても制止しなかった時などが挙げられる。この父親がいかなる罪に問われるのかは明らかではないが、18世紀の注釈書によれば、上位者は、その権威により、下位にある者を

⁴⁹ 「名誉を守るための当然の配慮のゆえに」という部分の原文は、「*cum moderamine inculpatæ tutela honoris*」である。Bornier, *op. cit.*, p.234.

⁵⁰ Isambert et al., *op. cit.*, t. 12, p. 635.

⁵¹ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 85.

⁵² Jousse, *Commentaire*, p. 323.

⁵³ Bornier, *op. cit.*, pp. 231-233 ; Isambert et al., *op. cit.*, t. 19, pp. 436-437. 書状と有罪証拠などが大きく異なる例としては、予謀を伴う殺人を犯した者が、予謀の事実を隠して恩赦を嘆願した場合が挙げられる。Serpillon, *op. cit.*, p. 754. なお、セルピヨンは、この書状の日付を11月20日としているが、本稿では『会議』など、その他の文献が11月22日としていることを考慮し、後者の日付とした。voir *Ibid.*, p. 749.

⁵⁴ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 13.

⁵⁵ ボルニエによれば、容赦はキケロの言う「弁明」のフランス語訳である。また、容赦の書状は「無実の書状」とも呼ばれると述べている。Bornier, *op. cit.*, p. 235.

抑えなければならない。したがって、妻と夫、家事使用人と雇い主などにも同様の関係が成立する⁵⁶。

④出廷許可(*ester à droit*)。これは、王への奉仕(*fervice*)など、正当な理由により裁判を欠席し、欠席裁判により有罪判決を言い渡されてから、5 年が経過した者を対象とする⁵⁷。裁判に欠席した被告人は、まず財産を差し押さえられ、そのうえで財産目録を作成され、2 週間以内の出頭を命じられる。期限までに出頭がなければ、1 週間後に口頭の召喚がなされる。次に、裁判官により、検真が対質に相当するとの命令が出され、最終的には、欠席裁判で判決が下される。判決が死刑であれば、似姿による執行がなされる。しかし、処刑から 1 年以内に被告人が出頭した場合、財産の差押えは解除される。また、それまでに売却された財産があれば、その分の対価が償還され、訴訟費用も減額される。さらに、処刑から 1 年が経過していても、5 年以内に出頭し、無罪判決か財産没収を含まない判決を得た場合には、果実分を取り戻すことこそできないが、財産を返却してもらうことができる⁵⁸。5 年を経過すると、罰金刑や財産没収刑は確定し、奪われたものを取り戻すことはできなくなるが、この書状を得て、それを認可手続きのために裁判所に提出した時点で、当該被告人の欠席判決は消滅する。したがって、受益者は裁判を受ける権利を回復する⁵⁹。没収された財産も回復するが、その果実分や罰金、損害賠償は返却されない⁶⁰。なお、やり直された裁判では、無罪か、原審で言い渡されたよりも軽い刑が言い渡されることもあった⁶¹。

⑤追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し(*rappel de ban ou de galères*)。これは、ガレー船徒刑もしくは追放刑を言い渡された者を対象とする。しかし、刑罰がすでに執行されてしまった場合、嘆願をするのは非常に困難であっただろう。実際、この恩赦は、数自体が少なかった⁶²。また、フォヴィオによれば、嘆願を行っていたのは、受刑者の家族や聖

⁵⁶ Jousse, *Commentaire*, p. 324. また、襲撃を受けた主人を救出しようとしなかった使用人にも同様の責任が課せられる。Serpillon, *op. cit.*, pp. 764-765.

⁵⁷ 罰金の寄託(*confignation*)を避けるためや、他の裁判官区で裁判を受けるためなど、正当な理由があれば、欠席から 5 年経たないうちに、この書状を得ることも可能である。Jousse, *Traité*, t. 2, p. 410.

⁵⁸ Isambert et al., *op. cit.*, t. 18, pp. 407-410. 中村「一六七〇年刑事王令」302 - 307 ページ、塙「ルイ十四世「刑事王令」訳」651 - 657 ページ、鈴木『フランス刑事諸王令』112 - 115 ページ、石井前掲書、66 - 67 ページ。

⁵⁹ Rousseaud de la Combe, Guy, *Traité des matières criminelles, suivant l'ordonnance du mois d'août 1670 & les édits, déclarations du roi, arrêts et réglemens intervenus jusqu'à présent*, Paris, 1768, p. 281.

⁶⁰ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 410.

⁶¹ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 92.

⁶² 1721 年から 1792 年にかけてのフランドル・パルルマン法院の記録によると、この 70 年間における、呼戻しの書状の発行数は 15 通であった。Dautricourt, Pierre, *Les*

職者、有力者など、本人以外の者が多かった。このことも、本人の不在に起因する手続きの困難さを示しているだろう。したがって、この恩赦は、女性にたいし与えられることが多かった。女性は、ガレー船徒刑の代わりに、一般施療院への収容か、終身追放刑を言い渡されていたからである⁶³。

この恩赦の効果は、当該刑罰の消滅であるが、その際、受益者は住みたいと希望する地を伝え、その街角にて(*par quartier*)解放された⁶⁴。さらに、特別に条項が設けてあれば、失われた名誉や財産も回復した⁶⁵。

なお、フランソワ 1 世（在位 1515 年～1547 年）は、ヴィレル・コトレの王令第 170 条で、この書状を与えることを禁止し⁶⁶、さらに、シャルル 9 世（在位 1560 年～1574 年）とアンリ 3 世（在位 1574 年～1589 年）も、1573 年と 1579 年の王令によりこれを踏襲したため⁶⁷、一時的ではあるが、この恩赦はフランスから姿を消したことがあった。

⑥減刑(*commutation de peine*)。減刑は、確定判決による刑罰を緩和した。しかし、減刑の対象は、あくまで刑罰の強度のみであり、書状に明記されていない限り、当該判決によって失われた名誉も権利も、没収された財産も回復することはなかった⁶⁸。減刑後、別の恩赦を得ることも可能で、死刑がガレー船徒刑に減刑されてから 9 年経過した後、さらにガレー船徒刑からの呼戻しが与えられた事例もあった⁶⁹。

⑦復権(*réhabilitation*)。これを得た者は、名誉と権利と評判を裁判前の状態まで回復することができる⁷⁰。一方、財産については、書状に明示されていない限り回復しない。復権を嘆願するには、受刑者が刑罰を執行された(*fatisfait à la peine*)こと、罰金と損害賠償を支払い終えていることが必要だとされている⁷¹。しかしながら、恩赦状をいくつか見る限り、*réhabilitation*の語こそ用いられていないが、実質的に、復権は他の恩赦に付随する形で言い渡されていたようである。罪刑消滅を除き、恩赦は、理論の上では、直ちに名誉

criminalités et la répression au parlement de Flandre au 18^e siècle (1721-1790), Lille, 1912, p. 383. なお、ドートリクールは、この書状を「刑の免除の書状」(*lettres de décharge de peine*)と表記しているが、この書状については、第 4 章第 3 節(1)注 122 を参照。

⁶³ Foviaux, *op. cit.*, p. 84, note 4.

⁶⁴ *Ibid.*, p. 85.

⁶⁵ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 411.

⁶⁶ Isambert et al., *op. cit.*, t. 12, p. 635.

⁶⁷ Legoux, *op. cit.*, p. 136.

⁶⁸ 財産没収を伴う刑罰がそれを伴わない刑罰に軽減された時には、没収は取り消される。Jousse, *Traité*, t. 2, p. 414.

⁶⁹ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 103.

⁷⁰ 1791 年刑法典第 1 編第 7 章第 6 条、第 7 条は、復権の儀式について規定しているが、そこでは、受益者の品行に非の打ち所がないことをもって、罪の汚点(*tache de son crime*)が消滅することが宣言される。Duvergier, *op. cit.*, t. 3, p. 407. 内田ほか前掲訳、54 ページ。

⁷¹ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 415.

の回復を導くわけではなかったが、実際には、書状に受益者の名誉の回復が言及されていることがあった⁷²。ただ、このことは復権の書状に大きな意味がなかったことを意味するわけではない。有罪判決を受けた公職者は、復権の書状を得なければ復職することができなかったのである。

⑧再審 (*révision de procès*)。これは、重罪の場合に、パルルマン法院で下された終局判決を破棄し、再度裁判を行うことである。再審は、1670 年刑事王令においては、恩赦の諸行為とともに規定されているが、この書状によって可能となるのは、あくまで「再審」であって、書状を得たからといって、必ずしも刑罰を免れられるわけではなかった。ゆえに、正確には、再審は恩赦の一種とはいえない。実際、ジュースは、王令の規定にもかかわらず、これをその他の恩赦とは別の場所で論じている⁷³。また、20 世紀の学位論文を見ても、ヴィオーが、再審請求は、有罪判決を言い渡された無実の者が行うものであることと、この書状をもって刑罰を免れることはできないことを理由に、再審は恩赦とは異なるとしている⁷⁴。このように、再審は、これまで述べた恩赦と同列に置いて論ずることはできないので、本稿では、行論に必要な限りで述べていくことにする。

1670 年刑事王令をもって、それまでは曖昧で混同されていた恩赦の諸行為は、それぞれ異なる枠組みのなかに整理された (表 1)。とはいえ、この王令をもって、直ちに実務が改められたわけではない。1670 年以降も、正当防衛の建前で、不適切な事例に赦免が与えられることがあり、前述の 1678 年の勅令や 1680 年 1 月の勅令、あるいは 1723 年 5 月 3 日の国王宣言により、法令の遵守が求められた⁷⁵。ともあれ、1670 年刑事王令の規定が、それ以降の恩赦制度の基礎となってきたことは疑いがない。

ところで、恩赦を求める人々は、誰に嘆願したのだろうか。恩赦権が国王大権であることから、その名宛て人が国王であることは容易に想像できるが、すべての嘆願状に国王が目を通していたとは考えにくい。恩赦状の発行には、誰が関与していたのだろうか。また、恩赦状を有効にするには、裁判所による認可が必要であったが、それはどのように行われていたのだろうか。続いて、嘆願から最終的に赦しを得られるまでの手続きを概観する。

⁷² その一例として、資料 6 以下を参照。

⁷³ voir *Ibid.*, pp. 777-779.

⁷⁴ Viaud, *op. cit.*, p. 32.

⁷⁵ Le Poulichet, *op. cit.*, pp. 57-58.

種類	時期	対象	方法	効果	
①罪刑消滅	判決の前	死刑に該当する犯罪	慶事 嘆願	一般効 特別効	罪刑の消滅
②赦免		過失致死 正当防衛	嘆 願	特 別 効	刑罰のみの免除
③容赦		死刑に相当しない犯罪で、宥恕の余地がない場合			刑罰のみの免除
④出廷許可	判決の後	欠席裁判後 5 年経過した場合			欠席の事実の消滅
⑤追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し		追放刑、ガレー船徒刑の受刑者			当該刑罰の免除
⑥減刑		刑罰を言い渡された場合			刑罰の強度の軽減
⑦復権		刑罰を受け、罰金・損害賠償を支払い 終えた者（通常は他の恩赦に付随）			名誉、権利、評判の回復
⑧再審		重罪で、パルルマン法院判決がすでに 下されている場合			裁判のやり直し

表 1 1670 年刑事王令第 16 章における恩赦

(3) 恩赦獲得までの手続き

恩赦が国王大権であるということは、国王が気分次第で刑罰を取り去ってしまえるということ直ちに意味するわけではない。恩赦を行うためには、一定の手続きを踏む必要があった。恩赦獲得までの手続きは、基本的にはどの書状にかんしても同じであるが、①から④の罪刑消滅・赦免・容赦・出廷許可の場合の手続き、⑤から⑦の追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し・減刑・復権の場合の手続き、そして、⑧の再審の場合の手続きの 3 つに分けることができる。ただ、手続きの違いが見られるのは、書状を作成し、認可する役人の側のことが多く、嘆願者が種類の別に対応しなければならなかったというわけではない。

嘆願をするには、まず「命令書(jussio)」なるものを獲得しなければならない。これは通常、大法官やパリ大尚書局の訴願審査官もしくは国王の随員、あるいはパルルマン法院にある小尚書局から与えられる。嘆願を行うのは基本的に罪人本人で、逮捕されて監獄の中で行う場合と、逃亡中に行う場合が考えられる⁷⁶。また、裁判官が被告人に恩赦嘆願を促

⁷⁶ Davis, *op. cit.*, pp. 7-8. デーヴィス前掲訳書、18 - 20 ページ。

す場合もあった。本人以外にも、両親や聖職者、あるいは有力者が嘆願状をしたためることがあった⁷⁷。さらに、裁判官が恩赦嘆願を勧めたり、自ら嘆願を行うこともあった⁷⁸。命令書を得ることに成功すると、嘆願者は国王公証人を前に犯罪事実を語り、それを文書にしてもらう。この嘆願状には、しばしば、有力者や教区の人々全員による推薦書が添付された⁷⁹。また、嘆願者が裕福であった場合などには、自力で弁護士などを頼むこともあった⁸⁰。

恩赦の可否は、この嘆願状に書いてあることに左右されるので、国王が当該事件について十分に理解できる程度の詳しい記述が必要である。また、過去に別の犯罪について恩赦状を得ている場合には、そのことも嘆願状に書いておかなければならない⁸¹。しかし、重大事件の場合には、逮捕された被告人には、嘆願状の文面をゆっくり推敲している余裕はない。1670 年刑事王令第 25 章第 21 条は、刑の執行が判決の当日に行われることを規定しており⁸²、実務の上でも、判決の翌日には刑罰が執行されることが普通であったため、実際に有罪判決を下されてから動き始めては手遅れで、ほとんどの場合、被告人は、裁判が始まるや否や、監獄の中で嘆願書を作成しはじめなければならなかった。逃亡した犯人が嘆願する場合は、話は別である。彼らは、時に自ら国王公証人を訪ね、嘆願状の作成を依頼した⁸³。

完成した嘆願状は、訴訟趣意書(*mémoire*)とともに、王もしくは国璽尚書(*garde des sceaux*)に送付された⁸⁴。嘆願状は、国王の元に届くと、大尚書局の訴願審査官に振り分け

⁷⁷ たとえば、Gueullette, Thomas-Simon, *Sur l'échafaud. Histoires de larrons et d'assasins (1721-1766)*, Édition présentée et annotée par Pascal Bastien, Paris, 2010, pp. 247-248 には、家事使用人による窃盗(*vol domestique*)の罪に問われた小間使いに助祭が恩赦を嘆願してやる場面が書かれている。なお、この事件は、第 3 章第 3 節 (2) で再び取り上げられている。

⁷⁸ 1734 年以降には、裁判官が口頭で嘆願を行う例も見られるようになるが、この種の嘆願も、書面による場合と同様に扱われた。Abad., *op. cit.*, pp. 67-70.

⁷⁹ Andrews, Richard Mowery, *Law, magistracy, and crime in Old Regime Paris, 1735-1789*, v. 1, *The system of criminal justice*, Cambridge, 1994, p. 398. アバドによれば、1717 年から 1787 年までの間にパリ・パルルマン法院が扱った嘆願のうち、検事長への諮問が行われたものの約 60%は、家族や有力者による支援を得ていた。Abad, *op. cit.*, p. 129, Tableau 9.

⁸⁰ Davis, *op. cit.*, pp. 16-17. デーヴィス前掲訳書、32 - 33 ページ。イギリスでも、有力者による介入は恩赦の可否に影響を与えた。Lacey, Helen, *The Royal Pardon. Access to Mercy in Fourteenth-Century England*, York, 2009, pp. 44-58.

⁸¹ Bornier, *op. cit.*, p. 229 ; Jousse, *Traité*, t. 2, p. 384.

⁸² Isambert et al., *op. cit.*, t. 18, p. 418. 中村「一六七〇年刑事王令」、317 ページ、塙「ルイ十四世「刑事王令」訳」670 ページ、鈴木『フランス刑事諸王令』121 ページ。

⁸³ Davis, *op. cit.*, p. 20. デーヴィス前掲訳書、39 ページ。

⁸⁴ かつて、嘆願は「門前集会(*plaids de la porte*)」においてなされていたが、近世になると書面の形で行われることが多くなり、ルイ 14 世の時代には、毎日国王がミサから帰った後に嘆願書(*placet*)が提出され、毎週土曜日にも、國務大臣が嘆願を受け取る時間が設けられた。Krynén, *L'idéologie de la magistrature ancienne*, p. 27 ; Le Poulichet, *op. cit.*, p. 30 ;

られる。彼らは、司法官や検事長などに当該訴訟にかんする資料や意見を求め⁸⁵、国務会議に報告する。恩赦が認められれば、大尚書局で書状が準備される（第 5 条）。ただ、赦免と容赦の場合に限っては、これらの手続きはパルルマン法院にある小尚書局で行われ、書状も、小尚書局付きの国璽尚書が王の名において作成した⁸⁶。

書状は羊皮紙で作成される。ここには、嘆願状の内容をもとに、事実関係や受益者の名、身分などが書かれ、貴族の場合には、それに加えて刑罰の無効も明記される（第 11 条参照）。完成した書状は、玉璽押捺審判会議(*audience du sceau*)に提出され、押印される⁸⁷。罪刑消滅と赦免の書状は、書状の下 3 分の 1 程度を折り返した部分に、大法官の手で「Visa（検印）」と書かれ、彼と秘書官(*Secrétaire*)の署名、取得年月が書かれて、王令や勅令を閉じると同じ緑の封蝋に、赤と緑の絹ひもをつけたもので閉じられる。その他の書状には取得年月日が記入され、封印には、国王宣言と同じ黄色の封蝋が用いられる⁸⁸。

ここまでこぎつけば、あとは交付を待つだけ、と思いたいところではあるが、国王はただでは慈悲を与えてくれない。書状の余白をよく見ると、税(*charge*)が課されているのである（第 21 条参照）⁸⁹。税は封をした翌日に課され、これを支払わなければ恩赦状を手にすることはできなかった。たしかに、1670 年刑事王令は、認可に際して、関係役人が礼金などを受け取ることを禁止しているが（第 23 条）、これは無料で恩赦が与えられることを意味するわけではなかったのである。しかも、その金額は決して安くはなかった。14 世紀には高くても 32 スー、16 世紀初頭までは 3 リーヴル（60 スー）であったが、インフレもあって急激に値上がりし、16 世紀前半では約 6 リーヴル、世紀半ばには 10 リーヴル 10 スーになった。法令の定めるところによれば、税額は 1561 年で 8 リーヴル 8 スー、1570 年では 14 リーヴル 8 スーであった⁹⁰。しかし、法令における金額はしばしば最低額と解

Abad, *op. cit.*, pp. 81-82.

⁸⁵ 検事長への諮問は、1720 年代ごろからほとんどの場合で行われるようになり、18 世紀半ばには、事実上制度化された。Abad, *op. cit.*, p. 662.

⁸⁶ Sermet, *op. cit.*, p. 87. アンドリューズによれば、書状を作成するのは国王秘書官である。Andrews, *op. cit.*, p. 398.

⁸⁷ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 58.

⁸⁸ Sermet, *op. cit.*, p. 88. 『会議』は、裁判上の書状の場合は黄色、それ以外の場合は緑色の封蝋を用いるとしているが、フォヴィオの提示した資料によれば、これは誤りである。Bornier, *op. cit.*, p. 231 ; Foviaux, *op. cit.*, pp. 142-144, 148-152, planche I. なお、緑の封蝋には恒常的な効果という意味が、黄色の封蝋には一時的効果という意味があった。Michaud, Hélène, *La grande chancellerie et les écritures royales au XVI^e siècle*, Paris, 1967, p. 212.

⁸⁹ この「税」は、登録税(*taxe du sceau*)、国王秘書官報酬(*émolument des secrétaires du roi*)、雑費からなる。また、赦免と容赦の場合には、施しも追加された。Abad, *op. cit.*, pp. 739-741. これより、この「税」は、手数料のような性格も有していたとすることができる。しかしながら、近代以降の研究は、時にこれを *taxe* あるいは *droit* と言い換えており、本稿もこれらの先行研究を踏襲した。

の一例として、Le Poulichet, *op. cit.*, pp. 58-59 ; Sermet, *op. cit.*, pp. 88-89.

⁹⁰ ただし、容赦に限っては、1561 年の時点では 57 スー、1570 年では 114 スーであった。

されており、実際にはここで挙げた価格をはるかに上回る、法外な値段が付けられた可能性は大いにある。その後も税額は上がり続け、18世紀になると、最も安い、ガレー船徒刑および追放刑からの呼戻しの書状でも 55～60 リーヴル、最も高い赦免の書状では 140～150 リーヴルにまで至った⁹¹。参考程度に述べると、16世紀の未熟練工の2ヶ月分の賃金が6リーヴル弱で、印刷職人の1ヶ月分の給料や小間使いの持参金も同程度であったから、恩赦状の交付の際の財政的負担はかなり重かったといえる⁹²。そのうえ、嘆願の時点で、嘆願状を代筆した人々への礼金や、書状の送付代が必要であった⁹³。ただ、少なくとも恩赦状の交付にかんする費用については、経済状況を考慮して「神の恩寵により(*gratis pro Deo*)」書状が与えられたり、弁護士、あるいは検事が肩代わりしたりすることもあった⁹⁴。

支払いが終わると、税額査定官(*contrôleur*)が押印し⁹⁵、嘆願者に書状が与えられる⁹⁶。書状は、裁判所にも送付され、認可手続きへと移る。恩赦状が貴族に与えられる場合には、犯罪があった土地のパルルマン法院(第12条)に、平民のために与えられる場合は、上座裁判所のある場所のバイイ裁判所、もしくはセネシャル裁判所の裁判官に送付される(第13条)。しかし、貴族の場合、私訴原告人の希望があった時や、上座裁判所が最終審であった時には、上座裁判所にも送付されうるし(第12条、第14条)⁹⁷、平民の場合も、上座裁判所のない地方であれば、パルルマン法院の裁判官に送付される(第13条)⁹⁸、書状には身柄拘束令状が添付され、これにより嘆願者が投獄されると、原判決や決定の効力が停止する(第17条)⁹⁹。だが、書状に記載された日付から3ヶ月以内にここまでこぎつ

Sermet, *op. cit.*, pp. 88-89.

⁹¹ Abad, *op. cit.*, p. 741, Tableau 19. 容赦の書状は60～70リーヴル、減刑の書状は85リーヴルである。また、判決後の嘆願の場合は、嘆願者自ら判決を手に入れる必要があったため、さらに20リーヴルが必要であった。なお、罪刑消滅、復権の書状については明らかではない。

⁹² vide Davis, *op. cit.*, pp. 10, 153, note 14. デーヴィス前掲訳書、22、234 - 235 ページ、注14参照。Gauvard, « *De grace especial* », p. 69.

⁹³ Nassiet, *Lettres de pardon*, introduction, p. XVII.

⁹⁴ Foviaux, *op. cit.*, p. 67. 「神の恩寵」による場合には、嘆願者に有利な価格で恩赦状が与えられた。フランス革命期になるが、管見の限りでは、このような措置が取られることは珍しくなかったようである。たとえば、AN BB³⁰ 44 et 45 に収められている、1791年1月29日から6月15日にかけての赦免の書状のうち、およそ80%に、「神による(*pro Deo*)」恩赦であることが明示されていた。他にも、貧しい人々への恩赦状の送付を支援する取り組みとして、18世紀半ばには、大法官ダゲッソーやパリ・パルルマン法院検事長ジョリ・ド・フルーリらにより、慈善基金が設立されている。Abad, *op. cit.*, pp. 745, 752.

⁹⁵ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 59

⁹⁶ Andrews, *op. cit.*, p. 398.

⁹⁷ 1731年2月5日の国王宣言第12条により、貴族の犯した犯罪の最終審が上座裁判所では行えなくなり、第14条は死文化した。Jousse, *Commentaire*, p. 335.

⁹⁸ 1702年5月29日と1723年5月22日の国王宣言により、平民にたいする恩赦状は、犯罪の場所を管轄するバイイ裁判所、あるいはセネシャル裁判所の裁判官へ送付されることとなった。Serpillon, *op. cit.*, p. 784.

⁹⁹ 裁判官の推薦による嘆願の場合には、推薦の時点で裁判手続きは停止される。Abad, *op.*

けなければ、当該書状は無効となる（第 16 条）¹⁰⁰。

手続きの違いが見られるのはこれ以降である。まずは①から④の罪刑消滅・赦免・宥赦・出廷許可の場合の手続きを見てみよう。

書状が裁判所に送付されると、嘆願者を自宅に帰すことなく、法廷での手続きが開始する。はじめに、嘆願者は書状を提出し¹⁰¹、続いて書記が書状を読み上げる。この時、嘆願者は脱帽し剣や杖を置いて、跪いた状態でそれを聞き、内容が正しいか、税を支払ったか、そして、その書状を利用したいかを確認される（第 21 条）¹⁰²。

ここで嘆願者は監獄へ戻され、尋問が行われる（第 24 条）。それと同時に、嘆願者は、書状の提出から、尋問の後に行われる合議法廷での手続きまでの間に、私訴原告人に書状の写しを通達しなければならない。これを怠った場合、認可は無効となる¹⁰³。この通達により、私訴原告人は、期限を設けて召喚される（第 19 条参照）。この期限は、私訴原告人が、書状の写しに書かれた事実に反論をしたり、追加の検真・対質を行ったりするために設けられたものである（第 22 条参照）。被害者が死亡している場合には、相続人や未亡人が認可に異議を唱えることができる¹⁰⁴。私訴原告人は、恩赦状の認可に反対するだけでなく、内密に受領者と和解し、認可を得るために協力することも可能である¹⁰⁵。検事には、有罪証拠や証人尋問により集められた情報が伝達されるが（第 20 条）、彼らもまた、新証拠を出して争うことができる（第 22 条）。

期限が到来すると、合議法廷での手続きに入る。嘆願者は、監獄からふたたび法廷に連れられ、刑事裁判では体刑が求刑された場合に使う、セレットと呼ばれる小さな椅子に座

cit., p. 65.

¹⁰⁰ ただ、3 ヶ月以内に認可手続きに入れなかった場合でも、期限切れの取り消しの書状 (*lettres de furannation*) を得ていた時には、期限到来後にも認可手続きをすることが可能であった。Jousse, *Traité*, t. 2, p. 376.

¹⁰¹ 受益者が精神異常の場合には、後見人 (*Curateur*) が代理する。Jousse, *Commentaire*, p. 341 ; Sermet, *op. cit.*, pp. 96-97. また、犯罪の時点で精神に異常があった場合は、大逆罪など一部の重罪を除いて刑事責任を問われることはなく、対質が終わるまでに精神異常が発覚した場合は、手続はそこで中断する。異常が生じたのが審理の後であれば、死刑以外の刑罰にとどまり、死刑判決後の異常であれば、死刑は執行されない。Muyart de Vouglans, *op. cit.*, pp. 75-79.

¹⁰² 嘆願者が、恩赦を得ることで自分が原告側にたいし不利を被ると考えた場合は、書状の取得に自分がかかわっていないなどと主張し、恩赦状の利用を拒否することも可能である。Serpillon, *op.cit.*, p. 795.

¹⁰³ 出廷許可の場合は、嘆願者が書状を法廷に提出することも、私訴原告人に通達を行うことも不要である。Jousse, *Traité*, t. 2, p. 411.

¹⁰⁴ *Ibid.*, p. 398

¹⁰⁵ Serpillon, *op. cit.*, p. 792. セルピヨンとは、「証拠を弱めるために嘆願者と協同することができる (*pourroit...travailler de concert avec l'impétrant pour affaiblir les preuves*) 」と述べている。王権の側も、恩赦を与える際、私訴原告人との和解の有無を考慮することがあった。Abad, *op. cit.*, pp. 162-166.

られ（第 26 条）、尋問と最終答弁を経て判決を下される¹⁰⁶。認可が下りれば、嘆願者は晴れて自由の身となる¹⁰⁷。

しかしながら、恩赦状が認可されたとしても、私訴原告人への賠償が不要になるというわけではない。加害者と被害者のみの関係からなる損害賠償の義務は、恩赦が与えられた後もそのまま存続し、弁済が完了するまで、私訴原告人は受益者の釈放に反対することができた¹⁰⁸。ここから、恩赦の効力の範囲は、あくまで受益者と国家の関係に限られており、第三者には影響を及ぼさなかったことがわかる¹⁰⁹。

ところで、恩赦は「赦し」である以上、これを嘆願することは、自らの犯罪を認めることを前提としている。ゆえに、書状が棄却されることは、有罪が事実上決定することを意味した。そのため、認可の可否は、書状の交付の可否と同様、嘆願者の運命を大きく左右したと言えるが、何をもってそれが決定されたのだろうか。ポイントは二つある。ひとつめは、書状が真実を述べていることである。『会議』によれば、事実関係に相違がある時、裁判所は、建言などを行わずにこの書状を棄却することが可能である¹¹⁰。事実関係に相違がある場合として考えられるのは、記述の欠落(*obreption*)と虚偽の記述(*fubreption*)である¹¹¹。『会議』によると、これらの場合、嘆願者は、重罪裁判の際に用いられる特別手続きを経て、体刑を加えられる¹¹²。しかし、1670 年刑事王令第 16 章第 1 条は、書状に記載された内容が有罪証拠や証人尋問と一致しない場合、裁判所は建言を行うことができるとしている。さらに、1683 年 11 月 22 日の国王宣言は、恩恵による赦免の場合、犯罪の性質が変わってしまうほど大きな相違点がなければ、書状は認可されるとしている。これら

¹⁰⁶ この時の答弁の内容は、Abad, *op. cit.*, pp. 781-783 を参照。

¹⁰⁷ 解放後、嘆願者が元の生活に戻るためには、恩赦の事実を人々に周知させる必要があるが、これまでの研究のほとんどは、このことについて多くを述べていない。ミショーによれば、書状一般は、登録された後、国王公証人により署名された正本と一致する写し(*copie certifiée conforme*)をもって周知されることが一般的で、尚書局あるいは裁判所により、真正の写し(*copie authentique*)を正式に交付する、*vidimus* と呼ばれる伝統的な方法も用いられていた。おそらく、恩赦状の場合も同様にされていたのではないだろうか。Michaud, *op. cit.*, pp. 382-383.

¹⁰⁸ Sermet, *op. cit.*, pp. 99-100.

¹⁰⁹ ただ、恩赦状には、既に支払われた損害賠償の返却が明記されることも少なくなかったようである。そのような書状の例として、資料 6 以下を参照。

¹¹⁰ Bornier, *op. cit.*, p. 228.

¹¹¹ ただ、赦免の場合、仮に記述の欠落があったとしても、嘆願者は、3 ヶ月以内に国王から補充の書状(*lettres d'ampliation*)を得れば、刑罰を免れることができる。Serpillon, *op. cit.*, p. 754.

¹¹² Bornier, *op. cit.*, p. 229. 『会議』には、検真・対質が行われることしか書かれていないが、これは検真、対質、そして拷問を含む特別手続に持ち込まれることを意味する。なお、特別手続きが用いられたのは、たとえ対象となっている罪が重大でなかったとしても、認可が拒否されたことをもって重罪扱いになったということではなく、恩赦の対象となる犯罪が、基本的に殺人などの重罪であったことを意味するにすぎないと思われる。参考として、1565 年から 1566 年にかけての、シャルル 9 世の行幸での恩赦の内訳が、第 3 章第 3 節 (1) 注 130 に示されているので、確認されたい。

の規定から判断するに、即座に棄却されるか建言にとどまるかは、相違の程度によったのであろう。なお、この 1683 年の国王宣言は拡大解釈されたようで、恩恵による赦免の書状の内容が、事実と全く異なっていたとしても、認可されるようになった。これを受けて、1686 年 8 月 10 日には再び国王宣言が出され、恩恵による赦免の書状の内容が、行為の性質を変えるほど有罪証拠や証人尋問と異なる場合には、証人尋問にかんする新たな命令が届くまで、認可手続きを延期しなければならないと定められた¹¹³。

もうひとつのポイントは、犯罪の重大さである。犯罪が恩赦不可能であった場合、最高諸法院は建言を、下級裁判所は大法官への進言を行うことができた。これには、共謀だけであった場合や、未遂であった場合も含まれた（第 1 条、第 4 条）。他にも、嘆願者が原判決を受け入れなかった場合や再犯の場合は、恩赦が得られる可能性が低かった。

棄却された場合には、手に入れた恩赦状は反故になり、刑罰を与えられる。この時の刑罰の目安は特になかったようである¹¹⁴。しかし、たとえ棄却されたとしても、下級裁判所による場合であれば、上訴の道が残されていたし、私訴原告人と検事も上訴が可能であった。上訴がなされると、下級審から、認可手続きと尋問調書がパルルマン法院へ送付される（第 26 条）。また、嘆願者自身も、パルルマン法院に移送されて尋問を受ける。嘆願者や検事による上訴の場合、刑罰にかかわるので投獄は継続されたが、私訴原告人による場合は、損害賠償すなわち民事にかかわるに過ぎないので、投獄の必要はなかった¹¹⁵。逆に、上訴後に恩赦状が与えられた場合は、認可手続きはパルルマン法院で行われた¹¹⁶。

次に、⑤から⑦の追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻し・減刑・復権の場合の手続きに目を移してみよう。これらの書状の場合、書状の花押の下に終局判決が添付され（第 6 条）、その判決を下した裁判官の下に送付される。認可手続は簡素で、国王検事か検事長の申し立てを経て、即座に認可される（第 7 条）¹¹⁷。さらに、追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻しに限っては、嘆願者は投獄されず、法廷に出頭する必要もなかった¹¹⁸。

以上が、恩赦状の認可までの基本的な流れである。

最後に、⑧の再審の書状について簡単に述べておく。この書状が得られると、訴願審査官の意見と国王国務会議による裁決とともに、当該事件の判決を下した裁判所に送付され

¹¹³ 命令は、裁判所に受領された後、検事長もしくはそれに代わる人物が、書状と共に大法官に送付する。この間、嘆願者は継続して収監される。Bornier, *op. cit.*, p. 233.

¹¹⁴ Davis, *op. cit.*, pp. 141-142, Appendix C. デーヴィス前掲訳書、218 - 222 ページには、13 の事例が掲載されているが、与えられた刑罰の幅にはむらがあり、最も軽い事例では、死刑判決が当該バイイ裁判所管区からの 3 年間の追放に減刑されている。

¹¹⁵ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 78.

¹¹⁶ *Ibid.*, p. 67.

¹¹⁷ ただ、書状に記述の欠落や虚偽の記述が含まれていないかの確認をすることが禁止されているわけではない。Jousse, *Commentaire*, pp. 327-328.

¹¹⁸ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 412.

る（第 9 条）。嘆願者は、これらの書類とともに、新たな証拠を提出することも可能である（第 10 条）。再審は、上訴の手段を尽くした後に初めて可能になるので、送付先はパルルマン法院をはじめとする最高諸法院である。ここで原審の内容に疑わしいことが見つければ、判決の破棄が宣言された後、別のパルルマン法院に当該事件が移送され、再審が開始される¹¹⁹。もし、破棄が認められなければ、被告人は国王に 300 リーヴル、私訴原告人に 150 リーヴル支払わなければならない（第 28 条）。

ここまで概観してきた手続きを図に示すと、図 1 のようになる。人々の身体を苦痛から免れさせる恩赦の権力の意義は、その対極にある、人々の身体に苦痛を与える刑罰の権力の華々しさのために見落とされがちであるが、この二つの権力は表裏一体をなしている。だからこそ、王権は、力を増すごとに、諸侯の裁判権を、恩赦権もろとも奪い去っていった。「すべての正義は王より来る」と同時に、すべての慈悲もまた、王より来るのである。

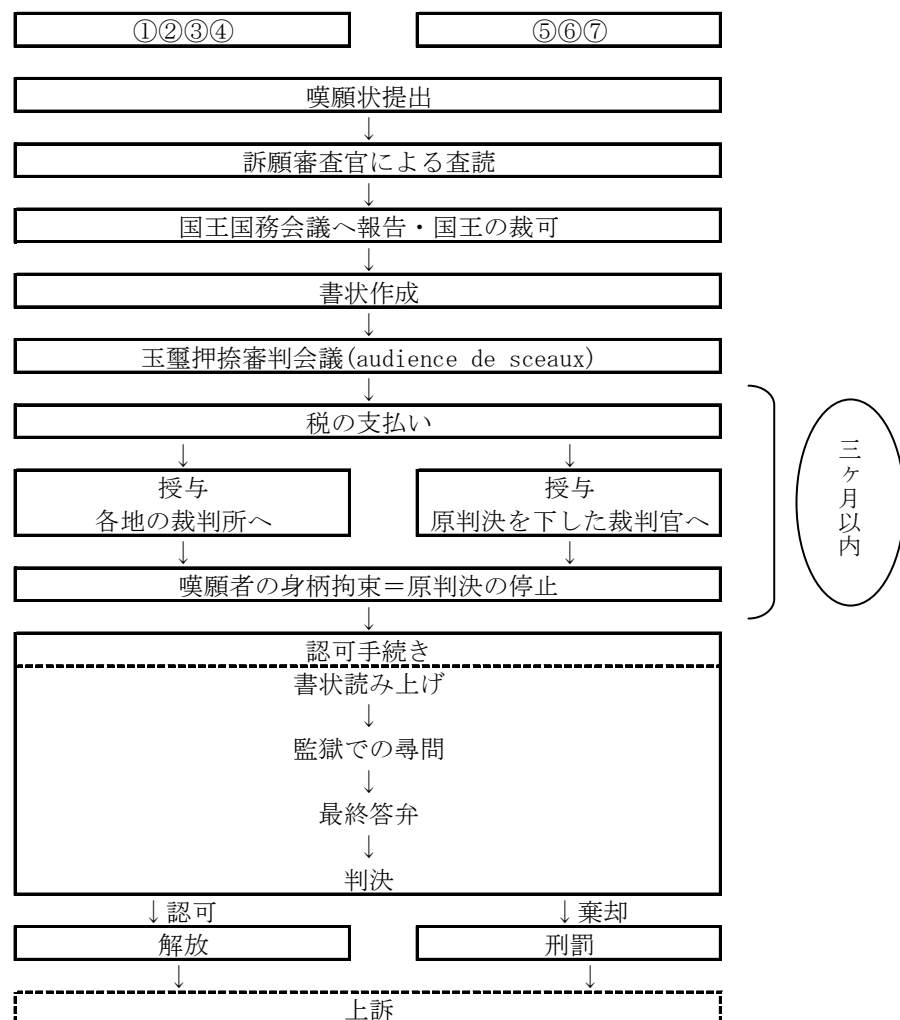


図 1 恩赦嘆願から認可までの手続き

¹¹⁹ Ibid., pp. 787-791. voir aussi Jousse, *Commentaire*, p. 331.

(4) すべての慈悲は王より来る

「すべての正義は王より来る」という言葉は、アンシャン・レジームにおけるフランスの裁判秩序を象徴している。しかし、「すべての正義」が国王に由来することが自明であれば、わざわざこのような言葉を掲げる必要などない。したがって、この言葉は、他の裁判権にたいする国王裁判権の優位をあえて主張している。後期中世から力をつけだした王権は、この言葉を振りかざし、諸侯の裁判権を国王裁判権の一部として取り込もうとした。

イザンベールの法令集を見る限り、国王以外の貴族や王妃による恩赦を、初めて明示的に否定した法令が制定されたのは、1358年5月14日のことであった¹²⁰。ところが、レジストたちの後押しにもかかわらず、国王は、思うように諸侯や教会などを排し、恩赦権を独占することはできなかった。ヴァロワ朝(1328～1589年)の初期には、いまだ諸侯たちが恩赦権を含む「国王大権」を行使し続けていたのである¹²¹。しかし、国王は、1449年に再び、自分以外の諸侯による恩赦を禁じ¹²²、1498年のブロワ王令第70条で、ついに、恩赦権を主権の一部と宣言した¹²³。その後も、1507年11月4日の国王宣言第253条などにより、同じことを主張し続けた¹²⁴。パルルマン法院もまた、1548年1月5日の判決で、教皇特使による恩赦を否定した¹²⁵。1571年にも再び、王国全土において、国王以外に恩赦権をもつ者はいないとの国王宣言が出された¹²⁶。

ところで、先に述べたように、恩赦状は裁判所での認可を経て初めて有効となる。したがって、領主など、あらゆる権力から完全に恩赦権を奪うには、彼らの裁判所による恩赦状の認可の権利にも目を向けなければならない。そもそも、書状の認可手続きが導入された背景には、偽の書状や、不注意ないし王権の脆弱さにより詐取された書状を退けるといふねらいがあった¹²⁷。ゆえに、領主裁判所による認可の禁止は、国王による恩赦権の独占と直接的に結びついていた。1401年に、パリ・パルルマン法院は、赦免の書状の認可手続きは国王裁判所でしか行われないことを宣言し¹²⁸、また、1558年以降、国王による恩赦の認可に、領主裁判所(*Les seigneurs hauts justiciers*)が反対することを何度も禁じた¹²⁹。国王も、1536年の勅令の第11条で、罪刑消滅、赦免、容赦、そして追放刑およびガレー船徒刑からの呼戻しの書状の認可は、パルルマン法院をはじめとする最高諸法院のみにより行われると定めた¹³⁰。また、1560年1月の王令第75条では、役人により不適切な場合

¹²⁰ Isambert et al., *op. cit.*, t. 5, pp. 15-16.

¹²¹ Krynen, *Empire du roi*, pp. 404-405.

¹²² Legoux, *op. cit.*, p. 130.

¹²³ Isambert et al., *op. cit.*, t. 11, p. 353.

¹²⁴ *Ibid.*, p. 514.

¹²⁵ Sermet, *op. cit.*, p. 72.

¹²⁶ Legoux, *op. cit.*, p. 135.

¹²⁷ Duparc, *op. cit.*, p. 134.

¹²⁸ Legoux, *op. cit.*, p. 129.

¹²⁹ Sermet, *op. cit.*, pp. 71-72.

¹³⁰ Isambert et al., *op. cit.*, t. 12, p. 506.

にも恩赦が与えられることが禁止された¹³¹。

国王は、貴族による恩赦への介入を防ぐとともに、1572年1月の勅令第9条により、恩赦を得た貴族は、自らパルルマン法院へ書状を提出し、脱帽し、跪いて認可を求めなければならないと命じた¹³²。脱帽し、跪くというのは、他でもない臣従のポーズである。国王は、かつて恩赦権を争っていた貴族たちに、恩赦の場で、彼らが完全に国王の臣下となったことを思い知らせたのである。

果たして、これらの努力は実を結んだのだろうか。宗教戦争のさなか、1588年5月12日のいわゆる「バリケードの日」には、パリが強硬派のカトリック・リーグに占拠され、その結果、国王アンリ3世はプロワを経てトゥールへ避難してしまった。国王が反政府勢力に押されて首都から逃げ出すなど、普通では考えられない。そして、国王不在のパリでは、この時のリーグの指導者であるマイエンヌ公が、1589年4月に、自らの名において恩赦権を行使した¹³³。国王の言うように、恩赦権が「主権のしるし」であるならば、これはまさに主権の篡奪である。ただ、王権にとっては幸いなことに、この混乱は長く続かず、この事件を最後に、王権は恩赦権を完全に掌握することになる¹³⁴。

これ以後は、主に認可手続きにかかわる修正が何回も繰り返された¹³⁵。これらの修正のなかで最も重要なのは、建言の問題を中心とする、裁判所との関係にかんするものである。1670年刑事王令第16章第1条は、法院の建言権を明示的に認めてはいたが、その一方で、罪刑消滅の書状の場合は、即座に認可しなければならないと規定していた。前述のように、この王令は初めて罪刑消滅の存在に言及したが、その目的は、裁判上の書状と恩赦状との別を明らかにし、裁判官による恩赦状の棄却を防ぐことにあった¹³⁶。王権は、法院の建言権をさらに封じ込めるため、1673年2月24日に、恩赦状や法令の書かれた国王公開状にいかなる異議を唱えることも、いかなる修正を施すことも禁止し、パルルマン法院による建言も、これらの書状が無条件に登録されてからに限定した¹³⁷。1678年6月の勅令は、犯罪の重大さに応じて、最高諸法院が建言をなすことを再び認めはしたが、前述のように、この勅令は恩恵による赦免の概念をもちだして、パルルマン法院の小尚書局による赦免を限定し、主権者による赦しの枠をより広いものとした。1683年11月22日の国王宣言も、恩恵による赦免を罪刑消滅の場合と同様に扱うことを求めた。これらの法令により、裁判所が恩赦にかかわる余地はかなり少なくなったとすることができる。さらに、1723年5月22日の国王宣言までは、パルルマン法院の小尚書局は、国王政府の介入なしに赦免の

¹³¹ *Ibid.*, t. 14, p. 83. また、1548年のパリ・パルルマン法院判決も、マレショセのプレヴォ裁判官が恩赦状の認可手続きに介入することを禁じている。Legoux, *op. cit.*, p. 133.

¹³² Isambert et al., *op. cit.*, t. 14, p. 250.

¹³³ Legoux, *op. cit.*, p. 250. この時の恩赦状の名義は「シャルル、マイエンヌ公かつフランス王国(l'État et royaume de France)総代行官」であった。

¹³⁴ Sermet, *op. cit.*, p. 73.

¹³⁵ Legoux, *op. cit.*, pp. 137-151.

¹³⁶ Le Poulichet, *op. cit.*, p. 12.

¹³⁷ Isambert et al., *op. cit.*, t. 19, pp. 70-73.

書状を交付することができたが、この法令の第3条により、小尚書局は、送付した赦免の書状の一覧表を、4か月ごとに大法官に送付しなければならなくなった¹³⁸。こうして、それから10年も経過しないうちに、すべての書状が国王の側により発せられるようになった¹³⁹。法院による恩赦への介入の余地はさらに限定され、1762年には、国王国務会議裁決により、宮内庁判事(*prévot de l'Hôtel*)が、その管轄区であるヴェルサイユ宮殿の周囲10キロ内の事件にかんする恩赦状の認可の権限を与えられた¹⁴⁰。国王国務会議裁決は、通常の法令と異なり、パルルマン法院による登録を経ずして効力を有し、法院による王権への反発に対抗するために用いられたことをかんがみると、この裁決の意図は明らかである。

こうして、王権はまず、諸侯などの諸権力から巧みに恩赦権を奪い、恩赦権を独占すると、次は恩赦の決定を覆されることがないように、認可手続きを形骸化させた。国王以外の者が恩赦を与える可能性を考慮しなかった1670年刑事王令が成立したのが、絶対王政の絶頂期であるルイ14世の時代であったことは単なる偶然ではないだろう。もはや、国王以外の誰も恩赦の権利を有してはいない。かつて神の恩寵であった恩赦は、国王の恩恵となるのである。

¹³⁸ Serpillon, *op. cit.*, pp. 751-752.

¹³⁹ Abad, *op. cit.*, p. 23.

¹⁴⁰ Legoux, *op. cit.*, p. 151.

第2節 神の赦しから王の恩赦へ

これまで述べたように、恩赦と主権には密接なかかわりがあった。近代的主権概念をはじめて定式化したボダンも、『国家論』（1576年）において、恩赦を「主権の第5のしるし」と位置づけ、主権者以外の者が恩赦権をもつことを批判している。一方、ボダンによれば、刑罰権は主権のしるしに含まれない。主権者自ら与えなければならないのは赦しだけで、刑罰は司法官に与えさせてしまっても何ら問題はないし、むしろそうすべきだといっているのである。これはなぜだろうか。フーコーは、『監獄の誕生』で、アンシャン・レジーム期の王権は、華々しい身体刑を通じてその力を増幅させたと述べた¹⁴¹。それなのに、なぜ、刑罰権ではなく恩赦権が主権のしるしなのだろうか。しかし、考えてもみよう。今まさに命を奪われんとする死刑囚のところに、一通の書状を手にした国王の使者が駆け寄ってきたら、処刑を見物しに来た人々は何と思うだろうか。とくに、罪人自身はこの慈悲を神の慈悲とまで思うであろう。王権の狙いはそこにあった。王権は、恐ろしい刑罰と恩赦のコントラストにより、神の座を手にしようとしたのである。

(1) 冤罪と恩赦

アンシャン・レジーム期の刑罰として、まず思い浮かぶのは死刑であろう。当時は、あらゆる犯罪に頻繁に死刑が用いられていた。死刑の方法には、四つ裂き、火あぶり、車刑など、非常に残酷なものもあったが、多く用いられていたのは絞首刑である¹⁴²。死刑を言い渡された受刑者は、監獄で最後の一夜を明かし、翌日粗末な車に乗せられて処刑台へと連れられる。刑場へ到着し、死刑執行人が仕事を始める直前に、罪人は聴罪司祭に慰めの言葉をかけられ、いとまごいをする…このようなドラマティックな処刑は、見せしめにより犯罪を予防するという効果だけでなく、犯罪によって傷つけられた共同体秩序を再建し、人々の前に権力の重々しさ、彼らにたいする王権の絶対的な優位を可視化し、その正当性を再提示するという狙いもあった。そうすると、もしこの裁きに間違いがあったとしたら、共同体秩序は再建されるどころか再び混乱し、権力の正当性が崩壊することにはならないだろうか。それとも、無実を訴える者の声は無視され、犯罪者の汚名を着せられて、恐ろしい刑罰の餌食となるしかなかったのだろうか。

実は、アンシャン・レジームにも冤罪事件は存在した。これは「生ける正義」であり「正義の源」である国王の名の下に行われた裁判にも間違いがあり、しかも、それが他人の手によって明らかになったということを意味する。その有名な例としては、18世紀後半のカラス事件など、啓蒙期の刑法改革への動きにつながったものもある。しかし、それ以前にも、冤罪が、しかも、処刑が完了する前に、明らかとなった事例が数多く見られた。ただ

¹⁴¹ voir Foucault, *op. cit.* フーコー前掲訳書参照。

¹⁴² 絞首刑は平民にたいし一般的に用いられていた死刑の執行方法であり、貴族には特権として斬首刑が用いられていた。

し、それはかっこつきの「冤罪」であるけれども。

当時の冤罪と興味深い関係をもつのが「司法の奇跡(*miracle judiciaire*)」と呼ばれる現象である。これは、処刑が失敗に終わり、受刑者が死亡せずにすむことを指す。処刑の失敗の理由としては、死刑執行人が首に縄をかけ損ねたことや、木製の絞首台がすでに腐っていて折れてしまったことなどがあるだろうが、当時の人々の目には、間違った判決が下されたために神や聖母、あるいは聖人たちが受刑者を助け、人間の裁判の過ちを晴らしたと映った。つまり、不完全な人間の誤った裁きに、神の裁きが割って入ったのである。これより、「奇跡」は、神判に近いものであったと考えられる。しかしながら、「奇跡」は、「誤った」判決の後に神が介入するという点で神判とは異なっていた¹⁴³。そのため、この慣習は、神判が姿を消しても存続し、18世紀後半になっても議論されることがあった。神による「奇跡」という考え方は、当時の人々の間で共有されていたようである。16世紀や17世紀には、この主題を扱った書物がいくつか出版されているし¹⁴⁴、有名な法学者たちもこの概念に考察を加えている¹⁴⁵。

したがって、この現象を分析することは、当時の赦しの根底として社会に共有されていた思想を明らかにすることを意味する。では、具体的に、いかなる状況において「奇跡」は認められたのであろうか。また、ここで明らかにされる神の意思は、国王の意思にいかなる影響を与えたのであろうか。そして、「生ける正義」である国王の判断は、無謬であるはずではなかったのだろうか。実際に事例を検討してみよう¹⁴⁶。

1528年9月19日土曜日、パリのセヌ川左岸にあるモーベル広場で、アンジェ出身の、およそ21歳の青年が、死体隠しを手伝った罪で絞首刑に処された。彼が車に乗せられ、監獄を出たのは午後3時のことであった。刑場に到着すると、聴罪司祭と人々が讃美歌サルヴェ・レジナを歌って、彼の死を見届けようとしていた。そして、彼の首に縄がかけられた。しかし、この時「奇跡」が起こった。彼は首を絞められても死亡しなかったのである。ところが、「亡骸」として絞首台から降ろされて荷馬車に積まれた青年が、片足を高く挙げ、息をしているのを見た執行人の助手(*vallet*)は、とどめをさすために、その腹部を蹴飛ばし、ナイフを出してのどを切ろうとした。その時、間一髪で「ああ、ならず者め。お前はこの人を殺すのか。これが奇跡だとわからないのか」と、一人のみずぼらしい女性が

¹⁴³ Bastien, Pascal, *L'Exécution publique à Paris au XVIIIe siècle : une histoire des rituels judiciaires*, Seyssel, 2006, pp. 208-209. 本稿における「司法の奇跡」の考察は、バスティアンに多くを負っていることを予めお断りしておく。

¹⁴⁴ voir Chartier, Roger, *La pendue miraculeusement sauvée. Étude d'un occasionnel*, dans *Les usages de l'imprimé*, sous la direction de Roger Chartier, Paris, 1987.

¹⁴⁵ たとえば、16世紀の法学者、パポンやティラクオがこの現象について言及している。Bastien, *op. cit.*, pp. 209-210, note 3.

¹⁴⁶ 以下に挙げる事例は、*Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier (1515-1536)*, publié pour la Société de l'histoire de France d'après un manuscrit inédit de la Bibliothèque impériale par Ludovic Lalanne, Paris, 1854 ; réimpression, New York, 1965, pp. 372-374 ; Bastien, *op. cit.*, pp. 210-211.

声を上げる。一命を取り留めたこの受刑者は、カルメル会教会にあるマリア像の前に運ばれた。そして、彼は暖炉の前のベッドに寝かされ、瀉血され(fut seigné)、飲み物と塗油を受けた。翌朝、彼は、ほんのわずかだが食事をとることができ、さらに2日後には記憶を取り戻した。当時の日記によれば、このできごとは、彼が日頃から帰依していた聖母の加護によるものであった。

生還した青年は、国王フランソワ1世のところに連れられ、この事件のことを話すよう求められた。国王は、「輝かしい聖母」を理由に、9月26日にこの青年に恩赦を与えた。国王も「奇跡」を認めたのである。先に述べたように、「司法の奇跡」は人間の裁判で生じた過ちを、神が判決の後に修正することを意味していた。よって、「奇跡」が起きたということは、その死刑判決が間違っていて与えられたことを意味していると言うことができる。そうであれば、彼が処刑される理由はもはや存在せず、彼を「罪人」のままにしておくことは認められない。ゆえに、国王は恩赦を与えたのである。ところで、この事例では、「奇跡」の後、パルルマン法院が青年の警備のため、役人を2週間程度派遣している。つまり、裁いた張本人であるパルルマン法院もまた、自らの誤審と、人の裁きにたいする神の裁きの優位を認めているのである。

1589年のブルターニュでも、似たような事件が起こっている。受刑者の女性は嬰兒殺の罪に問われていたが、彼女は容疑を否認し続けていた。結局、絞首刑は執行されたものの、彼女は3日間死亡せずに生き延び、最終的に恩赦を得たのであった¹⁴⁷。この事件を伝えた出版物のひとつは、「奇跡」が司法にたいし慎重になるように戒めたのだと述べた¹⁴⁸。これらの事例から、人々にとって、人の裁きと神の裁きは別個の存在であり、前者には誤りが当然ありうる一方、後者は絶対的に無謬であったということがわかる。

もちろん、処刑が失敗すればすべて「奇跡」とみなされるのではない。バスティアンは「奇跡」の要件として、(1) 処刑が偶然中断されること(2) 被告人が犯罪を自白しないこと(3) 処刑に集まった人々が率先して受刑者の救いを求めることの3つを挙げている¹⁴⁹。しかし、人々の側から神の「奇跡」が主張されるのであれば、神の意志を盾に、臣民が国王の判断に逆らうこともありうるのではないか。このようなことは、国王にとっては受け入れがたい。それでは、自らの裁きを絶対化するためにはどうすればよいだろうか。国王の裁きを、神の裁きと一体化させてしまえばよいのである。

しかし、神の裁きを標榜するもうひとつの権威が存在した。教会である。当時、教会の

¹⁴⁷ Chartier, art. cit. ; Milanesi, Claudio, La réanimation d'un condamné à Montpellier en 1745, dans *L'exécution capitale : une mort donnée en spectacle XVI^e-XX^e siècle*, sous la direction de Régis Bertrand et al., Aix-en-Provence, 2003, pp. 35-37.

¹⁴⁸ *Discours miraculeux et véritable advenu nouvellement, en la personne d'une fille nommée Anne Belthumier, servante en l'Hostellerie du Pot d'Estain, en la Ville de Mont-fort entre Nantes et Rennes en Bretagne, laquelle a esté pendu III jours & 3. nuits sans mourir. Avec Confession de plisieurs dudit Mont-fort, comme l'on pourra voir par ce présent discours*, Douai, 1589, p. 7, cité dans Chartier, art. cit., p. 89.

¹⁴⁹ Bastien, *op. cit.*, pp. 211-212.

勢力は世俗勢力に劣っていたが、教会裁判権は、宗教にかんする事件の管轄やアジール権を維持し、国王裁判権からの、一定の独立を守っていた。しかし、先に述べたように、かねてから、国王以外の恩赦を禁止する立法がしばしば出されており、1539年には、ヴィレル・コトレの王令によりアジールの存在も否定され、1563年からは、教会裁判権の管轄も狭められてしまった¹⁵⁰。もはや教会は、宗教秩序を独占的に支配することができなくなったのである。

ちょうど同じころ、訴訟手続きにも変化が生じていた。中世までの訴訟は、現在でいう民事訴訟のように、原告が被告を訴えることで開始し、両当事者が平等な立場で争うという形をとっていた。しかしながら、王権が伸長するに従い、手続きは徐々に職権化し、1670年刑事王令の頃には、かつて例外的と考えられていた糾問が、主たる手続きと位置づけられるに至った¹⁵¹。裁判官が訴追から判決に至るまで主導権を握るこの手続きにおいては、被告人が無実を主張するチャンスはほとんど失われた。人々は、ひとたび嫌疑をかけられると、仮に真犯人が別にいたとしても、尋問や拷問により自白を強要された。つまり、この手続きにおいては、裁判に誤りなど絶対に「生じえない」。こうして、「司法の奇跡」は姿を消した。今や、罪人の命は、国王が独占する「殺す (*faire mourir*) か、生かしておく (*laisser vivre*) 権利」に委ねられるのである¹⁵²。

もちろん、以上のことは、恩赦が与えられなくなったことを意味するわけではない。しかし、裁きを下す国王こそが神であり、正義の源泉なのであるから、恩赦が与えられる根拠は、もはや裁判の誤りではなかった。ここでバスティアンは、1625年にディジョンで起きた、かつての「奇跡」を思わせるできごとを紹介する。この事件の主演は 22 歳の高貴な女性である。彼女は、嬰兒殺により斬首刑を言い渡されていたものの、一貫して容疑を否認していた。処刑の日、刑場ではイエズス会やカプチン会の人々が「イエス！ マリア！」と、野次を飛ばしていた。この声に執行人は集中力を乱されたのか、処刑は 1 回では成功せず、失敗とともに、野次を飛ばしていた人々の怒りは増して、とうとう執行人は逃げ出さざるを得なくなった。そこで、彼の妻が、受刑者を縛っていたひもや、はさみまで使って夫の代わりを務めようとしたが、人々は石を投げ、最終的には執行人夫妻を殺害してしまった。一方、受刑者の女性は、医者に運ばれて一命を取り留め、その後恩赦を得た¹⁵³。

¹⁵⁰ Bastien, Pascal, *Erreurs et miracles judiciaires dans la France d'Ancien Régime (XVI^e-XVIII^e siècle)*, dans *L'erreur judiciaire : de Jeanne d'Arc à Roland Agret*, sous la direction de Benoît Garnot, Paris, 2004, p. 91.

¹⁵¹ Esmein, Adhémar, *Histoire de la procédure criminelle en France et spécialement de la procédure inquisitoire depuis le XIII^e siècle jusqu'à nos jours*, t. 1, Paris, 1882, p. 221. エスマン「フランス刑事訴訟法史（13 世紀から 1670 年刑事王令まで）」塙浩訳（塙浩訳著『フランス刑事法史』信山社、2000 年、所収）、505 ページ。

¹⁵² Foucault, Michel, *La volonté de savoir*, Paris, 1979, p. 178. ミシェル・フーコー『知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986 年、172 ページも参照。

¹⁵³ Bastien, *L'Exécution publique*, pp. 216-217 ; Delarue, Jacques, *Le métier de bourreau du Moyen-Age à aujourd'hui*, Paris, 1979, pp. 68-69.

たしかに、この事例にも前述の 3 要件が見て取れる。しかしながら、バスティアンは、16 世紀の事例との決定的な違いを指摘する。この女性は、無実とはみなされなかったのである。さらに、この恩赦は「輝かしい聖母」によるものではなく、「朕自身の行動、特別な恩寵、全権と王権をもって」行われたのであった。

17 世紀の恩赦は、受刑者が「死の恐怖と、彼女〔受刑者〕がさらに耐えた責め苦により、すでに罪を償った」から、あるいは「とても謙虚に嘆願した」からという理由で与えられた¹⁵⁴。以前は、神に赦しを求めることで「奇跡」が起きたのだが、今や、処刑の際に「奇跡」を願うことは、たとえそれが無実の者の願いであったとしても、「非常に横柄な言動」に過ぎないのである¹⁵⁵。恩赦は、あくまで国王に赦しを求めることによってしか与えられない。さらに、前述のように、赦しを乞うということは、罪を認めたことを意味するので、国王の恩赦は、「奇跡」のように、国王の正義の無謬を傷つけるものではない。

国王に赦しを求める光景は、恩赦嘆願以外の場所でも見られる。死刑を言い渡された者は、通常、付加刑として、公然謝罪刑を与えられていた。この刑罰は、処刑場へ向かう途中で、「神と国王と正義」に赦しを求めるというものである。公然謝罪を行う際も、恩赦状の認可の際と同様、赦しを乞う者は脱帽し、跪かなければならなかったのだが、自白と赦しとの関係を思い出すと、この一致は必然的なものであったようにさえ思われる。事実、公然謝罪は、14 世紀末ごろから赦しと組み合わせられるようになっていった。このことは、臣民の「赦してください」という声を、神と正義である国王が聞いてやっているという印象を人々に与えたであろう。ゆえに、この刑を通じて、国王が神としての姿を手にしたことは想像に難くない¹⁵⁶。こうして、神となった国王が正義の中心に据えられ、純粋な意味での神は、正義の場から姿を消した。そして、死刑囚に恩赦が与えられるのを目の前で見た人々は、こう叫ぶようになるだろう。「国王ばんざい¹⁵⁷！」

実は、このような劇的な恩赦の裏には、巧妙な演出があった。1633 年 11 月 14 日の事例から、このことをはっきりと見て取ることができる。この日、政治犯として囚われていたジャール騎士の死刑が執行される直前に、恩赦状を手にした見張り兵(gardes)が、刑場に集まった人々をかき分けながら滑りこみ、間一髪のところ処刑を止めた。観衆は大いに喜び、感謝のテ・デウムを歌った。ところが、この兵士たちは、書状を手を急いで刑場にやって来たのではなかった。彼らは、初めからその場において、処刑のクライマックスを待っていたのである。実は、彼らには事前に、大法官セギエから、最後の瞬間に処刑を制

¹⁵⁴ Bastien, *L'Exécution publique*, pp. 217-218.

¹⁵⁵ *Ibid.*, p. 212.

¹⁵⁶ Gauvard, Claude, *L'honneur du roi. Peines et rituels judiciaire au Parlement de Paris à la fin du Moyen Âge*, dans *Les rites de la justice. Gestes et rituel judiciaires au Moyen Âge*, sous la direction de Claude Gauvard et al., Paris, 1996, pp. 108-110.

¹⁵⁷ 1731 年 10 月 19 日の事例。この後、解放された受刑者は国王に礼状を書き送っている。Bastien, *L'Exécution publique*, pp. 221-222.

止するよう命令がなされていた¹⁵⁸。おそらく、この華々しい演出は、厳しい処罰と恩赦という正義の二面性を人々の前に一度に提示することで、王権の強化を促したのである¹⁵⁹。

恩赦が与えられた事例があれば、与えられなかった事例もあるわけで、赦されなかった者の家族や友人が、不満を募らせ国王を恨むこともあり得ない話ではない。また、直接死刑囚と知り合いであるわけではないが、目の前で人が痛めつけられ、苦しみ声を上げるのを見て哀れに思い、国王の残虐さに眉をひそめた者もいただろう¹⁶⁰。こうした、国王に反感をもつ者を生み出さないために、厳かな儀礼により処刑に権威が与えられたのである。

加えて、国王を人々の怒りから守るためには、もうひとつ重要なことがある。死刑を執行するのは、国王ではなく、死刑執行人とその助手だということである。アンリ 3 世以前は、国王は処刑に立会い、それが国王により主催されていることと同時に、臣民の身体にダイレクトに作用する王権の絶対性を示していた。しかし、アンリ 4 世（在位 1589～1610 年）は処刑に出席しなかったようであるし、16 世紀末には、国王が処刑に出席しないよう求める意見さえ登場した¹⁶¹。したがって、執行人は、本来であれば国王が行うべき、死刑囚の命を奪うという行為を、処刑台という舞台の上で、国王の代わりに演じている。その演劇は、壁で区切られていない舞台上で執り行われることにより、それを囲む観客をも、登場人物として取り込んでいる¹⁶²。そして、緊張した空気をつんざくような受刑者のうめき声は、それを聞くすべての者にその身体をイメージさせ¹⁶³、彼らをも処刑の空間の中に引きずり込むのである。したがって、ここで重要なのは、死刑囚がどこのだれかということではなく、死刑が行われているということである。ジャンやカトリーヌといった個人的な名前を失ったひとりの「死刑囚」は、これまでに処刑された幾人もの死刑囚のイメージと重なりあってひとつになり、次の死刑囚が処刑される時にもう一度姿を現す。言い換えれば、人々は、今処刑される死刑囚の苦しみ声をきっかけに、それ以前のすべての処刑を

¹⁵⁸ Fernandez-Lacôte, Hélène, *Les procès du cardinal de Richelieu : droit, grâce et politique sous Louis le Juste*, Seyssel, 2010, pp. 84-85.

¹⁵⁹ voir Garnot, *op. cit.*, p. 437.

¹⁶⁰ Bée, Michel, *Le spectacle de l'exécution dans la France d'Ancien régime*, *Annales : économies, sociétés, civilisations*, 38, 1983, p. 856.

¹⁶¹ Bastien, *L'Exécution publique*, pp. 214-216. この意見を述べた、博学の人スカリジェは、「王国の第一の裁判官」である国王を含む司法官は処刑に臨席すべきではないと述べている。

¹⁶² voir Apostolidès, Jean- Marie, *Le Prince sacrifié. Théâtre et politique au temps de Louis XIV*, Paris, 1985, pp. 39-42. J.= M. アポストリデス『犠牲に供された君主』矢橋透訳、平凡社、1997 年、51-54 ページ参照。アポストリデスは、演劇の登場人物と貴族との装束が類似していたために、貴族が演劇に容易に同化することができたと述べるが、これを参考に考えると、たとえ貴族であってもその豪華な装束を脱がされ、粗末な車に乗せられた死刑囚の姿は、この人を主役とする処刑に、貧しい民衆が同化することを容易に言うことができるかもしれない。また、松永寛明『刑罰と観衆 近代日本の刑事司法と犯罪報道』昭和堂、2008 年も参照されたい。

¹⁶³ 蓮實重彦『ゴダール マネ フーコー—思考と感性とをめぐる断片的な考察』N T T 出版、2008 年、164 - 166 ページを参照。

思い出すのである。

こうして、死刑執行人は、その命令を下す国王に代わって、観衆の怒りをすべて一手に引き受けることとなった。執行人への恐れや怒りは、刑罰が過激であればあるほど大きくなり、その一方で、国王は、神のように、目に見えないところからこの空間を司るだけであつた。国王はあくまで「正義の源」であつて、その手を汚すことなどない。悪いのは執行人で、国王は、人々を死から救い出す正義の味方である¹⁶⁴。したがって、国王が処刑場に姿を現すのは、処刑が中断される時だけとなる¹⁶⁵。ただ、繰り返しになるが、死刑は、あくまで国王の名において与えられているわけで、執行人は、国王が直接的に担ってはいない役割を、国王に代わって受けもつという点において、国王と一体である。つまり、執行人は国王の対極として汚辱を受け、そのことを通じて国王の栄光に資するのである¹⁶⁶。

今や、「神の正義」は「王の正義」にその座を奪われた。王権をこの高みにまで持ち上げたものが何であつたかを一言でまとめることは困難であるが、厳しい刑事手続きと表裏一体となった恩赦が重要な役割を担っていたことは確かである。当時、犯罪はその被害者だけでなく、国王にたいする攻撃でもあると考えられていた。ゆえに、それを厳しく罰することは、王国を揺さぶる反逆者にたいする国王の勝利を意味した。このような、一度屈服させられた罪人に与えられる赦しは、さながらカエサル仁慈であつた。これは、かつて徹底的に弾圧されることがお決まりであつた政敵に、カエサルが赦しを与えたことを意味する。セネカによれば、仁慈は勝者たる賢王の徳であり、神と君主を結び付ける意義を有していた¹⁶⁷。ただ、カエサル仁慈は、単に赦しを与えるだけでなく、「従う者は赦し、

¹⁶⁴ モンテスキューは「君主の面前から退出するとき、人は必ず満足した状態にあるべき」なのであるとして、国王の恩赦権を根拠に、王による裁判を否定しているが、この言葉からも、国王は死刑を言い渡す側ではなく、あくまで赦しを与える側でなければならないことが見て取れる。*Œuvres complètes de Montesquieu*, t. 1, p. 105. モンテスキュー『法の精神（上）』、168 ページも参照。

¹⁶⁵ Bastien, *L'Exécution publique*, pp. 220, 223. バスティアンは、ギヨの『法学辞典』（1778 年）を引用しているが、これに加筆・修正を加えて 19 世紀に出版されたメルランの『法学辞典』には、当該引用箇所は書かれていない。voir Guyot, Joseph-Nicolas, *Répertoire universel et raisonné de jurisprudence civile, criminelle, canonique et bénéficiale*, t. 24, Paris, 1778, p. 68 ; Merlin, Philippe Antoine, *Répertoire universel et raisonné de jurisprudence, ouvrage de plusieurs jurisconsultes, réduit aux objets dont la connaissance peut encore être utile, et augmenté de des changemens apportés aux lois anciennes par les lois nouvelles, tant avant que depuis l'année 1814; 2^e de dissertations, de plaidoyers et de réquisitoires sur les unes et les autres*, t. 6, Paris, 1827-1828, p. 354.

¹⁶⁶ voir Apostolidès, *op. cit.*, p. 48. アポストリデス前掲訳書、62 - 63 ページ参照。

¹⁶⁷ voir Sénèque, *op. cit.* 『セネカ哲学全集 2』「寛恕について」を参照。Ham, Bertrand, « Tuer contre la loi, tout le monde le peut, sauver, personne sauf moi » Le De clementia de Sénèque et l'idéologie stoïcienne du principat, dans *Le prince et la Norme. Ce que légiférer veut dire*, textes réunis par Jacqueline Hoareau-Dodinau et al., Limoges, 2007 ; Flamerie de Lachapelle, *op. cit.*, pp. 72-107.

傲慢な者をくじく」という意味を含んでおり¹⁶⁸、彼の秩序の下に完全に組み込まれることを条件としていた。つまり、一見逆説的であるが、国王を攻撃した者への恩赦は、犯人により揺るがされた王権を立て直し、犯人にたいする王権の優位を構築するのである¹⁶⁹。このことをはっきりと示すのが、反乱後の恩赦である。国王は、反乱を平定すると、つい先ほどまで自らに向けられていた刃のことを忘れてやろうとするかのように恩赦を与えた¹⁷⁰。こうして、国王の慈悲は、屈服したかつての反乱分子たちの命を救ったが、「傲慢な者」は、見せしめとしてそこから除外されたのである¹⁷¹。

このように、恩赦は王権の勝利のセレモニーとしての意味ももつ¹⁷²。恩赦は、聖別戴冠式などの喜ばしいセレモニーの際にも行われていたが、これにより喜びを共有させることで国王と臣民を一体とし、王権の安定と王国の発展に資することができただろう。が、それよりも重要であったのは、元来宗教的行為であった「赦し」を、荘厳な儀礼の中で行うことで、聖なる空間を形成し、国王の神性をさらに高めることであったのではないだろうか。次は、儀礼と恩赦の関係を検討する。

¹⁶⁸ 引用部分の原文は、「*parcere subiectis et debellare superbos.*」である。vide Arendt, Hannah, *On Revolution*, London, 1990, p. 210. ハンナ・アレント『革命について』志水速雄訳、合同出版、1968年、270ページを参照。

¹⁶⁹ ウィットマン前掲訳書、15、206ページ。

¹⁷⁰ 14世紀のイギリスにおける恩赦を研究したレーサーによれば、恩赦には、王に刃向って敗れた者にたいし、将来の保護を保証する意義がある。Lacey, *op. cit.*, p. 94,

¹⁷¹ たとえば、1652年10月22日には、ルイ14世のリ・ド・ジュスティスにより、フロンドの乱の参加者を対象とする大赦法が登録されている。Isambert et al., *op. cit.*, t. 17, pp. 296-299. また、フロンドの乱が鎮圧された直後の1653年8月にも大赦が行われたが、ここでは、ピエール・ド・ヴィラルールという人物が、名指しで大赦の対象から外されている。彼はボルドーの反乱分子、「榆の木同盟」の指導者のひとりで、フロンドの乱の間から、王権側に貴族としての地位を否定されていた。ヴィラルールは、大赦の対象から外された後、コンティ親王の援助と庇護を得て身を保っていたが、1659年3月に恩赦を与えられている。Blanquie, Christophe, Pierre de Villars : An Ormiste after the Fronde, *French History*, v. 20, n. 1, 2006. voir aussi Brière, *op. cit.* 1675年のブルターニュ地方でのいわゆる「印紙税一揆」でも、首謀者がひととおり処罰された後の、1676年2月5日に大赦が出されたが、164名が凶悪犯としてそこから除外されている。二宮宏之「『印紙税一揆』覚え書」(二宮宏之『フランス アンシアン・レジーム論—社会的結合・権力秩序・叛乱—』岩波書店、2007年、所収)、348ページ。本章第1節(2)注33も参照。

¹⁷² この点、1451年と1453年のボルドーにたいする恩赦が想起される。この頃、ボルドー市はイギリスと手を結んでいたが、1451年に、イギリスから得た特権の維持と引き替えに、フランス国王シャルル7世の前に屈した。ここで与えられた恩赦にもかかわらず、ボルドーは1452年に再びイギリス兵を受け入れ、フランスに抵抗したが、1453年7月17日に敗北した。二度めの抵抗のため、1453年には恩赦に異論もあったが、ボルドーの商業的利点が考慮され、見せしめとしての刑罰や、ボルドーの犯した罪をこれ見よがしに述べた恩赦状などを用いることで、処罰と恩赦を一度に行うという方策がとられた。また、その後は、国王側の役人が市の要所に送り込まれるなど、ボルドーの「フランス化」が進められた。結局、市にたいする王権側の不信はシャルル7世の死まで払拭されなかったが、敗北以後、ボルドーは王権の中継地として、「善き都市」の役割を担うこととなった。

Bochana et al., *art. cit.*, pp. 87-103.

(2) 儀礼と恩赦

ランスのノートルダム寺院で行われる、フランス国王の聖別戴冠式は、彼が「いとキリスト教的」であることを象徴している¹⁷³。国王が両手を福音書の上に置き、キリストの名において行う宣誓や、彼に聖なる性格を与える塗油、さらにミサや聖体拝領からなる聖別戴冠式は、国王が聖書の王たちの後継者であるような印象を与えただろう。そして、そこで行われる恩赦は、人々に「神の赦し」を想起させたに違いない。

ところが、聖別戴冠式で恩赦が与えられるようになったのは、記録の上では 1610 年のことに過ぎない¹⁷⁴。それ以前には、新国王の即位時の恩赦が行われていたのは、国王が初めて都市を訪れる際になされる入市式であった¹⁷⁵。興味深いことに、入市式は、聖別戴冠式で恩赦が行われはじめたのとはほぼ同じ頃に衰退する¹⁷⁶。このことから、17 世紀には、入市式ではなく、聖別戴冠式こそが恩赦にふさわしい場であると考えられるようになったとすることができる。なぜこのような変化が生じたのだろうか。まずは、入市式における恩赦の事例を見てみよう。

宗教戦争終結直後の 1594 年 3 月 22 日、国王アンリ 4 世によるパリへの入市式が行われた¹⁷⁷。一時は国王を追い出すほどの勢力を誇っていたカトリック・リーグは敗北し、人々は「国王ばんざい」と叫んで王を受け入れた¹⁷⁸。ヌーヴ門からパリに入市した国王は、ルーヴル宮やサントノレ門などを経てノートルダム寺院に入り、神に感謝を捧げた¹⁷⁹。この時、町のあちこちでは、パリ北東の町サンリスで 2 日前に出されていた、16 区総代会(Seze)

¹⁷³ 石井三記「フランス君主制の儀礼と象徴」『社会思想史研究』第 15 号、1991 年、22-25 ページを参照。

¹⁷⁴ Jackson, Richard A., *Vive le Roi! : A History of the French Coronation from Charles V to Charles X*, Chapel Hill and London, 1984, p. 96.

¹⁷⁵ voir Le Poulichet, *op. cit.*, p. 33.

¹⁷⁶ Bryant, Lawrence M., *The King and the City in the Parisian Royal Entry Ceremony : Politics, Ritual, and Art in the Renaissance*, Geneve, 1986, pp. 216-218. 小山啓子『フランス・ルネサンス王政と都市社会—リヨンを中心として』九州大学出版会、2006 年、138-141 ページも参照。なお、小山は、入市式の衰退に伴い、テ・デウムの重要性が増したと指摘している。

¹⁷⁷ 入市式の様子は Wagner, Marie-France, *Les Entrées royales et solennelles du règne d'Henri IV*, t. 1, Paris, 2010, p. 159-201. また、*Collection complète des mémoires relatifs à l'histoire de France*, avec des notices sur chaque auteur, et des observations sur chaque ouvrage par M. Petitot, t. 47, Mémoires de Pierre de L'Estoile pour servir a l'histoire de France et Journal de Henri III et de Henri IV, t. 3, Paris, 1825, pp. 3-46. 高澤紀恵『近世パリに生きる ソシアビリテと秩序』岩波書店、2008 年、121-123 ページも参照。

¹⁷⁸ L'Estoile, *op. cit.*, p. 4. アンリ 4 世は、かつてはプロテスタントであったが、1593 年 7 月 25 日にカトリックに改宗し、1594 年 2 月 27 日に聖別戴冠式を行っている。Wagner, *op. cit.*, p. 160.

¹⁷⁹ ヌーヴ門は、17 世紀後半まで、ルーヴル河岸のボワ塔近く、サン=ニケーズ通りにあり、1588 年には、アンリ 3 世がこの門からパリを脱出した。Wagner, *op. cit.*, p. 172. アフレッド・フィエロ『パリ歴史事典』鹿島茂監訳、白水社、2011 年、720 ページ。

を含むすべての者を赦す国王宣言が公示されていた¹⁸⁰。27日には、バスティーユに籠城して最後まで抵抗を続けていた一派も降伏し、翌28日に、パリ平定の勅令により恩赦が与えられた¹⁸¹。入市式の日取りが復活祭の時期に近かったこともあり、国王は、4月7日の聖木曜日に貧しい人々の足を洗い、8日の聖金曜日にオテル・デューを訪れ、また、囚人解放を行い、10日の復活祭当日には、自らいれき患者に触れることでその病を治癒する儀礼、ロイヤル・タッチを行った。この一連の行為により、国王に反抗していたソルボンヌの神学者なども彼の前に跪いた¹⁸²。

ここからわかるように、都市にとって、国王を迎えるということは、彼に服従することを意味していた。したがって、そこで与えられる恩赦は、まさに国王の勝利のセレモニーであった。ゲネらは、入市式を「聖体の祝日(Fête-Dieu)」の政治版、すなわち「国王の祭典(Fête-Roi)」と表現したが¹⁸³、ここでの恩赦は、「神の赦し」をも彷彿とさせたであろう。さらに、国王の神性はロイヤル・タッチによっても表現される。ジャクソンによれば、聖別戴冠式でのロイヤル・タッチと恩赦は、それぞれ、王朝の連続の原理を具現化する意義と、あらゆる権力と権威の保持を証明する意義を有していたが、入市式におけるこれらの行為にかんしても、同様のことが言えるであろう¹⁸⁴。

しかし、入市式は、国王の威厳を示す場であると同時に、国王と都市との契約の場でもあった。受け入れる側の都市は、国王への服従を宣言し、貢物をささげる代わりに特権の承認などを求めたのである¹⁸⁵。また、式の準備作業は各都市が全面的に行っていたため、入市式は、都市が自らの誇りを表現する場でもあった。ゆえに、式には莫大な費用がかけられ、絢爛豪華な飾り付けや多くの貢物が用意された。王権と都市の双方にとって利益となる入市式は、諸勢力とのバランスの上に立つルネサンス期の王権にとって、重要な意義を有していたのである¹⁸⁶。ここから考えると、入市式における恩赦は、都市による国王への服従の見返りとして与えられるものであったとすることができるだろう。この点に、入市式における恩赦と、聖別戴冠式における恩赦の違いがある。聖別戴冠式においては、国王に要求をする貴族や都市は登場せず、恩赦は国王の一方的な恩恵として与えられているのである。

¹⁸⁰ Wagner, *op. cit.*, p. 182.

¹⁸¹ Isambert et al., *op. cit.* t. 15, Paris, 1829, pp. 81-83.

¹⁸² Wagner, *op. cit.*, pp. 173-174.

¹⁸³ Guenée, Bernard et al., *Les entrées royales françaises de 1328 à 1515*, Paris, 1968, p. 18. voir aussi Apostolidès, Jean-Marie, *Le roi-machine. Spectacle et politique au temps de Louis XIV*, Paris, 1981, p. 16. ジャン=マリ・アポストリデス『機械としての王』水林章訳、みすず書房、1996年、10ページも参照。

¹⁸⁴ Jackson, *op. cit.*, p. 113.

¹⁸⁵ たとえば、前述のパリ平定の勅令は、かつて市が有していた特権を全面的に認めている。Isambert et al., *op. cit.*, t. 15, p. 81.

¹⁸⁶ Brayant, *op. cit.*, p. 208. 小山前掲書、110-118ページも参照。

聖別戴冠式で恩赦されるのは、ランスの監獄にいる囚人たちである¹⁸⁷。この囚人たちには、パリからランスまでの道のりにある監獄に自首した者も含まれる。彼らは、国王に先立ってヴェルサイユを發った親任官により、ランスの監獄に集められる。そこで、宮廷司祭(*grand aumonier de France*)の立会いの下¹⁸⁸、国王の親任官により尋問され¹⁸⁹、釈放の対象となるか否かを判断される。ルイ 15 世の聖別戴冠式の際には、尋問は戴冠式の当日をまたいで 13 日間続いた¹⁹⁰。この作業が終了すると、恩赦を認められた者とそうでない者の一覧表が作成される¹⁹¹。その翌日、宮廷司祭はランス監獄へ赴き、囚人たちを集め、彼らを解放する¹⁹²。釈放の際、囚人たちには恩赦状が与えられるが、彼らは 3 ヶ月以内にそれを認可手続きにかけなければならない。ただ、認可手続きのために税を支払う必要はなく、解放された人々には、故郷に帰るための費用も与えられる。最後に、宮廷司祭が監獄から退出すると、囚人たちは列をなしてその後に続き、「国王ばんざい！」と叫ぶのである。

ジャクソンは、1654 年のルイ 14 世の聖別戴冠式の際に恩赦を与えられた囚人の数は、6000 人にも上った可能性があると言う¹⁹³。これほど大規模な仁慈の行為が、治世のはじめを飾ったことの意義は明白である。ところで、国王の正義が神の正義と同化したのも、国王が死刑執行の場から姿を消したのも、聖別戴冠式で恩赦が行われるようになったのと

¹⁸⁷ 以下は、1722 年 10 月 29 日の、ルイ 15 世の聖別戴冠式での恩赦の様子を参考にした。Jackson, *op. cit.*, pp. 94-96.

¹⁸⁸ フランス語の名称は、Jackson, Richard A., *Vivat rex. Histoire des sacres et couronnements en France*, Traduit par Monique Arav, Paris, 1984, p. 89.

¹⁸⁹ 王太子誕生など、その他の慶事の場合にも同様な恩赦が行われていたが、アバドによれば、1729 年 9 月 4 日の、王太子誕生の恩赦の際には、尋問の前に親任官が嘆願書を回収していた。聖別戴冠式でも同様の作業が行われていたどうかは定かではないが、AN BB³⁰ 54 には、囚人本人からの嘆願書のようなものが数枚収められていた。しかしながら、日付や名宛人が明示されていないものがほとんどであり、聖別戴冠式の際に出されたものであるのか、同じカートンに収められている、王太子誕生など、その他の恩赦の際に出されたものであるのかは判然としない。Abad., *op. cit.*, p. 73.

¹⁹⁰ ルイ 15 世の聖別戴冠式は 10 月 25 日に執り行われたが、尋問が終了したのは 28 日であった。Jackson, *Vivat rex*, pp. 94-95.

¹⁹¹ ルイ 16 世の聖別戴冠式の時に用いられた一覧表は、AN BB³⁰ 54 に収められている。恩赦が認められなかった者は、他の監獄に送られるが、その際、国务大臣から 3 ヶ月を限度とする通行手形が与えられた。Ibid., p. 95.

¹⁹² ルイ 16 世の聖別戴冠式における、釈放当日の様子は *Relation de la cérémonie du sacre et couronnement du Roi, faite en l'Église Métropolitaine de Rheims, le Dimanche 11^e jour de Juin 1775*, Paris, p. 30 を参照。それによると、釈放は聖別戴冠式の 3 日後の 6 月 14 日に行われ、15 日に聖体の祝日が祝われた後、16 日に国王はランスを後にしている。

¹⁹³ ジャクソンによると、ルイ 15 世の聖別戴冠式では 588 人中 511 人が、ルイ 16 世のときには 150 人中 112 人が解放されている。Jackson, *Vivat rex*, pp. 95, 97. ジャクソンの記述は、Bibliothèque de l'Assemblée Nationale, 1387. fols. 1-49^v や、その他の二次文献に従っているが、ル・プリシェは、AN O¹ 242 を参照し、ルイ 16 世の聖別戴冠式で 207 人中 205 人が恩赦を獲得したと述べている。Le Poulichet, *op. cit.*, p. 33. なお、AN BB³⁰ 54 には、112 名の囚人の名前、犯罪事実、所見の書かれた一覧表が収められていた。

ほぼ同じころのことであった。今や、国王が恩赦を拒否すれば、それは正義ゆえの行いとされ、逆に、恩赦を認めれば、それは善良さのためだとみなされるようになった¹⁹⁴。こうして国王は、すべての者に優位する絶対的な権力を手にした。この絶対的権力、すなわち近代的主権の概念を確立したのが、ジャン・ボダンであることは知られているが、彼の主権論においても、恩赦は重要な位置を占めている。(3) では、彼における恩赦について考察したい。

(3) ジャン・ボダン『国家論』における恩赦

ボダンは、『国家論』第1編第10章において、恩赦権は「主権の第5のしるし」であると述べている¹⁹⁵。この章の中で、彼はいくつかの「主権のしるし」について論じているが、その中で重要なのは、恩赦権を含む5つのしるしである¹⁹⁶。第1のしるしから第4のしるしをそれぞれ述べると、立法権、戦争と平和の権利、役人の任命の権利、そして、終局裁判を行う権利である。以上のしるしは、主権者である国王が独占しなければならない。というのも、これらを臣民の手に委ねることは、主権者の権威を減ずることを意味し、絶対に許されなかったからである¹⁹⁷。

これらの権利を有する「国家の絶対的かつ永続的な」主権が、彼の議論の特色である¹⁹⁸。また、彼の国家は、強力な主権でもって、複数の家およびそれらに共通するものを、正しく(droit)統治することを意味している¹⁹⁹。この国家の形は、主権者の形態と統治の性質に左右される。すなわち、主権をひとりが担えば君主制、国家の構成員全員、あるいはその大部分が有せば民衆制、寡占されていれば貴族制となる²⁰⁰。さらに、これらの国家形態それぞれにたいし、王政的統治、主人的統治、暴君的統治がありうる。王政的統治においては、臣民が主権者の立法に、主権者が自然法に従い、自然的自由と所有権が臣民にとどめ置かれる。主人的統治においては、主権者は軍事と正戦の権利(droit des armes & de bonne guerre)により財産と人民を支配し、家長が奴隷を支配するのと同じように臣民を統治する。

¹⁹⁴ Bastien, *Exécution publique*, p. 224.

¹⁹⁵ Bodin, Jean, *Les six livres de la République avec l'Apologie de R. Herpin*, Paris, 1576 : réimpression, Aalen, 1961, p.236. 『国家論』は、1586年にラテン語訳、1588年にイタリア語訳、1590年にスペイン語訳、1592年にドイツ語訳、そして1606年に英語訳が出版されている。佐々木毅『主権・抵抗権・寛容—ジャン・ボダンの国家哲学』岩波書店、1973年、102 - 103 ページ参照。

¹⁹⁶ ただ、例外として、領土が広すぎる場合、主権者たる君主が囚われの身にある場合、狂乱の状態にある(en fureur)場合、そして彼がまだ子供の場合には摂政に恩赦権を委ねることができる。Bodin, *op. cit.*, p.239.

¹⁹⁷ *Ibid.*, p. 212.

¹⁹⁸ *Ibid.*, p. 122.

¹⁹⁹ *Ibid.*, p. 1. この部分の訳は、成瀬治「ジャン・ボダンにおける『国家』と『家』」『法制史研究』第34号、1984年、82ページを参考としている。

²⁰⁰ Bodin, *op. cit.*, p. 252.

そして、暴君的統治では、主権者が自然法を蔑視し、自由人を奴隷のように扱い、臣民の財産を自分ものだと考える²⁰¹。前述のように、彼の主権は絶対的であるから、それを担う者が複数存在する民衆制や貴族制においては存在しえない²⁰²。また、3種類の統治についていえば、王政的統治が「正当な(legitime)」統治と言いかえられている箇所があり²⁰³、ボダンが、それぞれの統治にたいし、いかなる価値判断を下していたかを容易に推測できる。つまり、彼は絶対的な権力を手にする唯一の主権者、すなわち君主が正当に、ないしは正しく統治する国家をよしとしている。そして、この主権観、もしくは国家観が、彼の恩赦観を形作っている。

ところで、ボダンはこの書物の第4編第6章で、君主制を維持するための最も優れた規則は、君主が人々に好かれることであると言う。彼によれば、君主が好かれるための第一の方法は、悪人には公正な刑罰を、善人には報賞(loyer)を与えることである²⁰⁴。これと似たことが、第5編第4章でも述べられている。ここで彼は、刑罰と報賞が賢明に配分されていれば、国家は常に幸福で繁栄するが、もし善人が報賞を与えられず、悪人が彼らの罪に相当する刑罰を受けていなければ、国家は衰退すると述べている²⁰⁵。ここから、君主が好かれることが国家の繁栄を意味しているということがわかる。君主に善人と認められるという名誉を手にした臣民は、彼に愛着を覚え、信頼するだろう。その結果、この臣民は反乱など考えるにも至らなくなり、最終的には、国家の平穏な統治につながるのである。しかし、悪人を野放しにすれば、さらなる犯罪が助長され、国家は不安定になる。それゆえに、悪人は確実に処罰されなければならない。しかし、残酷で加辱的な刑罰が君主の手により与えられれば、臣民は彼を憎むかもしれない。したがって、心得た君主は、刑罰を司法官に下させ、臣民の怒りのクッションになってもらうのであるとボダンは説く²⁰⁶。彼によれば、報賞は善であるが刑罰は悪である。また、穏やかさや慈悲ほど、主権者たる君主にふさわしいものはないが、これらは、真の正義と善き裁判官とは逆の方向にある²⁰⁷。つまり、報賞を君主が与え、有罪判決などを裁判官に与えさせることが、君主が好かれる

²⁰¹ *Ibid.*, p. 273.

²⁰² *Ibid.*, p. 961.

²⁰³ *Ibid.*, p. 273.

²⁰⁴ *Ibid.*, p. 625.

²⁰⁵ *Ibid.*, p. 729 ; Bodin, Jean, *The Six Bookes of a Commonweale : A Facsimile reprint of the English translation of 1606, Corrected and supplemented in the light of a new comparison with the French and Latin texts*, edited with an Introduction by Kenneth Douglas McRae, Cambridge, 1962, p. 584. ボダンは、恩赦が与えられうる場合として、フランス語版では、武器の携行を禁止する法令に違反したが、携行の理由が自己の防衛のみであった時と、敵に食料を与えることを禁止する法令に違反したが、その理由が窮乏をしのぐために敵に食べ物を高く売却せざるを得なかったことであった時の二つを挙げているが、英語版では過失や正当防衛による殺人(bloodshed)が、これらの例よりも先に挙げられている。*Ibid.*, p. 240 ; Bodin, *Commonweale*, p. 174.

²⁰⁶ Bodin, *République*, pp. 625, 730.

²⁰⁷ *Ibid.*, pp. 621-622.

ための第二の方法なのである²⁰⁸。

では、報賞とは具体的に何を指しているのだろうか。ボダンによれば、報賞は名誉あるいは利益の性質を帯びるが、両方の性質を兼ね備えるものもある。ただ、両方の性質をもつものにかんしては、名誉の割合が多ければ利益の割合が少なくなり、利益の割合が多ければ名誉の割合は少なくなる。ボダンによると、凱旋式、全身像、名誉ある任務(charges honorables)などは、名誉の割合が多いとすることができる。また、税・従軍・通常の裁判官からの免除などは、利益の割合が多いと言える²⁰⁹。ところで、ボダンは恩赦が報賞に含まれるとは明言していない²¹⁰。しかし、「通常の裁判官からの免除」とは、国王の親裁に与れること、もしくはそもそも裁判自体を免除されることを意味すると考えられる。さらにいえば、報賞として国王の親裁に与れるということは、通常の裁判所で裁かれた場合に下されう厳しい判決ではなく、かなり甘い判決が下されることを含意していると推測される。つまり、彼の言う「通常の裁判官からの免除」とは、事実上の恩赦を意味していたと考えられるのである。

以上より、刑罰権ではなく、「パルルマン法院の判決の上から、法律の厳格さに反して、有罪判決を受けた者に恩赦を与える権力」が、主権の第5のしるしであることの理由が明らかとなる。このしるし、すなわち恩赦権は、「生命のためであれ、財産のためであれ、名誉のためであれ、追放からの呼戻しのためであれ」行使することができる²¹¹。ボダンは、恩赦とは、主権者により政治的意図をもって与えられるものと考えていた。しかし、彼の恩赦は、単なる政治的道具であったというわけではない。彼にとって、主権者の人格の侵害にたいする恩赦は、あらゆる恩赦の中で最も優れている。しかし、彼の主権者は神の法と自然法に服しており、予謀を伴う殺人など、神の法が刑罰を定めている場合には恩赦を与えることはできない。よって、主権者が赦しを与えることができるのは、市民法に違反した場合などである。仮に、市民法と神の法が同じ犯罪に刑罰を科していても、市民法の定める刑罰の方が重ければ、神の法が定める刑罰に軽減することができる。しかし、神の法に違反した者に恩赦を与えれば、ペスト、飢饉、戦争、そして国家の崩壊がもたらされる。というのも、すべての悪人のうち、実際に犯罪が立証されうるのはごくわずかであって、この数少ない者に恩赦を与えれば、刑罰による見せしめが不可能となるからである²¹²。結局、彼の考えは、刑罰の場からは姿を消し、観衆の怒りや嫌悪を刑の執行人に集約する一方で、恩赦を与えるために姿を現し、絶対的な善としての地位を揺るぎないものにした王権のねらいと一致していると言えることができるだろう。

²⁰⁸ *Ibid.*, p. 625.

²⁰⁹ *Ibid.*, p. 730. 分類は *Commomweale*, p. 585 を参照。

²¹⁰ Bodin, *République*, p. 625 には報賞のひとつとして *autres graces* が挙げられているが、文脈から判断するに、この *grace* は恩赦ではなく「恩恵」を意味していると考えられる。

²¹¹ *Ibid.*, p. 236.

²¹² *Ibid.*, pp. 240-241.

ところで、ボダンは、主権者は神の地上における似姿であると述べているが²¹³、このように、主権者が神の名を僭称することは冒瀆ではないのだろうか。そうではない。繰り返すが、彼の主権者は、神の法と自然法に従属することで正当性を担保しているわけで、神の名を振りかざして圧政を敷く、悪しき独裁者とは全く異なる。彼にとって、主権者は神の代理人で、他の人々に命令をするためのものである²¹⁴。そうはいえども、神の法や自然法は、明文化されているというわけではないので、生身の人間である主権者が過ちを犯さないとは限らない。もし、主権者が恩赦を誤って与えてしまえば、危険な罪人が処罰されず、あちこちにはびこることになる。だからこそ、恩赦には裁判所による認可という歯止めが必要であったと考えられる。だが、「主権のしるし」である恩赦権を、主権者に服従する側である裁判所の判断で無効にしてしまえば、主権者の権威が揺らいでしまう。それゆえに、王権は裁判所による建言の権利を形骸化し、発行された恩赦状がそのまま有効になるようにしたのである。

では、裁判所による認可について、ボダンはどのように考えていたのだろうか。彼は、恩赦を命令の一種と位置づけたうえで²¹⁵、主権者の命令は自然法に決して矛盾することはないので、司法官は絶対に服従しなければならないと述べる。さらに、与えられた命令の執行だけを命じられていた場合には、命令の内容が明らかに自然法に反する場合でなければ、司法官は、それを審理すること(*prendre...cognoiffance*)はできないと彼は言う。司法官には、君主の意志を審理したり、それに背いたりする余地はないのである。ゆえに、彼らは、君主が有用な勅令を改悪したことに気付いたときにだけ、建言を行うまで、執行を未決の状態にとどめる(*tenir l'exécution...en souffrance*)ことができるに過ぎない²¹⁶。

以上、ボダンにおける恩赦について簡単に考察したが、ほぼ同時代の他の思想家にも、類似した主張をしている人物がいる。たとえば、17世紀前半を代表する法学者、ル・ブレは、『王の主権について』(1632年)第4編第7章で、「法律を免除したり、法律に違反した者(*ceux qui les [=lois] ont enfreintes & violées*)に慈悲を与えたりすることができるのは、神のみである。また、同様に、王令に反して犯罪を行った者に恩赦(*grâce et rémission*)を与えることができるのは、神の地上における似姿で代理人たる国王のみである」と述べる²¹⁷。さらに、彼はボダンと同様、司法官が恩赦を与えれば、王の権威は侵害されると言う。というのは、司法官は国王の定めた法令に服しているので、刑罰を与える際にも、それに従わなければならないからである。ただ、ボダンとは異なり、ル・ブレにおいては、刑罰権も主権の一部をなしている。ル・ブレによると、人の生死を恣にすること(*difpofer*)は最も強力な権利であり、それを言い渡す裁判官は、自らの権利としてではなく、職務と

²¹³ *Ibid.*, p. 212.

²¹⁴ *Ibid.*, p. 211.

²¹⁵ *Ibid.*, p. 410.

²¹⁶ *Ibid.*, pp. 413-415.

²¹⁷ *Les oeuvres de messir C. Le Bret*, p. 291.

してそれを行っているに過ぎない²¹⁸。一方、彼の恩赦は、王を飾る最も優れた特性 (qualitez) のひとつである。しかしながら、恩赦権は大いに慎みをもって行使されなければならない、凶悪な罪人に恩赦を与えれば犯罪が増加する。結局、仁慈の名に真に値するのは、王が自分にたいする攻撃を赦すときであって、その他の公的な不義 (injure publique) は罰せられなければならないのである²¹⁹。以上の議論から、彼は恩赦と刑罰を表裏一体のものとして、主権の一部と考えていたとすることができるだろう。それだけにいっそう、裁判官に委任されず、ここぞという時にだけ行使される恩赦権は、まさに伝家の宝刀のようなものであり、君主にとって重要な意義を有していたと結論付けることができるのである。

フランス以外でも、ホッブズは『哲学者と法学徒の対話』(出版年不明) の第 9 章で、恩赦は議会によってのみ与えられ、国王個人は恩赦を与えることができないというクックの説を批判し、国王による恩赦について述べている²²⁰。ホッブズによれば、犯罪を赦す権利は危害を受けた側のみにあり、犯罪と何の関係ももたない議会は、恩赦を与えることができない。ホッブズにおける恩赦は、犯罪により害を受けた当事者の赦しである。ゆえに、恩赦権は、彼における「主権のしるし」に直接的に列挙されるわけではない²²¹。しかし、そのことは、彼が国王の恩赦を否定していることを意味するわけではない。恩赦を与える権利は、対象となる犯罪が平和や主権者の権利を害する場合は国王に、その他の場合には被害者にある²²²。ひとつの犯罪が、国王と被害者の両方を侵害するのであれば、この権利は国王と被害者の両方にある²²³。また、国王は、自分に危害を加えられない限り、恩赦を与えられないというわけではなく、コモン＝ウェルスの利益に従って、自由に恩赦を与える権利を有している²²⁴。これより、国王が国の平和を体現し、その利益を代表していると

²¹⁸ *Ibid.*, p. 265.

²¹⁹ *Ibid.*, pp. 291-298.

²²⁰ *The English works of Thomas Hobbes of Malmesbury*, edited by Sir William Molesworth, London, 1966; reprint, t. 6, Aalen, 1966, p. 138. ホッブズ『哲学者と法学徒との対話』田中浩ほか訳、岩波文庫、2002 年、214 - 215 ページ。

²²¹ Hobbes, Tomas, *De cive*, A Critical Edition by Howard Warrender, the Latin Version, Oxford, 1983, pp. 147-148; the English Version, pp. 103-104. トマス・ホッブズ『哲学言論；自然法及び国家法の原理』伊藤宏之ほか訳、柏書房、2012 年、876 ページ。一方、ホッブズにおける君主の刑罰権は、立法権と、刑罰を執行する軍事権が「主権のしるし」に含まれていることから導き出すことができるだろう。彼によれば、刑罰を規定する者と刑罰を執行する者は一致していなければならない、そのような機能を持つのは主権以外にはありえない。*The English works of Hobbes*, t. 6, pp. 122-123. 『哲学者と法学との対話』、190 ページを参照。

²²² *The English works of Hobbes*, t. 6, pp. 34, 138. 『哲学者と法学との対話』、56 - 57、215 ページ。

²²³ この部分の原文は [the right of pardon belongs] to both together, if the injury be done to both. であるが、邦訳は「両方に [危害が] 加えられたものでしたら、恩赦の権利は、国王に、そうした行為を許すかどうかの権利は私 [被害者] にあります」となっている。*Ibid.*, p. 138. 同前訳、215 ページ。

²²⁴ *Ibid.*, p. 139. 同前訳、216 ページ。

言うことができる。ただ、たとえコモン＝ウェルスの利益となる場合であったとしても、被害者には損害賠償請求の権利があるので、加害者に相当の賠償を約束させなければ、国王は恩赦を行うことはできない²²⁵。このような制限はあるが、国王は、法によって恩赦を制限されることは決してなく²²⁶、自らの政治的判断によって、あらゆる重罪に恩赦を与えることができるのである。

以上に述べたように、恩赦は強力な王権と密接な関係を有していた。実際、ルイ 14 世は、仁慈こそが「すべての徳のなかで最も王政的である」と述べている²²⁷。ここから明らかとなるように、「赦し」という概念は、絶対王政を考察する上で重要な意義を有していたのである。

²²⁵ *Ibid.*, pp. 34-35, 139. 同前訳、57、217 ページ。

²²⁶ *Ibid.*, p. 139. 同前訳、216 ページ。

²²⁷ Boissy, *op. cit.*, p. 258.

第3節 フランス王国の形成と恩赦

(1) 恩赦権を与える国王

14世紀半ば頃から諸侯の恩赦権を奪いはじめた王権は、それと同時に不可解な行動を見せていた。恩赦権を国王以外の貴族に委ねていたのである²²⁸。しかも、委譲の範囲は大逆罪への恩赦にまで及ぶこともあった。その一方で、国王は、法令を通じて恩赦権を「主権のしるし」と宣言したり、神聖ローマ帝国内に住む人を「王国にとどまらせる(*demourer*)ため」に恩赦を与えたりもした²²⁹。これらの行為を見ると、国王は統治における恩赦の意義を十分に理解していたように思われる。にもかかわらず、なぜ、国王は、大貴族たちに恩赦権を与えたのだろうか。

われわれが確認できた限りでは、恩赦権を初めて他人に与えたフランス国王は、フィリップ6世(在位1328～50年)であった²³⁰。彼は、1342年に、ボーヴェ司教をラングドック地方の刑事代行官に任命するとともに、彼に包括的な恩赦権を与えた。その後も、ジャン2世は、1352年3月6日、ポワトゥーなどを受け持つ国王代行官アルノー・ダンドレームに²³¹、シャルル5世(在位1364年～1380年)は、1366年8月29日に酒蔵係長(*Bouteiller de France*)に恩赦権を認めた²³²。さらに、シャルル6世(在位1380年～1422年)は、かつてフィリップ6世がボーヴェ司教に与えた恩赦権を、その後継者たちにも認めた。すなわち、1380年11月19日にはベリー公に²³³、1386年にはオック大司教にこの権利が下賜された²³⁴。さらに、国王は1401年3月13日にも、大法官コルビの手に恩赦権を委ねた²³⁵。大法官への恩赦権委譲は、国王が精神を病んでいたために行われたものではあるが、この頃、大法官が強い権力を握っていたことをかんがみると、事実上、国王は恩赦権を篡奪されたのではないかと思われる²³⁶。実際、ル・ブレは、大法官が恩赦権を手にしたことを「野心」と表現している²³⁷。ルイ11世(在位1461年～1483年)も、

²²⁸ 恩赦権が大貴族などに委ねられることを表す語は一樣ではない。法令では「託する」を意味する *confier* や「権限を与える」を意味する *investir*、「恩恵として与える」を意味する *octroyer* などが用いられているが、大法官への委譲の事例では「命ずる」を意味する *mander* も使われている。

²²⁹ Gauvard, « *De grace especial* », pp. 895-896.

²³⁰ Duparc, *op. cit.*, p. 125.

²³¹ Merle, *op. cit.*, pp. 73-74.

²³² Isambert et al., *op. cit.*, t. 5, pp. 255-257.

²³³ *Ibid.*, t. 6, pp. 545-549. ベリー公は、ジャン2世の三男で、国王シャルル6世が精神を病むようになると、大きな権力をもった。voir *Ibid.*, p. 545, note 1 ; *Dictionnaire de biographie française*, sous la direction de M. Prevost et Roman D'Amat, t. 6, 1954, pp. 154-156.

²³⁴ Duparc, *op. cit.*, p. 125.

²³⁵ Isambert et al., *op. cit.*, t. 7, pp. 14-16. コルビについては、*Dictionnaire de biographie française*, sous la direction de Roman D'Amat, t. 9, Paris, 1961, pp. 599-600 を参照。

²³⁶ voir Bodin, *République*, p. 238.

²³⁷ *Les oeuvres de Le Bret*, p. 292.

1475年6月にオランジュ大公(prince d'Orange)に恩赦権を与え²³⁸、1477年9月と1480年には、アングレーム伯に、伯領内における入市式で囚人を解放する権利を認めた²³⁹。ルイ12世(在位1498年～1515年)は、1507年11月14日の王令第253条で、国王以外の者が恩赦を与えることを禁止した²⁴⁰。しかし、次の国王フランソワ1世は、1514年2月4日の国王宣言により、王母ルイズ・ド・サヴォワに、フランス国内とプロヴァンス伯領およびドーフィネ地方における王母の入市式で、囚人を解放する権利を与えようとした²⁴¹。これにたいし、パリ・パルルマン法院は、臣民に恩赦権を与えれば王権が弱まるとの建言を行い、王母もこの意見を受け入れたため、実際には、彼女の手で恩赦権が握られることはなかった²⁴²。それでも、国王は恩赦権を与えることをやめなかった。フランソワ1世は、1539年、休戦のために、神聖ローマ皇帝カール5世にまで、フランス入国時における恩赦権を認めているのである²⁴³。しかも、皇帝は、この年の12月9日には西部の都市ポワティエで²⁴⁴、同月の20日にはロワール川沿いの都市オルレアンで、さらに、1540年1月1日にはパリでこの権利を行使した²⁴⁵。もし、恩赦権が本当に「主権のしるし」であるならば、外国の君主にまで恩赦権を認め、しかも、その権利の首都での行使さえ許すというのは、主権者としての威厳をあまりにもないがしろにしているように思われる。さらにいえば、カール5世の恩赦は、「神の仁慈によりローマ人たちの皇帝であり、常に威厳あるアウグストゥスであり(toujours auguste)、ドイツとカスティーリャと…[その他の国や地域]の王…でもある」カール5世の名において与えられており²⁴⁶、封謁も、フランスの恩赦状では用いられていない赤色で、皇帝の紋章が押されていた。

先に述べたように、ちょうど同じ頃、国王以外による恩赦を禁じる法令が何度も出されていた。このことは、王権とレジストたちの間に、多少なりとも温度差があったことを示

²³⁸ Isambert et al., *op. cit.*, t. 10 p. 712.

²³⁹ *Ibid.*, pp. 782-783. アングレーム伯は国王ルイ11世のはとこで、後の国王フランソワ1世の父親である。*Dictionnaire de biographie française*, sous la direction de J. Balteau, t. 2, Paris, 1936, pp. 1201-1203.

²⁴⁰ Isambert et al., *op. cit.*, t. 11, p. 514.

²⁴¹ *Ibid.*, t. 12, p. 18-19. イザンベールの法令集はこの国王宣言を1514年のものとしているが、フランソワ1世の即位は1515年である

²⁴² Bodin, *République*, p. 238 ; Sermet, *op. cit.* p. 75.

²⁴³ 委譲が行われた年はセルメの記述にのっとっているが、休戦協定が締結されたのは1538年6月18日である。Sermet, *op. cit.*, p. 76. 柴田三千雄ほか編『世界歴史大系 フランス史2 —16世紀～19世紀なかば—』山川出版社、1996年、81ページ。

²⁴⁴ この時与えられた恩赦状の内容は、Legoux, *op. cit.*, pp. 248-250 を参照。

²⁴⁵ Soyer, Jacques, *Lettre de Rémission accordée par Charles-Quint lors son passage à Orléans (20 décembre 1539)*, Paris, 1909. オルレアンへの入市は、皇帝単独ではなく、フランソワ1世や王太子などとともに行われた。皇帝は12月にバイヨンヌを訪れた時にも恩赦を行っているが、その具体的な日付は明らかではない。*Collection universelle des mémoires particuliers relatifs à l'histoire de la France*, t. 20, Londres, 1786, Mémoires de Martin du Bellay, pp. 291-292.

²⁴⁶ Soyer, *op. cit.*, pp. 6-7.

しているように思われる。つまり、法令により恩赦権の独占を主張しながらも、王権にとっては、未だ恩赦権は真に「主権のしるし」というほどのものではなく、大貴族を懐柔するために与える特権のひとつにすぎなかったのである。とくに、フランソワ 1 世が恩赦権の独占にあまり執着していなかったことは、彼の時代の初期に当たる、16 世紀初頭に出された赦免の書状からも見て取れる。これらの書状の多くは、パリ・パルルマン法院の小尚書局から出されていたのだが、そこには、当時よく用いられていた定型句「国務会議の報告に基づき国王により (par le Roy à la relation du Conseil)」ではなく、「国務会議により (Par le conseil)」とだけ書かれていた。このことを指摘したポッターは、国王の行為を集めた『カタログ』から、赦免の一部が漏れていると指摘するにとどまっているが²⁴⁷、書状の名義から国王の文字が消えていることに、史料上の欠陥以上の意味があることは、容易に理解できる。

国王は、やはり、恩赦が自分の名において与えられることの意味を理解していなかったのだろうか。「国務会議の報告に基づき国王により」という定型句は、赦免を与える決定の際に国王が不在であったことを意味したが²⁴⁸、それでも、明記されていれば、赦免の最終的な責任が国王にあることを示していた²⁴⁹。したがって、この定型句を書かないということは、国王が、恩赦にたいする責任を放棄したことを意味するようにも見える。しかし、国王による恩赦権の委譲は、国王と貴族の双方が、恩赦権は本来国王のものであると了解していなければ不可能である。ゆえに、恩赦権を与えるという行為は、むしろ、戦略的な意味を有していたとは考えられないだろうか。実は、恩赦権を与えられた側は、実際に恩赦を行う際に、その権利が国王により認められたものであることを宣言しなければならなかった²⁵⁰。つまり、逆説的であるが、国王は、恩赦権を与えることで、自らが恩赦権を独占していることと、その権利を受け取る貴族よりも優位にあることを主張していたのである。

このことは、フランソワ 1 世が、初めてプロヴァンス地方を訪れた国王であり²⁵¹、大規模な王国巡回をしたことから類推できる。ルネサンス期の国王は、各地を巡回し、人々にその姿を見せて回ることで、王権を国の隅々まで浸透させることを目指していた。この時、国王が訪れた都市で行われたのが入市式であり、そこで与えられた恩赦を通じて、国王は、新たに統合された土地の人々を国王の臣民にしようとした。たしかに、フランソワ 1 世は、恩赦権の独占には気を配っていなかったかもしれないが、恩赦の意義を無視していたというわけではなかったのである。

²⁴⁷ Potter, art. cit., p. 277.

²⁴⁸ Gauvard, « *De grace especial* », p. 80.

²⁴⁹ Michaud, *op. cit.*, pp. 257-258.

²⁵⁰ Legoux, *op. cit.*, p. 9. カール 5 世による恩赦の際にも、フランソワ 1 世により恩赦権が与えられたことが明示された。Soyer, *op. cit.*, p. 7.

²⁵¹ 小山前掲書、33 ページ。

(2) 支配の道具としての恩赦

国王が入市式で与える恩赦には、都市の服従にたいする見返りという意義だけでなく、新たな領地に住む人々の支持の獲得という意義もあった。国王と臣民が実際に接触するこの恩赦は、この二者における直接的契約をも意味していたのである²⁵²。恩赦による人々の懐柔の事例として、1532年にフランソワ1世により行われた、ブルターニュ地方訪問の際の恩赦がある。この行幸の目的は、フランス王国への併合を、現地の地方三部会に受け入れさせることであった²⁵³。この年にブルターニュ地方で与えられた赦免の書状の数は88通で、同じ時期の平均的な数よりも、およそ50通多かった(図2)。この50通の42%に相当する21通は、国王、王妃、王太子の入市式での恩赦によるものであった²⁵⁴。入市式では複数の囚人が解放されるので、恩赦数が通常よりも多くなるのは、当然と言えば当然のことである。しかし、注目すべきことは、入市式を目当てに、自ら監獄にやってくる罪人がいたことである。ここで解放された囚人のうち、少なくとも13名は自首した者であった。入市式により恩赦が得られるという確信がなければ、罪人は自分から監獄に出向かなかったわけで、この現象は、国王への信頼なしには生じえなかったはずである。

また、前述の50通のうち、残りの半数以上が個別に嘆願されたものであったことにも注目したい。このことは、単に国王がいるだけで、人々が恩赦を嘆願する気になったということの意味する²⁵⁵。他の事例を見ても、シャルル9世(在位1560年～1574年)が、ブルターニュ地方の都市シャトブリアンに滞在していた時に出された証書の71%は、この地方の人々の嘆願にたいするものであったし、彼が冬の2ヶ月をトゥルーズですごした時も、証書の59%が近隣地域の人々へのものであった²⁵⁶。ここから、国王が近づくと、その土地の人々の忠誠心が上昇したとすることができるだろう。また、15世紀後半のギューエンヌ地方を研究対象としたハリスも、政治状況による留保をつけてはいるものの、国王が近くにいることで恩赦が得られやすくなると述べている²⁵⁷。

²⁵² Nassiet, *Lettres de pardon*, introduction, p. XXXII.

²⁵³ Nassiet, *Brittany*, p. 434.

²⁵⁴ 王妃や王太子による恩赦の権利は、彼ら固有のものではない。Serpillon, *op. cit.*, p. 763. voir aussi Duparc, *op. cit.*, p. 113, note 1.

²⁵⁵ Nassiet, *Brittany*, p. 435. 国王が近づいたときに恩赦嘆願が増加した背景には、嘆願のために必要な旅費の問題もある。Nassiet, *Lettres de pardon*, introduction, p. XIV.

²⁵⁶ Boutier, Jean et al., *Un tour de France royale : le voyage de Charles IX, 1564-1566*, Aubier, 1984, pp. 196-197, 207 ; Nassiet, *Brittany*, p. 427. ブティエは、遠くの地方に住む人々への恩赦の方が、近くに住む人々への恩赦よりも多数であった例を挙げ、恩赦の地域性に留保を加えている。しかし、彼の掲げた、中部の都市ムーラン滞在時の恩赦嘆願の分布図を見る限り、遠くの地方からの嘆願をすべて合わせた数が多かった場合でも、それぞれの場所あたりの数に注目すると、多くの嘆願が出されたのは滞在地近くの都市であった。ただ、この時には、さまざまな場所でごく少数の嘆願が行われており、その分、相対的に滞在地近辺からの嘆願の割合が減少している。

²⁵⁷ Harris, Robin, *Valois Guyenne: a study of politics, government and society in late medieval France*, Woodbridge and others, 1994, p. 135.

新しく併合された土地には、国王裁判所が十分に組織されていなかったことも重要である。アンシャン・レジーム末期には 13 を数えることになるパルルマン法院は、16 世紀初頭には、まだ全国に 6、7 ヶ所しかなかった。中でも、ブルターニュ地方を含む北西部は比較的併合が遅く、すべてパリ・パルルマン法院が受け持っていたため、その管区は、他のパルルマン法院と比べて格段に広がった。実際、1523 年から 1550 年に認可された赦免の書状のうち、パリで認可された書状は、全体の 75% 以上にもなるが²⁵⁸、これは、パリの人々が他の地方の人々よりも、圧倒的に多くの嘆願を行ったからではなかった。新たに併合された地域では、裁判を行う場合、第一審はもともとあった領主裁判所や都市裁判所で行うことができたが、控訴をするとなると、遠くのパルルマン法院まで行かなければならなかったため、恩赦が嘆願されたのである²⁵⁹。当時、裁判には時間がかかり、数年を要することさえ珍しくなかったのにたいし、恩赦状は、少なくとも 5 割程度が、犯罪から半年以内に発行されていたことをかんがみれば²⁶⁰、わざわざ遠くまで行って上級審に臨むより、恩赦が好まれたとしても不思議ではない。また、ブルターニュ地方では、1554 年にパルルマン法院が設置されるまで、下級裁判所でも拷問が行われていたため、被告人たちは急いで恩赦を嘆願しなければならなかった。事実、この地では、パルルマン法院ができた後は、赦免の数が一気に減少した。それまでは、毎年平均して 38 通の書状が認可されていたが、1554 年以降は、多い年でも 25 通を超える程度で、全く認可のない年もしばしば見られるようになったのである（図 2）²⁶¹。

地方の人々が国王の恩赦を期待したことは、単に、彼らが国王を信頼し、自分の主君と認めていたことを示すだけではなかった。嘆願状は、中央での審査を経なければならなかったから、各地の方言ではなくフランス語で書くことが求められたし、恩赦状もフランス語で書かれた。このやり取りを通じて、フランス語は徐々に人々の中に入っていくであろう²⁶²。また、用いられる言語だけでなく、嘆願状の内容を通じて、人々は各地方の住

²⁵⁸ Potter, art. cit., p. 278. この時期、パリで認可された書状の約 25% は、ピカルディー地方での事件に関係していた。この地方は 1477 年にフランスに復帰し、パリ・パルルマン法院の管轄下となったものの、領主や都市の裁判権が根強く残っていたうえ、1522 年にアミアンに置かれた刑事代行官も、土着の総代行官の抵抗により、1552 年までその目的を果たすことができなかった。また、この地方は国境に近く、常に戦争の脅威にさらされていたため無法状態が続いていたことも、恩赦を増加させたと考えられる。Ibid., pp. 266-271, 280 ; Gauvard, «*De grace especial* », p. 263.

²⁵⁹ パルシは、地方では土着の裁判官たちが国王裁判権に反発し、控訴を阻止したと述べる。しかしながら、そうであれば、なぜ同じ国王に由来する恩赦の嘆願に裁判官たちが干渉しなかったのかという疑問が生ずる。Paresys, Isabelle, Pardonner et punir aux marges du royaume de France sous François I^{er}, dans *Le pardon*, Textes réunis par Jacqueline Hoareau-Dodirau et al., Limoges, 1999, pp. 422-423.

²⁶⁰ Gauvard, «*De grace especial* », pp. 70-71, Tableau 4.

²⁶¹ Nassiet, Brittany, pp. 433-434.

²⁶² ブルターニュ地方では、書き言葉はブルトン語ではなくフランス語であったため、字の書ける人には、フランス語は既に理解されていた。voir Ibid., p. 429.

民から「善きフランス人」へと変えられていったのである。

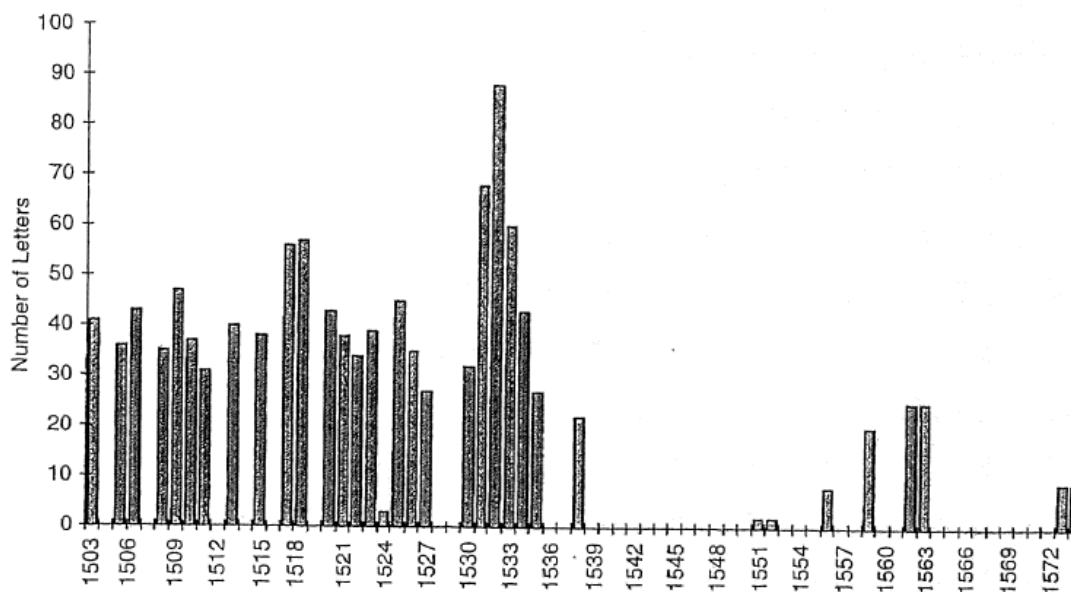


図2 ブルターニュ地方における恩赦数の推移（1503～1574年）（単位：通）

(Nassiet, Brittany, p. 433, Table 2.)

先に述べたように、嘆願状には、嘆願の対象となる事件の内容が説明されていたが、そこには、事件のすべてを書く必要はなかった。このことは、実際に恩赦状に書かれた情報の偏向性から見て取ることができる。というのも、恩赦状は、嘆願状に書かれた内容をもとに作成されたからである。したがって、恩赦状に頻繁に書かれた情報は、嘆願状にも頻繁に書かれていたとすることができる。ゴヴァールによれば、後期中世の恩赦状のほとんどに、犯罪の内容、犯人の性別、書状を登録したバイイ裁判所管区や書状の名義などが書かれていた。他方、恩赦状にあまり書かれていなかったのは、被害者にかんする情報や、罪人の身分にかんする情報である²⁶³。これらの内容は、嘆願状に書かれていたとしても、恩赦状に書くほど重要ではないと判断されたか、もしくは、そもそも嘆願状に書かれなかった、すなわち言及する必要がなかったと考えられる。さらにいえば、これらの情報は、恩赦状に書かれて審査されることはないのだから、少し脚色をしてもわからなかった可能性がある。実際、後期中世の裁判では、人々は、尋問の際に自分にかんする情報をごまかして答えることがあった。たとえば、被告人は、たとえそうでなかったとしても、自分が模範的な性格で、罪を犯すことなどできそうにない人物であると主張した。さらに、彼ら

²⁶³ Gauvard, « De grace especial », pp. 100-101, Tableau 5.

は、拷問を含む特別手続きを免れるために(*échapper à l'extraordinaire*)、時には貴族や聖職者であると詐称したり、高齢であることを強調したりしたのである²⁶⁴。

16世紀の恩赦嘆願の場面でも、同様の現象が見られる。このような嘆願状の「フィクション性」に注目したデーヴィスの研究から、当時におけるジェンダー別の理想的人物モデルを見て取ることができる²⁶⁵。たとえば、男性の嘆願であれば、不合理な理由で名誉を棄損されたために憤慨して乱闘となり、その結果、やむなく相手を殺害してしまったという筋書きがありうるだろう。古くから、若者たちの血の気の多さは社会に受け入れられてきたこともあり、彼らの間の暴力は赦されやすい傾向にあった²⁶⁶。一方、女性であれば、夫の度重なる暴力から身を守ろうとしたところ、気がついたら夫が血を流して倒れていた、などと書かれた嘆願状ならば、赦しの期待が高まったかもしれない。このような、ある一定の枠組に沿って嘆願のストーリーが作成されたことは、人々が、恩赦を得るために戦略的に行動していたことを表しているだろう。しかしながら、それと同時に、このような人物モデルは、恩赦という、国王の主観のかかわる行為を通じて作られている以上、上から与えられたものでもあったとすることができる。つまり、人々は、刑を逃れるために戦略的に動いていたと同時に、理想的フランス人の型を体得させるために動かされていたのである。

では、ここで実際に当時の恩赦状を検討してみよう。まずは、1673年3月8日にジャン・カジエに与えられた赦免の書状を参照する²⁶⁷。それによれば、1670年2月16日、5人の子を抱える木こりのカジエは、周りにいた人々と同じように、ダモワジエなる人物に雪玉を投げつけた。すると、ダモワジエはカジエを突然刀身で殴り、追い回した。その夜、カジエは夕食に招いていた友人たちを見送っていると、盗み聞きをしていたダモワジエに挑発される。カジエの危険を察知したのか、一緒にいた彼の友人は持っていた短筒を撃つ。そして、運悪くその弾に当たったダモワジエは、翌日死亡してしまう。

書状に書かれていることがすべて真実であれば、カジエ自身は、この事件により何の責任も問われるはずがないにもかかわらず、犯人扱いされ、裁判にかけられたということになる。さらに、書状には、裁判官が、自らの権限を飛び越えてカジエを逮捕し、そのうえ恩赦嘆願まで禁じたと書かれている。ここから、実際場面では、赦免が不正な裁判からの救済手段としても用いられていたとすることができる。ところが、フォヴィオによれば、この書状は小尚書局で作成されている²⁶⁸。1670年刑事王令の規定に従えば、小尚書局で

²⁶⁴ voir *Ibid.*, p. 131.

²⁶⁵ Davis, *op. cit.* デーヴィス前掲訳書。

²⁶⁶ Muchembled, *op. cit.*, pp. 41-42.

²⁶⁷ 資料6を参照。前述のように、赦免の書状には、それが与えられた年と月しか明記されない。しかしながら、フォヴィオや福田により参照された恩赦状の中には、その裏面や表面の欄外などに、押印日が示されているものもあった。以下、赦免の書状に、取得日まで示されている場合には、これらの日付を典拠としている。

²⁶⁸ Foviaux, *op. cit.*, p. 142.

作成される書状、すなわち裁判上の赦免の書状は、正当防衛による殺人や過失致死の場合にしか与えられないはずである。また、恩恵による赦免の概念を持ち出したとしても、このような事例をカバーすることはできない。したがって、名目上は 1670 年刑事王令第 16 章第 2 条に合致しているが、実際には、それを逸脱している事例があったと言えるだろう。ところで、カジエへの書状を見る限り、嘆願者に殺害の責任がなかった場合でも、この人は、自分が「善人」であることを強調する必要があったと考えられる。書状によれば、カジエは、理不尽に攻撃されたにもかかわらず、逆上して反撃を食らわせるようなことはしていない。また、彼は 5 人の子の世話にいそしむ一方、友人を夕食に招き、彼らが帰宅する際には見送りをする気遣いも併せ持っているのである。

嘆願者が被害者の死亡に関係している場合はどうだろうか。今度は、1692 年 6 月 6 日に、ニコラ・トリドンに与えられた赦免の書状を見てみよう²⁶⁹。この事件は、1686 年 6 月 3 日、友人とのボール遊びの後に酒場に入ったトリドンが、同席した友人のひとりであるギヨマンに借金の返済を求められ、それを断ったことから始まっている。返済を断られたことに腹を立てたギヨマンは、トリドンに暴言を吐いて木皿を投げつけ、さらに、何か道具を使って彼を痛い目にあわせようと、暖炉の方へ走った。ギヨマンが侮辱的な言葉を発し続けているので、トリドンは彼を追いかけ、近くにあった暖炉用のシャベルを手に取り、ギヨマンを一発殴った。するとギヨマンは薪台の上に倒れて頭を打ち、流血し、失神した。彼は意識を取り戻したが、その 3 日後に死亡した。

一見すると、この事件の原因はギヨマンにあるように思われる。しかしながら、彼が腹を立てた原因は、借金の返済を迫られたトリドンが彼に「ろくでなし(coquin)」という暴言を発したことであった。それに、たしかに、ギヨマンはトリドンを痛い目にあわせようとして暖炉の方へ走ったが、先にシャベルを手に取り、攻撃を加えたのはトリドンである。また、書状は、ギヨマンの死の原因を事故としているが、その事故を引き起こしたのはトリドンとのいざこざである。ここから、恩赦を得るためには、必ずしも、被害者の側だけに責任を押し付けるようなシナリオを描く必要はなかったということがわかる。では、いったい何が、恩赦の可否を判断する際に重要視されたのだろうか。トリドンへの書状を見ると、彼はギヨマンを殺害しようと考えるところか、これまでに彼と争いを起こした経験さえなく、むしろギヨマンの事故に心を痛めていたと書かれている。つまり、より重要なのは、予謀や事件後の後悔の有無といった、犯人の内面的な部分であった。それゆえに、嘆願者は、自分を「フィクション」で飾らなければならなかったのである。

恩赦の可否を左右する要素のひとつに、王権への忠誠があったことにも注意しておきたい。嘆願状の中には、犯罪事実そのものよりも、これまで自分がいかに国王に奉仕してきたかということの方により多くのスペースを割いたものもあった²⁷⁰。国王への忠誠が重視

²⁶⁹ 資料 7 を参照。

²⁷⁰ ル・ブレによると、親族による国王への奉仕も恩赦の可否を左右した。*Les oeuvres de Le Bret*, pp. 294-295. また、ハリスは、実際に父親の貢献に言及した嘆願の例を紹介している。

されたことは、一見すると当たり前のようにも思われるが、国家の形成段階にあった末期中世から前期近世においては、戦略的な意味を有していたと言えるだろう。

ただ、以上に述べたことには留保が必要である。というのも、恩赦の嘆願主体には偏りがあったからである。まず、場所的な偏りがあった。国王裁判所が未整備の辺境の地で恩赦が用いられていたとはいえ、その地方の中心地から離れれば離れるほど、恩赦の数は減少しているのである。たとえば、1535年から1574年の間にブルターニュ地方で与えられた赦免の書状の、セネシャル裁判所管区別の割合を見ると、この地方の小尚書局の本部が置かれていた、レンヌとナントの二大管区で与えられたものが、全体の4割近くを占めている。3番目に多かったのはこの二つの管区に隣接するプロエルメルで、4番目はプロエルメルの南で、ナントにも隣接するヴァンヌであった（図3参照）。これら4つの裁判所管区で与えられた赦免の数は全体の6割弱を占めており、この時期ブルターニュ地方で与えられた赦免の多くが、半島の根元の方に集中していたと言えることができる。また、これらの場所は、国王が巡幸した場所に対応している。たとえば、フランソワ1世は、ブルターニュ地方ではレンヌ、ナント、シャトーブリアン、ヴァンヌに訪れており、シャルル9世は、ナントとシャトーブリアンに訪れている。シャトーブリアンは、レンヌとナントの中間あたりに位置する都市なので、上述のセネシャル裁判所管区に含まれている。したがって、たしかに国王の来訪は、人々にその権威を浸透させたものの、王の威厳は、たとえ同じ地域であっても、国王が訪れなかった場所には、必ずしも及ばなかったと言えることができる。国王が訪れなかった場所とは、おそらく、入市式を行うことができない小さな町や村である。そもそも、このような人口の少ない場所では、事件の数も少なくなるし、あっても、小さな共同体内で解決できるものである可能性が高かっただろう。このような場所の人々は、「王様なんぞわしらにゃ到底関係のないお人じゃ」とでも思っていたかもしれない。関連して、郵便網の問題もある。

次に、実際に嘆願する人々にも注目したい。嘆願には識字能力だけでなく、ある程度のテクニックが必要であったので、たとえ恩赦を嘆願しようと考えていたとしても、それができなかったということが考えられる。そのうえ、筆記用具は当時まだ稀少であったから、識字能力のある人や、ある程度の記事力を持つ人がいたとしても、まだ嘆願までは高いハードルがあっただろう。

そして最後に、忘れてはならないのが、恩赦状の交付の際に支払う税の問題である²⁷¹。先に述べたように、税はかなり高額であったが、それが払えなければ絶対に恩赦を得ることができないとは限らなかった。料金の減額や弁護士などによる肩代わりの可能性があったし²⁷²、条件を付けて恩赦が与えられる場合もあったのである。

Harris, *op. cit.*, p. 134.

²⁷¹ vide Nassiet, Brittany, pp. 429-430.

²⁷² 第2章第1節(3)注94を参照。

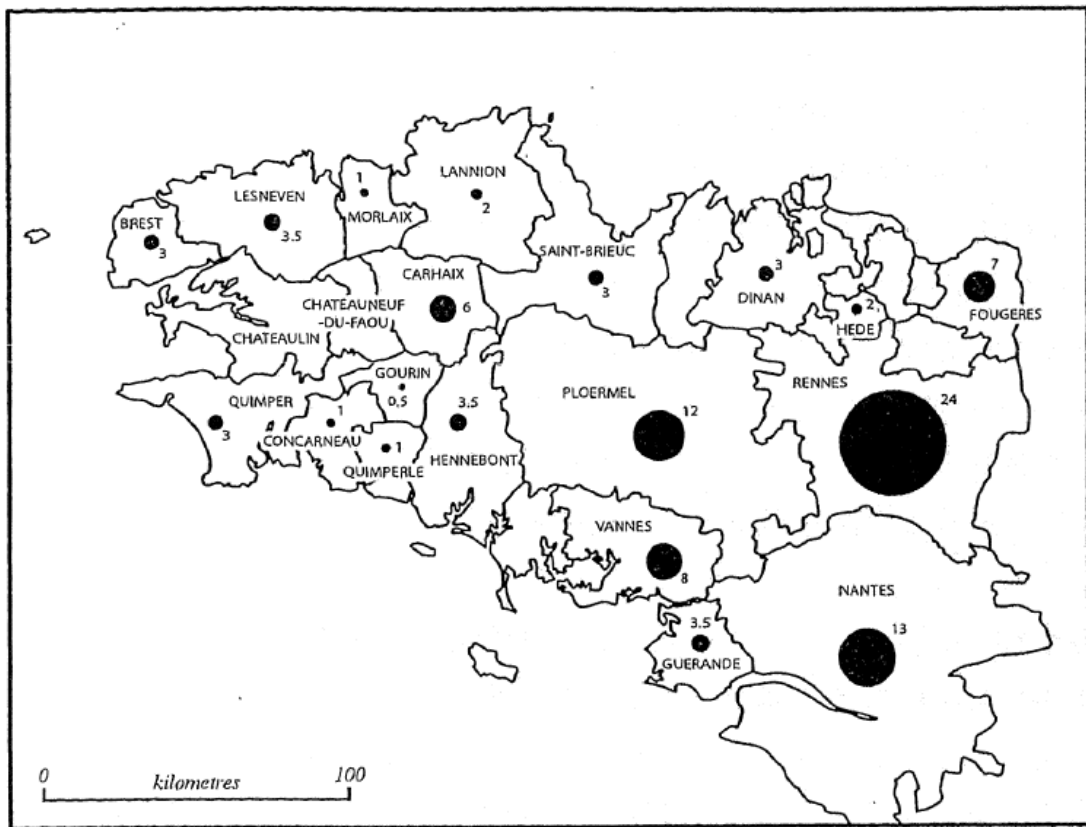


図3 ブルターニュ地方におけるセネシャル裁判所管区別の赦免の書状の割合 (単位: %)
(Nassiet, Brittany, p. 428, Map 1)

(3) 条件付きの恩赦

恩赦に付随する条件には、一定期間の投獄や施し、巡礼といった刑罰の延長のようなものもあったが²⁷³、決してそういったものに限られていたわけではない。たとえば、人体実験の被験者となることで恩赦を与えられた例がある。1474年1月、ボシャジュ殿下 (monseigneur Boschage) を含む、多くの人々が「尿路結石、腹痛、狂気とわき腹の疾患 (pierre, colique, passion et maladie de coste)」に苦しんでいたため、医師たちは、この病に感染した死刑囚を解剖してみることに決めた。この死刑囚は、解剖されると病の位置を確認され、内臓を出された。しかし、15日後に彼が復活すると、当時の国王ルイ11世は、

²⁷³ たとえば、1373年7月の、シャルル5世によるアンボワーズ殿(sire d'Amboise)への赦免は、罪を贖うことと、8日間投獄されることを条件とした。Sermet, *op. cit.*, p. 85; Isambert et al., *op. cit.*, t. 5, pp. 392-394.

赦免の書状を無料で下賜し、さらに金銭までつけてやった²⁷⁴。

この例では、結果的に人体実験と恩赦が交換されることになったに過ぎないが、次の例では、実際に条件付きの恩赦が与えられている。その条件とは、死刑執行人になることであつた。執行人といえ、パリでは、サンソン家が代々受け継いでいたことが思い出されるが、世襲であつたのは北部だけで、南部では、恩赦と引き換えに、罪人に死刑の執行をさせていた²⁷⁵。というのも、犯罪者は暴力をふるいやすく、人が苦しむことにたいし無頓着だと考えられていたからである。刑の執行を恐れる受刑者の本音は、刑罰から逃れられるのであれば、死刑執行人でも何でもやるというのではなかっただろうか。こうして、1414年4月24日、ブルゴーニュ公妃は、これを交換条件として、ディジョンに住むジャン・レキューイエなる人物に恩赦を与え、両耳そぎと終身追放刑を免除している²⁷⁶。また、傭兵として軍隊に仕官することで赦しが得られる場合もある。この例は、百年戦争の時代など、兵士が多数必要となったときに見られ、彼らが何らかの功績を挙げると赦しが与えられた²⁷⁷。

これらの例から、恩赦は、罪人を社会の役に立たせることで、一種の「社会復帰」を可能にするという側面も有していたことがわかる。まず、解剖実験の例を見てみよう。この時、謎の病が流行していたため、すぐにでも対策をとらなければならなかったが、それには、この病の正体を知らなければならないし、治療を行うにも、まずはその方法を明らかにしなければならない。しかし、罪もない患者の腹部を開いてその中をかき回し、彼らを生命の危険にさらすことはできない。したがって、この受刑者の存在なくしては、状況がさらに悪化したかもしれない。死刑執行人の例も同様である。死刑がさまざまな犯罪に与えられ、治安維持にとって重要な役割を担っていた時代においては、執行人の存在は不可欠であつた。受刑者から執行人を選出する慣行が1938年まで続いたことを思えば²⁷⁸、それがいかに社会のニーズに適っていたかを推し量ることができる。性質は異なるが、1467年に、ルイ11世が、戦争などで人口が減少した地域に罪人を住ませたことも、恩赦を通じた「社会復帰」の一例とすることができるだろう。

²⁷⁴ Mandrot, Bernard de, *Journal de Jean de Roye : connu sous le nom de chronique scandaleuse 1460-1483*, t. I, Paris, 1894-1896, p. 322 ; Gontier, *op. cit.*, p. 196 ; Sermet, *op. cit.*, pp. 86-87.

²⁷⁵ Delarue, *op. cit.*, pp. 57-58.

²⁷⁶ Gontier, *op. cit.*, p. 195. この人物は、素行の悪さのために1426年に町を追われた。なお、18世紀後半にも、テュルゴが、犯罪者に恩赦を与え、執行人をさせるべきだと述べている。Friedland, Paul, *Seeing Justice Done. The age of spectacular capital punishment in France*, Oxford, 2012, p. 86.

²⁷⁷ *Ibid.*, p. 196. 十字軍の遠征の時代、主君のために命をささげた封臣が、キリスト教を守るために命を落とした殉教者になぞらえられ、すべての罪にたいする赦しを与えられたことが思い出される。Kantorowicz, *op. cit.*, pp. 239-240. カントーロヴィチ前掲訳書(上)、310 - 311 ページ。

²⁷⁸ この年まで存在していたギユイエンヌの徒刑場では、場内での犯罪を処罰するため、囚人の中から執行人が選出されていた。Delarue, *op. cit.*, pp. 58-59.

このような、恩赦の「社会復帰」という側面に関連させて、ゴンティエは興味深い慣習を紹介している。それが、死刑執行直前の若い男性受刑者に若い女性が求婚した場合、その受刑者は死を免れられるという慣習である²⁷⁹。この慣習は、主に14世紀から15世紀に、ロワール川以北を中心とする広い範囲で見られた²⁸⁰。

われわれが知ることのできた最も古い例のひとつは、1274年の、イングランド国王エドワード1世治下のバイヨンヌ地方のそれである。この事例を見る限り、かつては、婚姻を求めるのは若く貧しい女性や娼婦で、彼女たちも、より道徳的な生活を送り、社会に再統合されることを望んでいる必要があった。また、この時誕生した新しい夫婦は、新たな土地で再出発しなければならず、もし戻ってきたらふたたび裁判にかけられるとされていた²⁸¹。14世紀から15世紀になると、夫婦の追放は行われなくなり²⁸²、求婚する女性も、必ずしも身を持ち崩した女性や、貧しい女性でなければならないとは考えられなくなった。たとえば、1341年7月10日の事例では、評判も身分も良い女性が求婚したとされている²⁸³。

求婚は、必ずしも自発的に行われなければならないというわけではなかった。1424年のルーアンの事例では、母親や親戚に促されて女性が登場しているし²⁸⁴、1567年8月11日のアブヴィルの事例では、死刑囚自身が知り合いの女性の名を呼び、婚姻を申し込むように懇願している²⁸⁵。さらに、処刑を見物しに来た人々は、時に圧力をかけて女性に求婚を強いた。そのうえ、女性が名乗り出ると、即座に人々が司祭に婚約をさせ、婚姻のための費用を支援した例まであった²⁸⁶。

ただ、求婚された死刑囚は、その場で自由の身になることができるというわけではなか

²⁷⁹ Gontier, *op. cit.* p. 197 ; Lemerrier, Pierre, Une curiosité judiciaire au Moyen Age : La grâce par mariage subsequent, *Revue historique du droit français et étranger*, 1955, n. 3. 求婚される男性は12歳から24歳くらいであることが多かった。求婚する女性の年齢の幅ははっきりしないが、当時の記録にはしばしば「処女」と表現されており、時に14、5歳のこともあった。また、例外的であるが、男性が求婚した事例もあり、とりわけグルノーブルでは、執行人による求婚の例も見られた。Hoareau-Dodinau, Jacqueline, La jeune fille, le roi et pendu, dans *Le pardon*. pp. 355-356, 360 ; Armand, Frédéric, *Les bourreaux en France. Du Moyen Age à l'abolition de la peine de mort*, Paris, 2012, pp. 151-152.

²⁸⁰ Hoareau-Dodinau, art. cit., p. 354. このような事例は、フランス以外にも、スペインやドイツ、スイスなどヨーロッパ各地で見られた。Armand, *op. cit.*, p. 149. 一方、ミシュレによると、これはBarège en Bigorreの慣習であった。Barège en Bigorreの場所は定かではないが、おそらく、スペインとの国境沿いで、ルルドにほど近いバニェール＝ド＝ビゴール(Bagnères-de-Bigorre)のことではなかろうか。Michelet, *Origines du droit français : cherchées dans les symboles et formules du droit universel*, t. 2, Bruxelles, 1840 ; réimpression, Paris, 2009, p. 184

²⁸¹ Lemerrier, art. cit., pp. 464-465.

²⁸² Gontier, *op. cit.*, p. 197.

²⁸³ Hoareau-Dodinau, art. cit., p. 357. voir aussi Sermet, *op. cit.*, p. 108.

²⁸⁴ Lemerrier, art. cit., p. 467.

²⁸⁵ Ibid., pp. 469-470. ルメルシエによると、これがフランス最後の事例であった。

²⁸⁶ Hoareau-Dodinau, art. cit., p. 359.

った。求婚の効果は執行の停止にとどまり、その後、受刑者は国王に恩赦を嘆願しなければならなかったのである。もし、裁判官がそのまま受刑者を自由にしてしまえば、それは処罰の対象とされた。とはいえ、この恩赦のイニシアティブが、王権ではなく一般の人々にあることは否定できない。そのことが関係したのか、裁判官たちはこの慣習に懐疑的であった²⁸⁷。多くの場合、彼らは求婚された受刑者を監獄に連れ戻し、上級審に諮ることで、この慣習を受け入れるか否かを判断した。しかし、婚姻の申し出があったと主張する受刑者にたいし、そのような慣習は知らないと答えたり、婚姻の申し出を無視して執行を命じたりする事例もあった²⁸⁸。

法律書に目を移してみても、13世紀から14世紀の慣習法書は、求婚による恩赦に触れていない。15世紀の弁護士ジャン・マジュエは、この慣習の存在を認めているが、その他の多くの法律家たちは、女性の求婚だけで死刑囚の命が救われることには否定的である²⁸⁹。結局、この慣習は、1606年4月6日にパリ・パルルマン法院により禁止された²⁹⁰。しかし、国王によらない恩赦の中には、フランス革命まで存続したものもあった。しかも、これらの恩赦は、いくつかの法学書の中で言及されていた²⁹¹。本節の最後に、これらの恩赦について考察したい。

(4) 国王によらない恩赦

オルレアン司教とルーアンのノートルダム司教座聖堂参事会、そしてヴァンドーム市は、独自に恩赦を与える特権をフランス革命期まで有していた²⁹²。まずは、これらの中で最も早く成立したとされる、オルレアン司教の特権について見てみよう²⁹³。この特権の成立にかんしては諸説あるが²⁹⁴、セルメによれば、4世紀にオルレアン司教聖エニアン(Aignan)が、祈りによりローマ総督(gouverneur)アグリッピヌスの命を救ったことに由来する²⁹⁵。

²⁸⁷ しかしながら、1515年2月12日に、パリ・パルルマン法院に認められたブルゴーニュの慣習法や、1616年の、スイス西部のヴォー地方の慣習法、さらには、1668年のオルドナンスでもこの種の恩赦に言及がなされている。Armand, *op. cit.*, p. 150.

²⁸⁸ Hoareau-Dodinau, art. cit., pp. 362-364. アルマンによれば、この判決を下したのはグルノーブル・パルルマン法院である。Armand, *op. cit.*, p. 150.

²⁸⁹ Lemerrier, art. cit., pp. 467-469.

²⁹⁰ Hoareau-Dodinau, art. cit., p. 354, note 5.

²⁹¹ たとえば Jousse, *Traité*, t. 2, pp. 400-404 ; Serpillon, *op. cit.*, pp. 759-763.

²⁹² 同様の特権は、他にもいくつか存在したが、オルレアン、ルーアン、ヴァンドームの特権ほど長く存続したものはほとんどない。

²⁹³ この特権にかんする質問に丁寧に対応してくださったオルレアン市当局、とりわけ前述のマリオン氏には心から感謝申し上げます。

²⁹⁴ voir Guérolld, Jacques Yves, *Le droit de grâce des évêques d'Orleans*, Thèse pour le doctorat en droit, présentée et soutenue publiquement, Orleans, 1969, pp. 13-14. 以下、オルレアン司教の恩赦については、主にゲロルの記述を参照している。

²⁹⁵ Sermet, *op. cit.*, p. 114.

このことをきっかけに、総督が聖エニアン²⁹⁶の要求を聞き入れ、入市式の際に、オルレアン²⁹⁷の監獄の囚人を解放することを認めた。こうして、後任のオルレアン司教、聖プロスペルの時代から、この恩赦が行われるようになったのである。

したがって、恩赦が行われるのは、司教の入市式である²⁹⁸。そこでは、世俗の監獄と教会の監獄とを問わず、当地の囚人でカトリック教徒である者が釈放された。釈放は、事前に作成されたリストに基づいて行われたが、ゲロルによれば、神と王にたいする大逆罪と異端の場合以外には、基本的に恩赦が認められていた²⁹⁹。解放された囚人たちには、司教の恩赦状が与えられたが、これは裁判所で認可される必要はなかった³⁰⁰。そのため、逃亡中の罪人は、入市式が近づくと、こぞってオルレアンに集った。また、1707年には、3月2日の入市式直前に、ひとりの死刑囚が、同月8日までの一次出獄の許可(*cong *)を得て、シャンパーニュ地方の監獄からオルレアン司教の監獄に移った例も見られた³⁰¹。このように、各地から囚人が集まったこともあってか、この年の解放者の数は854人に上り、1734年には、それをさらに上回る1150人から1160人、あるいは1200人に達した³⁰²。

ところで、前述の伝説は、12世紀よりも前の記録では言及されていない³⁰³。したがって、その信憑性には、疑問があると言わざるを得ない。ただ、封建領主としての司教による恩赦は、それ以前にも行われていた³⁰⁴。オルレアン司教の特権は、1556年3月4日の国王公開状で、国王アンリ2世（在位1547～1559年）により、ほぼ無制限的に認められた。ところが、アンリ3世時代の1578年から、王権はこの特権に制限を設けるようになる³⁰⁵。また、解放者数の増加は、裁判官や大法官の目には行き過ぎと映ったようで、彼らは、この特権の自由な行使を妨げるような行動を見せた。たとえば、パリ・パルルマン法院は、1707年6月7日、予謀を伴う殺人の犯人にたいし、この恩赦の無効を宣言し、車刑を言い渡した³⁰⁶。1734年にも、解放された死刑囚が再び逮捕され、死刑を言い渡されるという事件が起こっている³⁰⁷。また、大法官ダゲッソーは、1734年6月11日の書簡で、ルイ14世以来の王の意向として、この恩赦が免責不可能な犯罪の場合や、尋問での供述の内容が嘘である場合にも与えられていると批判した³⁰⁸。さらに、彼は9月19日の検事

²⁹⁶ 恩赦が最終的に与えられるまでの流れは、Gu rold, *op. cit.*, pp. 52-62.

²⁹⁷ 国王が拒否した者は解放されなかった。Ibid., p. 52. 恩赦の条件については、Ibid., pp. 80-81を参照。

²⁹⁸ Ibid., p. 87.

²⁹⁹ Ibid., p. 51.

³⁰⁰ Ibid., pp. 91-92.

³⁰¹ Ibid., p. 90.

³⁰² Ibid., p. 33.

³⁰³ Sermet, *op. cit.*, pp. 115-116.

³⁰⁴ Jousse, *op. cit.*, t. 2, pp. 401-402.

³⁰⁵ Gu rold, *op. cit.*, p. 88. ただ、この事例では、被告人とその家族がトゥルーズ・パルルマン法院に上訴し、1753年9月10日にこの恩赦の効力を認める判決を得た。

³⁰⁶ *C uvres compl tes du chancelier d'Aguesseau*, Nouvelle  dition, par M. Pardessus, t. 11, Paris, 1819, p. 461.

長への書簡で、オルレアン司教の恩赦状も、その他の書状と同様、内容に誤りがないかなどを審査しなければならないと述べた³⁰⁷。

その後も、オルレアン司教の特権は、王令によって制限を加えられる。1753年11月の勅令は、この恩赦の対象を、オルレアン司教区における犯罪により、オルレアンの監獄に入れられた者に限定した。さらに、この勅令は、司教が事前に送付した「とりなしと嘆願 (*intercession et dépreccations*)」の書状をもとに、国王が恩赦の可否を判断すると定めた。したがって、予謀を伴う殺人など、通常は恩赦が認められない犯罪は対象外とされた。また、釈放時に与えられる恩赦状は、オルレアン司教の書状ではなく国王の書状となり、司教の書状は、恩赦の可否の判断のために6ヶ月間刑事手続きを停止させることしかできなくなった³⁰⁸。つまり、この勅令をもって、オルレアン司教の恩赦の自律は失われ、この特権も単なる「委任裁判権」のひとつとなったのである。そして、1758年4月にふたたび勅令が出され、この特権は事実上廃止されることになる。1788年5月29日に就任した、アンシャン・レジーム最後のオルレアン司教の入市式の際には、もはや囚人の解放は行われなかった³⁰⁹。

最終的に、この恩赦は、フランス革命期に、司教が有していたその他の特権とともに、正式に廃止される。ただ、革命後の1820年1月4日と、1849年12月11日に、この特権は「復活」した³¹⁰。1820年当時のオルレアン司教は、ヴァリクールという人物で、彼は入市式の際、身銭を切ってひとりの父親の借金を返済してやり、彼を債務者監獄から解放した。1849年にも司教デュパンルーが³¹¹、何人かの借金を肩代わりすることで彼らを自由の身にしてやっている³¹²。ただ、革命を経て、監獄は、アンシャン・レジーム期のような未決囚の勾留施設ではなく、刑罰のひとつとなったこともあり、かつてのような解放が行われることはなかった。

次に、ルーアンのノートルダム司教座聖堂参事会の特権について述べる。640年ごろから存在したとされるこの特権は、「聖ロマンの聖遺物箱の特権」と呼ばれていた。「聖ロマン」というのは、フランク王家の者で、メロヴィング朝のクロタール2世（在位613年～628年）やダゴベール王（在位629年～634年）の時代のルーアン大司教である³¹³。ルー

³⁰⁷ Guérolld, *op. cit.*, pp. 87-88.

³⁰⁸ Serpillon, *op. cit.*, pp. 760-762. イザンベールの法令集にもこの勅令が収録されているが、後半部分が書かれていない。Isamber et al., *op. cit.*, t. 22, pp. 257-258.

³⁰⁹ Guérolld, *op. cit.*, pp. 94-95.

³¹⁰ それ以前にも、1801年のコンコルダと1802年の恩赦復活後、何人かの司教により、この恩赦の復活が企てられた。Viaud, *op. cit.*, p. 42.

³¹¹ デュパンルーは、教育の世俗化の流れに抵抗した人物で、1871年には国民議会の議席を得、その4年後に高等教育の自由化にかんする法律の採択にこぎつけている。*Dictionnaire de biographie française*, publié sous la direction de Roman D'Amat, t. 12, Paris, 1970, pp. 292-297.

³¹² Guérolld, *op. cit.*, p. 95.

³¹³ Sermet, *op. cit.*, pp. 109-110.

アン司教座聖堂参事会の特権は、聖ロマンがひとりの死刑囚とともに、街を怪物から救い出したという故事に由来している。この奇跡を記念するために、聖ロマンの後を継いだ聖ウーアンの時代に、ダゴベール王がこの特権を成立させた³¹⁴。ただ、オルレアン司教の場合と同様、この伝説も当時の記録には書かれておらず、初めて文献に登場したのは 1485 年ごろのことであった³¹⁵。にもかかわらず、伝説は 1512 年 11 月に、国王ルイ 12 世により公式に認められた³¹⁶。

この恩赦は年に一度、キリスト昇天祭の日に行われ、司教座聖堂参事会が指名したひとりの罪人を解放することになっていた。ただ、1394 年に共犯者の解放の可否が検討され、1407 年 4 月 12 日にそれが認められたため³¹⁷、その後は一度に多くの囚人が解放されることもあった³¹⁸。

解放される囚人の選出は、キリスト昇天祭の約 15 日前から行われる³¹⁹。この日、ルーアン・パルルマン法院と租税法院、そしてバイイ裁判所に参事会員が派遣されると、この特権のことが法院側に告知され、それにより、ルーアン市におけるすべての刑事手続きが停止する³²⁰。昇天祭の 3 日前から、2 名の参事会員が市のすべての監獄を訪れ、囚人全員の尋問を経て、候補者を選出する。釈放される者は、最終的には昇天祭当日の朝に、参事会の多数決により決定される。普通は、最も重い犯罪を行った者が選ばれる傾向にあった³²¹。解放される者が決定すると、この囚人の名前を書いた封書(pli)がパルルマン法院に送付され、法規的判決を下す際に行われる、赤い法服を着用しての会同(*affemblée en Robe rouge*)が招集される³²²。そこで、罪人はセレットの上で尋問され、恩赦が認められれば、解放の判決を下される。この判決により、その囚人の行った犯罪自体が消滅し、没収された財産も回復する。判決の後すぐに、この囚人は鉄鎖をつけられた状態で聖ロマンの行列に参加し、翌日の朝に自由の身となる。

参事会の決めた候補者が、パルルマン法院により却下されることもありうる。この時、

³¹⁴ Floquet, A., *Histoire du privilège de Saint Romain*, Rouen, 1833, t. 1, pp. 15-18. 以下、ルーアン司教座参事会の恩赦については、主にフロケの記述による。

³¹⁵ Lifshitz, Felice, *The privilege of St. Romanus : Provincial Independence and Hagiographical Legends at Rouen*, *Analecta Bollandiana*, n. 107, 1989, pp. 169-170. このテキストは、1485 年の国王シャルル 8 世の行幸の際に作成され、それ以後、この特権を維持する要となった。

³¹⁶ Floquet, *op. cit.*, t. 1, p. 15 ; Guérolld, *op. cit.*, p. 71.

³¹⁷ Floquet, *op. cit.*, t. 1, pp. 92-94, t. 2, pp. 615-628.

³¹⁸ たとえば、1644 年には、軍の宿泊の免除の特権をめぐる争いで、殺人を犯したトロンケ村の村人全員が、恩赦の対象となった *Ibid.*, t. 2, pp. 1-9.

³¹⁹ 以下は Jousse, *Traité*, t. 2, p. 403 ; Floquet, *op. cit.*, t. 2, pp. 167-337.

³²⁰ ただ、1597 年 1 月 25 日の国王宣言以降は、特権のことが告知されても、パルルマン法院は刑事手続きを停止せず、判決と刑の執行を延期するのみとなった。Floquet, *op. cit.*, t. 1, p. 424.

³²¹ Guérolld, *op. cit.*, p. 71.

³²² Muyart de Vouglans, *op. cit.*, p. 106.

参事会は別の候補者を立てるか、法院の決定を拒否した。法院と参事会との、対象者をめぐる争いは、古くは、国王が参事会の肩をもつことで解決された³²³。しかしながら、次第に、この特権は濫用とみなされるようになり、1597年1月25日の国王宣言により、大逆罪、異端、通貨偽造、予謀を伴う殺人、強姦が釈放の対象から除外され³²⁴、参事会は自由に候補者を選出することができなくなった。それでも、この特権は1790年まで生き延びた。最後に解放されたのは、隣人との争いの結果、彼を殺害した夫婦であった。翌年の5月30日、司法大臣デュポールは、ルーアン・ディストリクト裁判所からの問い合わせに答えた書簡でこの特権を否定し、以後、この恩赦が行われることはなかった³²⁵。

最後に、ヴァンドーム市の特権について検討する³²⁶。この特権は、1428年8月21日に成立した。そのきっかけは、捕虜として13年間ロンドン塔に囚われていたヴァンドーム伯ルイ・ド・ブルボンが病に陥った時に、釈放を願って祈りを捧げたことであった。パキエによれば、祈りの内容は以下のものであった。自由になった暁には、キリスト受難の日の次の金曜日に、トリニテ修道院の聖ラルム(sainte Larme)の聖遺物の前で、33リーヴルのろうそくを点し、その後も、この儀式を繰り返させるため、毎年、この日にひとりの囚人に恩赦を与えるよう命じる³²⁷。ヴァンドーム伯は、釈放されると実際にその約束を守った。この逸話を語り継ぐため、彼が聖ラルムの聖遺物の前に現れたのと同じ日に、ひとりの囚人を聖ラルムの行進に参加させ、釈放することになったのである。この囚人を選出するのは、バイイ裁判所長官(Bailli d'Épée)、市総督(Gouverneur de la Ville)、司法官、ヴァンドーム修道院長(Prieur)、そして聖ジョルジュ聖堂参事会(Chapitre de l'Eglise Collégiale de S. Georges)の最も敬虔な修道士(deux des plus notables Religieux)・長老会員(Doyen)・聖歌隊長・会員それぞれ2名からなる委員会である。彼らは監獄の評議室に集まり、事件を検討し、罪人に尋問を行うことで対象者を選んだ。もちろん、いかなる罪を犯した者にも釈放のチャンスがあったわけではなく、大逆罪や通貨偽造など、一般的に恩赦不可能とされる犯罪は例外とされた。この特権は、1789年まで存続することとなるのだが³²⁸、オルレアン司教やルーアン司教座聖堂参事会の特権のように、制限をかけられることはなかったようである。これはおそらく、他の二つの特権が教会権力と関係していた

³²³ Sermet, *op. cit.*, p. 112.

³²⁴ Floquet, *op. cit.*, t. 1, pp. 423-424.

³²⁵ *Ibid.*, t. 2, pp. 153-162. ディストリクト裁判所による問い合わせは、教会から裁判所への書簡を受けて行われた。裁判所にたいする返答の中で、司法大臣は、ルーアン司教座参事会の恩赦は、刑法の欠陥を補う一時的なものでしかなく、刑法が厳しすぎると訴える囚人がいる場合には、彼ら自身で恩赦をするのではなく、国王に判断を委ねるべきだと述べている。

³²⁶ Jousse, *op. cit.*, t. 2, p. 404.

³²⁷ Pasquier, Jean-Claude, *Le château de Vendôme, une histoire douce amère*, Vendôme, 2000, p. 52. この文献を提示してくださったヴァンドーム市当局のコワファール氏(2009年当時)に心から感謝申し上げる。voir aussi Sermet, *op. cit.*, p. 117.

³²⁸ Sermet, *op. cit.*, p. 118.

こと、とりわけオルレアンの事例については、国王の入市式における恩赦とよく似ていたことや、その範囲にほとんど制限がなかったことと無縁ではあるまい。

以上に述べたように、たしかに、国王以外による恩赦の特権は革命期まで存続した。しかしながら、これらの恩赦も、正義の源泉である国王や彼の与えた法令から完全に独立して与えられるものではなかったし、逆に、王権が、あらゆる恩赦権を自らの掌中に置こうとする中で、その独自性を失った。結局、このような特権が存在したものの、最終的には「すべての慈悲は王より来る」ことには変わりなかったのである。

第3章 啓蒙の時代と恩赦

17世紀、国王は恩赦権を独占し、神と一体化した。しかし、国王の絶対的な権力は長くは続かず、18世紀には王権に翳りが見えはじめる。世紀半ばになると、国王ルイ15世（在位1715年～1774年）への中傷が街にあふれ、1757年には国王の襲撃事件さえ生じた。そして、ついに「主権のしるし」である恩赦権にもくさびが打ち込まれた。ベッカリーアが『犯罪と刑罰』第5版（1765年）において恩赦廃止論を唱えたのである。本章では、王権の衰退と啓蒙思想の登場を背景とするこの時代に、恩赦がどのように捉えられていたのかを見ていきたい。

第1節 王権の翳りとパルルマン法院の抵抗

(1) パルルマン法院の建言と恩赦

18世紀は、啓蒙の時代であると同時に、王権とパルルマン法院の対立の時代でもある。対立の発端は、1713年に出された教皇勅書「ユニゲニトゥス」の受け入れをめぐる意見の相違であった。イエズス会と密接な関係をもち、受け入れを進めようとする国王の側に、ガリカニズムを重視する法院が反対を唱えたのである¹。さらに、ルイ15世の時代からは、深刻化する財政を補うための新税設置の際にも両者は激しく対立した。

このような対立の際に法院が用いたのが、建言の権利であった。しかし、この権利は、1673年2月24日に、実質的廃止に追い込まれていたはずである²。実は、建言の制度は、ルイ15世の即位とともに復活していた³。さらに、わずか5歳で即位した国王には、摂政だけでなく、パリ・パルルマン法院による立法面での後見もつけられた⁴。一方、同じく幼少のうちに即位したルイ13世やルイ14世は、パルルマン法院に「主権の第一のしるし」である立法権への介入を許したことはなかった。つまり、ルイ15世は、即位の時点で、主権者としては「傷もの」となっていたのである。そして、衰退する王権を尻目に政治的プレゼンスを増したパルルマン法院は、次の国王ルイ16世（在位1774年～1792年）の

¹ 「ユニゲニトゥス」は、ジャンセニストを断罪する教皇勅書であるが、1730年までには、パリ・パルルマン法院の内部や周辺にジャンセニストの一派が形成されており、このことも王権と法院との対立に影響した。Van Kley, Dale K., *Les origines religieuses de la Révolution française 1560-1791*, traduit de l'anglais (États-Unis) par Alain Spiess, Paris, 2006, p. 172.

² 第2章第1節(4)を参照。voir aussi *Œuvres complètes du chancelier d'Aguesseau*, t. 10, Paris, 1819, pp. 14-15. しかしながら、アントワヌによると、地方ではこれまで通り建言が行われていたうえ、パリでも、この禁止は見かけだけの効力を持つにとどまった。Antoine, Michel, *Les remontrances des cours supérieures sous le règne de Louis XIV (1673-1715)*, *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 151, 1993, p. 90.

³ Isambert et al., *op. cit.*, t. 21, pp. 5, 10.

⁴ Hanley, Sarah, *The Lit de Justice of the Kings of France. Constitutional Ideology in Legend, Ritual, and Discours*, Princeton, 1983, p. 341.

時代には、恩赦にも反対の意を示すことになる。ここでは、パルルマン法院の建言と恩赦について考えてみたい。

1781年3月30日、パリ・パルルマン法院は、文書偽造(*faux*)の罪を犯したダルジャン殿にたいする減刑の書状を認可すると同時に、この書状について進言を行うことを決定し、4月7日にこれを行った。フラメルモンの、パリ・パルルマン法院による18世紀の建言にかんする研究の目次をたどった限りでは、1715年の建言権復活以降、恩赦状の認可に際して意見が述べられたのは、これが初めてのことであった。この進言の中で、法院は、このような恩赦は「法律により言い渡された刑罰を軽減することで、厳格さのみが制止しうる者たちを大胆にする」ため「不都合」であると述べた。また、法院は1531年、1680年⁵、1699年⁶、1716年、そして1720年の文書偽造犯にかんする法律は⁷、政治社会や家の安らぎと安全を害するこの罪に、死刑を与えてきたと主張する。法院によれば、先の国王たちは、文書偽造の罪が王国の一般的善と取引の安全、そして臣民の利益にとって重要であると考えたからこそ、これにたいする刑罰を強めていった。したがって、法令の原理の通り、偽造(*contrefaçon*)により利益を得ようとする事件が横行する状況において、偽造の罪を犯した者には、すべて同じ刑罰を与えなければならない。また、法院によると、あらゆる文書偽造の罪はおしなべて社会を害し、人々の財産と名誉を危険にさらすので、証拠(*degré de conviction*)を得ることが困難であればそれだけ、犯罪が立証された場合には、犯人を厳しく処罰しなければならない⁸。

3年後の1784年3月28日には、罪刑消滅の書状にまで進言が行われている。フラメルモンの解説によれば、この書状は、ラディクス・ド・サント＝フォワ殿とピロン殿にたいする訴訟を消滅させるものであった。しかし、3月2日に法院に送付されたこの書状は、認可すらされなかった。この進言において、法院はまず、罪刑消滅の書状は、1670年刑事王令などにより定められた形式にのっとって送付され、提出されなければならないと述べた。つまり、罪刑消滅の書状の認可手続きは、嘆願者自身の求めがあつて初めて行われるのである。しかしながら、今回の罪刑消滅の書状は命令として送付されており、この書状の性質に反している。また、この罪刑消滅は、嘆願者の利益になるだけで国益につながらないし、恩赦に反対する役目であるはずの検事長が、嘆願者の代わりに書状の認可を求めていると法院は指摘する。さらに、法院は、この恩赦が認められれば、1670年刑事王令の違反の先例となり、その結果、影響力(*credit*)のある被告人は、裁判の場で自白をしなくてもよくなるだけでなく、彼らに国王の権威を知らしめることもできなくなると言う。法院によると、罪刑消滅の書状は、法律により、嘆願者自身が提出することとなっているが、それはこの書状が、嘆願者が罪を認めることに基づいているからである。そのため、嘆願

⁵ Isambert et al., *op. cit.*, t. 19, p. 238.

⁶ *Ibid.*, t. 20, p. 340.

⁷ *Ibid.*, t. 21, p. 184.

⁸ Flammermont, Jules, *Remontrances du Parlement de Paris au XVIII^e siècle*, t. 3, Paris, 1898, pp. 475-476.

者は、自ら罪を告白し、認可手続きでの書状の読み上げの後、自分で書状を得たこと、書状が真実であること、そしてその利用を希望していることを宣言しなければならない⁹。そうでなければ恩赦状など必要なく、また、書状の内容が間違っている時には、存在しないはずの犯罪を消滅させることになる。さらに、不処罰の希望は、あらゆる無秩序を増加させるため、法院はこの書状について進言を行うのである¹⁰。

1781 年の進言について言えば、1670 年刑事王令は、裁判所が犯罪の重大さに応じて、建言や進言を行うことを認めている（1670 年刑事王令第 16 章第 1 条）。たしかに、この王令により想定されていたのは、とりわけ、恩赦不可能な犯罪の場合であったが（同第 4 条）、その他の場合に建言を行うことも可能であった¹¹。しかし、1784 年の方はどうだろうか。1670 年刑事王令の制定時の審議録を見ても、罪刑消滅が国益につながらなければならないとの記述は見られない。それに、罪刑消滅は、国王の恩恵という性格を強くもっていたはずである¹²。にもかかわらず、なぜ法院は進言を行ったのだろうか。

その理由を考えるにあたって、上述の進言よりも少し前に行われた建言が参考になるだろう。たとえば、1764 年 3 月 4 日の建言において、法院は、刑事手続きは権力により中断されてはならず、寛恕に固執することは、主権の利益にも害を与えると述べた。しかしながら、法院は、恩赦それ自体を否定しているというわけではない。法院によれば、正式に裁判された者にたいする恩赦は、悔い改めを促し、法律を権威づけ強固にする。一方、裁判を免除すれば、不処罰により犯罪がかきたてられ、法律の権威も損なわれる。結局、国王は慈悲深く、恩赦などによってのみ人々に知られるべきものであり、王権にとって骨の折れる義務である犯罪者の処罰は、国王を守るために、司法官によって行われるべきなのである¹³。この建言において、法院は、恩赦と裁判が対極にあることを前提に、国王と恩赦権との結びつきを強調することで、自分たちの権限を確保しようとしたと考えられる。したがって、法院には、彼らの行う通常の手続きをとばして被告人の刑罰を免除することは、絶対に認められなかった。ジュースによると、法定の手続きは衡平により形成されたものであり、正義の担保でもあった。したがって、手続きの省略は、やむを得ない場合を除き、認められない¹⁴。これより、1784 年に法院が問題としていたのは、恩赦の内容そのものというよりは、通常の手続きが歪められたことであったと推測できる。実際、二人の嘆願者は、数ヶ月後に手続きを遵守して自ら書状を提出した結果、書状を認可されているのである¹⁵。

しかし、恩赦が裁判手続きをストップさせるというのは、18 世紀にはじまったことでは

⁹ 1670 年刑事王令第 16 章第 21 条を参照。

¹⁰ *Ibid.*, pp. 543-544.

¹¹ voir Bornier, *op. cit.*, t. 2, p. 230.

¹² voir *Procès-verbal*, p. 186.

¹³ Flammermont, *op. cit.*, t. 2, pp. 476-482.

¹⁴ Jousse, *Traité*, t. 1 preface, pp. xxxij, xxxv

¹⁵ Abad, *op. cit.*, p. 767.

ない。にもかかわらず、なぜ、この頃になって、法院は恩赦に反対の意を示すようになったのだろうか。ここで重要なのが、王権とパルルマン法院との力関係である。石井三記は、1673年2月24日の禁止により、「最高法院は高等法院に格下げされた」と述べたが¹⁶、ここから、1715年の建言権の復活は、高等法院を最高法院にふたたび格上げたものであるとすることができる。しかも、この復活は、ルイ14世の遺言により、ルイ15世の摂政に指名されていたオルレアン公が、遺言状により制限されていた摂政の権限を強化するために法院に働きかけ、その見返りとして行われたものであった¹⁷。このことをふまえると、建言権の復活は、単に法院を「最高法院」の地位に戻しただけでなく、国王と法院との力関係のターニング・ポイントになったと考えられる。そもそも、一度廃止した建言の権利を復活させることは、国王が自らの無謬を否定し、法院によるコントロールの有用性を認めたということを意味する¹⁸。だからこそ、法院は国王の立法行為に抵抗することができたのである。ところで、抵抗とは、何らかの圧力から逃れるためのものであるもので、物理的暴力から身を守るためにとっさに行われたものでない限り、成功の可能性がほとんどない場合には、めったに行われまいだろう。ゆえに、法院が国王の決定に抵抗したということは、法院自身が、自分たちは国王に刃向かうことができるだけの力をもっていると認識していたことを意味すると言することができるのである。

王権とパルルマン法院との力関係を示す尺度として、リ・ド・ジュスティスに注目することができるだろう。リ・ド・ジュスティスは、国王がパリ・パルルマン法院の大審部に直接出向くことで、本来国王に由来する、正義を発動させる儀礼である。その主な役割は法令の強制登録で、パルルマン法院が法令の登録を拒否し、建言を繰り返した場合にしばしば行われた。つまり、リ・ド・ジュスティスは、建言を通じた法院の抵抗を弾圧する手段として用いられていたのである。リ・ド・ジュスティスは、もともと、国家の重要事項を審議するために開催されていたので、大貴族にたいする裁判や摂政の宣言、そして国王の成人の宣言などの場合にも行われた¹⁹。いずれにせよ、この儀礼は、国王が単独で法院に乗り込むのではなく、大貴族たちが国王とともに現れ、それぞれが、地位に応じて決められた場所に座すことで行われた²⁰。したがって、この儀礼は、貴族たちの間の上下関係を可視化し、国王の主権を堅持するという意義も有していた。よって、あえてこの儀礼を行うということは、大貴族たちに、国王の優位を確認させなおす必要があったことを意味すると言することができるのである。

¹⁶ 石井三記「一八世紀フランスの国王・法・法院」（上山安敏編『近代ヨーロッパ法社会史』ミネルヴァ書房、1987年、所収）、179ページ。

¹⁷ Shennan J. H., *The Political Role of the Parlement of Paris, 1715-23*, *The Historical Journal*, v. 8, n. 2, 1965, pp. 185-186 ; Flammermont, *op. cit.*, t. 1, introduction pp. IV-V.

¹⁸ Egret, Jean, *Louis XV et l'opposition parlementaire*, Paris, 1970, p. 9.

¹⁹ 石井「一八世紀フランスの国王・法・法院」、171ページ。

²⁰ リ・ド・ジュスティスの様子は、石井「一八世紀フランスの国王・法・法院」、171 - 173ページを参照。

実際、ルイ 14 世以降の 3 代の国王について見てみると、イザンベールの法令集に収録されているものを数えた限りでは、王権が弱体化するにつれて、リ・ド・ジュスティスが頻繁に行われるようになってきている²¹。さらに、ルイ 14 世は、1663 年 12 月 15 日以降、一度もリ・ド・ジュスティスを行っておらず、1673 年から 1713 年までの 40 年間は、パリ・パルルマン法院大審部を訪れることすらしていない²²。

リ・ド・ジュスティスが頻繁に行われたことは、逆から見れば、法院による建言が頻繁に行われたことを意味している。また、18 世紀には、リ・ド・ジュスティスの最中に、パルルマン法院の裁判官たちが法令の登録を拒否したり、強制的に登録されたにもかかわらず、法院側の抵抗により、その法令が廃止されたりすることがあった。つまり、法院を押さえつけるための武器であったはずのリ・ド・ジュスティスは、今や、必ずしも法院に通用しなくなったのである。そして、1771 年、いわゆるモープーの改革によりパルルマン法院は解体され、国王に協力的な新裁判所、高等評定院が置かれるのである²³。

1774 年にルイ 15 世が崩御すると、新国王ルイ 16 世は、旧パルルマン法院を復活させた。しかしながら、ルイ 16 世は、改革により既得権益にメスを入れようとしたため、パルルマン法院の抵抗を受け、これらの改革にかんする法令を登録するためのリ・ド・ジュスティスも、無効が言い渡されるなどして失敗に終わった。実は、ルイ 16 世による改革の中には、恩赦に関係するものもあった。それが、1788 年 5 月に行われた刑事訴訟法改革である。(2) では、この、いわゆるラモワニョンの改革について見てみたい。

(2) ラモワニョンの改革における恩赦

1788 年 5 月 8 日、アンシャン・レジーム最後のリ・ド・ジュスティスが行われた。この時登録されたのが、ラモワニョンの改革に関連する 6 つの法令である。これらの法令の内容を簡単にまとめると、ひとつめに、裁判の遅延などに対処するため、大バイイ裁判所を設置し、この裁判所を、2 万リーヴルまでの民事訴訟と、一部特権身分を除く刑事訴訟の最終審とすること。二つめに、特別裁判所を廃止したり、司法官職を削減したりして裁判所組織をスリム化すること。三つめに、中世の列侯会議を復活させて、王国全土にかかわる一般的立法の登録をさせることであった²⁴。モープーの改革がルイ 15 世の崩御により頓挫してから 14 年後、ルイ 16 世は、ふたたび法院の権限を奪い取ろうとしたのである。当然、法院の側はこれに抵抗し²⁵、改革はわずか 4 ヶ月で潰えることとなった。ところで、

²¹ 石井「一八世紀フランスの国王・法・法院」、187 ページ。

²² Hanley, *op. cit.*, p. 327.

²³ モープーの改革については、木崎喜代治「18 世紀におけるパルルマンと王権—モープーの改革をめぐる— (1~3・完)」『経済論叢』第 134 巻第 5・6 号、第 135 巻第 5・6 号、第 136 巻第 2 号、1984 - 1985 年、を参照。

²⁴ 石井『18 世紀フランスにおける法と正義』、190 - 191 ページを参照。

²⁵ パルルマン法院は、この改革を大臣による専制とし、祖国愛の概念を持ち出して抵抗し

この時登録された法令は、すべて裁判所の権限や組織にかかわるものであったわけではない。ラモワニョンの改革が目指したのは、単に法院の力を弱めることだけではなく、刑法改革思想の要請に応えることでもあった。それを実現させたのが、5月1日の、「[1670年] 刑事王令にかんする国王宣言」である²⁶。実は、この国王宣言の中で最も重要な箇所は、恩赦と密接なかわりを有していた。では、その箇所とは、どのようなものであったのだろうか。

1788年5月1日の国王宣言は、1787年2月22日から5月25日に開催された名士会議の要求に従って、制定されたものであった²⁷。全12条からなるこの王令の目的や内容は、前文にまとめられている。それによれば、1670年刑事王令が制定されてから100年が経過し、時代に合わせてそれを改正する必要があるが出てきた。この改正は啓蒙思想に基づいて行われ、世論を法令のレヴェルにまで格上げするものである。また、この改正は、秩序の維持と公安(*surête générale*)を危ぶませることなく、刑罰を緩和することができる方法を探求する。しかし、仁慈の行きすぎは避けなければならない。前文によれば、この法令の目的は、確実で見せしめになる刑罰により犯罪を予防すること、無実の者を保護すること、刑罰を緩和し確実にすること、そして、節度(*moderation*)をもって犯罪者を処罰することである。ただ、すぐに行われなければならないのは、1670年刑事王令の二つの弊害を除去することであると前文は言う。それらの弊害のひとつめは、1670年刑事王令第25章第21条が定める、「判決はそれが言い渡された当日に執行されなければならない」という規定であり、二つめはセレットの利用である。まず、前者については、この規定のために、他の悪弊が改善不能となり、1670年刑事王令の全面的な改正が必要となったと述べられている。前文によれば、判決が即座に執行された場合、恩赦を嘆願したり²⁸、あるいは司法を啓蒙したりすること(*eclairer*)はできない。したがって、人間性の立場からすれば、判決からその執行までの間には間隔を置かなければならない。もうひとつの問題点について言えば、セレットは刑罰ではないものの、有罪であることが終局判決により確定するまでは、被告人は無罪と推定されるという要請に反している²⁹。

た。Campbell, Peter R., *The Politics of Patriotism in France (1770-1788)*, *French History*, v. 24, n. 4, 2010, pp. 572-574.

²⁶ Isambert et al., *op. cit.*, t. 28, p. 526-532. この国王宣言の前文は、鈴木『フランス刑事諸王令』、289 - 291 ページに、前文の一部と本文は、同「ラモワニョン司法改革について」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』第16巻、2004年、10 - 12 ページに翻訳されている。

²⁷ 鈴木「ラモワニョン司法改革について」、10 ページ。

²⁸ 大法官ダゲッソーも、「王権(*Majesté royale*)の最も高貴な属性」である恩赦権が侵害されることを理由に、判決の即時執行は国王の命令がなかった場合に限られるとしている。*Œuvres de M. chancelier d'Aguesseau, contenant les lettres sur les matière criminelle & matière civile*, t. 8, Paris, 1776, p. 276.

²⁹ 他にも、前文では、処刑先行拷問を暫定的に廃止すること、判決を印刷し公示すること、判決の理由を明らかにすること、無罪の被告人に補償を行うことが言及されている。

前文では、判決の執行を遅らせることが改革の第一の内容として掲げられていたが、このことが規定されていたのは、第1条ではなく第5条である。第5条によると、死刑が言い渡された場合、執行まで1ヶ月の期間を設けなければならない。判決が下されると、検事長が大法官か国璽尚書に事件を送付した後、国璽尚書は事件を再検討し、何らかの恩赦に相当するか否かを判断する³⁰。ただ、この規定には例外もあり、国王の命令があった時には、1ヶ月が経過する前でも死刑を執行することができる。また、反乱あるいは騒擾の事件の場合も、判決は、従来通り即座に執行される(1788年5月1日の国王宣言第6条)。第1条が言及するのは、二つめの問題点であるセレットの廃止であったが、ここでは、恩赦状の認可手続きの際にセレットを使用することも、明示的に禁止されている。

1788年5月1日の国王宣言の前文が、第一の改善点と述べていることからわかるように、刑の執行を延期して恩赦嘆願をしやすくすることで、被告人に防御の手段を与えることこそが、この改革の主要な目的であった³¹。しかしながら、パルルマン法院には、これを受け入れることは不可能であった。死刑執行の延期と国璽尚書による事件の再検討は、法院が下した判決を、国王側の判断に強制的に委ねることを意味したからである。一方、ラモワニオンは、この規定をなんとしても成立させたいと考えていたようである。実は、この規定は、国王宣言として、すでに1788年2月10日に法院へ提出されており、5月1日の法令は、それにその他の規定を加えたものであった。また、この法令の前文の前半は、2月の国王宣言の前文を用いていた。しかし、2月初めの時点で、国王が法院を破壊しようとしているとのうわさが流れていたこともあってか、法院は、この国王宣言を登録せず、建言を行うことにした。この建言書が作成される間、国王の側は、新たな命令が出るまで死刑の執行を停止するよう法院に命じたが、法院はそれを無視して、いつも通り死刑を執行した。建言書は3月11日に提出されたが、この時には不適切だとして却下された。それでも、新たな建言書が作成されることとなり、その作成の間も法院は揺さぶりをかけ続けたため、ラモワニオンは一度改革を断念している³²。

2月の改革に反対したのは、保守派の司法官などであった。彼らによれば、判決の後す

³⁰ Jacobson, David Yale, *The Politics of Criminal Law Reform in Pre-Revolutionary France*, Thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the Degree of Doctor of Philosophy in the Department of History at Brown University, 1976, p. 408.

³¹ 1788年5月8日のリ・ド・ジュスティスにおけるラモワニオンの言葉から、大バイイ裁判所の設置も、部分的には、冤罪を防ぐために恩赦嘆願を促すことを目的としていたことがわかる。 *Discours de M. le Garde de Sceaux, Pour annoncer la Déclaration du Roi, relative à l'Ordonnance Criminelle, Versailles*, p. 2. フランス国立図書館の目録によれば、この資料の出版年は1788年である。この資料は、リ・ド・ジュスティスの際の国王の演説以下、司法組織にかんする王令、特別裁判所の廃止にかんする勅令、[1670年] 刑事王令にかんする国王宣言、パリ・パルルマン法院の司法官の削減にかんする勅令、列侯法院の再建にかんする勅令、休廷期間にかんする国王宣言の順に、それぞれ国璽尚書の趣旨説明と法令本文を一冊にまとめている。

³² Jacobson, *op. cit.*, pp. 415-416.

ぐに死刑を執り行うことこそが、実は人間性によるのであって、死ぬのか、それとも恩赦が認められるのかと気をもみながら、1ヶ月過ごすことを被告人に強いる方が残酷である。また、国王の側が終局判決を再検討することは、実質的に新たな審級を設けることを意味するが、これは、同輩法廷により裁判されるという大貴族たちの特権に抵触し、王国の国制の原理に反する。さらに、判決から死刑までに1ヶ月の間を設けることで、富める者は自分たちの影響力を用いて刑罰を免れようとする一方、貧しい者たちは、そのような影響力を持たないために、刑罰を受けることになる。したがって、公安(public security)のためには、恩赦嘆願の権利を制限する方が望ましい。このような期間を置くことは野蛮であり、イギリスにかぶれた人々(anglomania)が、イギリスの制度を無理にフランスに適用させようとしているのである³³。

5月8日のリ・ド・ジュスティスでも、法院は同様な意見を述べて抵抗した。登録に際して、ラモワニオンは以下のような趣旨説明を行っている³⁴。刑事法改革の必要性はあまねく理解されており、国王は人々の願いを聞き入れた。国王はまず、刑事法の悪弊(abus)のうち、法令に起因するものと、そうでないものを区別するよう命じた。これらのうち、より重大なのは法規定に基づく悪弊で、それこそが、死刑の執行は判決後すぐに行われるという規定である。この規定は、そのほかの悪弊を取り返しのつかないものになっている。国王は、冤罪を避けるため、有罪判決の後、被告人に恩赦を嘆願する時間を与えることを望んでいる。ゆえに、国王は、死刑判決と執行の間に、1ヶ月の間を設けることを命じた。ヨーロッパで最も啓蒙されている諸国では、死刑は、国王による事前の許可なしに与えることはできない³⁵。恩赦権は、王権の最も見事な属性であるから、この習慣(usage)は、いっそうフランスの法律にふさわしい。もし、死刑の判決が与えられたことを国王に知らせずにそれを執行すれば、恩赦権が台無しになってしまう³⁶。

これにたいし、保守的な次長検事セギエは、この国王宣言は人間的な行いを見せており、そのため、すべてのフランス人はあわてて国王に感謝している(s'empresseront de rendre très humbles actions de grâce à leur souverain)と述べた。彼によると、死刑判決とその執行との間に1ヶ月の期間を設ければ、その間、受刑者は生死の間をさまよい絶望に暮れ、そのことにより、このような情け(bienfait)の偉大さが減少してしまう可能性がある³⁷。し

³³ *Ibid.*, pp. 418-419.

³⁴ ここでは、恩赦に関係する部分のみを扱う。

³⁵ 「ヨーロッパで最も啓蒙されている諸国」のひとつは、イギリスだろう。当時のイングランドでは、死刑判決の場合、裁判官による検討を経て内閣に恩赦が提案されることが多く、事実上、死刑を執行するには国王の許可が必要となったとすることができるからである。なお、18世紀末のロンドンにおける恩赦率は全判決の75%にのぼり、ここから、死刑判決の大部分が恩赦の可能性を検討されていたと推測される。栗原前掲書、176、181 - 182 ページ。

³⁶ *Discours de M. le Garde de Sceaux, Pour annoncer la Déclaration du Roi, relative à l'Ordonnance Criminelle.*

³⁷ Flammermont, *op. cit.*, t. 3, p. 774.

かしながら、パリ・パルルマン法院が危惧していたのは、自分たちの権力が国王によりそぎ落とされることであった。ゆえに、司法官たちにとって、この改革は国王の暴挙にすぎなかった。地方でも、たとえばブザンソン・パルルマン法院は、一度下した判決を国璽尚書に委ねることで、彼ひとりが、あるいはその秘書らが、刑罰や恩赦を恣意的に与えることになる」と述べたのである³⁸。

実は、この規定に反対したのは法院だけではなくた。5月14日には、この国王宣言を起草した立法委員会まで、集団辞職をしてラモワニオンに反対の意を示したのである。彼らが危ぶんだのは、死刑の宣告から執行まで間を空けて恩赦嘆願を促すことにより、司法官の中から、犯罪者に恩赦を売る者が出てくるかもしれないことであった³⁹。こうして、この年の9月半ば、国王は法院に屈し、一連の改革を取り下げた。敗れたラモワニオンは辞任を余儀なくされ、勝ち誇った法院は、以前同様の権限を取り戻した。ヤコブソンは、この失敗の原因は改革の内容そのものではなく、王権の政治的弱さであったと述べている。彼によれば、世論はその後も刑法改革を求め続けた⁴⁰。したがって、1788年5月1日の国王宣言は、まぎれもなく「世論を法令のレヴェルにまで格上げする」ものであったと言えるだろう。

ところで、この改革を進めたラモワニオンとは、いったい何者だったのだろうか。彼は1787年4月8日から国璽尚書を務めた人物で、その前はパリ・パルルマン法院の上級部長評定官(*président à mortier*)の職にあった。彼の先祖は、1670年刑事王令を起草したパリ・パルルマン法院長であり、いここは『百科全書』の出版を後押ししたマルゼルブである⁴¹。ラモワニオン自身も改革派に名を連ねており、当時の有名な冤罪事件「3人の車刑囚事件」では、被告人の無罪を主張する開明的な弁護士たちを支持した⁴²。ラモワニオンは、国璽尚書に就任して間もなく、刑事法改革に着手しており、1788年5月1日の国王宣言の起草の際には、自ら組織した立法委員会だけでなく、マルゼルブや、3人の車刑囚事件で活躍した弁護士などの助けも借りて、作業を行った⁴³。実は、ラモワニオンを支えた改革派の人々の中には、以前から、死刑判決の執行を遅らせ、恩赦嘆願を促すべきだと主張していた者もいた。たとえば、弁護士のブロンデルは、3人の車刑囚を擁護したテキストの中で、犯罪者には、犯罪の性質に応じて「国王の仁慈を求める」権利を与えるべきだとしている⁴⁴。他にも、たとえばピエパプが同様のことを述べており⁴⁵、このことから、

³⁸ Egrét, Jean, *La pré-révolution française(1787-1788)*, Paris, 1962, p. 270.

³⁹ Jacobson, *op. cit.*, pp. 423-424.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 427. voir aussi Egrét, *Pré-révolution*, p. 273.

⁴¹ Marion, Marcel, *Le garde des sceaux Lamoignon et la réforme judiciaire de 1788*, Paris, 1905, p. 9.

⁴² 3人の車刑囚事件については、石井『18世紀フランスの法と正義』、183 - 186 ページを参照。

⁴³ Jacobson, *op. cit.*, pp. 393-394.

⁴⁴ Blondel, Jean, *Discussion des principaux objets de la législation criminelle ; Présentée au Conseil le 30 Juillet 1787, dans le Rapport de l'affaire des nommes Simarre, Lardoïse et Bradier*,

刑法改革思想家たちにとって、国王の慈悲により刑罰を緩和させるという考え方は、いたって自然なものであったと推測することができる。しかしながら、ここでひとつの事実に注目したい。刑法改革思想に大きな影響を与えたベッカリーアの『犯罪と刑罰』は、恩赦の廃止を主張しているのである。なぜ、同じように刑法の人道化を目指した彼らは、恩赦にかんしては、全く逆の意見を述べたのだろうか。次節では、当時の恩赦を取り巻く思想について考察する。

condamnés à la roue par Arrêt du Parlement de Paris, et déclarés en fuite innocents par Arrêt du Parlement de Rouen, Paris, 1789, p. 51.

⁴⁵ Jacobson, *op. cit.*, p. 412.

第2節 恩赦廃止をめぐる対立とイデオロギー

(1) 恩赦不要・廃止論の登場

1764年、イタリアで『犯罪と刑罰』が出版された。この書物の打ち出した人道的な刑法観は、フランス初の刑法典である1791年刑法典をはじめとする、その後の立法に大きな影響を与えることとなり、現在では「刑法学の聖書」とさえ呼ばれている⁴⁶。しかし、この作品が成功を収めたのは、その内容が、人々の心を引き付けたからだけではなかった。この書物が、18世紀ヨーロッパのあちこちに広まった要因のひとつは、1765年末に、モルレによるフランス語訳が出版されたことである。モルレはこの時、この書物を体系的で論理一貫したものとするため、オリジナルの47章立てから42章立てに改変し、それがフランスで大いに受け入れられたのである⁴⁷。『犯罪と刑罰』の成功には、1766年に、ヴォルテールが、この書物を支持する『一地方弁護士による、「犯罪と刑罰」という書物にかんする注釈』を出版したことも影響しているだろう。しかも、『犯罪と刑罰』に、ヴォルテールの注釈が付けられて出版されることも少なくなかったのである⁴⁸。

『犯罪と刑罰』の中で最も知られている部分は、おそらく死刑廃止論だろう。ベッカリーアは、死刑などの厳しい身体刑に代えて、緩和された確実な刑罰を用いることを主張した。彼によれば、犯罪者にたいし不必要に厳しい責め苦を与えても、それにより人々が受ける印象は長続きするわけではなく、すぐに記憶から失われてしまうので、そのような刑罰は無駄である。それよりは、受刑者にはそれほど苦痛を与えず、見る側には大きな苦しみを惹起させる、終身隷役刑などを確実に与える方が有用である。緩和された確実な刑罰と表裏一体をなすのが、この書物の第46章が説く、恩赦の廃止である。彼は、初めて死刑廃止論を唱えた人物として知られているが、初めて恩赦廃止論を打ち出した人物でもあったのである。

第46章の冒頭で、彼はこう述べている⁴⁹。「刑罰がより穏やかになればなるほど、[主権者の]寛大さ[clemenza]や赦しはそれだけ必要でなくなる。むしろ、それらが害悪になる

⁴⁶ 石井『18世紀フランスの法と正義』、98ページ。

⁴⁷ モルレ訳は、岩波文庫から出版された、風早八十二らによる日本語訳でも参照されているが、風早訳では、さらに段落構成の変更や意識が加えられている。47章立ての翻訳が各国で出版されるようになったのは1960年代以降であり、わが国でも、2008年から2009年にかけて石井三記らにより翻訳が行われたほか、2011年には、小谷眞男による翻訳が東京大学出版会から出版された。以下、本稿では石井三記、福田真希共訳「ベッカリーア『犯罪と刑罰』(第五版)」『名古屋大学法政論集』、第228号、第229号、第231号、2008 - 2009年を用いる。

⁴⁸ 石井『18世紀フランスの法と正義』、136、139 - 140ページ。なお、ヴォルテールは、恩赦廃止の立場は取っていない。彼は1768年の『A、B、CまたはA、B、Cの間の言説、フエ氏の英語からの翻訳』という作品において、恩赦に好意的に言及している。Voltaire, *Œuvres complètes*, éditées par L. Moland, t. 27, Paris, 1879, pp. 385-387.

⁴⁹ 以下はベッカリーア前掲訳稿(三・完)、267 - 268ページ。

ような国の国民は何と幸せであろうか。」彼によれば、寛大さは、主権者ではなく立法者の側にあるべきであり、寛大な立法者の制定した「刑罰が穏やかで、裁判の方法も規則正しく迅速である」法律の確実な執行を、主権者が寛大さの名の下に妨げることはできない。たしかに、寛大さ、すなわち恩赦は「王位のもっとも美しい大権であり、また、それは主権者の属性の中でもっとも望ましいもの」であるが、これは法律の否定に他ならない。恩赦は、人々にたいし、刑罰が犯罪の必然的な結果ではないと示すので、それを見た人々は、不処罰の可能性を求めるようになり、正義による判決を力による暴力と考えるようになる。さらにいえば、「法律が不合理で、有罪判決が残酷であるだけに、赦しや恩赦が必要となる」のであって、法律が完璧であれば、そのようなものは必要ない。この、完璧な法律というのは、人間の自己愛を基礎にして形作られ、個人の利益が一般の利益へと結実するようなものである。逆に、私的個人の善が公共善から切り離されれば、恐怖と猜疑心の上に、公共の福祉の誤ったイメージが建てられることになる。言い換えれば、彼は、諸個人の利益を保護する法律により、公共の福祉を実現することを目的としており、それは、このように完璧な法律の確実な執行により達成される。逆に、主権者の独断により法律の執行を不確実にすることができれば、法律の威厳は失墜してしまう。そもそも、完璧な法律が定められていれば、執行の段階で恩赦を与える必要などない。つまり、彼は、君主による「慈善の私的行為」を通じた人の支配ではなく、法の支配を実現することを目指しており、そのひとつの要件として求められるのが、恩赦の廃止なのである。

恩赦の廃止を求める第 46 章は、1765 年の第 5 版になって新たに追加された。したがって、ベッカリーアは第 5 版を出版する時になって、結論の直前にこの章を置く必要を感じたということになる。その理由は述べられてはいないが、彼は、初めは恩赦の存在をそれほど気にかけてはいなかったのではないだろうか。というのも、第 46 章と、第 47 章の前半部分の内容は、初版からあり、刑罰の緩和について述べている第 27 章と類似しており、そこには、「誘惑に弱く、墮落した裁判官」による刑罰の免除への批判は見られるものの、主権者による恩赦については、何も述べられていないからである⁵⁰。しかし、版を重ねるにつれ、ベッカリーアは、現場の裁判官の墮落により与えられる不処罰よりも、華々しく、犯罪者に多くの希望を与えうる恩赦が重要であることに気付き、さらに、恩赦こそが、残酷な刑罰とのコントラストにより、当時の刑事司法を支えていると考え、恩赦廃止論を打ち出すに至ったように思われる。つまり、『犯罪と刑罰』の最後の 2 章は、密接にかかわりながら結論をなしており、そこで彼は、未開状態から抜け出たばかりで、「雷のような一撃」によってしか倒すことができない、ライオンのような人々にふさわしい刑法でない限り、恩赦は必要でないと述べているのではないだろうか⁵¹。

⁵⁰ 同前訳（二）、246 ページ。

⁵¹ 同前訳（三・完）、268 - 269 ページ。なお、小谷は、恩赦の章が結論の直前に挿入されたことは、文明の発展史という長期的な時間軸が取り入れられたことを意味し、そのことによって、『犯罪と刑罰』は刑罰論としてだけではなく、歴史的視点に立脚した寛容論とい

ベッカリーアに影響を受け、彼と同じく恩赦の廃止を主張した思想家に、ベンサムがいる。彼は『民事および刑事立法論』（1802 年）の第 2 巻の中にある、刑法の諸原理の第 3 部第 10 章において、「もし法律が厳しすぎるなら、恩赦を行う権力は緩和剤となるが、この緩和剤は別の悪である。善き法律を作れ、そしてそれらが無効にする力をもつ魔法の杖を作るな。もし刑罰が必要なら、それを赦免するべきではない。また、もし刑罰が必要でないならば、それを言い渡すべきではない」と言う⁵²。ここから推測されるように、ベンサムの主張は、多くの点で、ベッカリーアの考えと共通している。彼によれば、刑罰は不確実になればそれだけ厳格になり、確実になればそれだけ緩和される。ゆえに、恩赦権は「まさにそれら〔刑罰〕を不確実にするために作られた権力」なのである。

しかし、理性の時代の前にある、熱情の時代においては、怒りと復讐により定められ、気まぐれと反感に基づいた野卑な刑法が人々に害を与えていた。そのため、この時代、恩赦は、法律の厳格さを緩和する比較的な善であった。こうして、恩赦は称賛の対象となり、「主権者の第一の徳」、あるいは「王位の最も高貴な特権」であると言われるようになった。しかし、ベンサムから見れば、その特権は、用いれば弱腰と批判され、用いなければ冷酷と批判されるような重荷でしかない。結局、社会にたいする犯罪が問題となる場合、恩赦を行うことは、汚職を意味するに過ぎないと彼は言うのである⁵³。

ベンサムの思想がベッカリーアの思想と大きく異なるのは、ベンサムにおいては、例外的に恩赦が認められる場合が想定されているという点である⁵⁴。そのような場合として、まず挙げられるのは、当該犯罪が君主の自惚れだけを攻撃する場合や、君主とその寵臣たちに向けられる風刺に過ぎない場合である。この時、君主による恩赦は彼の勝利を意味する。次に挙げられるのが、「反乱、共謀、公共的騒乱の後、刑罰が善より多くの悪を作る」場合である。この時、恩赦は有用であるだけでなく、必要である。というのも、この恩赦が善き法律によりあらかじめ規定されていたならば、それは法律の侵害ではなく、その執行を意味するからである。しかし、この恩赦が、動機なくして与えられた、君主の好みや

う結論ももつようになったと述べている。チャーザレ・ベッカリーア『犯罪と刑罰』小谷眞男訳、東京大学出版会、2011 年、199 - 200 ページ。

⁵² Bentham, Jeremy, *Traité de législation civile et pénale, Précédés de Principes généraux de Législation, et d'une Vue d'un Corps complet de Droit*, Publiés en François par Ét. Dumont, de Genève d'après le Manuscrits confiés par l'Auteur, t. 2, Paris, 1802, p. 434. J・ベントム『民事および刑事立法論』長谷川正安訳、勁草書房、1998 年、576 ページも参照。『民事および刑事立法論』は、フランスでデュモンにより初めて出版された。ベンサムの著作はデュモンにより出版されたものが多く、また、デュモンを通じてミラボーの演説にも取り入れられたと言われている。Phillipson, Coleman, *Three Criminal Law Reformers, Beccaria, Bentham, Romilly*, Montclair, 1970, p. 125.

⁵³ Bentham, *op. cit.*, pp. 432-434. ベンタム前掲訳書、575 - 576 ページも参照。

⁵⁴ ベンサムによれば、過失あるいは正当防衛、酩酊状態など、違法行為が犯人の意思によらない場合は、恩赦ではなく、裁判官による減刑を導くことができる。Ibid., pp. 276-277. 同前訳、471 - 472 ページ。

人の良さによるものであるならば、人々は法律や政府を残酷だと批判することになる⁵⁵。例外的に恩赦が許される場合は、別の章でも4つ挙げられている。まず、法律により処罰される者の数が多すぎる場合、次に、ある犯罪者を処罰すれば、確実に国民的不満が醸成される場合、それから、その犯罪者が、友好関係に配慮すべき他国に保護されている場合、最後に、この人が国家に著しく貢献している場合である⁵⁶。

ところで、ベンサムはもうひとつ例外を設けているように見える。彼は、恩赦の章の最後で「少なくとも殺人は常に例外となるべきである」と述べているのである。ところが、彼は、殺人を赦す権利をもつ者はすべての人の生命の主人であるとも言ふ⁵⁷。ここから、殺人犯に恩赦を与えることができるのであれば、犯罪者に死刑を科すこともできるという結論が導き出される。しかしながら、彼は、死刑にかんしては、ベッカリーアの議論に負うと明言し⁵⁸、この刑罰の廃止を主張している。したがって、ベンサムは、殺人が例外的に恩赦の対象となると述べているのではなく、少なくとも、殺人には恩赦は認められてはならないと述べていると考えられる。

今度は、イタリアの刑法改革論者、フィランジェーリを見てみよう。彼は、ベッカリーアの影響を受けたナポリの思想家で、1788年に夭逝したものの、フランス革命にも影響を与え⁵⁹、さらに、ナポレオンをして「この若者こそ、すべての者にとっての教師である」と言わせた人物である⁶⁰。フィランジェーリは、『立法の科学』（1780～1791年）第3巻第2部第57章において⁶¹、「恩赦が公正であれば、法律は悪い。しかし、もし法律が善ければ、恩赦は法律にたいする侵害である。前者の場合においては、法律を廃止しなければならない。一方、後者の場合には、恩赦を拒否しなければならない」と述べる⁶²。彼はまず、プラトンやキケロなどのテキストを用いることで、自らの主張を正当化する。それらのテキストによれば、共和国においてはいかなる犯罪も処罰されずにいることはなく、不処罰は犯罪の原因となる⁶³。フィランジェーリにおける主権者の第一の義務は、社会と個々人の安全を守ることであるが、この義務に反する仁慈は弱さの表れ(*debolezza*)で、明らか

⁵⁵ *Ibid.*, pp. 432-433. 同前訳、575 ページ。

⁵⁶ *Ibid.*, pp. 383-384. 同前訳、543 ページ

⁵⁷ *Ibid.*, p. 434. 同前訳、575 ページも参照。

⁵⁸ *Ibid.*, p. 429. 同前訳、573 ページも参照。ベンサムの死刑論は、Bentham, Jérémy, *Théorie des peines et des récompences*, Réédité en françois, d'après les manuscrits, par M. Et. Dumont, de Genève, t. 1, Londres, 1811, pp. 224-262 を参照。

⁵⁹ Maestro, Marcello, Gaetano Filangieri and His Science of Legislation, *Transactions of the American Philosophical Society*, new series, v. 66, p. 6, 1976, p. 62.

⁶⁰ 中村喜美郎「フィランジェーリの立法思想—近代立法学の原点—」『日伊文化研究』第29号、1991年、103 ページ。

⁶¹ 『立法の科学』は全7巻からなるが、刑法にかんする第3巻は1783年に出版された。Maestro, art. cit., p. 28.

⁶² Filangieri, Gaetano, *La scienza della legislazione e gli opuscoli scelti*, v. 4, Firenze, 1821, p. 68.

⁶³ *Ibid.*, pp. 65-66.

な悪徳である。ゆえに、主権者は法律を厳格に適用しなければならない。また、たとえ恩赦権が、それ自体恣意的なものではなかったとしても、この権利は、行使される時には、おおかた社会にたいする不正義となるのである。

フィランジェーリも、ベンサムと同様、例外的に恩赦が認められる場合があると考えている。ひとつめに挙げられているのは、不処罰が犯罪のきっかけとなるのではなく、善への後押しとなる場合である。この場合の具体的な例としては、犯罪者の才能や徳が祖国に大きな利益をもたらす場合、犯罪の理由が、心の腐敗というよりは激しい情熱であった場合、そして、罪人を裁いた裁判官、あるいはこの罪人の徳や奉仕の証人となる者が恩赦を求めた場合がある。恩赦が認められる場合として、二つめに挙げられているのは、人口の全体が犯罪者であった場合である。この場合の具体的な例は、多くの市民が、不穏な空気(*spirito*)にそそのかされて犯罪に手を染めた時や、町や村全体が共犯者であった時、そして、法律に従って刑罰を与えると人口や農業、技術に空洞をもたらす時などである。恐らく、ここで彼は、人々が誰かに扇動されて反乱などを起こした時を想定している。というのも、この他にも、具体例として、共犯者全員を処罰することが国益に反する時や、祖国の父が恩赦や平和の命令を出した時、あるいは、主たる犯人のみを処罰しただけであっても、公共の平安に損害をもたらされない時が挙げられているからである⁶⁴。

ベッカリーアやベンサムにおいては、恩赦の廃止が刑罰の緩和、さらには死刑の廃止とかわりをもっていたが、フィランジェーリは死刑を否定していない。それどころか、彼はこの書物の第3巻第2部第29章で、『犯罪と刑罰』を引用しながら、ベッカリーアの死刑廃止論を「詭弁」だと批判している⁶⁵。では、フィランジェーリは、厳しい刑罰を確実に与えるために恩赦廃止論を唱えたのであろうか。そうではない。前述の「法律が善い時」というのは、法律が穏やかな時を意味している⁶⁶。したがって、フィランジェーリにおいても、あらゆる犯罪に死刑を科すことは認められず、死刑は最も限定的に(*colla maggiore economia*)用いられた場合に限り有用である。彼によれば、死刑があらゆる罪に科されれば、より重い罪を犯さないようにしようという動機付けがないので、軽い罪を犯そうとする者も、より重い罪を犯すようになる。あるいは、より軽い犯罪は、当事者が法律の適用を求めなかったり、裁判官が法律の定める刑罰を言い渡さなかったりすることで刑罰を免れ、その結果、犯罪が増加する。つまり、フィランジェーリにおいても、過酷すぎる刑罰は不処罰を招き、ひいては犯罪の増加をもたらすのである⁶⁷。

ところで、フィランジェーリは、死刑にかんしてルソーにも言及している⁶⁸。フィラン

⁶⁴ *Ibid.*, pp. 68-69.

⁶⁵ *Ibid.*, v. 3, p. 70.

⁶⁶ *Ibid.*, v. 4, p. 68.

⁶⁷ *Ibid.*, v. 3, pp. 80-81. また、フィランジェーリは、暴君の法律は、人間的な人々の下では、遅かれ早かれ効力を失うと述べているが、ここから、彼がベッカリーアと同様、法律の厳しさが人々の野蛮さの度合いと比例すると考えていることがわかる。

⁶⁸ *Ibid.*, p. 72.

ジェーリが指し示しているのは、『社会契約論』（1762 年）第 2 編第 5 章である。この章は、犯罪者は敵として死刑に処されなければならないと述べた有名な箇所であるが、実は、この章の中で、ルソーは恩赦に否定的な見解を表明している。彼によれば、恩赦権は主権者のみが有するが、恩赦にかんして、主権者の権利がいかなるものなのかは明らかではなく、そのため、この権利が行使されることはめったにない。というのも、国家がよく治められている時には、犯罪者が少ないので、恩赦を行う必要がないからである。逆に、国家が衰退している時には、犯罪が増加すれば恩赦も増加する。そして、最終的には、犯罪はそもそも処罰されなくなり、わざわざ恩赦をする必要もなくなる⁶⁹。つまり、ルソーは、恩赦の数と犯罪の数に相関性があり、これらが、国家の統治のバロメーターになると考えているのである。

ルソーの犯罪者にたいする姿勢をかながみれば、彼は、不安定になった国家を、毅然とした死刑により安定化させることを目指していたように見える。ところが、ベルナルディによれば、ルソーの議論は、ベッカリーアの死刑廃止論に影響を与えている⁷⁰。ベッカリーアは『犯罪と刑罰』第 28 章において、人は「生命の権利を他の人びとや社会全体に渡すことはできず、したがって死刑は「国家が市民に対して、当該市民の存在を抹殺することが必要または有用と判断してなされる「戦争」行為ということになる」と述べ、このことを死刑廃止の根拠としている⁷¹。一方、この部分に類似するルソーの言説は、以下のようになっている。犯罪者はすべて、法律に違反したために、国家の構成員ではなくなり、「さらにこの人はそれ〔祖国〕にたいし戦争をしてさえいる。」これより、犯罪者は「契約の違反者として、追放によってそこ〔国家〕から切り離されるか、公の敵として、死によって切り離されるかしなければならない⁷²。」この部分だけを読めば、ルソーは犯罪者を積極的に共同体の外に排除しようとしているように見えるが、実はそうではない。ルソーの主権者は、共同体の構成員と共同体そのものの保護を義務付けられている。その一方で、主権者は、構成員と共同体を危険にさらす殺人犯を排除しなければならない。ところが、排除すべき犯人が保護すべき共同体の構成員であれば、これらの義務は矛盾し、遂行することができない。つまり、ルソーが、犯罪者を敵として殺害しなければならないと言うのは、主権者が、自らの義務に反することなく義務を遂行するための消極的な意味をもつに過ぎないのである⁷³。そもそも、ルソーによれば、死刑は、その罪人が何の役にも立たず、生かしておくだけで危険だという場合にしか認められないが、そのような人は決していな

⁶⁹ Rousseau, Jean-Jacques, *Du contract social, ou principes du droit politique*, Amsterdam, 1762, pp. 72-73. ルソー『社会契約論』桑原武夫他訳、岩波文庫、1961 年、56 ページ。

⁷⁰ Bernardi, Bruno, *Le droit de vie et de mort selon Rousseau : une question mal posée?*, *Revue de Métaphysique et de Morale*, n. 37, 2003, p. 103.

⁷¹ ベッカリーア前掲訳稿（三・完）、233 ページ。

⁷² Rousseau, *op. cit.*, p. 71. ルソー前掲訳書、55 ページも参照。vide Sitze, Adam, No Mercy, *South Atlantic Quarterly*, v. 107, n. 3, 2008, p. 601.

⁷³ Bernardi, art. cit., pp. 100, 102-103, 105.

い。さらに、身体刑自体、頻繁に科されるのは政府が弱い、怠けていることのしるしなのである⁷⁴。以上をまとめると、国家が乱れている時には刑罰が厳格になるが、それと同時に刑罰は不確実になり、恩赦が増加する。一方、国家が安定している時には、刑罰は緩和され、恩赦も必要なくなる。このことから、ルソーにおいても、行き過ぎた刑罰と恩赦が結びついていることがわかる。

このように、刑法改革思想を代表する3人の思想家たちや、フランス革命の思想的支柱であるルソーは恩赦に否定的であった。一方、18世紀の保守的法学者として知られる、ミュイヤール・ド・ヴーグランやジュースは、恩赦にたいして好意的な見解を表明している。とりわけ、ミュイヤール・ド・ヴーグランは、モンテスキューやベッカリーアを批判する著書を出版しており⁷⁵、このことだけに注目すると、18世紀には、開明的な刑罰緩和の側が恩赦の廃止を唱え、保守的な厳罰主義の側が恩赦を支持していたように思われる。「近代＝刑罰緩和＝恩赦廃止」対「前近代＝厳罰＝恩赦支持」という構図は、「正義＝厳罰」対「慈悲＝恩赦」という後期中世のそれとは全く別の様相を呈している。たしかに、18世紀には、恩赦を厳罰と対立的に論ずる者はあまり見られなくなった。また、ベッカリーアらが恩赦に反対の意を示し、ミュイヤール・ド・ヴーグランらが恩赦を支持したことは、恩赦が前近代的なものであることを裏付けているようにも思われる。このことは、ズィツェの議論を見ると、より真実味を帯びたものになるだろう。彼は、ベッカリーアの恩赦廃止論は、旧来的な神権的主権からフーコーの「生－権力」への転換、つまり「殺すか、生かしておく」権力から「生きさせるか、死の中へ廃棄する」権力への転換を示していると言うのである⁷⁶。彼によれば、アンシャン・レジーム期の、身体刑を中心とする刑法における仁慈は、主権者が偶然的に与える恩赦によって表現されていたが、ベッカリーアの刑法は、仁慈を法律の一般規定に取り込んでおり、その結果、死刑は廃止される。この移行は、仁慈の脱神聖化を意味しているが、仁慈の神権的主権者から法律への移行は、死刑の代わりに終身隷役刑を導入することによって表現される。さらに、終身隷役刑は、犯罪者を労働力として用いることで生産を向上させるわけで、ここに「生－権力」の図式が形成されるのである⁷⁷。以上から考えると、恩赦廃止論は死刑廃止論と密接にかかわっており、さらに、恩赦の可否は、そのまま「前近代」対「近代」という図式にあてはめることができるようにも思われる。

⁷⁴ Rousseau, *op. cit.*, p. 72. ルソー前掲訳書、56 ページ。

⁷⁵ ミュイヤール・ド・ヴーグランが、刑法改革思想を批判した文献には、1767 年の『「犯罪と刑罰論」における危うい原理の論駁』、1781 年の『刑法の領域で提案された新しい改革プランにかんしての「刑法」の著者の手紙』、そして、1785 年の『刑罰の緩和にかんする「法の精神」の著者のシステムについての手紙』の3冊がある。石井前掲書、206 ページ。

⁷⁶ Foucault, *La volonté de savoir*, p. 181. フーコー『性の歴史』、175 ページを参照。

⁷⁷ Sitze, *art. cit.*, pp. 599-602. ただ、彼は『犯罪と刑罰』の恩赦の章が、初版から存在していたと誤って認識しており、さらに、モルレによるフランス語訳の出版年を、1766 年としていることには注意が必要である。

しかし、ことはそれほど単純ではない。というのも、ベッカリーアが『犯罪と刑罰』の冒頭において、名指しで批判しているカルプツォフは、恩赦にかんしては、ベッカリーアと同様に否定的な意見を表明している一方、ベッカリーアに影響を与えたとされるモンテスキューは、恩赦を「主権の最も美しい属性」として肯定しているのである。さらに、そのモンテスキューの恩赦観をフィランジェーリは批判している。そのうえ、ベッカリーアを名指しで批判するカントは恩赦を否定している。したがって、恩赦を支持する人々は前近代的であり、恩赦の廃止を求める人々は近代的であると単純に判断することはできない。では、この対立の軸はどこにあるのだろうか。

(2) 恩赦をめぐる言説の交錯

17 世紀ドイツの厳罰主義の法学者で、魔女裁判を支持したカルプツォフは⁷⁸、『ザクセン新刑事実務』（1635 年）第 3 部の問 110 で恩赦に言及している。この書物は当時の裁判実務を整理するものであったことから⁷⁹、彼自身が恩赦についてどのように考えていたかははっきりと示す部分は多くはない。しかしながら、彼は、ベッカリーアと同じように、恩赦を否定している。彼によれば、赦免は、慣習法によっては証明されるが、理性によって成立するものではない。というのは、君主の赦免により、裁判官が裁判権の行使の際に不安にされてはならないからである⁸⁰。

また、ベッカリーアを批判したカントも、恩赦廃止論を唱えている。彼がこのことを述べたのは、『人倫の形而上学』（1797 年）第 1 部の中にある、法論の第 2 部第 1 章の一節である⁸¹。ここでカントは、刑罰は犯罪にたいする応報であり、その質と量の基準は同害報復であると述べる。このことから、彼が殺人にたいする死刑を認めていることがわかる。しかしながら、彼はただ、犯罪を厳しく処罰すればよいと考えているわけではない。カントは、人間は生得的人格ゆえに、刑罰を受ける時であっても、人間性にのっとって扱われなければならないとする。たとえば、受刑者を犯罪予防のための見せしめとすることは、人間を物と同じにしてしまうことを意味し、認められない。カントによれば、刑罰は他の善を促進するための手段ではなく、それ自体が目的であり、犯罪と報復との関係のみにお

⁷⁸ カルプツォフにおける魔女裁判については、宮本弘典「刑事司法の原風景（2・完）——ドイツ刑法学の祖カルプツォフ——」『関東学院法学』第 18 巻第 2 号、2008 年、126 - 134 ページを参照。

⁷⁹ 宮本前掲論文、112, 133 ページ。

⁸⁰ 引用部分の原文は «Quae Regula consuetudine ita probata est, ratione tamen haudquaquam destituitur. ; …Quare a Principe Superiore, iudices inferiores in exercitio jurisdictionis per aetu Remissionis turbari nequeunt.»である。Carpzov, Benedikt, *Practica nova Saxonica rerum criminalium*, Wittenberg, 1635 ; Goldbuch, 1996, p. 114.

⁸¹ 以下は『カント全集 11 人倫の形而上学』樽井正義ほか訳、岩波書店、2002 年、178 - 186 ページ。

いて与えられなければならないのである。よって、殺人犯にたいしては、死刑以外に正義を満足させる方法は存在せず、たとえ、ある市民社会が解体することになったとしても、その社会における最後の殺人犯は、死刑に処されなければならない。要するに、彼が目指しているのは正義、あるいはその原理と基準となる相等性の実現である。また、刑罰は、ただ単に犯罪の裏返しであるというわけではなく、犯罪者の内面の悪意に釣り合うものとして命じられる。仮に、死刑か労役刑かを罪人自身が選べたとすれば、名誉を重んじる人は死を、悪党は労役を選ぶはずであるから、この場合には、名誉ある人からみれば軽く、悪党から見れば重い死を刑罰として用いることが有用となるのである。

これより、カントはベッカリーアの死刑廃止論を批判する。ベッカリーアは、自らの生命にたいする権利が社会契約に含まれていないことを根拠に死刑を否定するが、カントにおいては、死刑が与えられるのは、それに値する行為が行われたからであって、罪人が進んで自らの命を差し出したからではない。それに、もし、刑罰の根拠が社会契約にあるのなら、自分が処罰されるべきかどうかは犯罪者に委ねなければならない。

このように、ベッカリーアとカントの刑罰観は大きく異なっているが、恩赦については、カントは「処罰されないことは、臣民に対する最大の不法」であると述べ、これを否定している。彼によれば、殺人を犯した者は、たとえ直接に手を下していなかったとしても、死刑に処されなければならない。また、たとえば、ある罪人が人体実験の被験者となり、その実験が成功して国家に有益な知見がもたらされた場合であったとしても、この犯罪者に恩赦を与えることはできない。彼にとって、そのようなことは、正義が自らを売り渡しているに過ぎないのである。

ベッカリーアと同様、カントも、恩赦権により「偉大な光輝」が示されると述べている。しかし、カントによれば、この権利は「主権者がもつすべての権利の中でもっともあいまい」であり、あらゆる権利の中で唯一大権の名にふさわしいものである。ゆえに、この権利を行使しうるのは、殺人の共犯者があまりにも多く、全員の死刑を執行しようとするれば臣民がいなくなることになりかねないが、国家の解体は望まないという場合や、加害行為が主権者自身に向けられた場合に限られる。しかしながら、このような恩赦が認められるのは、あくまで、人民の安全に危険をもたらさない限りにおいてであって、それ以外の場合には決して認められない。

刑法改革思想とは異なる立場に立つ人々が、恩赦については彼らと同じように否定的な考えをもっていた一方、ベッカリーアが『犯罪と刑罰』の序で「不滅の部長評定官」と呼んだモンテスキューは⁸²、『法の精神』(1748年)第1部第6編第5章において、恩赦を「主権の最も美しい属性」と述べている⁸³。モンテスキューによれば、国家の政体は大きく分けて君主制、共和制、専制の3種類からなるが、恩赦は制限政体、すなわち専制で

⁸² ベッカリーア前掲訳稿(一)、377ページ。

⁸³ *Œuvres complètes de Montesquieu*, t. 1, p. 105. モンテスキュー前掲訳書(上)、167ページ。

はない政体の「大きなバネ」である⁸⁴。この「バネ」とは政体を動かす原理であり、君主制においては名誉、共和制においては政治的徳、専制においては恐怖である⁸⁵。ここから、モンテスキューは、恩赦が制限政体を維持するための重要な手段だと考えていたとすることができる。なかでも、制限君主制国家においては、恩赦はとりわけ重要であると彼は言う。というのも、君主制国家においては、名誉のために犯罪が行われる可能性があるからである⁸⁶。しかし、名誉のバネは権力を制限する役割も有している⁸⁷。したがって、制限君主政体においては、名誉のための犯罪を赦すことが、名誉それ自体とともに権力を制限すると言いうことができるだろう。また、仁慈には愛が伴うから、君主はそこから得るものが大きく、仁慈を施す機会が多くあれば、それだけ君主に幸福がもたらされるのである⁸⁸。

以上のように論じたモンテスキューにたいし、フィランジェーリは、気づかぬうちに専制に肩入れしていると批判する⁸⁹。フィランジェーリは、まず、モンテスキューが、君主が赦し、法律が有罪を言い渡すと述べていることを問題とする。フィランジェーリによると、もしこの通りであれば、法律は、暴君に気にいらなかった人々を抑圧し、恩赦を得るための後ろ盾をもつ人々に嘲笑されるものになってしまう。すると、市民の主要な利益は法律に従うことではなく、君主に気にいられることとなり、賄賂が横行する。また、モンテスキューは、君主制においては名誉が支配するため、恩赦がとりわけ有用であると述べたが、これは、名誉のために法律が侵されうることを意味する。しかし、この場合に求められるのは恩赦ではなく、法律の改正である⁹⁰。

フィランジェーリによるこのような批判は、的を射ているのかもしれない。たしかに、モンテスキューは、仁慈のタイミングは法律により規定されるものではなく、感覚により判断されるものであると述べており⁹¹、ここだけを見れば、あたかも、彼が法の支配ではなく人の支配を「気づかぬうちに」奨励しているようにも見える。しかし、本当にそうなのだろうか。

そこで、モンテスキューの思想をもう少し細かく見てみよう。彼によれば、制限政体においては穏やかさが支配する。反対に、専制政体においては、厳しい刑罰がふさわしく、

⁸⁴ *Ibid.*, p. 122. 同前訳、190 ページ。

⁸⁵ *Ibid.*, avertissement de l'auteur, pp. lvij-lviil, p. 35. 同前訳、31 - 32、82 ページ。

⁸⁶ *Ibid.*, p. 126. 同前訳、194 ページ。

⁸⁷ *Ibid.*, p. 38. 同前訳、85 ページ。

⁸⁸ *Ibid.*, p. 126. 同前訳、195 ページ。

⁸⁹ フィランジェーリは、モンテスキューが封建制を認めていることも批判しているが、この批判の中には、領主が友人などに恩赦を与える一方で、それを拒否した正直者を恣意的な裁判にかけることも含まれている。Ferrone, Vincenzo, *La politique des Lumières. Constitutionnalisme, républicanisme, Droit de l'homme, le cas Filangieri*, Paris, 2009, pp. 61-62.

⁹⁰ Filangieri, *op. cit.*, v. 4, pp. 66-68.

⁹¹ *Œuvres complètes de Montesquieu*, t. 1, p. 127. モンテスキュー前掲訳書（上）、195 ページ。

恩赦は決して行われぬ⁹²。ここから、彼の言う「穏やかさ」というのは、厳しすぎる刑罰の緩和や恩赦を意味していることがわかる。では、なぜモンテスキューにおいては、恩赦と刑罰の緩和とが対立しないのだろうか。彼によれば、厳しい刑罰をもつ法律の下では、「最も恩赦のしやすい特別の場合に、あらゆる場合の刑罰の是正に至りうるまで、犯罪の刑罰を軽減」し⁹³、また、「刑罰に何ら違いがないときには、恩赦の期待に違いを設け」ることが望ましい⁹⁴。つまり、モンテスキューにおいて、恩赦は、刑罰の緩和のためのひとつのステップなのである。したがって、彼においても、むやみやたらな恩赦は認められない。「あらゆる緩みの原因がなにかを調べるならば、それは犯罪の不処罰に由来し、刑罰の緩和に由来するわけではない」のである⁹⁵。

モンテスキューと同様、啓蒙思想家たちに影響を与えたロックも恩赦を肯定している。彼の、恩赦にたいする考え方が見て取れるのは、『統治二論』（1689年）後編の第14章である⁹⁶。ロックによれば、法律はすべてを予見したり、それに備えたりすることはできないから、法律により対応することができない場合、立法府である議会が招集されるまでは、執行権が、公共の善と利益(advantage)が要求するところに従って、裁量により判断をする。さらに、場合によっては、執行権による判断が、法律に優先することさえありうる。というのも、法律は、すべての人に差別を設けないものであるから柔軟性に欠け、その結果、時には、報賞に値する行為が法律に抵触することもありうるからである。この時、法律の厳格な遵守は害悪を生み出す。ゆえに、執行権は、社会の構成員をできるだけ保護することを目的とする、自然と統治の基本法に従い、法律を緩和して彼らを赦してやる必要があるのである。また、罪人が人々に全く害を与えない場合も同様である。たとえ罪人であっても、必要がなければ無駄に体を傷つける必要はない。厳格すぎる法律は、執行権者の手によって緩和されなければならない、そのために恩赦が必要なのである。

しかしながら、ロックも、モンテスキューと同様に、恩赦を手放しで肯定しているわけではない。ロックによれば、このような権力、すなわち大権は、人々の善のために用いられる限りにおいて、その正当性を確保することができる。統治がまだ行われはじめたばかりのころには、統治はほとんど大権により行われていたが、愚かな君主が登場すると、大権が私的利益の追求のために悪用されるようになった。そして、大権が善のみを目的に与えられる場合でも、公然たる制限を設けることが当然と考えられるに至ったのである。したがって、もし君主がその目的から逸脱しなかったとすれば、大権に何の制限を設ける必

⁹² *Ibid.*, pp. 109-111. 同前訳、174 - 175 ページ。

⁹³ *Ibid.*, p. 116. 同前訳、182 ページも参照。

⁹⁴ *Ibid.*, p. 122. 同前訳、190 ページ。

⁹⁵ *Ibid.*, p. 114. 同前訳、179 ページも参照。

⁹⁶ 以下は Locke, John, *Two Treaties of Government, Preceded by sir Robert Filmer's "Patriarcha", with an Introduction by Henry Morley*, second edition, London, 1887, pp. 276-278. ジョン・ロック『完訳統治二論』加藤節訳、岩波文庫、2010年、488 - 493 ページ。

要もなかったということになる。しかし、ロックは、君主の恣意的な恩赦を認めているわけではない。彼によれば、大権は、自分たちの善を守り促進するために君主を設けた、理性的な人々により容認されて初めて成立しうる。したがって、彼の君主は、自分の好みや気まぐれにより恩赦を与えることはできない。

興味深いことに、モンテスキューやロックと同様、恩赦を肯定しているのは、彼らの対極にいるはずの、保守的で厳罰主義の法律家たちであった。そのような法律家のひとりであるミュイヤール・ド・ヴーグランは、『刑罰の緩和にかんする「法の精神」の著者のシステムについての手紙』（1785年）において、法律の目的は犯罪を抑圧することであり、犯罪がなければ法律もなかっただろうと述べている⁹⁷。彼によれば、刑法が改正されるのは、従来の刑罰では不十分であったからなので、刑罰は時を経るにつれて厳しくなる。このように、刑罰が厳格さへ向かうことは、国王が司法官に法律の執行を委任し、恩赦権を自分だけに留保した、フランスのような政体にとりわけ必要である。また、国がよりよく統治され、法律の権威がより強固になるに従って、刑罰は厳しくなるのであって、刑罰が緩和されることは、支配が弱く、乱れていることを示しているのである⁹⁸。

しかしながら、いくら法律が賢明で数も多かったとしても、その適用はさまざまな状況に左右されるので、しばしば予測できない不都合を生ぜしめることがある。そのため、勅令や国王宣言による修正が必要となる⁹⁹。こうして刑罰は永遠に重くなりつづけるのである。ただ、場合によっては、刑罰を緩和する必要がある可能性も考えられる。これに対応するひとつの方法として、恩赦がある¹⁰⁰。彼によれば、恩赦権は主権者のもつあらゆる権利の中で、最も人を喜ばせる(*flateur*)ことができる。というのも、この権利は、臣民の心を最も強く主権者に結び付け、神の地上における似姿である主権者をいっそう神に近づけるからである。したがって、フランス国王が恩赦権を自己に留保し、裁判権を司法官に委ねていることは、国王の善良さにもふさわしい¹⁰¹。彼の議論は17世紀の思想家たちのそれを思わせる。彼にとって刑法とは、神権的王権の司る、伝統的な社会の秩序を表現するものであったとすることができるだろう¹⁰²。

ところが、その一方で彼は、『名誉刑にかんする覚書』（1780年）において、死刑や、その他の公開で執行される身体刑の場合には、恩赦嘆願を促すために、受刑者とその家族に一定の時間を与えるべきだとも述べている。彼のこの主張は、ラモワニョンの改革でなされた提案と一致しているが、ミュイヤール・ド・ヴーグランの主眼は、被告人の権利の保

⁹⁷ Muiart de Vouglans, Pierre-François, *Lettre sur le système de l'auteur de l'Ésprit des Lois, Touchant la Moderation des Peines*, Paris, 1785, pp. 21-22.

⁹⁸ *Ibid.*, pp. 23-25. 石井『18世紀フランスにおける法と正義』、212 - 213 ページも参照。

⁹⁹ Muiart de Vouglans, *Institutes*, preface, iij.

¹⁰⁰ Muiart de Vouglans, *Lettre*, pp. 33-34.

¹⁰¹ Muiart de Vouglans, *Institutes*, p. 102.

¹⁰² voir Porret, Michel, Les « lois doivent tendre à la rigueur plutôt qu'à l'indulgence » Muiart de Vouglans versus Montesquieu, *Revue Montesquieu*, n. 1, 1997, p. 70.

護ではなく家の名誉にある。彼が恩赦嘆願のための猶予を求めたのは、あくまでも、裁判官による名誉刑の濫用により、犯罪とは無関係の家族まで判決による不名誉の害を被ることを避けるためだった¹⁰³。当時の社会にとっての名誉の意味をかんがみれば、ここでも恩赦は、伝統的な社会の維持を担っていると言えることができる¹⁰⁴。

ミュイヤール・ド・ヴーグランと同様な刑法観をもつジュースはどうだろうか。『フランス刑事司法論』の序の部分から、彼の考えを見て取ることができる。彼はまず、善き市民に褒美を与え(recompenser)、悪人を罰することが国家の存続に資すると述べる。この部分を見ると、彼はボダンと同じ考えを持っているように思われる。しかし、刑罰権ではなく、恩赦権を「主権のしるし」としたボダンにたいし、ジュースは刑罰権を「主権的権利」とし¹⁰⁵、「正義の管理の主要な目的(la fin & le but)」と位置付けている。ジュースによれば、正義は臣民の平和を維持し、政府を存続させるためにも不可欠なものであるが、それには、犯罪を、迅速で見せしめになる刑罰により処罰することが必要である。

ここから、ジュースにとって、刑罰は国家の統治の要であったと言えることができる。彼によれば、犯罪の原因は人間の精神の軽さや変わりやすさ、宗教と法律にたいする軽蔑などにあり、これを抑圧するためには、犯罪の悪の大きさや状況に従い、複数の種類の死刑を含む多様な刑罰を与えなければならない¹⁰⁶。とはいえ、刑罰の根拠となる有罪判決は、法律の手続きに従った裁判により正当に言い渡されなければならない、そうでなければ、正義はひっくりかえってしまうと彼は言う。ただ、法律の定める手続きに従っていたとしても、証人の偽証や偽りの徴表(indice)などのために、無実の罪に問われる者が出てくる可能性がある。彼によれば、このような時には、神により、同じ刑罰に相当する別の犯罪の存在が示唆されていることがある。ここからすれば、彼は、すべての有罪判決は神によって正当化され、それゆえに、その判決を反故にする恩赦は認められないと考えていたような印象を受ける。ところが、彼は、国王は好きなときに恩赦を与えることができ、場合によっては、手続きを無視してそれを行うことも認められているとも述べている¹⁰⁷。この二つの主張は一見矛盾しているが、当時の王権が宗教により裏打ちされていたことをかんがみれば、国王が神の正義を無視して恩赦を与えることはありえないので¹⁰⁸、恩赦が与えられるのは、悪意の証言などにより、被告人が本当に陥れられた場合に限定されると考えることができるだろう。

¹⁰³ Muyart de Vouglans, Pierre-François, *Mémoire sur les peines infamantes*, dans *Les lois criminelles de France dans leur ordre naturel*, t. 2, Paris, 1780, p. 336. voir aussi pp. 333-334.

¹⁰⁴ ここからすれば、ミュイヤール・ヴーグランにとっても、モンテスキューと同様、名誉は君主制にとっての「バネ」であったと言えることができる。

¹⁰⁵ Jousse, *op. cit.*, t. 1, preface, p. vij.

¹⁰⁶ *Ibid.*, preface, pp. i-iii.

¹⁰⁷ *Ibid.*, preface, pp. xxxvij-xxxix.

¹⁰⁸ ジュースは、神にたいする大逆罪は国王にたいする大逆罪よりも重く罰せられると述べている。 *Ibid.*, t. 3, p. 672.

ここまでで明らかになったように、恩赦にたいする考え方の違いは、必ずしもイデオロギー的な立場に依拠するわけではなかった。では、何が恩赦支持派と廃止派とを区別しているのだろうか。

ここで、再びベッカリーアをはじめとする恩赦廃止派の主張を確認してみよう。彼らは、法律を侵害した者が確実に処罰されることを求めている。というのは、それが正義だからである。さらにいえば、それは、彼らがよりどころとする法律が正義だからである。つまり、彼らにおける法律は完全無欠であり、その完全無欠の法律に、わざわざ傷をつけてしまう恩赦は正当化されえない。しかしながら、その「法律」とは、現在適用されているものではなく、彼らが思い描く理想の法律であることは言うまでもない。

今度は、恩赦支持派の言説を見てみると、彼らの想定する法律は、必ずしも完全ではない。むしろ、彼らは、法律を個々の事例に適用する際には、個別化の問題をはじめとする不都合が当然生ずるものと考えており、これを補うために恩赦が必要だとしている。つまり、この視点のズレこそが、恩赦にたいする態度を決定づけているのである¹⁰⁹。法律の不完全さが恩赦を必要とするというのは、厳罰主義のミュイヤー・ド・ヴーグランやジュースにおいても同様で、現行の刑法を肯定的に捉える彼らもまた、法律には、どうしても適用の際に不都合が付きまとうと考えている¹¹⁰。しかしながら、逆に言えば、もし完全な刑法が制定されたとしたら、支持派の主張は根拠を失うことになる。また、恩赦廃止派の側にも、不完全な法律の下では恩赦は必要である、あるいは有用でさえあるという主張が見られる¹¹¹。よって、恩赦を支持する側と、それを否定する側との見解の対立は、実際には存在しないか、もし存在したとしても、補う必要のない、完全な刑法を制定できるか否かという点に帰着するということになる。

とはいえ、恩赦が主権と密接なかわりを有していることは否定できない。このことは、恩赦が実際に与えられた場面を見れば明らかとなる。前述のように、16世紀には、人々が、刑罰を免れようと戦略的思考をこらしていた一方で、王権は、赦しを通じて人々を特定の価値観の枠にはめ込み、理想的な臣民を作り出そうとしていた。ところが、18世紀になる

¹⁰⁹ vide Maestro, Marcello, *Voltaire and Beccaria as Reformers of Criminal Law*, New York, 1972, p. 119.

¹¹⁰ たとえば、ミュイヤー・ド・ヴーグランは、恩赦は、有罪判決の理由が示されないため獲得しにくく、家族による嘆願の場合にも、費用などの問題があるうえ、仮に恩赦状が得られたとしても、取り除かれるのは刑罰だけで不名誉は残るという問題をもつと指摘する。それゆえ、彼は、恩赦状に明示されている場合には、判決により失われた名誉や、剥奪された職務あるいは特権は、すべて回復するようにすべきだと主張する。このことから、彼も現行の刑法を盲目的に信頼していたわけではなく、刑法改革思想家たちと同様、その問題点を認識していたとすることができる。しかしながら、問題解決のアプローチは現行法の抜本的な改正ではなく、勅令や国王宣言などによる部分的な改正にとどまっており、この点に刑法改革思想家たちとの大きな違いがある。Muyart de Vouglans, *Mémoire*, pp. 332-333, 336 ; Muyart de Vouglans, *Institutes*, preface, p. iij.

¹¹¹ voir Rulleau, *op. cit.*, p. 134

と、社会の変化に伴い、伝統的な社会に基づいていた王権が衰退し、さらには、恩赦も形を変えはじめるのである。

第3節 社会の変化と恩赦

(1) 恩赦嘆願における変化

恩赦を得ようとする人々は、嘆願の際さまざまに知恵を絞る。たとえば、彼らは事実 hands を加えることで、自分が恩赦に相当する人物であるように取り繕った。しかしながら、こうして作られた人物像は、実際には、権力の側が求める臣民像であり、人々は自ら戦略的に行動すると同時に、権力によって動かされてもいた。このような人物像は、時代とともに変化している。16世紀前半の嘆願者は、正当防衛あるいは「逆上(*chaude colle*)」のために手を挙げたと言った。16世紀後半の嘆願者も、正当防衛を主張したが、彼らは、自分は平和的かつ理性的であり、「怒り(*colère*)」や「酔い」に身を任せることもないものの、暴力を振るおうとする被害者をなだめることに失敗し¹¹²、自分を守るために、とっさに犯行に及んだと述べた。その一方で、犯行の原因となった争いについては、あまり描かれなくなった。18世紀になると、犯行の前に嘆願者と被害者が争ったという文脈は、ますます見られなくなる。

18世紀の嘆願書にしばしば見られたのは、「怒り」あるいは「酔い」の文字であった。当時アンジューで出された赦免の書状の45%に、これらの主張が織り込まれていたのである¹¹³。また、正当防衛と怒りが対立的に捉えられていた16世紀とは異なり、これらが並んで用いられることもあった¹¹⁴。もちろん、ただ酔っていただけで恩赦が得られたはずはなく、正氣に戻った現在は、罪を深く悔やんでいることを強調する必要があった。また、犯行時、身体的な病気や知的障害のため、一時的に精神が混乱していたと主張する人々も

¹¹² 恩赦嘆願の際に言及された、被害者に「忠告する」行為としては、平手打ちをする、あるいは被り物を奪うなどの象徴的な意味を伴うものだけでなく、帯剣者の場合であれば、峰打ちも同種の行為とみなされていた。このような、剣を用いた行為が容認された背景には、当時細身の長剣(*rapière*)が普及したことがある。また、被害者側の度重なる攻撃に耐えかね、一撃をくらわせてしまったとの嘆願も見られた。Nassiet, *Lettres de pardon, introduction*, pp. XXIV-XXV. ただ、このような威嚇行為は、無条件にそれとして受け入れられたわけではなかったようである。というのも、資料6のケースでは、被害者の側が、雪玉を投げつけた加害者に峰打ちをくらわせており、それが事件のきっかけとされているからである。もし、あらゆる場合において、峰打ちが忠告、さらにいえば、恩赦にふさわしい臣民としての行いであることが共有されていたのであれば、事件の幕開けにそれが置かれることはなかったのではないだろうか。

¹¹³ 恩赦嘆願における飲酒のプレゼンスのこのような変化は、ブルターニュ地方やリヨンなどの記録をたどったルクートルの研究でも明らかとされている。Lecoutre, *Mattieu, Ivress et ivrognerie dans la France moderne*, Rennes, 2011, pp.268-275. ただ、18世紀にパリ・パルルマン法院検事長を2代にわたって務めたジョリ・ド・フルーリ親子は、「酩酊」という言い分を考慮することには否定的であった。その一方で、彼らは「殴り合いの喧嘩(*rixé*)」による殺人の場合には、嘆願に好意的な反応を示し、これを過失致死に次ぐ恩赦の第2の要因と考えていた。Abad, *op. cit.*, pp. 402-409, 509-512.

¹¹⁴ Musin, et al., *art. cit.*, pp. 56-57, 62-64, 66-67. ただ、コーエンによると、時期を追うごとに「怒り」という言葉はほとんど用いられなくなった。Cohen, *art. cit.*, pp. 103-104.

いた¹¹⁵。つまり、16世紀の人々は、自分ではなく被害者こそが悪人であることを強調し、善き臣民である自分と対照させることで赦しを得ようとしたが、18世紀の人々は、自分の内面の弱さを強調し、刑を逃れることをねらったのである。

この違いは何に由来するのだろうか。ミュザンらによれば、16世紀にはいまだ殺人が頻繁に行われていたため、権力は暴力の連鎖を拒むような臣民を求めた。一方、18世紀には、人々はより穏やかになり、王権は落伍者に慈悲を与えることで榮譽を手にしようとした¹¹⁶。ここから、恩赦嘆願のディスクールは、その時々統治の方向性を反映していると言えることができる。

嘆願状の内容の変化は、司法制度の変化にも影響を受けている。近世以降の職権主義的訴訟手続きは、人々の心の内に隠された「真実」を引き出そうとすることで、裁く者の目を個々の嘆願者へと向けていった。その結果、かつての当事者主義的訴訟手続きの下で重視された、事件の原因となる争いや嘆願者の身分などよりも、動機などの内面的な部分に大きな注意が払われるようになったのである¹¹⁷。

こうして、18世紀の前半と後半で、嘆願の傾向に違いが生じた。1729年の王太子誕生と、1775年のルイ16世の聖別戴冠式の時の恩赦を比べてみると¹¹⁸、1729年には、嘆願全体の56%に、被害者の行為がもとで犯罪行為に至ったと書かれていたが、1775年には、そのような嘆願は23%に減少している。また、1729年には、全体の16%が、嘆願者自身の無知などを理由に無罪を主張していたが、1775年にはそれが倍増し、別に教唆者がいるとした嘆願も20%ほど見られた¹¹⁹（図4）。

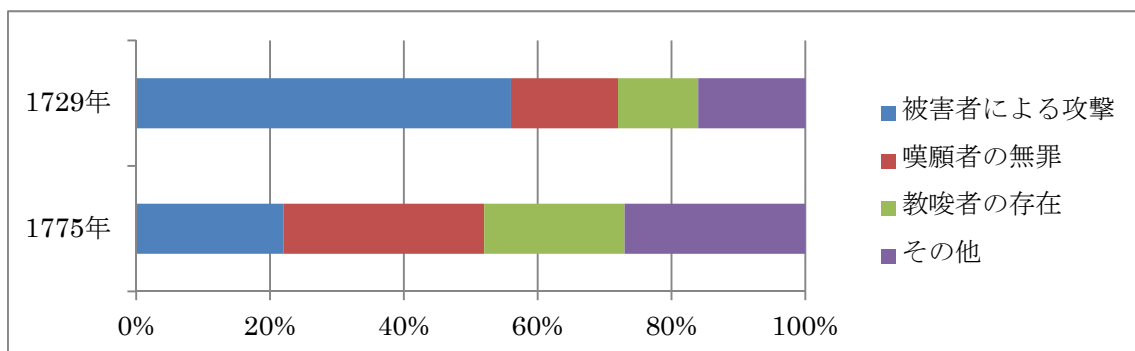


図4 1729年と1775年の恩赦嘆願の内容

（Cohen, art. cit., p. 96, Figure 3を参照し、福田により作成）

¹¹⁵ Abad, *op. cit.*, pp. 234-235.

¹¹⁶ Musin et al., art. cit., p. 68

¹¹⁷ Cohen, art. cit., pp. 102, 109. 以下の記述はコーエンに多くを負っているが、彼女が参照したのは恩赦嘆願状そのものではなく、恩赦の可否を決定するための尋問の調書である。

¹¹⁸ 参考までに、資料7に、1775年の恩赦状のひとつを訳出した。

¹¹⁹ *Ibid.*, pp. 95-96, 99.

1729年の段階では、無実を主張する者の多くは、共犯者として訴追された人々であった。彼らは、自分は現場にいただけであると言い張ったり、主犯が目上の人物であったので、協力せざるをえなかったなどと口にしたたりして、刑罰を免れようとした。1775年になると、共犯者とされた人々は、別の人に教唆され、自己の弱さのために誤った判断をしてしまっと言って、責任を免れようとするようになった¹²⁰。

恩赦を得るための新しい言説が登場する一方で、かつて頻繁に用いられた「若さ」という言葉は、もはや通用しなくなった。さらに言えば、「若さ」は、将来の社会的安全への脅威とみなされ、より厳しい判断に結びつく場合もあった¹²¹。コーエンによれば、若さに言及した嘆願は、1729年の時点で全体の4%、1775年に至っては1%にまで落ち込んだ¹²²。これにたいし、17世紀には、アルトワ地方で与えられた赦免のうち、実に70%が若い男性の暴力事件を対象としており、この頃には、若者であることが恩赦を得るために重要な意味を有していたと言えることができる¹²³。しかし、18世紀になると、若者の嘆願自体が全体の32%に減少している。とはいえ、当時のパリでは、35歳以下の男性の犯罪は、全体の78%を占めており¹²⁴、また、1729年と1775年の恩赦の際に、若さに言及した嘆願者の中には、30歳程度の者もいたことから¹²⁵、年齢を強調して恩赦を嘆願する可能性のある者の数が大きく減少したわけではないと考えられる。

他にも、人々はさまざまな事由を持ち出して恩赦を得ようとした。彼らは、家柄や過去の善行を強調したり¹²⁶、一度罪を犯した者でも将来は国家にとって有用な働き手となることができると言ったり、受刑者が家族の生計にとって不可欠な存在であり、恩赦がなければ妻子などが路頭に迷うとして、裁判官の同情を誘おうとしたりもした¹²⁷。一方、恩赦を認める権力の側は、嘆願の内容そのものだけでなく、受刑者の兵力としての有用性を考慮したり、処刑と恩赦それぞれの場合における、他の受刑者や人々への影響を天秤にかけたりして、その可否を決定した¹²⁸。恩赦は、権力と人々がそれぞれの利益のために策を練る、せめぎあいの場なのである。

言うまでもないが、いかなる罪を犯したとしても、さまざまな戦略を駆使すれば刑罰を

¹²⁰ Ibid., pp. 100-102.

¹²¹ Abad, *op. cit.*, pp. 503, 508-509. 19世紀にも、再犯者などの場合には、犯人の「若さ」は危険視され、恩赦が却下されることがあった。Boer, *art. cit.*

¹²² Cohen, *art. cit.*, pp. 111-112.

¹²³ Muchembled, *op. cit.*, p. 41. また、少なくともシャルル9世の時代には、赦しを与える王の「若さ」が恩赦の根拠として述べられることもあった。Nassiet, *Lettres de pardon*, introduction, p. XIV.

¹²⁴ Farge, Arlette et al, *Les théâtres de la violence à Paris au XVIII^e siècle*, *Annales : Histoire, Sciences Sociales*, n. 5, 1979, p. 988.

¹²⁵ Cohen, *art. cit.*, p. 111.

¹²⁶ 嘆願者の側は、時に公式の証書を模倣した善行証明書を作成しようとする事さえあった。Abad, *op. cit.*, p. 256.

¹²⁷ Ibid., p. 262 ; Cohen, *art. cit.*, pp. 115-116.

¹²⁸ Abad., *op. cit.*, pp. 266,

免れられたというわけではない。18世紀には、重罪にたいする社会の目が厳しくなり、このような犯罪にたいする恩赦が得られにくくなった。1729年には、死刑に相当する犯罪を中心とする重罪事件(cas criminels)にかんする嘆願のうち、76%が恩赦を認められていたが、1775年になると28%にまで減少している。しかし、その他の事件も含めた全体では、1729年が57%、1775年が76%であったことから、軽い罪にたいする恩赦は容易に得られるようになったと言えることができる¹²⁹。また、1729年には、嘆願全体の75%が重罪事件であったのにたいし、1775年には、重罪事件は30%にまで落ち込み、身体刑に相当しない通常事件(cas civils)が17%から60%に跳ね上がった。嘆願の母体数は、1729年が461件であったのにたいし、1775年には224件とほぼ半分になっており、通常事件にかんする嘆願数は、激増したと言うほどではない一方で、重罪事件にたいする恩赦嘆願の数は、かなり少なくなっているということがわかる¹³⁰ (図5)。

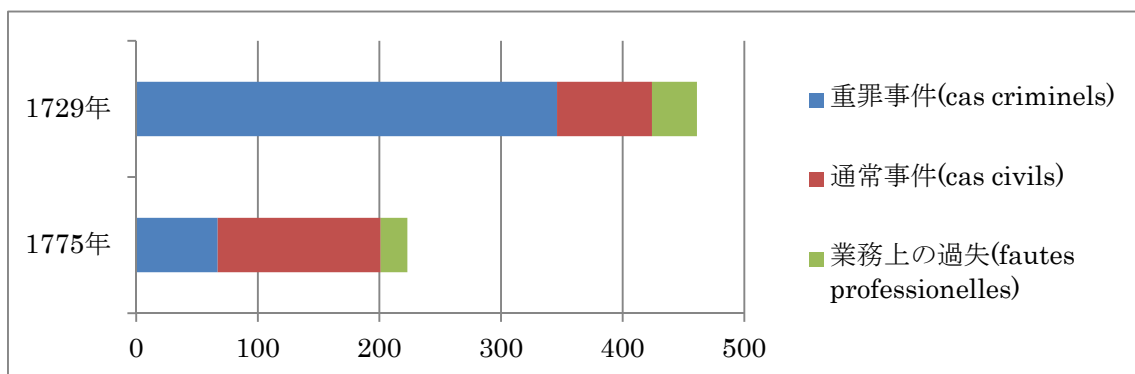


図5 1729年と1775年に恩赦が嘆願された事件の内訳 (単位：通)

(Cohen, art. cit., pp. 93-94, Figure 1 et 2 を参照して、福田により作成)

このことは、当時のクリミナリテの変化を反映しているように見える。18世紀には、それまで犯罪の中心だった、殺人や傷害などの人身犯が減少し、反対に窃盗などの財産犯の数が増加した。ファルジュらによれば、パリ・シャトレ裁判所の軽罪部(Petit Criminel)の、1765年と1785年の記録を比較してみると、人身犯の数が455人から111人に減少し

¹²⁹ Cohen, art. cit., pp. 98-99, Figure 4-7.

¹³⁰ Ibid., pp. 93-94. 恩赦嘆願全体のうち、検事総長の諮問を受けたものに限った結果ではあるが、18世紀前半には、全体の51.2%が殺人犯、18.5%が窃盗犯であった。一方、世紀後半になると、殺人犯の割合は29.3%にまで減少し、窃盗犯が40.2%にまで上昇する。このような変化は、嘆願する恩赦の種類にも反映されている。18世紀前半には、赦免の嘆願が全体の36.8%を占めていた一方、減刑は35.3%であった。しかし、世紀後半になると、赦免の嘆願が16.4%、減刑が72.7%へと変化する。Abad, op. cit., pp. 113-114. これにたいし、1565年から1566年にかけての、国王シャルル9世の行幸の際に与えられた恩赦のうち、およそ90%は、殺人を対象としており、財産犯への恩赦は全体の1.5%にすぎなかった。しかも、窃盗にたいする恩赦は1件もなかった。Nassiet, *Lettres de pardon*, introduction, p. XX, Tableau 1.

ている一方、財産犯の数は 957 人から 1178 人に増加しており、1785 年には全体の約 9% が人身犯、約 91% が財産犯となっている。1765 年の時点では、人身犯と財産犯のパーセンテージはそれぞれ 32% と 68% であった¹³¹。重罪においても、18 世紀後半のパリ・パルルマン法院が扱った窃盗事件の、全体にたいするパーセンテージは、世紀前半と比較して約 30 ポイント増加し、74% となっている¹³²。ところが、ほぼ同じ時期のパリ・パルルマン法院の有罪判決の数を見てみると、財産犯の数は、1760 年ごろと比べて、1785 年ごろには、およそ 700 人増加の 2000 人程度となっているものの、人身犯の数自体に大きな変化はなく、400 人程度を推移している¹³³。当時、重罪に与えられる身体刑の判決が第一審で下された場合には、自動的にパルルマン法院への上訴が行われたことをかんがみれば、単に財産犯が増加しただけではなく、比較的軽微な人身犯が減少した結果、このようなクリミナリテの変化が生じたと考えることができるだろう。したがって、重罪事件への恩赦が減少したのは、そのような事件の数自体が少なくなったからではなく、嘆願の数だけが減っているからだということになる。

以上より、18 世紀後半には、恩赦は比較的軽微な財産犯、より具体的には、窃盗犯を中心に与えられるようになったとすることができる。また、恩赦を与えられた者の多くは、無実を主張したり、自らの責任を回避したりするためにそれを嘆願していた。この時代には、刑事裁判の被告人は、自己を弁護する機会をほとんど認められていなかった。ここから、18 世紀後半には、恩赦は国王の慈悲というよりはむしろ、このような法律の欠陥を修正する手段として用いられていたとすることができるだろう。

加えて、18 世紀には、身内から犯罪者を出したという不名誉を免れるために、家族により恩赦が「利用」されるようになったことにも言及しておきたい。彼らは、罪を犯した身内のために恩赦を嘆願し、そのことが恩赦の可否に影響を与えることもあった。しかしながら、家族が恩赦獲得のために奔走したのは、必ずしも罪人本人のためではなかった。彼らは時に、自らの利益のために、受刑者本人を犠牲にするような嘆願さえ行っている¹³⁴。罪人の家族が最も危惧したのは、受刑者が衆目にさらされることであった。彼らにとって、人々の目の前で行われる鞭打ちや焼き鋺は恐怖でさえあったかもしれない。また、本人が乞食や再犯者に身を貶める可能性の高い追放刑も、罪人の家族にとっては好ましいものではなかった。それゆえ、彼らは時に、これらの刑罰を無期の投獄や流刑、さらにはガレー船徒刑に「減刑」するよう嘆願した。アバドは、このような嘆願の実態から、恩赦状が、

¹³¹ Farge et al. art. cit., p. 986, Tableau I-B.

¹³² 1775 年から 1786 年にかけての 10 年間の記録による。Abad, *op. cit.*, p. 116 ; Lecuir, Jean, Criminalité et 'moralité' : Montyon, statistien du parlement de Paris, *Marginalité et criminalité à l'époque moderne*, numéro spécial de la *Revue d'Histoire Moderne et Contemporaine*, t. 21, 1974, p. 480, Tableau 11.

¹³³ Muller, Dominique, Magistrats français et peine de mort au 18^e siècle, *Dix-huitième siècle*, n. 4, 1972, p. 89, graphique n. 1.

¹³⁴ このような傾向は、特に聖職者、貴族、公職者の家庭に見られた。Abad, *op. cit.*, p. 275.

一部では封印令状と同様な意義を有していたと指摘する¹³⁵。封印令状は、貴族の事件を内々に解決するためだけでなく、放蕩息子など、家庭を乱す原因となる家族を排除するためにも用いられていたが、恩赦にもこのような側面が見られると言うのである。この時、もはや恩赦は単なる国王の慈悲ではない。恩赦は、かつてとは姿を変えてしまったのである。

ちょうど同じ頃、実際に恩赦が与えられる現場でも変化が見られた。処刑の直前に、判決が残酷すぎるという不満の声を上げた人々が力づくで受刑者を救い出し、その結果、恩赦が与えられたのである。ここでは、実質的に恩赦を与えているのは国王ではなく、民衆である。つまり、ここでは、国王の「主権のしるし」であり、他人には決して譲り渡してはならなかったはずの恩赦権を、人々の側が行使しているのである。

(2) 人々による恩赦権の篡奪

先に述べたように、王権の衰退とともに、パルルマン法院は国王の正義に抵抗するようになった。しかし、国王の正義に楯つくようになったのは、パルルマン法院だけではなく、人々もまた、時に処刑に反対して暴動を起こしたり、処刑台の下で恩赦を求めたりしたのである。たとえば、彼らは、執行人が処刑に手間取った時に怒りをあらわにした。というのも、スーラによれば、執行が中断されたり、犯罪との不均衡を明らかにする要素があったりした場合、その刑罰は象徴的效果を失うからである。このような刑罰は、場合によっては正義にとって有害にさえなりうる¹³⁶。そして、この時、刑罰は単なる暴力へと姿を変えるのである。

たしかに、処刑が失敗した時に観衆が暴動を起こしたというのは、この頃に始まったことではない。しかしながら、18世紀の人々は、ただ単に、神により無実が証明された受刑者を、不当な刑罰から救うために暴力に訴えたのではないようである。というのも、1779年5月のカオールの事例では、助かった受刑者がどうなったか知る者はいなかったのである¹³⁷。したがって、18世紀には、人々の目は受刑者にではなく、別の箇所にあったと言

¹³⁵ *Ibid.*, pp. 297-303. 封印令状の交付が家族により請求された場合、家庭の財政状況や本人の矯正に必要な労力などを考慮して、ビセートルあるいはサルペトリエールといった一般施療院、宗教共同体などから場所が選択されたが、親族による恩赦の嘆願の場合にも、劣悪な条件の一般施療院よりも修道院などが好まれたり、逆に、経済的支援を行う必要のない植民地流刑が要求されたりすることもあった。Jandeaux, Janne-Marie, *La révolution face aux « victimes du pouvoir arbitraires » : l'abolition des lettres de cachet et ses conséquences*, *Annales historiques de la révolution française*, 2012, n. 2, p. 45 ; Abad, *op. cit.*, pp. 300, 816.

¹³⁶ Soula, Mathieu, *La roue, le roué et le roi : fonctions et pratiques d'un supplice sous l'Ancien Régime*, *Revue historique de droit français et étranger*, v. 88, n. 3., 2010, p. 361.

¹³⁷ Nicolas, Jean, *La rébellion française : mouvements populaires et conscience sociale (1661-1789)*, Paris, 2002, p. 382.

うことができる。また、それよりも前になるが、1761 年 6 月には、使用人による窃盗の罪で絞首刑を言い渡された女性のために、人々が恩赦を求め、興味深い行動に出ている¹³⁸。彼らは、執行人ではなく、盗難にあった主人である、小間物商メルシエの店を襲ったのである。しかしながら、実際には、受刑者の女性は、メルシエ家ではなく別の家の使用人であり、ほぼ同じ時期に、主人の者を盗み取ったとして死刑を言い渡されていた別の女性が、メルシエ家に仕えていた。便宜上、前者の女性をカトリーヌ、後者の女性をマリーとしよう。メルシエは悪名高い人物であったこともあり、彼に恨みを抱く人々は、この二人の使用人を取り違え、カトリーヌとは何の関係もないメルシエの店に押し入ったのである。

このことは注目に値するだろう。というのも、人々は、カトリーヌがメルシエ家の使用人ではないと伝えられた後も解散せず、彼らは、この主人の横暴に反旗を翻したと考えられるからである。また、これ以前にも、使用人による窃盗を過度に厳しく処罰することに反対し、恩赦を求めた暴動が何度か起きている。ここから、人々にとって、既存のヒエラルキーは、もはや当たり前のものではなかったとすることができるだろう。しかも、1661 年から 1789 年にかけてのフランスにおける反乱を研究したニコラによれば、この種の事件は、主に 18 世紀前半に生じており、17 世紀には見られなかったのである¹³⁹。

使用人の窃盗にたいする厳罰に人々が反対したことは、彼らにとって、国王の正義が必ずしも無謬ではなくなったことを意味する。さらに言えば、国王の正義の聖性は、それが無謬であることを根拠としていたため、この時には、その権威が失墜している¹⁴⁰。たしかに、このような暴動の矛先は国王ではなかった。というのも、17 世紀以来、国王は、処刑に立ち会ってはいなかったからである。しかし、長期的に見れば、国王が処刑の場に現れないことこそが、国王の正義の権威の低下につながったのではないだろうか。フーコーは、アンシャン・レジーム期には、犯罪は直接の被害者だけでなく、国王をも侵害したと述べた¹⁴¹。しかしながら、その意識は、すべての人々に共有されていたのだろうか。国王不在の処刑が行われれば行われるほど、刑罰の華々しさだけが人々の目を引くようになり、国王は、その空間から疎外されていったのではないだろうか。実際、1716 年 12 月 12 日にはすでに、公然謝罪刑の際に、神、国王、正義のうち、国王と正義に赦しを乞うことを拒んだ罪人が登場しているのである¹⁴²。

また、この後、マリーに恩赦が与えられている点にも注目できる¹⁴³。ただ、この恩赦は、16 世紀の「司法の奇跡」の結果としての恩赦や、17 世紀の国王の恩恵としての恩赦

¹³⁸ 以下の事例は Bastien, *L'Exécution publique*, p. 238 ; Gueullette, *op. cit.*, pp. 247-248.

¹³⁹ Nicolas, *op. cit.*, pp. 383-386. ただ、18 世紀にパリで起きたこの種の暴動は 5 件に満たない程度であった。Bastien, *L'Exécution publique*, p. 128.

¹⁴⁰ voir Bastien, Pascal, *Une histoire de la peine de mort. Bourreaux et supplices 1500-1800*, Paris, 2011, p. 158.

¹⁴¹ Foucault, *Surveiller et punir*, pp. 51-52. フーコー『監獄の誕生』、51 ページ。

¹⁴² Bastien, *L'Exécution publique*, p. 195.

¹⁴³ *Ibid.*, p. 238 ; Gueullette, *op. cit.*, p. 248.

とは異なっている。というのも、暴動のさなかに、使用人よりもメルシエの方が処刑されるべきだと口にした近所の女性が、この暴動の責任をとらされ、追放刑に処されているからである。したがって、ここでは、国王の正義が、メルシエを襲撃した人々を敵視している。これより、マリーに与えられた恩赦は、国王の恩恵ではなく、人々が国王に無理矢理与えさせたものと言うことができる。つまり、ここでは、「主権のしるし」であるはずの恩赦権が、人々の圧力により行使されているのである。たしかに、かつての「司法の奇跡」も、処刑の中断、受刑者による犯罪の否認と並んで、人々による恩赦の要求を要件としていた。しかし、「奇跡」を見た人々は、受刑者が無実を主張しているにもかかわらず、刑が執行され、さらにそれが不意に中断したために、神が冤罪を明らかにしたと考えて恩赦を要求したに過ぎない。一方、18世紀の人々は、単に刑罰が不当であるから、恩赦を求めるのである。つまり、彼らは神ではなく、自らの良心を根拠として、目の前の「正義」に異議を唱えているのである。

さらに、この事件にかんする当時の記録に、執行人への攻撃についての言及がない点も特筆に値する。ここから、この時には、かつてのように、執行人が人々の怒りを一手に引き受けていたわけではなかったと考えることができる。このことをさらにはっきりと示しているのが、1788年8月3日の事例である¹⁴⁴。

この日、ヴェルサイユのサン＝ルイ広場において、親殺しにより車刑を言い渡された受刑者が、観衆により処刑寸前に助けられた。受刑者の名前はジャン＝ルイ・ルシャル。殺された父親マチュランとは、思想の違いにより仲たがいをし、別居していた。父は職人気質の敬虔なカトリック信者であったが、息子は啓蒙思想に親しんでいたのである。ところが、やもめの父親は、同じ家に母と住んでいた息子の恋人を再婚相手にしようとする。ジャン＝ルイが家を出てからは会うことさえ禁じられた二人は、ある夜、密会に成功したが、別れたところを見つかり、折檻を受けた挙句、ジャン＝ルイは父を殺害してしまう。

しかしながら、事件の顛末や、ジャン＝ルイを擁護する友人たちを見た人々は、彼が無実だと考え始めた。処刑の日、彼らは監獄から刑場へ連れられるジャン＝ルイに、刑は執行されないはずだと声をかけ、最終的には、処刑台に立って刑の執行を待っていたこの人を奪い去った。執行人は、自らの身の危険を察知したが、救出者の一人は彼に、自分たちが憎んでいるのは彼ではなく、彼の道具に過ぎないと叫び、観衆に道を開けるよう求めた。そして、執行人は、何の危害も加えられることなく人々の間を抜け、ジャン＝ルイには恩赦が与えられたのである。

ここからわかるように、この事例においては、執行人にたいする侮蔑が消滅している。華々しい身体刑と恩赦のコントラストは、刑罰にたいする憎悪を執行人に集める一方で、恩赦を与える国王の神聖さを高めたわけであるが、ここでは、その図式が完全に崩れ去っていると言うことができるのである。

¹⁴⁴ この事件については *Sept générations d'exécuteurs, 1688-1847 : mémoires des Sanson*, mis en ordre, rédigés et publiés par H. Sanson, t. 3, Paris, 1862, pp. 181-265.

また、恩赦の要求が行われた場所にも目を向けておきたい。処刑は、主に公共の場で行われたが、このような場所に人々が集まり、公権力に何かを求めることは、彼らが権力の中に侵入することを意味した¹⁴⁵。ゆえに、処刑場に集まった人々が暴力に訴えて恩赦を求めたことには、単なる受刑者への同情や、執行人への軽蔑にとどまらない意味があったと考えることができる。たとえ、一時的な現象にとどまっていたとしても、人々は、たしかに国王の正義に公然と異を唱え、さらに、公権力の場に押し入って、主権を篡奪したのである。

加えて、もうひとつ言及しておくべきことがある。実は、1761年の事件は、使用人の窃盗にたいする死刑に反対した最後の暴動であった。というのも、この時期、この犯罪にたいする刑罰が緩和されていたからである¹⁴⁶。また、1788年の事例は、フランスで車刑が執行された最後の事件であった¹⁴⁷。おそらく、人々が国王に恩赦を与えさせたから過酷な刑罰が行われなくなったわけではない。しかしながら、重要なのは、人々が国王の正義を否定し、「主権のしるし」であるはずの恩赦権を篡奪し、そして、結果的に、正義のもうひとつの側面としての刑罰さえも動かしたことである。今や、神権的王権は瀕死の状態にあり、新しい時代が開かれようとしていた。ジャン=ルイを擁護した人々にとって、彼は蒙昧な父親の暴君的な支配の被害者であり、その彼が人々の力により助けられたことは、王権を支えていた伝統的思想が、新たな思想に敗北したことを意味したのである。

(3) 国王への「悪しき言説」と恩赦

もちろん、すべての場合において、人々は恩赦を与えさせることに成功したわけではない。たとえば、1750年8月3日にパリで行われた処刑では、恩赦の要求は退けられた。この処刑は、同じ年の5月に、パリで起きた騒擾に関係している。この頃、パリでは、警察による子供の誘拐事件がしばしば見られた。これは、パリから浮浪者を一掃しようとする警察の活動がエスカレートし、子供にまで逮捕の手が及んだ結果であった¹⁴⁸。町では、警察にたいする不信が高まり、人々は「誘拐犯」を捕え、リンチを行うといった血みどろ

¹⁴⁵ Lucas, Colin, *The Crowd and Politics between Ancien Regime and Revolution in France* *The Journal of Modern History*, v. 60, n. 3, 1988, p. 437.

¹⁴⁶ Nicolas, *op. cit.*, p. 385.

¹⁴⁷ *Sept générations d'exécuteurs*, p. 181.

¹⁴⁸ Chartier, Roger, *The Cultural Origins of the French Revolution*, translated by Lydia G. Cochrane, Durham and London, 2004, p. 114. ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳、岩波書店、1994年、173ページ。また、この事件については、Gueullette, *op. cit.*, pp. 137-147 ; Barbier, Edmond-Jean-François, *Chronique de la régence et du règne de Louis XV(1718-1763), ou Journal de Barbier*, t. 4, Paris, 1858, pp. 421-437, 453-456 ; Farge, Arlette et al., *Logiques de la foule. L'affaire des enlèvements d'enfants Paris 1750*, Paris, 1988. A. フェルジュ他『パリ 1750—子供集団誘拐事件の謎』三好信子訳、新曜社、1996年、を参照。

の暴動を、8日間で4度も起こした。この事態を收拾するため、パリ・パルルマン法院は、警察と住民の双方のうち、何人かに暴動の責任を押し付け、裁判にかけて見せしめにしようとした。しかしながら、この時下された判決は、警察の職権濫用を認めてはいたものの、警察側の被告人にはごく軽い、形式的な刑罰を言い渡すにとどまった。一方、住民側の被告人のうち、3名には死刑が言い渡され、さらに、彼らのうち1名については刑が執行された。処刑場では、集まった民衆が受刑者を助けようとしたり、恩赦を求めたりしたが、恩赦状を手にした国王の使者が駆け込んでくることはなかった。そのうえ、人々は、処刑場を警備する巡邏隊の威嚇により、負傷したり、将棋倒しになったりした。見張り兵たちに包囲されるのを恐れた人々は、一目散に逃げるしかなかった¹⁴⁹。ファルジュらによれば、この死刑は、パリの秩序の支配者が誰であるのかを見せつけるという意味をもっていた。ゆえに、この処刑はまさに見せしめであり、恩赦が与えられるはずはなかった。この見せしめにより、パリの混乱は収束したように見えたが、処刑から数日の後には、死亡した受刑者の同業者たちが、彼のためにミサを行い、静かな抵抗を見せた。ここから、公共の秩序を担うべき警察や司法、ひいては、正義の源泉たる国王が、全く信用されなくなっているということがわかる¹⁵⁰。

この頃から、パリでは、国王自身をターゲットとする「悪しき言説」が見られるようになった。人々は、子供たちが誘拐されるのは、国王がらい病で、その治療のために子供の血の風呂に入っているからだと噂したり、きっとおかみさんたちが団結してヴェルサイユに出向き、国王を廃位させ、その目を抜いてやるだろうと口にしたりさえした¹⁵¹。そのうえ、1757年の、ダミアンによる国王暗殺未遂事件の1年後には、こんな事件が起きている¹⁵²。宮内裁判所(réquets de l'hôtel)の役人、モリソー・ド・ラ・モットが、ある旅館で食事中に、ダミアン事件にかんして政府への批判を口にしたところ、バスティーユに送られ、公然謝罪のうえ、絞首刑を言い渡されたのである。処刑台への道すがら、集まった人々は、単なる言葉のために死刑にされることはないと考え、恩赦を期待していた。しかし、この処刑には、政府にたいする悪しき言説を抑えるために、公職者を見せしめに用いるというねらいがあり¹⁵³、恩赦は与えられなかった¹⁵⁴。

おそらく、これら二つの事件において恩赦が与えられなかったことは、国王自身への悪

¹⁴⁹ Barbier, *op. cit.*, p. 455.

¹⁵⁰ Farge et al., *Logiques*, pp. 123-125. ファルジュ他前掲訳書、129 - 132 ページ。

¹⁵¹ Chartier, *Cultural Origins*, pp. 114-115. シャルチエ前掲訳書、174 ページ。

¹⁵² 以下の事例は Barbier, *op. cit.*, t. 7, pp. 89-91.

¹⁵³ 加えて、公職者には高い倫理的要請があったことにも言及しておきたい。先に述べたように、通常、前科のある者の公職復帰は、復権の書状により行われたが、18世紀には、復職の禁止を一定期間、あるいは永久に禁止する条項を書状に挿入することで、公職者の「純化」を行おうとする動きがあった。しかし、1755年9月13日のパリ・パルルマン法院判決以降、復権の書状の獲得により公職復帰が許可されるとの見解が一般的となった。Abad, *op. cit.*, pp. 475-476, 478-483.

¹⁵⁴ Chartier, *Cultural Origins*, pp. 116-117. シャルチエ前掲訳書、177 - 178 ページ。

しき言説が蔓延していたことと関係している。というのも、当時、王を愛さないことは反逆を意味し、神の命令に反することと同じ刑罰に相当する犯罪であったので、これを抑圧する必要があったからである¹⁵⁵。しかし、かつて国王は、反乱の後に恩赦を与え、一度揺さぶられた王権を立て直し、自らに刃を向けた人々との上下関係を再構築することで、王権を伸長させていた。おそらく、この違いに王権の衰退のしるしを見て取ることができる。反乱分子に赦しを与えるためには、国王は一度自らの手で彼らを屈服させなければならぬ。しかしながら、18世紀の事例においては、人々は屈服するどころか、国王の正義に反対の意を表し、悪しき言説を止めることはなかった。18世紀後半にはもはや、そのような言説は冒瀆とは考えられなくなっていた。そして、人々は国王の人格や性癖を問題にしたり、国王が生きようが死のうがどうでもよいと述べたり、さらには国王の死を願いさえするようになった¹⁵⁶。ゆえに、これらの事件において、国王が恩赦を与えることは、自らの敗北を宣言するに等しかったのである。

このような人々の態度を、シャルチエは「王国の政治的身体を表す実体としての王の身体にかんする象徴体系に意味を与えていた情愛的な絆」が消滅したと分析しているが¹⁵⁷、国王への個人的攻撃が見られるようになったことは、それだけではなく、「王の二つの身体」、すなわち、神権的王権としての政治的身体と、ひとりの人間としての自然的身体が、分離しはじめたことをも意味しているだろう。というのも、これらの悪しき言説は、国王の自然的身体にたいするものであり、国王は国王としてではなく、ひとりの人間として見られていたからである。国王ルイ 15 世は、君主としての義務を顧みず、私人としての快楽を追求した¹⁵⁸。その光景は、あたかも、国王が政治的身体を脱ぎ捨て、自然的身体にこもってしまったようであった。そのためか、1751 年 9 月の王太子誕生は、人々の悲嘆をもって迎えられたありさまで、それを記念する祝賀行事に至っては、国王は、予定されていた市庁舎に立ち寄らず、そそくさと帰らざるを得ないほどであった。そして、パリでは、こんな事を述べたビラが出回ることになる¹⁵⁹。もはや「王はいない」¹⁶⁰。

しかしながら、仮に国王が人々にとって、ただの「人」であれば、なぜ、彼らは処刑台の下で恩赦を求め続けたのだろうか。もし、人々にとって、王は何の価値もないのであれば、そのような人に赦されたとしても何の意味もないのだから、ただ受刑者をさらっていけばよかったはずである。ファルジュによれば、国王への悪しき言説は、人々の国王への不満というよりはむしろ、社会への不満を反映していた¹⁶¹。また、前述のビラも、国王そのものを否定していたわけではなく、過去の偉大な王たちを懐かしみ、その再来を願って

¹⁵⁵ Farge, Arlette, *Dire et mal dire. L'opinion publique au XVIII^e siècle*, Paris, 1992, p. 193.

¹⁵⁶ Farge et al., *Logiques*, pp. 129-133. ファルジュ他『パリ 1750』、136 - 140 ページ。

¹⁵⁷ Chartier, *Cultural Origins*, p. 120. シャルチエ前掲訳書、182 ページも参照。

¹⁵⁸ Farge et al. *Logiques*, p. 127. ファルジュ他『パリ 1750』、136 ページ。

¹⁵⁹ *Ibid.*, p. 136. 同前訳、143 ページ。

¹⁶⁰ Chartier, *Cultural Origins*, p. 119. シャルチエ前掲訳書、180 ページ。

¹⁶¹ Farge, *Dire*, p. 101.

いた。したがって、人々はルイ 15 世を嫌ってはいたが、君主制の廃止を望んでいたのではなく¹⁶²、むしろ国王が善き統治を行うことに期待しており、悪しき言説をぶつけられていた国王の側だけが、それに怯えていたのではないだろうか。たしかに、この時代には、国王の正義の権威は失墜し、人々は主権の空間に足を踏み入れたが、それは、必ずしも国王の消滅を意図してはいなかったのである。

¹⁶² Engels, Jens Ivo, Dénigrer, espérer. Assumer la réalité. Le roi de France perçu par ses sujets. 1680-1750, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 50, n. 3, 2003, p. 107.

第4章 フランス革命からナポレオン期にかけての恩赦

第1節 恩赦の廃止と復活

フランス革命勃発から2年2ヶ月後の1791年9月25日、フランス史上初の刑法典により、恩赦は全面的に廃止された（1791年刑法典第1編第7章第13条）。この背景には、ベッカリーアをはじめとする、啓蒙期の恩赦廃止論の影響があった。しかしながら、廃止から11年後の共和暦10年テルミドール16日（1802年8月4日）、恩赦は正式に復活することになる（元老院議決第86条）。本節では、どのようにして恩赦は廃止され、復活したのかを見ていきたい。

（1）恩赦の廃止

1791年刑法典が、啓蒙期の刑法改革運動の成果であることは知られている¹。緩和された確実な刑罰という、刑法改革思想の目指したものは、この法典により現実となり、かつて用いられた過酷な身体刑は廃されて、死刑は「生命の単純な剥奪」によってのみ可能となった²。また、刑罰の目的は、見せしめから受刑者の改善へと転換し、その結果、主に、有期の自由刑が用いられるようになった。さらに、罪刑法定主義が成立し、いかなる場合であっても、同じ犯罪には同じ刑罰が与えられることとなった。そのうえ、1791年9月16日＝29日のデクレにより陪審制が成立し³、ある一定の証拠が得られれば自動的に有罪が確定する法定証拠主義から、裁き手自身が証拠の証明力を判断する自由心証主義への転換がなされたと同時に、かつては訴追から判決の言い渡しに至るまで主導権を握り続けていた裁判官は、陪審員の判断に従い、法律を適用するだけの存在となったのである。

ところで、本稿では、刑法改革運動の成果とされる法令を、すでにひとつ紹介している。1788年5月1日の国王宣言である⁴。この国王宣言は、冤罪を防ぐために恩赦を用いようとしたが、それではなぜ、1791年刑法典は恩赦を廃止したのだろうか。立法の過程を追いながら考えてみたい。

1791年刑法典の草案について、議会で審議されはじめたのは、この年の5月22日であった⁵。それから12日後の6月3日、刑法典起草者のひとりルペルティエは、議会に「恩

¹ voir Remy, Henry, *Principes généraux du code pénal de 1791*, thèse pour le doctorat, Paris, 1910, p. 9.

² 1791年刑法典第1編第1章第2条。Duvergier, *op. cit.*, t. 3, p. 403. 内田ほか前掲訳、48ページ。

³ Duvergier, *op. cit.*, t. 3, pp. 331-348. 沢登前掲訳。また、当時の陪審制については、中村義孝「フランス革命初期の重罪陪審裁判」『立命館法学』第225・226号、1993年を参照。

⁴ 第3章第1節（2）を参照。

⁵ Lascoumes, Pierre et al., *Au nom de l'ordre. Une histoire politique du code pénal*, Paris, 1989, p. 102. 以下は *Archives Parlementaires, de 1787 à 1860. 1ère série, 1787 à 1799 : recueil complet des débats législatifs & politiques des Chambres françaises*, t. 26, Paris, 1887 ; réimpression,

赦、赦免、罪刑消滅、容赦、減刑の書状の使用は、廃止される」ことを提案した。

これについて、まず意見を述べたのが、王党派のモリー師である。彼によれば、執行権がひとりの手に託されている国家では、その権利は国王にあるので、彼は恩赦を行うことができ、それは義務でもある。また、恩赦は、正義の賢明な管理(administration)にも不可欠である。というのも、恩赦が無ければ、過失致死の場合にも死刑が科されてしまうからである。ここで場内から、陪審制にかんするデクレはそのことについて規定しているのだと声が上がる。つまり、陪審による裁判では、犯罪事実だけでなく、個々の事情も考慮されるので、過失致死の場合に死刑が言い渡されるのを防ぐことができるというわけである。たいするモリー師は、陪審員が過失致死を判断するのであれば、それは、裁量(arbitraire)の場所を、尚書局から裁判所に移しているに過ぎないと答える。しかし、彼によれば、裁判官は正義の官吏であって、慈悲を職務とはしておらず、このことは憲法にも書かれている。つまり、彼にとって、陪審員が過失致死の判断を行うことは、憲法に反するのである。

さらに、モリー師はイギリスの例を引き合いに出し、国王の恩赦権を正当化する。すなわち、イギリスでは恩赦権と陪審制が調和しているし、恩赦権のない国王などどこにもいない。そもそも、仁慈は法律の知るところのものではなく、執行権は法律よりも仁慈たることを求められている⁶。また、普遍的原則からなる法律は、時に個別の正義と一致しない場合があるが、この、個別の正義こそが仁慈であり、これは国王の手に委ねられている。さらに彼は、裁判官を人々が選び⁷、国王が恩赦権をもたない司法権を組織すれば、それは共和政体を立てることを意味するが、そうではなく、憲法と恩赦を結び付け、国王が陪審員や法律の誤りを修正できることこそが国益にかなうのだと言う。彼によると、恩赦権は国民が執行権に委ねた権限であり、もし、執行権が、王国において憲法を永続的なものとするための唯一の方法であると考えのならば、それを奪ってはならない。国王に恩赦権を与えることの是非を人々に問えば、彼らはみな歓声をあげて、この美しい特権を王冠の下に置くだらう。こう述べて、彼はひとまず発言を終えた。

続いて、ガルベールもルペルティエに反対の意を示す。公法の知識がある者で、恩赦権が国王の最も美しい特権であることを知らない者はいないと彼は言う。しかし、国王大権には濫用の可能性がついて回るのではないか。このような反論を見越してか、モリー師が再び口を開き、すべてのものは濫用されうると言う。彼によれば、国民議会でさえも濫用されるかもしれないが、そのことを理由に議会が廃止されることはない。それに、議会は国王の恩赦権を奪う一方で、軍隊内での将軍の恩赦権を認めている。彼によると、人々は国王の恩赦権に反対するどころか、自分たちには行使しえない権力を執行権から奪っては、

Nendeln, 1969, pp. 727-731, 734-739 を参照。

⁶ 彼のこの意見は、ベッカリーアが『犯罪と刑罰』第 46 章で述べたものと全く逆である。第 3 章第 2 節 (1) を参照。

⁷ 1790 年 8 月 16 日=24 日のデクレ第 2 章第 3 条により、裁判官は公選制となった。Duvergier, *op. cit.*, t. 1, p. 362. 東京大学社会科学研究所『1791 年憲法の資料的研究』東京大学社会科学研究所、1972 年、143 ページ。

公共の大義に資することはできないと考えている。これを聞いた議会の右側の人々は歓声を上げた。そして、モリー師は、反乱など、罪人があまりにも多数であった場合には、歴史的に恩赦が行われてきたことを引き合いに出し、厳格に法律を行使することができない場合があるので、恩赦の廃止は認められないのだと締めくくった。

恩赦支持派が、国王と恩赦権との結びつきや、恩赦による法律の欠陥の補填を強調する一方、廃止派のデュポールは、恩赦は、国王ではなくてその取り巻きが行っていると述べた。この言葉に、議会の左側から喝采が起こる。続いて彼は、イギリスの陪審制とフランスの陪審制を比較することで、モリー師に反論する。デュポールによれば、イギリスに恩赦がある理由は、陪審員が事実認定だけを行い、刑を軽くする状況について判断できないことにある。ここでデュプレスが、恩赦が与えられている人の 9 割は最下層民だと口を挟むが、デュポールによれば、それは、有力な人々には封印令状や執行猶予が与えられていたからに過ぎない。また、イギリスでは、刑を軽くする状況の判断は国王に委ねられており、この判断に基づいて恩赦が決定されるが、国王の判断は、裁判官の作成したリストを基にして行われると彼は言う。彼によれば、イギリスでは、ほとんどすべての犯罪に死刑が言い渡されるが、それは威嚇のために過ぎず⁸、実際には国王により減刑がなされるので、死刑が執行されるのは重罪の場合に限られる⁹。一方、フランスでは、陪審員が事実の面だけでなく、意思の面も判断できるので、恩赦は必要でない。さらに彼は、恩赦の存在意義は、衡平による法律の緩和にしかなく、それがなければ、恩赦は、恣意的(arbitraire)で気まぐれな権利に過ぎなくなると言う。デュポールのこの発言に、歓声がふたたび議場を包む。彼によれば、あらゆる制度は濫用されうるということは事実だが、これを防ぐためには、それにより何の利益を手にもしない者にその権限を委ねなければならない。それが、人民からなる陪審である。人民は正義の客体であるので、濫用による不正義ではなく、正義により利益を得る。結局、自由の土台となるのはひとりの人間である国王の感性ではなく、法的権力の規則的な行使なのである。この発言に、議場からは何度も歓声が上がった。

これに反論したのが、恩赦支持派のムノンヴィルである。彼によれば、イギリスの陪審

⁸ ここで彼は、イギリスの人々がキケロの格言 *metus ad omnes, poena ad paucos*（恐怖はすべての人々に、刑罰はわずかな人々に向けられる）を原則としていると述べている。

⁹ ほぼ同時期のイギリスにおける恩赦については、栗原前掲書、173 - 187、339 - 347 ページを参照。イギリスでは、たしかに、恩赦により死刑の執行が大幅に制限されていたが、死刑を回避すべき理由は、公判においても審査されており、それが認められた場合には、陪審員は、犯罪の明白な証拠があるにもかかわらず、それを無視して無罪判決を下したり、起訴状のうち死刑に相当する部分が無視した「一部評決」により、軽い刑を導いたりした。1754 年から 1756 年にかけてのオールド・ベイリでは、全体の 41%が無罪、22%が一部評決となっており、これらの措置の存在は無視できなかったと思われる。さらにいえば、陪審の判断は、犯罪の背景にある事情だけでなく、被告人の人格や生活習慣にまで及び、起訴状に示された証拠よりも、そのような人格証拠が重視される傾向さえあった。同 148、154 - 162 ページ。

員は、フランスと同様、精神的側面も考慮に入れることができる。イギリス国民は、それにもかかわらず、国王による恩赦を広く認めていると彼は言うのである。この後、議論を先延ばしにするよう求める声が上がったが、廃止派のシャルル・ラメトが、議論を先送りにするというのは、最も単純な問題に疑問を抱かせるための右派の策略であると述べた。彼によれば、恩赦権の行使が、人々の利益に常に反することは証明されている。また、彼にとって、恩赦を認めることは、公民精神(civisme)と愛国心と、憲法への愛着を破壊することを意味した。国王を法律の上に置くことは不可能であり、恩赦権は、この議会にいる人々の大半の公民精神を疑問に付す権利なのである。彼の言葉にも歓声が飛び交い、この日の議論は終了した。議論は、翌日の 3 時 30 分から再開されることになる。

2 日目にまず声を上げたのは、廃止派のペティオンであった。彼によれば、国王に恩赦権を与えることは、陪審員が有罪を確信し、被告人の容疑が立証され(convaincu)、裁判官が法律を適用したにもかかわらず、執行権を法律の上に、その個別意思を一般意思の上に置くことを意味する。彼によれば、もし、恩赦状を与えられた者が無実であれば、恩赦状など必要ないし、逆に有罪であれば、恩赦は社会にたいする犯罪で法律の違反となるから、大いなる不正である。というのは、このような、法律の力(pouvoir)から解放された権力(pouvoir)は、自由な国家にはありえないからである。続いて、ペティオンは陪審制と刑法典を理由に、恩赦の存在意義に疑問を投げかける。彼によると、かつては、予謀を伴う犯罪と過失による犯罪が混同されていたから、恩赦は認められえたが、今は、陪審によって対応できる。また、かつて赦免は君主の慈悲によってのみ行われえたが、今はよりよい刑事システムがあるので、もはや不要である。さらに、以前は法律により規定されていない犯罪が多くあったため、恩赦が必要だったが、今はそのような犯罪はない。つまり、より完全な(plus completes)刑法により、恩赦という濫用の元凶(cause)は打ち壊されるのである。

それから彼は、公共にたいする有用性(utilité publique)が恩赦を必要とする時もあるとの反論も考えられるとして、こう述べる。このような事例としては、ある地方を荒廃させている盗賊団(une horde de bandits)の共犯者が、彼らの犯罪について告発をするなど、公的事項(chose publique)に貢献した場合が挙げられるが、その場合に必要なのは恩赦ではなく、明確な法律により赦免について定めておくことである。法律の上に置かれた者が存在する政府は専制であり、一度法律により言い渡されたことは、仁慈を言い訳に破棄されることはない。それに、当該犯罪を熟知して判決を言い渡した陪審員が恩赦を認めるだろうか。もし認めれば、理性と正義の第一の原理は傷つき、憲法も侵害されるだろう。彼が発言を終えると、場内に歓声がわきあがった。

これにたいし、恩赦支持派のトゥロンジョンが発言する。公にたいする有用性を認められている権力を行使できるというのは、国王にとって美しい特権である。よって、まずは、恩赦権が有用で必要な制度であるかを判断しなければならない。恩赦は売ることのできる権利(droit de la vendre)に過ぎないと言われるが、正義でさえ売り買いされている。それなのに、正義を廃止するということにはならない。人間によるあらゆる制度は濫用される運

命にあるが、だからといって、それらの制度を廃止するのではなく、善き法律により、濫用を打ち砕かなければならないのである。続いて彼は陪審制に言及し、恩赦の必要と正当性を訴える。すなわち、陪審制がまだ成立していないか、それが成立したばかりの時期には、法律の補正措置(remède)は未だ必要である。したがって、彼にとって問題は、陪審が機能し、裁判秩序が完全に確立してからのことである。しかし彼は、すべての自由な政府において、恩赦権は、法律の執行者に委任されるべきであると言う。彼によれば、国王の第一の機能は裁判権であるが、これと恩赦権とは不可分一体である。それに、陪審制と裁判官公選制の下でも、正義は国王の名において与えられるわけで、恩赦権は、その他の権限と同様、憲法や自然法に合致するのである。

以上の議論にたいし、ルペルティエは、議会は真の問題点にたどり着いていないと述べる。彼によれば、先に制定された陪審員にかんする法律により、社会が恩赦権を有することは認められているので¹⁰、問題は、これまでのような恩赦状を維持すべきか否かであった。これにたいし、グーピルは、問題は、執行権が判決の執行を妨げる権利を保持すべきか否かであるが、執行権の本質的な役割というのは、法律を執行することなのだから、自らそれを麻痺させたり、停止させたりすることはできないと述べる。彼によれば、社会の利益と公安は、法律の厳格な適用を求めているのである。そして場内は喝采を送る。

一方、ランジュアネは、ルペルティエ法案は不完全であり、有用でないと発言する。ランジュアネによれば、裁判官は、法律によってしか判決を言い渡しえないのだから、法律違反以外の何物でもない恩赦状を認可することはできない。しかし彼は、犯人の才能や祖国への奉仕を考慮した赦免が可能であるかどうか、知っておかなければならないと述べ、一般的大赦か、国家への重大な奉仕の場合に限っては、国王の裁可により、立法府が刑事手続きを止めさせたり、刑罰を減免し(remise ou commuée)たりすることを認めるべきだと提案する。

しかし、ルペルティエは、ここで問題となっているのは、立法府による一般的大赦ではなく、個別的な事実と与えられ、手続きや判決を反故にする恩赦状であると反論する¹¹。彼によれば、つつしみと分別をもち、恣意を排して用いれば、慈悲の権利は有用である。したがって、ここで問題となるのは、恩赦状の濫用である。彼にとって、恩赦は、ある受刑者には気まぐれにより恣意的に恩赦を認め、別の受刑者には厳格に法律を執行する機能ではない。しかし、大臣の手に握られた恩赦は、寵愛の恣意的な道具とされ続けるだろう。

¹⁰ 何をもって「社会が恩赦権を有する」と言うことができるのか、ルペルティエはこれ以上の特定を行っていない。しかし、以後の文脈から、彼は、1791年9月16日=29日のデクレの「刑事裁判について、および陪審員の制度について」第1章第28条や第8章第2条のことを述べていると考えられる。voir Duvergier, *op. cit.*, t. 3, pp. 335, 341. 沢登前掲訳、228 - 229、244 ページも参照。

¹¹ 以下のルペルティエの議論は *Œuvres de Michel Lepeltier Saint-Fargeau, député au Assemblée Constituante et Conventionnelle, assassiné le 20 janvier 1793, par Paris, garde du roi ; précédées de sa vie, par Félix Lepeletier, son frère, suivies de documents historiques relatifs à sa personne, à sa mort et à l'époque*, Bruxelles, 1826, pp. 229-234 にも収録されている。

また、彼は、無実の者を救うための慈悲の権利は、すでに刑法典の中に存在していると言う。というのも、かつては過失致死や正当防衛、思慮の欠けなどによる犯罪には恩赦状が与えられてきたが、今や、過失致死を判定するのは陪審員であるし、正当防衛の場合には、陪審により、そもそも犯罪は成立していないと宣言されるので、恩赦状を与える必要はないからである。さらに、軽率さや不注意による犯罪の場合も、起訴陪審が起訴を取り下げる。他にも、刑法典に減刑条項がある¹²。つまり、彼にとって、想定されうるあらゆる状況は、刑法典と陪審により対処することができ、これこそが理性に基づき、熟考された慈悲の権利なのである。そして、ルペルティエは、議員たちに向かってこう呼びかけた。国王に、市民からなる陪審、すなわち国全体の判決を取り消すつもり(*infirmera*)なのかと疑問を投げかけようではないか。この呼びかけを受けた議会は熱狂に包まれた。

続いて、ムジャンが、慈悲の権利は、陪審により裁かれた犯罪以外の場合のみ国王に属すると提案し、歓声がわきあがった。ルペルティエもこの修正案を受け入れ、議論は終わろうとしたが、恩赦支持派のマルーエが抵抗した。議論は打ち切られたのだと口にする人々にも負けず、彼はこう述べる。陪審が当該犯罪を宥恕しようと述べた時に、慈悲の法が適用されるというが、その権利は、裁判官ではなく、国王に認めたほうがよいのではないか。犯罪が宥恕される場合には、国王の威厳により恩赦や慈悲の権利が言い渡されるということを、法律によって定めるべきである。これには数人が先決問題だと声を上げるが、ルペルティエは、この提案には、デクレと理性により回答することができると答えた。まず、デクレによれば、陪審が宥恕しようとしたときには、裁判官が無罪を言い渡すと規定されている。次に、理性によれば、そもそも、判決は国王の名において言い渡されるので、無罪の判決は、すでに国王による慈悲の宣言を意味している。結局、マルーエの提案は却下され、恩赦の廃止が決定した。「重罪裁判の遂行(*exercice*)を妨げ、もしくは停止しようとするすべての文書の使用、すなわち恩赦、赦免、罪刑消滅、容赦、減刑の書状の使用は、陪審員により訴追されたすべての重罪について廃止される」ことが宣言されたのである¹³。

恩赦は、陪審制と刑法典の成立と引き換えに廃止された。前述の議論からは、ルペルティエら恩赦廃止派にとって、これらの制度がいかに信頼しうるものであり、また、恩赦がいかにそれを害するものであったのかということが見て取れる。実際、彼らにとって陪審制は無謬であり、冤罪はあり得なかった¹⁴。また、正当防衛や過失致死など、アンシャン・レジーム期の刑法では、赦免以外によっては救済することができなかった事例にかんしては、予め刑法典に定めておくことにより、無用な刑罰を避けることができるようになった。こうして、恩赦は今や過去のものとなったのである。

¹² たとえば、1791年刑法典第2編第2章第1節第8条には、予謀を伴わない殺人の場合には20年の鉄鎖刑が言い渡されることが、第11条には予謀を伴う殺人の場合に死刑が課せられることが定められている。Duvergier, *op. cit.*, t. 3, p. 413. 内田ほか前掲訳、65ページ。

¹³ *Ibid.*, p. 407. 同前訳、55ページ参照。

¹⁴ Remy, *op. cit.*, p. 166.

(2) 恩赦復活の企て

恩赦は、共和暦 10 年テルミドール 16 日の元老院議決により復活する。ナポレオン・ボナパルトが終身第一執政の座についてから 2 日後に出されたこの議決は、執政政府を成立させた共和暦 8 年（1799 年）憲法を補完するもので、恩赦権の復活は、その最後に規定されている。

実は、共和暦 10 年より前からすでに、恩赦の復活は企てられていた。早くも、1792 年 5 月 20 日の立法議会で、恩赦の復活が提案されたのである。この提案をしたウアによれば、革命前の制度の下で有罪判決を受けた罪人に、当時の過酷な刑罰が科されることを防ぐため、恩赦を与えるべきである。というのも、1791 年刑法典第 1 編第 7 章第 13 条は、「陪審員により訴追されたすべての重罪」のみについて恩赦を廃止しているからである。このことは、恩赦廃止の議論の際にすでに確認されていた。たしかに、1791 年 9 月 30 日の憲法制定国民議会の解散に伴い、議会のメンバーは総入れ替えされており、この時恩赦の廃止にかかわった議員はいなかったが、法文に明記されている以上、彼らがこの例外条項を知らなかったはずはないだろう。にもかかわらず、なぜウアがこの提案を行ったか、その理由は明らかではないが、彼によると、かつての怪物のような立法のわきには、その危険を予防し、厳格さを和らげる恩赦が必要であった。しかしながら、この制度は原則において悪であり、適用において恣意的であると彼は言う。ゆえに彼は、1791 年の廃止それ自体に異議を唱えているわけではない。彼は、恩赦は主権による行為であり、本質的に国民に属すると言うのは無駄であると言う。というのも、国民は初め、恩赦権を正当な宥恕(*excuse légitime*)の権利として、すなわち、法律に従って行使される司法権の行為として陪審に委任したが、その後、恩赦を必要とする制度を廃止しない限り、恩赦は要るということを感じ取り、廃止以前にこの権利を行使していた者の手に委ねることにしたからである。したがって、恩赦状を与えるのは執行府である。しかしながら、彼によると、この権限は国王大権としてではなく、正義と人間性として国王に委ねられる¹⁵。彼の提案にたいし、議会は議論の延期を求め、1 ヶ月以上経った 6 月 22 日に、再びこの議題が持ち出された。

5 月と同様の提案を行ったウアにたいし、グージョンは、自分の提案の方が憲法の諸原理に合致しているとして意見を述べた。これまでの議論では「恩赦」がすべて混同されていたが、厳密に言えば、恩赦は罪刑消滅、赦免、減刑、ガレー船徒刑および追放刑からの呼戻しからなると彼は言う。彼によれば、真の「恩赦」は罪刑消滅のことを言うが、恩赦は法律の本質に傷を付け、すべての人にたいし平等であるはずの刑罰から罪人を逃れさせてしまう。また、赦免も、かつては必要であったが、法律が排他的支配を取り戻し、陪審制が成立した今は、必要でなくなった。さらに、減刑も、刑法典の規定により、状況に応じて宥恕がなされるので不要である。彼もまた、陪審制成立以前の判決の場合には、赦免あるいは減刑をすることに賛成しているが、刑は法律によって規定されている以上、執行府

¹⁵ *Archives parlementaires*, t. 43, pp. 594-596.

が恣意的に恩赦を与えるのではなく、裁判所が行うべきであると言う。ゆえに彼は、このような場合には破棄裁判所に申し立て、古法にしたがって判断がなされた結果、赦免や減刑が認められた場合に、執行府が書状を与えるとのデクレを提案する。また、彼はもうひとつデクレ案を提出し、終身の刑罰は 1791 年刑法典に規定されていないので、公安に不可欠な何らかの方法により、刑法典前に言い渡された終身刑にも、期限を設けなければならないと主張した¹⁶。

たしかに、恩赦の廃止の際に、その種類の別を問題にした者はいなかった¹⁷。その点では、彼の主張は正しかったと思われる。しかし、彼の提案は、実質的に破棄裁判所に恩赦権を与えていると言うことができ、法律の誤った適用、あるいは、審理における重要な方式の違反の場合のみを取り扱うという、この裁判所の権限の幅を超えている¹⁸。結局、ここでは議論が延期され、彼の提案は自然消滅した¹⁹。しかしながら、ヴィオーによれば、総裁政府下の共和暦 4 年ニヴォーズ 17 日（1796 年 1 月 7 日）、またしても恩赦の復活が提案された。この提案を行ったのは、立法府五百人会議員のサヴァリーであった²⁰。提案は、その 3 年後の共和暦 7 年ジェルミナル 15 日（1799 年 4 月 4 日）にふたたび取り上げられ、翌 16 日（5 日）に議論が行われることになる²¹。

この日に提案を行ったシャザルは、古代ローマのカティリナの陰謀を引き合いに出し、恩赦の復活を求めた。カティリナとは、債務奴隷らを率いて反乱を起こそうとした人物である。この事件は、元老院により、告発をした共犯者への恩赦が宣言されたことで、解決に至った。このことを念頭に、シャザルは、このような恩赦をすべての場合に拡大するべきだと言う。彼によれば、刑罰は、社会によって打ち立てられているのだから、社会の利益が欲している場合には、それを緩和したり、赦免したりすることができる。また、刑法は推定された一般意思の発現であるが、真の一般意思は、一般的利益を前に道を譲る。この一般的利益こそが恩赦である。このような恩赦は、公安のための報酬であり、共犯者の

¹⁶ *Ibid.*, t. 45, pp. 469-471. 以上の議論を印刷したパンフレット *Opinion et projets de décret sur les lettres de rémission, de commutation de peine et de rappel des galères ou de prisons perpétuelles*, par L. J. Goujon, député de département de l'Oise が、専修大学ベルンシュタイン文庫に所蔵されている。

¹⁷ 管見の限りでは、革命期の議論において、出廷許可はほとんど問題にされていなかったが、それはおそらく、1791 年 9 月 16 日=29 日のデクレの、「刑事裁判について、および陪審員の制度について」第 9 章第 9 条、第 15 条により、判決の日から 20 年経過し刑が時効消滅するまでであれば、被告人はいつでも再出廷できると定められたためであろう。

Duvergier, *op. cit.*, t. 3, p. 343. 沢登前掲訳、250 - 251 ページ。ただ、革命期にも、出廷許可の書状が 1 通、1792 年 3 月 3 日に出されている (AN BB³⁰ 49, ジャック・アントワヌ・フィロル・デジュニエールへの書状)。これは、1789 年 3 月 7 日の書状を、何らかの理由のために認可手続きにかけられなかったため、その期限を更新したものである。

¹⁸ 1791 年 9 月 16 日=24 日のデクレ第 8 章第 23 条、24 条を参照。Duvergier, *op. cit.*, t. 3, p. 342. 沢登前掲訳、247 ページ。 .

¹⁹ Viaud, *op. cit.*, p. 89.

²⁰ *Ibid.*, p. 96

²¹ *Moniteur Universel*, 17-19 germinal An 7.

告発により、社会的危険が全面的に取り除かれたときには刑罰のすべてを、部分的に取り除かれたときにはその分だけ免除する。彼によれば、このような意味での恩赦は、自己保存の権利(*droit de se conserver*)と褒美の権利(*droit de recompenser*)の中にある。つまり、告発という、非常に大きな奉仕を行った罪人には、恩赦という褒美を与えるのである²²。このような恩赦を与えることができるのは立法府だけである。というのも、恩赦は、犯罪と刑罰を結び付けた者だけが与えられるからである。しかしながら、根拠のない恩赦嘆願が増加することを防ぐため、恩赦は執行府による提案に基づいて行われると彼は言う。また、恩赦が売られて濫用され、正義が損なわれないためにも、執行府の協力が必要である。彼にとって、このような恩赦は司法権にたいする侵害とはならない。というのも、一度有罪判決が下されたら、受刑者は執行権の手に移るからである。

これにたいし、ボレル＝ヴェルニエールが反論をぶつけた。彼によれば、シャザルの案は、道徳を破壊し犯罪を促す。犯罪を予防するためには、軽い刑罰を確実かつ迅速に与える方がよく、恩赦の希望は悪人を犯罪へと走らせる。しかも、立法府による恩赦は権力分立にも反する。また、恩赦を認めれば法律の平等な適用が揺らぎ、特権が復活するだろう。これは、共和国では、あってはならない濫用である。彼にとって、シャザルが提案したのは暴君や専制政府の用いる方法であって、これは公的自由を脅かすのである。

他にも、リュドが、以下のような意見を述べている。恩赦は主権の行為であり、憲法を制定する団体(*corps constituant*)が行使するものであるので、憲法により規定された権力に過ぎない立法、執行、司法の三権は、これを行行使することはできない。仮に、提案のように総裁政府が恩赦状を発し、議会がこれを認可するとすれば、憲法により定められた司法権の独立と、五百人会の法案提出権が侵害される²³。ゆえに、この権利はむしろ、裁判所に属するべきである。違憲性への言及は、デュプランティエによってもなされている。彼によれば、恩赦は、放免すること(*absoudre*)であるから、司法権の範疇にあり、立法府と執行府はこれを行行使することはできない。また、執行府が恩赦の提案を行うと言うが、これは立法行為であるので、立法府の行動を縛ることになる。それにより、権力は間接的に執政政府の手に集中し、政治的均衡は崩壊する。結局、この議論を制したのは、恩赦の復活に反対する側であった。このときも、恩赦の復活は受け入れられなかったのである。

しかしながら、革命期には、事実上の恩赦の復活を規定していると思われるデクレが制定されている。テルミドール派国民公会期の、共和暦 3 年ニヴォーズ 29 日 (1795 年 1 月

²² 彼によれば、この主張は、共和暦 4 年ブリュメール 3 日の罪刑法典第 545 条、第 546 条などを参考にしている。*Moniteur*, 18 germinal An 7. これらの条文は、通貨偽造の場合に共犯者を告発したり、身柄の拘束などに協力したりすれば刑罰を免除すると規定している。Duvergier, *op. cit.*, t. 8, p. 516. 沢登佳人ほか「邦訳・大革命期フランスの刑事訴訟立法 (その二) 罪刑法典 (一) (革命暦四年霧月三日)」『法政理論』第 17 巻第 4 号、1985 年、209 ページを参照。

²³ 五百人会により提案された法案は、元老会で審議される。なお、リュドにより引き合いに出された憲法の規定は、共和暦 3 年 (1795 年) 憲法第 76 条、第 202 条である。voir Duvergier, *op. cit.*, t. 8, pp. 283, 289. 中村『憲法史』、64、73 ページも参照。

18 日) に成立した、「立法委員会に、普通犯罪や王党派の事実により生じた判決以外により死刑もしくはその他の刑罰を言い渡された市民の釈放(*mise en la liberté*)について決定をなすことを認めるデクレ」と、「立法委員会と全国保安委員会に、1793 年 3 月 10 日と 28 日の法律〔革命裁判所設置のデクレ〕により追放刑を言い渡された者の釈放について決定をなすことを認めるデクレ」である。たしかに、これらのデクレのタイトルには「恩赦」の文字は含まれていない。また、デュヴェルジェの法令集には、これ以上のことは書かれておらず、詳しい内容は明らかではない。ただ、これらの表題を見る限りでは、立法委員会や全国保安委員会が、事実上、恩赦を行う権限を与えられたと理解することができる²⁴。恩赦を廃止した 1791 年刑法典の規定は、すでに破られていたようである。

(3) 恩赦の復活

シャザルの敗北から 3 年度、恩赦は復活する。ところが、それがどのような議論を経て決定されたのか、詳しいことはほとんど明らかにされていない²⁵。ただ、その前年、共和暦 9 年の刑法典起草委員会で、恩赦復活の提案がなされている²⁶。

これを行ったのは、タルジェである。彼が恩赦に言及したのは、死刑の正当性についての議論の中であった。彼によれば、社会には貧しさや軽蔑のために墮落し、長年の習慣や犯罪、あるいは欺瞞の中で年老いた、自分の野卑な感覚だけに従う「退化した人種(*race abatardie*)」が存在する。あらゆる犯罪は、このような「一般的性格から外れた蛮族のくず(*lie de cette peuplade*)」のなかでおびただしく増加している。彼によると、このような人々に隷役刑(*esclavage et travail*)は通用せず、長期の自由刑も、看守の不注意や仲間との結託などにより、逃げることもできるかもしれないという絵空事を信じているために、機能しない。しかし、このような人々は生への執着が強く、また、死刑であれば、それを免れるためには訴追を免れるしかないから、この刑罰が、彼らを最も抑圧することができる。これより、彼は、より幸福な時が来るまでは死刑は必要だと訴える。彼によれば、死刑は人間性に悖るところか、悪人たちの攻撃から人々を守ることができる²⁷。ただ、死刑を存置するためには、柔軟性の問題に目を向けなければならない。この問題を解決させる唯一

²⁴ この日には、ある特定の判決を無効にするデクレなどもいくつか制定されているが、デュヴェルジェの法令集では、これらも表題のみの記載にとどまっており、これらの法令の関係性は明らかではない。Duvergier, *op. cit.*, t. 7, pp. 487-488.

²⁵ ヴィオーによれば、恩赦が復活した時、それに反対する意見はなかった。Viaud, *op. cit.*, pp. 107-108.

²⁶ Locré, Jean-Guillaume, *Législation civile, commerciale et criminelle de la France*, t. 29, Paris, 1831, pp. 9-15.

²⁷ 彼は死刑の正当化事由としてモンテスキュー、ルソーとならび、ベッカリーアの例を持ち出す。言うまでもなく、ベッカリーアは死刑廃止論者であるが、タルジェは、ベッカリーアが、罪人の存在自体により他の犯罪が誘発される場合という例外を設けていることに注目し、死刑の必要性を強調している。Ibid., p. 12.

の方法が、恩赦である²⁸。彼にとって恩赦は、主権的行政(administration souveraine)により公布される、法律のただひとつの精神が行使するものである。ただ、恩赦により、処罰と不処罰のコントラストができたり、恩赦を得られないことが有罪判決よりも恥ずかしく思われるような、一種の特権が生みだされたりすることがないようにしなければならない。また、恩赦権の行使に法的な制限を与えることは困難なので、策謀や術策による濫用には用心しなければならない。彼によれば、執行権は無限の恩赦権を有しているが、法律に従い、また、裁判官や司法官の勧めなくしては、それを行使することはなく、ほとんど常に減刑にとどまる。この恩赦は政府と裁判所の合意であり、法律が厳しくなりすぎることや、恩赦が恣意的になりすぎることを防ぎ、さらに、法律の硬直性や不正義の疑いを取り除くのである。

ところで、恩赦廃止の際に、多くの議員が引き合いに出した陪審との関係は、タルジェの議論には登場しない。彼は、死刑を個々の事件にあわせて柔軟に運用するために、恩赦による減刑が必要なのだと述べたが、個々の事情への対応は、陪審制と刑法典の規定で十分に可能ではなかったのだろうか。しかし、陪審制は、1791年に議会が期待した通りには機能しなかったようである。1791年刑法典は、厳格な固定刑主義を採用していたので、陪審員たちは、法定刑が厳しすぎると感じた時、たとえその犯罪が何らかの刑罰に相当したとしても、無罪としたのである²⁹。さらに、陪審員の下した判断が否定され、再び審理が行われたものの、当初の判決が維持され、冤罪で死刑が執行された事件さえ生じた³⁰。この事件が起きた背景には、証人が証言を覆すという予想外の事態があったが、これにより、陪審制の欠陥は白日の下にさらされただろう。おそらく、恩赦復活までの10年間で、多くの議員たちは、このような陪審制の欠点を補うためにも、恩赦が必要なのだと考えるようになっていったのではないだろうか。

こうして、共和暦10年に恩赦は復活した³¹。この規定によれば、恩赦の権限は第一執政、

²⁸ タルジェは、死刑だけでなく、終身隷役刑、追放刑の場合も恩赦の対象に加えており、また、有期の刑罰の場合は刑の上限と下限を定めるとし、裁判官の裁量の余地を認めている。*Ibid.*, p. 20. なお、彼は、死刑は殺人や放火、強盗致死など、9種類の犯罪にたいし死刑を適用すべきだと述べている。*Ibid.*, pp. 14-15.

²⁹ ノール県重罪裁判所では、1791年から1804年までの間に、46.8%の被告人が無罪判決を受けている。デイヨン前掲訳書、129ページ、註(二)。

³⁰ この事件はルシュルク事件と呼ばれている。ここでは、殺人の罪に問われたルシュルクらについて、判決陪審で議論が行われていた際、犯人のひとりとされていたクーリオルが、ルシュルクを含む共犯者たちのことを知らないと言い、自らの無実を主張したものの、陪審は有罪の判断を下し、被告人たちに死刑が言い渡された。しかし、クーリオルは証言を急に撤回し、犯人は自分だけで、ルシュルクたちは無実だと言い出したため、対応に苦慮した立法議会は執行猶予を与えた。その後、共和暦5年ヴァンデミエール27日(1796年10月18日)にも、総裁政府が五百人会にルシュルクの執行猶予を求め、この事件をさらによく調べることにしたが、真実は明らかとならず、結局、この年のブリュメール9日(10月30日)、クーリオルがルシュルクらの無実を訴える中、全員が処刑されたのである。*Viaud, op. cit.*, pp. 90-91.

³¹ テルミドール16日(1802年8月4日)の元老院議決第86条「第一執政は恩赦を行う

すなわちナポレオン・ボナパルトのみにあり、彼は、コンセイユ・プリヴェでの議論を経て恩赦権を行使することになっていた³²。しかしながら、ルローによると、ここでの議論は、第一執政の恩赦権を制限するには程遠く、誰も彼の意思に刃向うことはなかった³³。ティエールは、恩赦の復活を、ボナパルトの「権威を王権のそれとできる限り同一にした」と評し³⁴、ヴィオーも、共和暦8年憲法により、すでにボナパルトの権力は「絶対主義に達する直前」に至っていたと述べている³⁵。彼を一躍有名にしたイタリア戦役の際、ボナパルトは「偉大さの見本を示すのはこの私だ」と口にしたというが³⁶、彼はこの頃から、恩赦という「偉大」な行為を見せる権限を手にするのを思い描いていたのかもしれない。

ナポレオン期には、1670年刑事王令第16章のような、恩赦制度の基礎となる法令は制定されていない。したがって、復活した恩赦が、具体的にどのような制度の下用いられていたのかは、管見の限りでは明確ではない。ただ、1810年7月6日に、帝国法院(*cours impériales*)のみが恩赦状を認可する権限を有するとのデクレが出されており、裁判所での認可手続きの様子を示した報告書も発見された³⁷。ここから、少なくとも、ナポレオン期の恩赦状も、アンシャン・レジーム期と同じように、裁判所により認可される必要があった

権利を有する。第一執政は、コンセイユ・プリヴェにおいて法務大臣(*grand-juge*)、2名の大臣、2名の元老院議員、2名のコンセイユ・デタ評定官、2名の破棄裁判所裁判官に意見を聞いた後に恩赦権を行使する。」*Duvergier, op. cit., t. 13, p. 510*. 中村『憲法史』、102ページも参照。なお、デュヴェルジェの法令集には、この条文が第86条であることは明記されておらず、「第10章 恩赦を行う権利」と書かれているのみであった。ちなみに、コンセイユ・プリヴェとはボナパルト直属の政策会議で、アンシャン・レジーム期の留保裁判権の行使に近い役割を担っている。具体的な権限としては、元老院議決の起草（憲法の起草・停止、陪審制の一時的な停止、政府の逮捕権の拡大、裁判所による判決の無効などを決定する）などがある。*Godechot, Jacques, Les institutions de la France sous la Révolution et l'empire, Paris, 1968, p. 573*.

³² コンセイユ・プリヴェでの議論にかんする一次資料は、フランス国立古文書館に数多く所蔵されているが、本稿では、1808年10月28日のもの(AN BB²¹ 28)を参照した。そこから読み取れる限りで言えば、コンセイユ・プリヴェでは、候補者ひとりずつについて作成された報告書に、司法大臣のコメントを加えたものが用いられたようである。具体的な議論の様子を示す資料は見当たらなかったが、前述の報告書とは別に、命令番号、事件番号、罪名、候補者の名前、司法大臣の提案とともに、ナポレオン・ボナパルトによる決定の内容が書かれた、恩赦の候補者一覧が見つかった。ここから、彼が実際に議論に参加し、最終的な決定を下していたことは確かだと言える。

³³ *Rulleau, op. cit., pp. 35-36*. ただ、管見の限りでは、ボナパルトはあらゆる事例に専断的に恩赦を認めていたわけではなく、ほとんどの場合、大法官の意見を覆して恩赦を与えることはなかった。AN BB²¹ 28.

³⁴ *Thiers, Adolphe, Histoire du consulat et de l'Empire, t. 3, Paris, 1845, p. 540*.

³⁵ *Viaud, op. cit., p. 104*.

³⁶ *Furet, François et al., Dictionnaire critique de la Révolution française, Paris, 1988, p. 32*. F・フュレほか編『フランス革命事典 1 事件』河野健二他監訳、みすず書房、1998年、27ページ。

³⁷ AN BB²¹ 28, 1808年4月20日の、オーギュスタン・フランソワ・ヴェルニエにたいする恩赦状の認可手続き。手続きの内容は、本章第3節(5)を参照。

と言うことができる。ところが、帝制を定めた共和暦 12 年フロリアル 28 日（1804 年 5 月 18 日）の元老院議決には、「恩赦」の文字は登場しない。したがって、厳密に言えば、皇帝は恩赦の権限をもたないはずである。にもかかわらず、1808 年 3 月 7 日にも、恩赦は判決自体を消すわけではなく、刑罰を免除するだけであるので、累犯者には相応の罰が与えられるとのデクレが定められた³⁸。

1808 年の治罪法典や 1810 年の刑法典には、恩赦の具体的な内容にかんする規定は見当たらない。ただ、刑法典には、1791 年刑法典と同様、一定の場合に刑罰が宥恕されるとの規定があり³⁹、また、そのような規定がなければ、刑の宥恕や減軽は認められないと定められている⁴⁰。これにたいし、治罪法典第 595 条は、特別法院による判決の場合に限り、法院が判決後に「陛下の憐憫(commisération)」のための口利きをすることができるとしている。特別法院とは、浮浪者や再犯者、軍人など一定の場合に限り、陪審なしで審理を行うことができる裁判所のことなので⁴¹、通常の場合には、タルジェの提案にもかかわらず、刑罰の個別化は、恩赦ではなく、法律の規定により行われることとなったと言うことができるだろう。では、恩赦復活の狙いはどこにあったのだろうか。アンシャン・レジーム期の恩赦には、刑法を補う側面の他に、王権を強化する側面があったことを思い出すと、恩赦は、純粹に君主的なものとして復活したようにも思われる。そうだとすれば、フランスは革命を忘れ、アンシャン・レジームの世界に戻ろうとしたということになるのだろうか。人民投票で 3,572,329 対 2,569 の圧倒的多数による賛成を得て⁴²、皇帝の座を手にしたナポレオンは、翌年のフリメール 11 日（1804 年 12 月 2 日）に、聖別戴冠式をパリのノートルダム寺院で執り行なった。皇帝は、アンシャン・レジームの国王を彷彿とさせる白てんのマントに身を包み、正義の手と王笏を手にし、さらには、シャルルマーニュのものと言われる王冠さえ用意していた⁴³。しかし、ボナパルトによる恩赦の復活は、本当に「国王」の復活の一言に尽きるものだったのだろうか。この点については、後に改めて考えてみたい。

³⁸ Legoux, *op. cit.*, p. 156.

³⁹ たとえば、1810 年刑法典第 321 条以下を参照。 *Les Codes français collationnées sur les textes officiels, contenant la conférence des articles entre eux et sous chaque article les textes tant anciens que nouveaux qui les expliquent, les complètent ou les modifient : précédés des lois constitutionnelles ; suivis : 1. d'un supplément par ordre chronologiques renfermant, outre les lois les plus usuelles avec nombreuses références, les textes anciens encore en vigueur 2. d'une table alphabétique*, par Louis Tripier et al., Paris, 1910, Code pénal, p. 57. 中村義孝編訳『ナポレオン刑事法典』、271 - 272 ページ。

⁴⁰ 同法典第 65 条。 *Ibid.*, p. 13. 同、175 ページ。

⁴¹ 1808 年治罪法典第 553 章以下を参照。 *Ibid.*, t. 28, pp. 4-12. 同、131 ページ。

⁴² Godechot, *op. cit.*, p. 578.

⁴³ Cabanis, José, *Le sacre de Napoléon*, Paris, 2007, p. 200. ジョゼ・カバニス『ナポレオンの戴冠』安斉和雄編訳、白水社、1987 年、252 ページ。

(4) 恩赦の廃止と復権

本節の最後に、復権についてごく簡単に確認しておきたい。というのも、恩赦の廃止を定めた 1791 年刑法典第 1 編第 7 章のタイトルは、「受刑者の復権について」であり、全 13 条のうち、12 条を復権の規定に割いているからである⁴⁴。このことは、1791 年刑法典の目的を反映していると言えることができる。前述のように、この法典は、受刑者の改善を目指していた。ブリソによれば、「受刑者とは、治療したり教育したりしなければならない病人、あるいは無知な者であり、絞め殺すべきものではない」⁴⁵、ルペルティエも、努力することで名誉ある人間になることができるという希望があれば、受刑者の改善は促されるだろうと述べている⁴⁶。こうして、復権は初めて恩赦の一部ではなく、独立した制度として捉えられるに至ったのである⁴⁷。

1791 年刑法典における復権は、アンシャン・レジームのそれとは全く異なっている。かつて、復権は国王への嘆願を通じて与えられていた。一方、1791 年の復権は、罪を悔やみ、自己を改善した受刑者を社会に戻すための「市民的洗礼」である⁴⁸。復権を請求することができるのは、鉄鎖(fers)・懲役(réclusion)・独房監禁(gêne)・禁錮(détention)刑の場合は刑期満了から、首枷刑の場合は刑の言い渡しから 10 年が経過した者で、同じ市町村に 2 年以上居住している者である(1791 年刑法典第 1 編第 7 章第 1 条、第 2 条)。このような法定の要件に該当すれば、誰でも復権を得ることができる。また、再犯の場合でも復権は認められる。

復権を得ようとする者は、住所地の市町村当局に善行証明書を請求し⁴⁹、1 ヶ月後に、市町村会によりその発行の可否を決定される(同第 4 条)。この後、公開の法廷において、市

⁴⁴ Duvergier, *op. cit.*, t. 3, pp. 406-407. 内田他前掲訳、54 - 55 ページ。

⁴⁵ Brissot de Warville, *Théorie des lois criminelles*, Berlin, 1781, préface cité dans Lair, Adolphe-Émile, *De la réhabilitation des condamnés dans le droit romain et dans le droit français ancien et moderne comparée dans ses effets avec la grâce, l'amnistie et la révision*, Paris, p 79.

⁴⁶ *Archives Parlementaires*, t. 26, p. 331. 沢登佳人校閲、藤尾彰訳「フランス一七九一年刑法典草案に関するルペルチエ報告」『法政理論』第 18 巻第 4 号、1986 年、196 - 197 ページ。

⁴⁷ Lair, *op. cit.*, p. 79.

⁴⁸ 復権が「市民的洗礼」であることは、ルペルティエ報告により宣言されているが、中世においても、悔い改め、赦しを得ることは「第二の洗礼」と呼ばれた。この「第二の洗礼」は、聖職者のとりなしを通じた神との和解、あるいは共同体への再編入を意味した。共同体による受刑者の受け入れという性格は、1791 年刑法典の復権にも共通している。したがって、制度的には分離されたとはいえ、1791 年刑法典における復権が、恩赦と全く関係ないものとなったということにはならないだろう。また、復権が 1791 年刑法典の目的を反映していることをかんがみれば、世俗的とされるこの刑法典にも、ある程度の宗教性が認められるとも言うことができる。ただ、ここでの崇拜の対象は、従来の意味での「宗教」とは異なり、革命的価値へと転換している。voir Guyon, *op. cit.*, pp. 242-243. 20 世紀初頭にも、復権の請求の際に恩赦嘆願と同様のディスクールが用いられた例が見られたが、その背景には、恩赦と復権のこのような結びつきがあるのかもしれない。voir aussi Coltel, *art. cit.*, pp. 97-98.

⁴⁹ 善行証明書が 18 世紀の恩赦嘆願の際に用いられることもあったことは、第 3 章第 3 節(1) 注 126 を参照。

職員が有罪判決を読み上げるとともに、受刑者の復権を宣言し⁵⁰、刑の言い渡しにより生じたすべての効果が消滅する（同第 6 条、第 7 条、第 10 条）。これで、この人は晴れて不名誉から解放される。以上の手続きから、復権の決定に国王は関与せず、その可否を実質的に決定しているのは市町村会であり、裁判所も、手続きに形式的に介入しているに過ぎないということがわかる。なお、善行証明書が認められなかった場合、受刑者は 2 年後にもう一度請求を行うことができる（同第 12 条）⁵¹。

以上が、1791 年刑法典における復権の規定であるが、この法典の下では、復権が実際に行われることはほとんどなかった。というのも、当時監獄の状態は劣悪で、受刑者は改善するどころか、むしろ以前よりも悪化して戻ってきていたからである⁵²。また、ルミによれば、復権の授与が公開かつ儀式的に行われたために、人々の足が遠のいたこともある⁵³。こうして、復権についての議論さえ、ほとんど行われなくなっていった。その後、共和暦 12 年プレリアル 30 日（1804 年 6 月 19 日）の刑法典起草委員会において、復権の原理は認められたものの⁵⁴、実際に議論が再開されるのは 1808 年を待たなければならなかった⁵⁵。

1808 年の治罪法典は、復権について 1 章（第 2 部第 7 編第 4 章）を設けている⁵⁶。しかし、ここでの復権には遡及効はなく、有罪判決の結果生じた受刑者の無能力を、将来に向かって消滅させるにとどまっている（同第 633 条）。復権を申請することができるまでの期間は、有期の労役・懲役刑の場合は刑期満了から、首枷刑の場合は判決執行の日から 5 年に短縮されている（同第 619 条）。ところが、この法典においては、現在住んでいる市町村議会だけでなく、その前に住んでいた市町村庁による善行証明書も必要とされた。しかも、この証明書を得るためには、2 年以上同じ市町村内に居住しているだけでなく、5 年以上同じ郡内に居住していなければならないうえ、副知事や検事、さらには、治安判事の承認も必要であった（同第 620 条）。善行証明書を得ることができても、法院で少なくとも 3 ヶ月の審議が行われ、ここで申請が却下される可能性もあった（同第 626 条、627 条）。復権が認められなかった場合には、5 年を経過しなければ再び請求をすることができなくなった（同第 628 条）。そのうえ、累犯の場合には、復権は全く認められなくなった（同第 634 条）。これらの点はさておき、本稿では、第 630 条と第 632 条に注目したい。これらの規定は、復権の場合においても、恩赦と同様、コンセイユ・ブリヴェでの報告を経て、ナポレオンにより最終的な決定がなされ、法院で登録されるとしているのである。さらに、立法時の審議では、復権が「主権者の行為」であり、「君主の書状」により行われるという発言も見

⁵⁰ 復権の儀式については、第 2 章第 1 節（2）注 70 を参照。

⁵¹ Lair, *op. cit.*, pp. 82-84.

⁵² Locré, *op. cit.*, t. 24, p. 104.

⁵³ Remy, *op. cit.*, p. 170.

⁵⁴ Locré, *op. cit.*, t. 24, pp. 105-106.

⁵⁵ Lair, *op. cit.*, pp. 86-87

⁵⁶ *Ibid.*, pp. 91-93 ; *Les Codes français, Code d'instruction criminelle*, pp. 95-98. 中村『ナポレオン刑事法典』、135 - 137 ページ。

られた⁵⁷。こうして、一度明確に切り離された恩赦と復権は、再び結びけられた。やはり、ナポレオンはアンシャン・レジームを復活させ、絶対君主として君臨しようと考えていたのだろうか。

⁵⁷ Locré, *op. cit.*, t. 28, pp. 123- 128

第2節 恩赦制度の変化とイデオロギー

恩赦が廃止された翌年の1792年8月10日、王権は停止された。かつて恩赦権が「主権のしるし」と呼ばれ、絶対王政の成立にも大きな役割を果たしていたことをかんがみれば、恩赦の廃止と王権の停止は連動しているようにも思われる。たしかに、恩赦の廃止が議会で提案された時、モリー師ら恩赦支持派は、恩赦権と国王との結びつきを強調して抵抗した。また、恩赦の復活は、ナポレオン・ボナパルトの終身第一執政就任とほぼ同時に行われており、恩赦と広義の君主制は、密接不可分の関係にあったように見える。しかしながら、実際には、恩赦の廃止と復活は、必ずしもイデオロギー的な観点から説明されるわけではなかった。本節では、革命期の恩赦と主権、あるいは国制にかんするイデオロギーとのかかわりを考えてみたい。

(1) 恩赦の廃止と王権

1788年8月8日、国王ルイ16世は、翌年の5月1日に全国三部会を召集することを決定した。5月5日に始まった全国三部会では、さまざまな陳情書が出され、その中には恩赦にかんする議論も見られた。

ヴィオーによれば、全国三部会の時点で、恩赦の廃止を口にした者はごくわずかしかなかった⁵⁸。多くの議員たちは、恩赦の存在を自明視していたのである。さらにいえば、恩赦を正面から肯定した陳情書も複数出されている。たとえば、トロワの貴族議員は、恩赦権は「王権(Courronne)の最も美しく、最も感動的な特権」で、「国王の心にとって疑うまでもなく最も大切」であるので、一部の犯罪を除いて、最大限に広く認められるべきだという伝統的な見解を述べた。ラブール代表からの陳情書も、恩赦権は「善き国王にとってかくも貴重な特権」であると述べている。さらに、トゥレーヌの議員は、一部を除いたすべての犯罪にたいし、国王が「好きなように(à son gré)」恩赦状を与えることを認めた⁵⁹。また、1788年5月1日の国王宣言により一度定められていた、刑の言い渡しから執行までに時間を置き、その間に恩赦の可否を判断するという規定を、復活させるべきだという意見も、いくつか見られた⁶⁰。

もちろん、恩赦の問題点を指摘する陳情書もあった。しかし、それらは、恩赦という制度そのものに疑問を投げかけていたわけではなく、それを行う方法の改善を求めているに過ぎなかった。たとえば、アモン・バイイ裁判所管区代表の全身分の議員は、恩赦から大臣の影響を排除すべきとの陳情を行った。おそらく、この陳情は、当時の人々がかつてと

⁵⁸ Viaud, *op. cit.*, p. 60.

⁵⁹ Gobron, Louis, *Le droit de grâce sous la Constitution de 1875*, Paris, 1893, pp. 62-63.

⁶⁰ Desjardins, Albert, *Les cahiers des États généraux en 1789 et législation criminelle*, Paris, 1883, pp. 61-63. デジャルダン は、国王宣言の日付を「1788年5月10日」と記述しているが、彼の引用する陳情書の内容を見る限り、5月1日の法令を指していると判断される。

同じように、何か悪いことが起こったとすれば、それは大臣の責任であり、国王は悪い大臣たちにだまされていたに過ぎないと考えていたことを反映している。つまり、恩赦に問題があるとすれば、それは大臣のせいなのであり、国王のみがそれを行うようにすれば、その問題は解決するというわけである。

デジャルダンによれば、この三部会で出された恩赦にかんする陳情のうち、最も多く見られたのは、法律に従って下された判決、あるいは最終審の終局判決後に恩赦を限定すべきであるというものであった。また、大逆罪など、一部の犯罪を恩赦の対象外とすべきだとの主張もなされた。最高諸法院のみが恩赦状の認可を行うべきであるとした陳情や、逆に、原判決を言い渡した裁判所のみが認可資格をもつとしたものもあった。さらに、正当防衛や過失による犯罪の場合には、裁判所がその旨を言い渡し、その他の場合には、裁判官が判決の際に恩赦の可能性あることを示し、両当事者からの上訴がない場合に限り、国王が恩赦を与え、原審が認可するという提案も見られた。議会の外でも、マラーは、法律は厳正(*inflexible*)であるべきだとしたうえで、ただ法律の不完全さを補うために限り、君主に恩赦権を与えることを認めている。しかし、彼は同時に、立法者は恩赦が必要となる場合を予測し、対象となる犯罪を規定しておかなければならないとも述べている⁶¹。

一方、恩赦の廃止を主張した議員たちもいる。たとえば、シャルトルの第三身分議員は、過失による犯罪に恩赦を与えるのは不要で無礼であり、有罪を宣告された者が刑罰を与えられないのは法律の違反であると述べた。パリ市壁外のジュイ小教区の第三身分議員もまた、将来的には、封印令状などとともに恩赦状を廃止すべきだと述べている⁶²。特権身分においても、たとえばオータンの貴族議員は、法律外の権威により、刑事手続きを中断させたり停止させたりすることを禁止するよう求めた。また、アルトワやジアン⁶³の貴族議員も、同様な陳状書を作成した⁶³。

以上をまとめると、全国三部会の時点では、議員のほとんどが恩赦の存在を認めており、また、恩赦の廃止を求めた議員でさえ、それを国王の廃位に関連させることはなかった。ただ、言うまでもないことではあるが、全国三部会が開催されたのは革命が開始する前である。したがって、実際に恩赦が廃止された1791年とは、議論の様子が異なっているとは思議ではない。

しかしながら、恩赦の廃止を提案したルペルティエにとっても、恩赦の廃止は王権の停止を意味したわけではなかった。そもそも、彼は「慈悲の権利」そのものを廃止しようとしていたわけではなく、恩赦状の濫用を問題にしていたに過ぎない。さらに、彼は慈悲の権利を国王の手から切り離そうとしていたわけでもない。彼によれば、過失致死や正当防衛など、陪審員が赦すに値すると判断した事件には、国王の名において無罪の判決が与え

⁶¹ *Ibid.*, pp. 204-207.

⁶² Viaud, *op. cit.*, p. 60. 封印令状と恩赦状との類似については、第3章第3節(1)を参照。

⁶³ Desjardin, *op. cit.*, pp. 204-205.

られる⁶⁴。彼にとって、それこそが慈悲の権利なのである。ここから、彼は陪審員による慈悲が、最終的には、国王により正当化されることを前提としていたとすることができる。

ルペルティエ以外にも、恩赦廃止の議論の際に発言した廃止派の面々は、みな国王の存在を問題とはしていなかった。繰り返しになる所もあるが、ここで、国王との関係に注目して、彼らの発言をまとめてみよう。シャルル・ラメトは、恩赦の廃止は国王から特権を奪うことではなく、公民精神、愛国心、そして憲法への愛着を破壊する嘆かわしい権利を廃止することであり、むしろ、善き市民は、憲法により国王に与えられた特権を守るべきであると述べた。彼にとって公民精神に反するのは、国王が君臨することではなく、国王大権を攻撃したり、それを守ろうとしないことだったのである⁶⁵。グーピルも、恩赦が国王の利益ではなく、大臣たちの利益に従って与えられていることを問題とする一方で、国王が善であり公正であることを認め、さらに、王に忠誠を尽くさなければならないとさえ述べた⁶⁶。ペティオンは、仮に、恩赦が陪審員の宣言に基づいて、国王により与えられるのであれば、この権限は非現実的なものとなり、国王の威厳を傷つけさえすると述べた。同様に、デュポールは、裁判官がある個人についての国王の意思を決定できるのであれば、自由は安全を脅かされ、陪審員がそれを決めれば、明らかに常軌を逸していると言う⁶⁷。

そのうえ、議員たちは、必ずしも恩赦の存在それ自体に反対してはいなかったようである。というのも、ペティオンは、強盗団のひとりが自分たちの悪事の告発を行った時など、恩赦が必要となる場合は、法律によりあらかじめそのことを定め、さらに執行府、すなわち国王にその恩赦を却下し、あるいは、専断的にそれを認める権利を与えることが必要だと述べているからである。また、ランジュアネも、祖国に奉仕した者や才能のある者に、国王の裁可により例外的に恩赦を与える可能性を否定しておらず⁶⁸、デュポールも、1791年8月8日になされた、恩赦の廃止を憲法に明記するとの提案にはっきりと反対している⁶⁹。

この提案を行ったのはビュゾであった。彼は、1791年憲法第1編第1条により保障される自然的・市民的権利のひとつとして提案された「同じ犯罪は、人による区別は全くなしに、同じ刑罰によって罰せられる」ことについて、以下のように述べた。憲法が市民的権利と、自然的権利を保障すると言うだけでは十分でなく、いかにしてそれが保障されるのかをわかるようにしなければならない。したがって、同じ犯罪に同じ刑罰を与えるのであれば、それを保証する法律が必要である。しかしながら、社会の中に恩赦権を有する者がいれば、それは保証されないであろう。こうして彼は、恩赦の廃止を憲法に明記することを求めたわけであるが、この時彼は、1791年6月3日の恩赦廃止についての議論で、デュ

⁶⁴ *Archives Parlementaires*, t. 26, pp.737-738.

⁶⁵ *Ibid.*, p. 731.

⁶⁶ 彼によれば、国王の側は、忠誠と引き換えに安全と保護を与えなければならず、それゆえにこの義務に反する恩赦は否定される。

⁶⁷ *Ibid.*, p. 730.

⁶⁸ *Ibid.*, pp. 734-736.

⁶⁹ 以下は *Ibid.*, t. 29, pp. 271-274 を参照。

ポールが、執行府の恩赦による不都合を明らかにしたことを引き合いに出している。ビュゾの提案にブットヴィル＝デュメスも賛同し、王国内に法律から解放された者がいないこと、すなわち、恩赦を与える権利が存在しないことを憲法に明記し、通常法律によりそれが破られないようにすべきだと述べた。

ところが、これらの意見にたいし、デュポールは、同じ犯罪が同じ刑罰により裁かれるという条文を適用するには、外面的には同じように見える二つの犯罪に、刑罰の微妙な違いを設ける、衡平の法が必要であると言葉を返した。たとえば、相手に挑発されたわけでもなく、憎しみや強欲により人を殺害した悪人と、ひどく挑発されたために人を殺してしまった正直者の罪の重さは歴然としており、このような場合には、衡平により正義を和らげなければならない。たしかに、恩赦廃止の議論の際、彼は、この問題には陪審制により対応することができると考えていた。しかし彼は、フランスのような、陪審員が事実だけでなく、意思についても判断する制度には先例がないことを指摘する。したがって、彼にとって、憲法に恩赦権の廃止を明記するのは、あまりに拙速で危険であった。彼によれば、イギリスやアメリカのような、自由な国家で採られている陪審制度においては、陪審員は事実判断を行うのみであり、経験を積んだ結果、フランスの陪審制度もそのように改められた場合には、恩赦権が必要となる。そして、その権利が委ねられるのは、国王に他ならない。彼は、誕生したばかりのフランスの陪審制度を優れていると考えてはいたものの、陪審員は人間であり、不完全なところもあることから⁷⁰、実践に移してみなければその真価を問うことはできず、イギリス流の制度に改正する必要が生ずる可能性を認識していた。それゆえに、憲法により恩赦権の存在を否定すれば、陪審制度を改めるために憲法の改正までしなければならなくなると考え、ビュゾらの意見に反対したのである。

したがって、一見すれば、1791年6月の出来事は、翌年の王権停止に直結していたかのようにも思われるが、そうではなかった。ヴィオーは、議会の中に王権の失墜にたいする強い願望があり、それが恩赦への敵意につながったと述べたが⁷¹、それは事実ではないのである。恩赦の廃止は、裁判官が自分の友人や親族には甘い判決を下す一方で、気に入らない人間には厳しい判決を下し、また、封印令状が貴族の事件をもみ消すということが日常茶飯事となっていた、アンシャン・レジームの不安定で恣意的な司法手続きにたいする拒否を意味していた。よって、ここに共和制の萌芽を直ちに見ることはできないのである。

(2) 恩赦される国王

恩赦は、大権であるから廃止されたというわけではなかった。しかしながら、このことは、必ずしも、恩赦が主権概念と無関係であることを意味するわけではない。恩赦廃止よりも前ではあるが、人権宣言後の1789年10月16日、ノルマンディー地方のグランヴィル

⁷⁰ voir *Ibid.*, t. 26, p. 730.

⁷¹ Viaud, *op. cit.*, p. 79.

では、処刑台の周りに集まった人々が「国民は恩赦を行う権利をもつ」と叫び、受刑者を救出したのである⁷²。ここから、人々にとって恩赦はまさに「主権のしるし」であったと言えることができる。また、1792年8月8日のデュポールの議論からも見て取れるように、恩赦復活の可能性は否定されていなかった。そして、1792年12月から翌年の1月にかけて行われた国王裁判の際には、「国王への恩赦」という言葉さえ口にされることになるのである。

国王裁判は、通常の裁判とは異なり、国民公会で行われた。そのため、判決は陪審員ではなく、議員たちの票決に基づいて下された。採決は4段階からなり、各議員の指名点呼により行われた。第1回の採決では、被告人ルイ・カペーが有罪であるか否か、第2回には、国民公会で下された判決を人民の裁可に服させるべきか否か、すなわちここでの判決を人民に上訴するか否か、第3回には、ルイにどのような刑罰を与えるべきかが問われた。第3回の採決では死刑が多数となったが、この時最初に発言したマイユが、死刑が多数となった場合には、刑の執行の延期について議論を行うべきであると述べていたため、延期の可否について第4回の採決が行われた⁷³。そして、最終的にはルイの即時死刑が決定し、判決が下された翌日の1793年1月21日、刑が執行されたのである。ところが、時間の制約のため、議員たちは指名点呼の際、自由に発言することができたわけではなかった。さらに、ウィあるいはノンの言葉だけでは答えることのできない第3回の採決の時でさえも、理由を挙げずに結論だけを述べた議員もいた。ただ、その代わりに、議員たちは、議会の外で、自らの意見を明らかにするためのパンフレットを出版している⁷⁴。ここでは、これらのパンフレットを用いて、国王への恩赦について考えてみたい⁷⁵。

まず、国王への恩赦に好意的な意見を見てみよう。たとえば、クーエによれば、屈服した敵を赦すことは、国民の勝利と自由を確実なものにする。したがって、ルイを生かすことが平和をもたらし、自由を強化しうるのであれば、彼を守ってやるべきなのである⁷⁶。では、恩赦を行うのは誰なのだろうか。それは主権者たる人民である。モン＝ジルベールによると、恩赦権は「主権の最も甘い属性のひとつ」なのである。彼は、恩赦は、法律により認められた復讐を奪うとして、これを否定しているが、犯罪により人民全体(en corps)が侵害された場合、彼らは被害者となるので恩赦をすることができると述べ、人民への上訴を

⁷² Taine, Hippolyte, *Les origines de la France contemporaine, La Revolution*, t. 1, Paris, 1896, p. 111, note 1.

⁷³ 石井三記「フランス革命期の国王裁判における法的側面」『名古屋大学法政論集』第186号、2001年、229 - 230ページ。

⁷⁴ これらのパンフレットは、1792年11月30日と1793年1月7日のデクレにより、公費で印刷され、各議員に配布されることが定められた。Duvergier, *op. cit.*, t. 5, pp. 82, 136.

⁷⁵ 以下で参照するパンフレットは、専修大学図書館に所蔵されているベルンシュタイン文庫に収められている。また、これらのパンフレットは遅塚忠躬により *Opinions des conventionnels sur le jugement des brochures conservées à la Bibliothèque de Michel Bernstein*, sous la direction de Tadami Chizuka, t. 1-6, Tokyo, 2008. として複製刊行された。

⁷⁶ *Opinion de Francois Couhey, député du département des Vosges à la Convention Nationale, sur la peine à ci-devant Roi des Français*, pp. 3-4, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 1.

求めている⁷⁷。したがって、人民による恩赦は、彼らへの上訴の際に行われる。人民への上訴は、キネットによれば、正義と政治が互いに矛盾する結論を導いた時、すなわち国民公会がルイに死刑を言い渡したものの、共和国の利益のために、その刑を改める必要を感じた場合に行われる。というのも、彼によれば、刑の変更は恩赦を意味するが、恩赦権は主権に内在しており、国民公会には委任されていないからである⁷⁸。

すべての議員が、人民による恩赦権を当然のものと考えていたわけではない。ドゥレールは、国王を法律の裁きに委ねるかどうか、また、彼の生死をどうするか決定することは「人民の主権の偉大なる行為」であり、恩赦は、「主権の美しい特性」なのであるとしながらも、最終的には人民への上訴を否定する。そもそも、彼にとって、人民の権力と恩赦は相容れない。さらに、判決を人民に諮ることは、国民公会の使命の範囲と完全性や、その判決の公平さに疑いを投げかけることを意味した。また、国王の処遇については人民の意見が割れており、彼らに判断を委ねれば内戦が生ずるだろうと彼は言うのである⁷⁹。

より法的な視点から、国王への恩赦に異議を唱えた議員もいた。たとえば、ギルルマンによれば、いかなる実定法も人民に恩赦権を与えるとは規定しておらず、自然法は正義を傷つけるすべてのものを拒絶しているので、犯罪を処罰しないままにしておく権利は、原則として存在しない。仮に、人民が恩赦権を有していたとしても、ルイ・カペーのためにそれを濫用することはできない。というのも、一般利益はルイの死と強く結びついているからである。それに、ルイのまわりには王党派や反共和派、さらには亡命貴族が集まっており、彼らは常に不安や出費、戦争の原因となって、自由を脅かしている。また、彼によると、ルイの死はフランスにより多くの敵を招くわけではなく、一般利益も個別利益もルイの死を望んでいる。万民法(*droit de gens*)は、主権の篡奪者を倒した者を有徳者とみなすが、フランス人は、ルイにたいしこの権利(*droit*)を備えもっているのである⁸⁰。ドゥヌーもまた、恩赦は法律に沈黙を強いるとして、国王にこれを与えることを拒否している。彼によると、国民は一般的な対象にかんする意思しかもっておらず、個別的な人や事物にたいし判決を言い渡すことはできないので、恩赦権をもたないのである⁸¹。ビヨー＝ヴァレンヌは、恩赦が法律からの除外であることを理由に、国王への恩赦に反対する。彼によれば、恩赦は、法律のみが支配する場所においては、正義だけでなく公共の利益にも反する。人

⁷⁷ *Opinion de Francois-Agnes Mont-Gilbert, député du département de sur le jugement de Louis XVI*, pp. 22-24, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 1.

⁷⁸ *Opinion de N. M. Quinette, député du département de l'Aine, sur le jugement de Louis Capet*, pp. 7-8, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 1.

⁷⁹ *Opinion d'Alexandre Deleyre, député par le département de la Gironde, Contre l'appel au peuple, sur le jugement de Louis XVI*, pp. 7-11, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 6.

⁸⁰ *Quelques réflexions de Claude-Nicolas Guillermin, député du département de Saône à la Convention, sur le procès de Louis Capet, et notamment sur la question de savoir si le peuple peut et doit lui faire grâce*, pp. 3-5, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 1. 同じテキストの、ドゥエで印刷されたものが第6巻に収録されている。

⁸¹ *Considerations sur le procès de Louis XVI, par P. C. F. Daunou, député du département du Pas-de-Calais*, p. 3, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 5.

民の主権は、衡平と理性を規範としているが、この主権が法律の唯一の源泉であれば、すべての市民は、法律の前に平等でなければならない。しかし、一度恩赦が行われれば、もう一度恩赦が行われることになり、やがては、力ある者の最も邪悪な犯罪が、易々と刑罰を免れることになる。このような法律の侵害は、あらゆる善き国制にとって、最も破壊的な要因である。それに、もし、国家を殺した者に人民が恩赦を与えることができるのであれば、それは人民を不正義と非難し、彼らが、攻撃者への復讐を求める人間性に反して、暴君の大義に興味を抱いているとみなすことを意味すると彼は言うのである⁸²。

ところで、1791年憲法第3編第2章第1節第2条は、国王の神聖不可侵を規定しており、これに従えば、国王にたいする裁判はできないはずである。この点について、ジャン＝ボン・サン＝タンドレは、同第3条に規定されている、フランスには、法律に優位する権威は存在しないという原則との矛盾を指摘し、これらの条文のどちらかを削除しなければならないと主張する。そのうえで彼は、そもそも、1792年8月10日をもって王制は停止しており、それとともに、この憲法は灰燼に帰したと述べる。憲法によれば、国王の犯した罪は廃位に相当するので⁸³、それ以上刑罰を与えることはできないように思われるが、今回の廃位は、単なる政体の転換の結果に過ぎず、刑罰を科すことができると彼は言うのである⁸⁴。したがって、国王裁判は1791年体制の否定を意味したと考えることができるだろう。王権の停止により、国王はその地位を失い、立憲君主制は崩壊した。そして、彼は国王としての不可侵性を失い、裁判にかけられたのである。

ただ、このことは、国民公会が、抽象的な「法」概念を引き合いに出す一方で、実定的な意味での法を軽視していたことを意味するわけではない。国民公会議員の約半数は元弁護士であったこともあり、多くの議員たちはパンフレットの中で「刑法典」などの言葉に

⁸² *Discours de Billaud-Vallenne, Député du département de Paris, sur le jugement de Louis Capet*, pp. 15-16, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 3. 同じテキストは第4巻にも収録されている。なお、国王への恩赦に肯定的な意見を表明した議員は、必ずしも国王に有利な判断を行っていたわけではなかった。石井三記によると、モン＝ジルベールやキネットは、パンフレットでの意見とは逆に、人民への上訴に反対票を投じている。一方、国王への恩赦に反対したドーヌーは、第3回の評決で死刑以外の刑罰に投票しており、第4回投票でも、執行猶予に賛成している。国民公会各議員の投票行動については、石井三記「フランス革命期の国王裁判における4回の表決の分析—フランス法制史からの読み—」日本西洋史学会第59回大会近代史部会（2009年6月14日、於専修大学）で明らかにされている。

⁸³ 1791年憲法第3編第2章第1節第5条から第9条によると、国王は立法府の要請から1か月以内に国民・法律への忠実、憲法の維持を宣誓しなかった場合、この宣誓を撤回した場合、国民にたいし軍隊を指揮した場合、王国外に出て、立法府の要請によっても帰国しなかった場合に、王位を放棄したとみなされる。Duvergier, *op. cit.*, t. 3, p. 281. 『1791年憲法の資料的研究』、42 - 43 ページ。

⁸⁴ *Opinion de Jean-Bon Saint-André, député du Lot, sur cette question : Louis XVI peut-il être jugé ?*, p. 13, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 3. 同じテキストの、モン＝トーバンで印刷されたものが第6巻に収録されている。なお、この意見は、1792年12月26日に行われた、ルイの弁護人ド・セーズのディスクールに対応していると思われる。ド・セーズの弁論については、石井「国王裁判」論文、220 - 229 ページを参照。

言及している⁸⁵。さらにいえば、ある議員は、国王は「国家の対外的安全と対内的安全にたいする」重罪のために刑に服さなければならないと述べており、刑法典によれば、この罪は死刑に相当した。したがって、彼らは法律を参照しながらも、ある部分ではそれから逸脱し、ある部分ではそれに従っていたとすることができるだろう⁸⁶。ところで、ヘッスによれば、王権停止から共和暦 3 年（1795 年）憲法まで、革命期の刑法は、主権者概念に明確には言及していなかった。彼女によると、この、いわば「首をはねられた刑法」は、共和暦 2 年（1793/94 年）の、ギロチンの利用法にかんする本の表紙に描かれている、正義のアレゴリーの下に横たえられた、断頭後の死体に象徴されている⁸⁷。つまり、王権の停止と処刑により、国王を「王国の頭」とする主権のイメージが崩れ去ったというわけである⁸⁸。ところが、国王を裁いた議員たちは、必ずしも具体的な主権者のイメージを欠いていたわけではなかった。もし、主権概念があいまいなままこの裁判が行われたのであれば、人民による恩赦という考えは登場しただろうか。それに、国王にたいする裁判の可能性が議論されていた 1792 年 11 月 7 日の議会の時点で、「あらゆる国民がその国王を裁判にかける権利は、国民主権の永久の、かつ譲り渡すことのできない帰結」であることを理由に⁸⁹、国王にたいする裁判を可能とするとの提案がなされていたのである。

ただ、人民あるいは国民という概念はしばしば危険をはらんでいる。このことを、ドゥビニョンのパンフレットから見て取ることができるだろう。彼によれば、国民の正義は、法律により規定されていようがいまいが、あらゆる犯罪を処罰することができる。ゆえに、国民がその犯罪を憎み、また、共和国にとって刑罰を科すことが有益である時に、刑法の規定がないからと言って赦しを与えるのであれば、それは、国民が暴君たちを敬い、彼らの苛烈さを高めることと同じだと言うのである⁹⁰。これは、罪刑法定主義の否定であり、優位者を認めないはずの法律を、国民の意思の名の下に捻じ曲げている。かつて、国王の意思が法律に優位することを批判して恩赦を廃止した議会は、今、主権者たる人民の意思が法律に優位することを認めているのである。しかしながら、ここで議会は、法律を超えて赦しを与えるのではなく、法律を超えて刑罰を与えることを選んでいる。そして、この裁判から 1 年も経たずして、恐怖政治が幕を開けるのである。

⁸⁵ 石井による 2009 年の報告では、各議員の刑法典への言及の有無も明らかにされている。それによれば、刑法典に触れていたのは、721 名の議員のうち、15%に相当する 108 名であった。

⁸⁶ 石井「国王裁判」論文、197 - 200 ページを参照。

⁸⁷ Hesse, Carla, *The Law of the Terror*, *MLN*, v. 114, n. 4, 1999, p. 704.

⁸⁸ voir Kelly, G. A., *From Lèse-majesté to Lèse-nation : Trahison in Eighteenth-Century France*, *Journal of the History of Ideas*, v. 42, n. 1, 1981, p. 270.

⁸⁹ *Archives Parlementaires*, t. 53, pp. 277-278.

⁹⁰ *Opinion du Citoyen Dubignon, député de l'Ille et Vilaine, sur le procès de Louis XVI*, p. 2, dans Chizuka, *op. cit.*, t. 3.

(3) 人民の恩赦から議会の恩赦へ

恩赦の概念は、恐怖政治期にも登場する。共和暦 2 年フリメール 30 日（1793 年 12 月 20 日）付のカミーユ・デムーラン『旧コルドリエ新聞』第 4 号は⁹¹、仁慈委員会(*comité de clémence*)の設置を提案しているのである。彼によれば、仁慈委員会を置くことにより、自由は強固になり、フランスはヨーロッパを征服することができる。というのも、彼にとって仁慈は、賢明に分配されれば、革命的なさまざまな方法の中で最も効果があり、それゆえに、この委員会は革命を終わらせることができるからである⁹²。反対に、盲目的で一般的な大赦は、反革命的である⁹³。被疑者が囚われている牢獄の扉を開放し、彼らを釈放するのは危険で不得策であるが、それと同じくらいに、仁慈委員会を設けることはフランス人にふさわしい。というのも、愛国者はあらゆる徳で満たされているので、人間性も博愛もなく、エゴイズムによって干からびた魂しかない場所にいることはできないからである⁹⁴。さらに、デムーランは、ルソーがマキアヴェリの『君主論』を、人民に重大な教訓を与える、共和派の書物と位置づけたことに倣ってか⁹⁵、マキアヴェリを「われわれの偉大な教授」としてこのように述べる。恩赦はすべての政府にとって最も重要であり、第一に必要である。また、恩赦を与えることができるのは、主権者だけなのである⁹⁶。

では、この主権者とは誰か。おそらく、国王裁判の時に議員たちが考えていたような「人民」ではないだろう。恩赦の可能性のある者全員について、それぞれ人民への上訴を行うことができるとは考えられない。それに、デムーラン自身、この号の注で、国民公会により決められた秘密の審査官 4 名あるいは 6 名が、被疑者をひとりひとり尋問し、当該被疑者が共和国を危険に陥れることはないと言った場合に限り、解放を行うことを提案している⁹⁷。したがって、恩赦の可否を決定するのは、仁慈委員会を構成する議員たちであり、しかも、その作業が人民の目に触れることはない。つまり、デムーランにおいて主権者とされているのは、人民ではなくその代表なのである。

ヘッスによれば、国王の処刑後、ジャコバン派は革命概念それ自体を主権の位置に据えようとした。しかし、革命という概念には制度的、あるいは物質的な形が存在せず、したがって、それはせいぜい自由・平等・単一性(*Unité*)という象徴を通じて判別し、保護されるに過ぎない⁹⁸。そのため、議会は「善く、革命的な人民」のイメージを作成し、「単一の

⁹¹ マティエの注によれば、この日付は正確ではなく、実際にはニヴォーズ 4 日（12 月 24 日）の発行である。Desmoulin, Camille, *Le vieux cordelier, édition complète et critique d'après les notes de Albert Mathiez ; avec une introduction et des commentaires par Henri Calvet*, Paris, 1936, p. 113, note 1.

⁹² *Ibid.*, p. 119.

⁹³ ところが、マティエによると、デムーランの属するダントン派は、1793 年 8 月 10 日に一般的大赦を提案している。*Ibid.*, p. 123, note 3.

⁹⁴ *Ibid.*, pp. 122-123.

⁹⁵ Rousseau, *op. cit.*, pp. 161-162. ルソー前掲訳書、103 ページも参照。

⁹⁶ Desmoulin, *op. cit.*, p. 125.

⁹⁷ *Ibid.*, p. 115, note 5.

⁹⁸ Hesse, Carla, *La logique culturelle de la loi révolutionnaire*, traduit par

人民」を革命のシンボルとした。しかしながら、1793年に起きた、ヴァンデ地方の農民や連邦主義者などの反乱により、革命の本質的理念であった、国民の不可分性と一般意思としての法律は危機に瀕した。反乱を起こした人々は、人民主権の名の下に国民公会を拒否し、その一方で議会も、人民の名の下に法律を制定し政治を行った。また、このような反乱に際しても、議会は「善く、革命的な人民」のイメージを放棄することではなく、彼らは抑圧と教育により人民を画一化しようと考えた。しかし、人民の画一化という作業は、権威主義的であり、パターンリスティックであることを免れない⁹⁹。つまり、この時議会は、人民により正当性を与えられていると同時に、人民を自らの作った枠の中にはめこみ、服従させようとしている。実際、1793年に、ビヨー＝ヴァレンヌにより作成された地方への通達は、人間をとるに足らないものとする一方で、人民と政府を一体化し、そうして作られた「祖国」にたいする絶対的服従を求めている。ジョームは、ここにボダンの主権を取り、さらには、ルイ14世期のディスクールとの一致を指摘する。彼によると、このような、国民を無とし、支配者のみが彼らに統一性を与えることができるという表現は、絶対王政の時代に頻繁に用いられていた。したがって、ここでは「新たな絶対主義」が成立している¹⁰⁰。今や、主権者は議会であり、神の声となるのは、人民の声という大義名分を盾に発せられる議会の声なのである。

しかしながら、デムーランの仁慈委員会が成立することはなかった。それから半年後の共和暦2年プレリアル22日（1794年6月10日）には、革命裁判所の権限が強化され、それに先立つジェルミナル4日（3月24日）にはエベール派が、同15日（4月5日）にはデムーランも含むダントン派が処刑され、恐怖政治は猖獗を極めた。そして、この年のテルミドール9日（7月27日）、恐怖政治を牽引してきたロベスピエールらは、不満を抱いた議員たちにより失脚させられ、恐怖政治は終焉を迎えるのである。

アンシャン・レジーム期、国王は残虐な刑罰により人々を抑圧すると同時に、神の権利である恩赦を用いて自らを神聖化し、さらに人々を懐柔することでその力を高めた。では、同じように「絶対主義」へと至った恐怖政治は、仁慈をないがしろにしたために瓦解したのだろうか。実は、恐怖政治にも「仁慈」は存在しないわけではなかった。デムーランは仁慈委員会の設置をロベスピエールに向けて訴えたが、ロベスピエールにとって、「人類の抑圧者」を赦すことは「蛮行」であり、彼らを処罰することこそが「仁慈」だったのである¹⁰¹。

Marie-Pascale Brasier d'Iribarne, *Annales, Histoire, Sciences Sociales*, n. 4, 2002, p. 928.

⁹⁹ Muller, Christian Alain, Du « peuple égaré » au « peuple enfant » le discours de la révolte populaire en 1793, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 47, n. 1, 2000, pp. 97-101, 110-112.

¹⁰⁰ Jaume, Lucien, *Échec au libéralisme. Les Jacobins et l'État*, Paris, 1990, pp. 26-27. リュシアン・ジョーム『徳の共和国か、個人の自由か ジャコバン派と国家 1793年 - 1794年』石埼学訳、勁草書房、1998年、29 - 32 ページ。

¹⁰¹ Hampson, Norman, La patrie, in *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture*, v. 2, *The Political Culture of the French Revolution*, Edited by Colin

(4) 恩赦と君主制

恩赦の復活後、ナポレオンは、1808年4月3日の書簡において、その利用方法を弟のオランダ王に説いている。その書簡によると、恩赦の権威を失わせないためには、国王の仁慈が裁判の信用を貶めないような場合に限って、それを行わなければならない。仁慈がうまくいくのは、とりわけ政治犯の場合であり、赦しは、主権者が攻撃された時に偉大なものになる。このような犯罪が初めて耳に入った時には(*au premier bruit*)、人々の関心は罪人の側に与するが、君主が恩赦を行えば、彼らは君主を罪人よりも上位に置き、襲撃者を非難するだろう。しかしながら、この人を処罰すれば、人々は君主を執念深い暴君だと呼ぶだろう。また、もし恩赦を凶悪な犯罪に行えば、人々は君主が弱いか、悪意をもっていると言うだろう。というのも、この時、恩赦の権利は社会集団(*famille sociale*)にとって有害だからである¹⁰²。

このように述べてはいるが、この時、皇帝ナポレオンに恩赦の権限を与える法規定はなかったはずである。したがって、彼は、アンシャン・レジームの国王たちのように、恩赦の権利は、君主としての地位に当然に付随するものとみなしていたと考えられる。この認識は、統治機構の内部で共有されていたようである。たとえば、共和暦12年ニヴォーズ18日(1804年1月10日)、コンセイユ・プリヴェは、恩赦権が「至高の権威(*autorité souveraine*)の中で最も高貴な特権である」とした。さらに、共和暦13年プリュヴィオーズ17日(1805年2月7日)の破棄院判決は、この見解を引用した検察側の報告を受け入れ、「恩赦を行う権利は国家元首の人格のうちにすべて、またそこだけに存する」と述べているのである¹⁰³。

それ以外の場所でも、この頃のフランスには、恩赦に否定的な見解はほとんど見られなかった。たとえば、フランス革命を批判した反革命・王党派のジョゼフ・ド・メーストルは、『教皇論』(1819年)第2編第3章において、人間には例外を設ける必要のない法律を作る能力はなく、あらゆる法律は、免除の権力なくしては違反を生ぜしめ、結局、自らの身を滅ぼしてしまうと述べている。というのも、人間は、その弱さのために、すべてを予測することはできず、また、事物はその本性上変化し、それ自体の動きにより法律の輪の外へ出てしまったり、感じ取ることのできないほどの小さな変化により、同じ種類のものでも微妙な色合いをもったりするので、間違いのない一般的な名称により把握することはできないからである。それと同時に彼は、法律に敬意を払い、法律に反する力がないことを自ら告白しなければ、それを免除することはできないので、免除は法律の力を強めるとも言う¹⁰⁴。ここから、彼は、法律の権威を守るために恩赦が必要であると言っていること

Lucas, Oxford et al., 1988, p. 135.

¹⁰² Sermet, *op.cit.*, pp. 330-331.

¹⁰³ Legoux, *op. cit.*, pp. 281-282 ; Merlin, *op. cit.*, t. 7, pp. 283-284.

¹⁰⁴ *Œuvres complètes de J. de Maistre : contenant ses œuvres posthumes et toute sa correspondance inédite*, t. 1-2, Nouvelle édition, Lyon, 1884 ; réimpression, Hildesheim et al., 1984, *Du pape*, p. 176. メーストルのこの主張は、セルメの学位論文の表紙にも掲げられている。

がわかる。

一方、彼が批判したコンスタンもまた、恩赦を肯定している¹⁰⁵。コンスタンは、『憲政講義』（1818 年）に収められている「政治の諸原理」（1815 年）第 9 章において、「憲法は、国家元首に属する恩赦の権利を全く制限しなかった」と述べている¹⁰⁶。また、第 19 章では、恩赦は「無実の者に認められた最後の防御装置(protection)」であるとも言う。その理由は、以下のようになっている。法律は、一般的になればなるほど個別の行為から遠ざかるが、これらの行為について適用されなければならない。ところが、法律は、あるひとつの状況においてしか、完全には公正とならないので、同じ法律を二つの状況に同時に適用した場合、一方にとってその法律は不公正となる。つまり、法律がすべてを包摂することは不可能であり、この、法律と事実の乖離を調整し、法律だけでは救い切れなかった無実の者を救うのが、恩赦である。恩赦権は、一般的な法律と個別的な衡平とを和解させるものなのである¹⁰⁷。

細部では異なるが、法律を補うために恩赦が必要であるという認識においては意見を共にしている彼らに、さらに興味深い一致が見られる。彼らは、君主の神聖不可侵を説き、それを恩赦権の根拠としているのである。このことには、違和感を覚えてしまうかもしれない。というのも、コンスタンとメーストルの思想的立場は全く相容れないからである。メーストルは、恩赦の権利をもつ主権者は神聖で、神の似姿であると述べている。ただ、彼の主権が無制限であり、絶対不可侵であるのは、各国の基本法に示された正当性の枠の中でそれが行使されている限りのことである¹⁰⁸。とはいえ、彼は、人間は必ず統治されなければならない、一般規則により彼らを導く力以上のものを想像することさえできないとも述べており¹⁰⁹、権威主義的な視点から恩赦を支持していたとすることができるだろう。

それにたいし、コンスタンは、国王の不可侵は立憲君主制の第一原理であり¹¹⁰、国王はすべての名誉の源泉であると同様に、すべての慈悲の源泉であると言う¹¹¹。しかも、彼は恩赦権が王権と不可分であり、もし王権がこの「美しき特権」の喜びを味わわず、それを行行使する義務を感じないのであれば、恩赦の制度は存在しないも同然であるとさえ言う¹¹²。ところが、これに先立つ共和暦 5 年（1796 年）の『政治反動論』第 9 章では、恣意を規範・

Sermet, *op. cit.*,

¹⁰⁵ メーストルによるコンスタン批判については、川上洋平「ジョゼフ・ド・メーストルの反革命論—総裁政府期のコンスタン批判にみる政治的なものの諸相—」『法学政治学研究』第 80 号、2009 年を参照。

¹⁰⁶ Constant, Benjamin, *Cours de politique constitutionnelle*, Paris, 1818 ; avec une introduction et des notes par Édouard Laboulaye, Paris, 1872 ; reimpression, Geneve - Paris, 1982, p. 80.

¹⁰⁷ *Ibid.*, pp. 160-161.

¹⁰⁸ *Œuvres complètes de J. de Maistre*, t. 1-2, *Du pape*, pp. 176-178.

¹⁰⁹ *Ibid.*, pp. 167-168.

¹¹⁰ Constant, *op. cit.*, p. 80.

¹¹¹ *Ibid.*, p. 424.

¹¹² *Ibid.*, p. 299.

制限・定義がないことと位置づけ、これが恐怖政治や政府の崩壊の源であると論じている。しかも彼は、恣意が犯罪にたいして用いられることを「無秩序の道具」とさえ述べているのである¹¹³。

ここで、もう一度『憲政講義』に戻ると、コンスタンは、王権は本質的に恣意に反対するとしている。さらに、彼によると、もし国王が恩赦をぞんざいに扱い、家臣の手にそれを委ねるようなことがあれば、法律の規定にない刑罰が与えられるようになり、実定法の意義が失われる。そうすると、罪人はみな偶然や気まぐれによる恩赦を期待し、恩赦は「死の福引(*loterie de mort*)」となる。しかしながら、恩赦を明確な規定に沿って与えれば、それは判決と同視されるに至り、恩赦の正義と有用性をつくりあげる、漠然としたものや道徳の自由(*latitude morale*)が失われるのである¹¹⁴。これらのことから、コンスタンにおける恩赦は、君主の気まぐれにより与えられるものでは全くないということがわかる。さらに、彼によれば、自由な恩赦を可能にする君主の不可侵は、憲法による擬制以上の何物でもない。しかも、この擬制は、反体制派の攻撃により、無秩序や永遠の内戦(*guerre eternelle entre le monarque et les factions*)がつきまとうことを防ぐため、つまり、秩序と自由を防衛するために行われているに過ぎない¹¹⁵。これより、コンスタンにおける神聖不可侵の君主は、自由な秩序を維持するためのただの道具だと言うことができる。つまり、彼は無制限な恩赦を盲目的に肯定しているわけではなく、自由な秩序の枠組みの中に限って、それを肯定しているのである。

以上から、コンスタンの恩赦は、あくまで憲法によって与えられた権限にすぎず、自由と実定法の意義を保つことを前提に、一般的な法律の規定を適用する際にどうしても生ずる不都合を、是正するためのものであったと言うことができる。したがって、彼の恩赦は、必ずしも君主の存在を不可欠とするわけではない。彼は、『大国に共和国憲法が成立する可能性にかんする、放棄された作品の断章』（執筆年不明）第8編第13章において、各県から選出された終身の代表からなる「共和国保全権力(*pouvoir préserveur*)」と呼ばれる合議体を設け、それに恩赦権を与えるべきであると言っているのである。この合議体は、立法権と執行権の対立を予防したり、地方自治体と中央政府との権限紛争に裁定を下したりするといった役割を担っており、恩赦権をもつことで市民との結びつきを強め、その権威を高める。また、彼によると、恩赦権はあらゆる合理的な立法の本質的な部分でさえある¹¹⁶。実は、ここでの彼の議論の多くの部分は、ほぼそのままの形で『憲政講義』にも収録されている。したがって、彼は国制のいかに問わず、普遍的な形で、恩赦について考察を加えているということがわかる。また、『憲政講義』には書かれていないが、『断章』によれば、共和国保全権力に恩赦の理由を提示させれば、恩赦の唯一の欠点である偶然の外観は

¹¹³ Constant, Benjamin, *Des réactions politiques*, An 5, pp. 80-91.

¹¹⁴ Constant, *Cours*, pp. 298-300.

¹¹⁵ *Ibid.*, pp. 80-81.

¹¹⁶ Constant, Benjamin, *Fragment d'un ouvrage abandonné sur la possibilité d'une constitution républicaine dans un grand pays*, éd. Henri Grange, Paris, 1991, pp. 433-434.

消え去り、人間性は、正義に由来する確実さと両立することができるのである¹¹⁷。

このように、コンスタンは憲法により恩赦権を規定すべきだと主張したが、一方のメーストルは、憲法の価値には否定的であり、『百科全書』とフランス憲法は、人間精神の最も醜い産物であると切って捨てた¹¹⁸。メーストルは、死刑執行人を、地上での罪への罰を神に代わって下す者と位置づけており¹¹⁹、ここから、彼がアンシャン・レジーム的な刑罰観をもっていたとすることができるだろう。実際、彼は、人々を震え上がらせるような刑罰と恩赦とのコンビネーションを、立法者の第一の目的としていたのである¹²⁰。

このように、全く異なるイデオロギーをもつ彼らが、恩赦については議論を一致させていたことは、恩赦の復活が、必ずしも君主制の復活という文脈だけでは説明できないということを示している。これまでも述べたことではあるが、恩赦は、赦す側と赦される側の間にある上下関係への暗黙の了解を前提に、その関係を再構築する役割を担っていた。したがって、恩赦権を有するということは、権力を有し、その権力を正当と認められることと同義なのである。

¹¹⁷ *Ibid.*, pp. 435-436.

¹¹⁸ *Œuvres complètes de J. de Maistre* t. 1-2, *Fragments sur la France*, pp. 216-217.

¹¹⁹ *Ibid.*, t. 3-4, *Les soirées de Saint-Petersbourg*, pp. 32-34.

¹²⁰ Guyon, *op. cit.*, p. 275.

第3節 新たな秩序の誕生と赦し

(1) 恩赦の廃止？

恩赦を廃止した刑法典が公布された1791年9月26日から1792年3月3日にかけて、国王は、少なくとも24通の赦免の書状と、1通の容赦の書状、4通の減刑の書状、71通のガレー船徒刑からの呼戻しの書状¹²¹、そして、2通の出廷許可の書状に押印している¹²²。これらの書状は、古法に従って裁かれた犯罪に与えられており、法規定に反しているというわけではない。しかしながら、1792年5月20日の議会で、ウアは、陪審制成立前の犯罪に、アンシャン・レジーム下で用いられていた、残虐な刑罰を科すことを防ぐため、恩赦の復活を提案していた。ゆえに、議会には、このような恩赦が行われていたことは、十分に把握されていなかったようである。

このことは、国王による革命議会への抵抗を意味しているのかもしれない。というのも、少なくとも赦免の書状については、アンシャン・レジーム期と恩赦廃止後で、同じような文面や形式が用いられており、一見すると、国王は、恩赦廃止後も「主権のしるし」として恩赦を与えようとしていたと思われるからである。

そこで、1792年1月11日にピエール・ルイ・アントワーヌ・ジャン＝バティスト・サン＝ヴィリエに与えられた赦免の書状を使って、アンシャン・レジーム期の書状と恩赦廃止後の書状とを、実際に比較してみたい¹²³。書状は大きく分けて3つのパートからなる。まず、はじめのパートから確認してみると、アンシャン・レジーム期の赦免の書状の冒頭には、「ルイ、神の恩寵によりて、現在と将来におけるフランスとナヴァールの王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ」と書かれていた。それにたいし、1792年の書状の

¹²¹ この時期、ガレー船徒刑からの呼び戻しの書状の数は、革命前と比較して明らかに増加しているが、その背景には、おそらく、1791年刑法典による、この刑罰の廃止があるだろう。以上の点については、第2章第1節(2)注62を参照。

¹²² AN BB³⁰ 47-49の3つのカートンを調査した限りの結果である。これらのカートンからは、その他にも、免除の書状が10通発見された。アバドによれば、この書状は、立法の上でも判例の上でも言及されてはいないが、ガレー船徒刑および追放刑からの呼び戻しが、刑の執行前に行われる場合や、これらの刑に付随する鞭打ち、焼き鐔の刑を免除する場合などに用いられた。Abad, *op. cit.*, pp. 56-57, 60. これゆえに、アバドは、死刑に対する免除の書状は考えられないと述べるが、BB³⁰ 49から、死刑にたいする免除の書状が発見された(1792年2月18日の、ルイ・コルニュにたいする免除の書状)。なお、福田により参照されたカートンは、当時の恩赦状およびそれに関連する資料のみを収めていたが、少なくとも、同時期のその他の書状も収めたAN Z³ 3にも恩赦状が含まれており、フォヴィオはこちらのカートンにある書状も引用している。Foviaux, *op. cit.*, planches VIII.

¹²³ 資料11を参照。また、併せて、17世紀の書状を訳出した資料6、7も参照されたい。なお、サン＝ヴィリエへの書状は、フォヴィオによると、Z³ 3のカートンに収められているが、BB³⁰ 49のカートンからも同じ文面の書状が発見された。フォヴィオの参照したものが羊皮紙に書かれていたのにたいし、福田の発見した書状は通常の紙からなっており、

「minute (原本)」の印が押されていたことから、これはおそらく、裁判所での保存のために作成されたものだと思われる。なお、「原本」の印は、資料11を参照。

冒頭は、「ルイ、神の恩寵と国の憲法律(*loi constitutionnelle de l'État*)によりてフランス人の王なり。現在と将来のすべての者に幸あれ」となっている。たしかに、1792年の書状には、王権が「神の恩寵」だけでなく、「国の憲法律」をよりどころとすると書かれており、また、国王が「フランスとナヴァールの」国王ではなく、「フランス人」の国王となっているという明らかな違いはあるが、「ルイ、…によりて…の王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ」という言葉が冒頭に置かれていることは共通している。これに続き、どちらの書状も「朕は…のつつましき嘆願を受けた。その内容は…」と、事件の内容が説明される。そして、最後に、嘆願者が恩赦状を「つつましく嘆願した」として、第1のパートが終了する。

2番目のパートからは、定型句がそのほとんどを占めているが、ここでも、アンシャン・レジームと恩赦廃止後に一致が見られる。1792年の書状を引用して見てみると、このパートには、「これらの理由により、正義よりも慈悲を好むことを望み、朕は前述のピエール・ルイ・アントワヌ・ジャン＝バティスト・サン＝ヴィリエを放免し、赦免し、容赦し、また、朕の手により署名されたこの書状により、上に説明されたような事実そして事件を、朕と正義にたいして招来されえたことを理由とする身体的・民事的・刑事的なあらゆる刑罰、罰金、汚辱の制裁ともに放免し、赦免し、容赦」し、「あらゆる命令、不出頭、裁判欠席、判決、その結果として生じうる下級裁判所の判決とパルルマン法院の判決を無効とする。さらに、彼の名声と、未だ没収されていない財産、仮に行われていたり偶然になされたとしても、事前に私訴原告人に行われた償いを取り戻し返還する」ことが書かれている。

最後の第3パートでは、アンシャン・レジームの書状でも、革命期の書状でも、まず、事件を管轄する裁判官にたいし、当該書状が認可され、「完全にかつ平和にかつ永遠に享受させまた用いらせ」ることが命じられている。次に、この書状が「反対する争い事や差し支えをすべて消し去りまた消し去らせる」ものの、嘆願者は、これを裁判所に提出して認可を求めなければならず、もしそうしなければ、書状は無効となると書かれている。この後、玉璽が押されたこととその日付が明記されている。

しかしながら、アンシャン・レジーム期と恩赦廃止後の書状には、注目すべき違いがある。上に指摘した国制上の変化に伴った違いはもちろんだが、1792年の書状には、「朕の全権と王権をもって」などの、国王の強い権威を示す言葉が見られなくなっているのである。前述のように、「朕の全権と王権をもって」という言葉は、14世紀初頭に初めて王令の中で用いられ、国王の絶対的な意思を表現し続けてきた¹²⁴。おそらくこの変化は、1789年の人権宣言第3条により、国王が主権者としての地位を国民に奪われたことや、1791年9月14日にフランス初の成文憲法が成立したことにより、国王が絶対君主ではなく、執行府という国の単なる一機関へと性格を変えたことが影響しているだろう。この点を、実際に当時の恩赦状をたどって考えてみたい¹²⁵。

¹²⁴ Krynen, *L'empire du roi*, p. 397. 第1章(2)も参照。

¹²⁵ なお、ここでは、フランス国立古文書館に所蔵されている、BB³⁰ 44 から 53 にかけて

まずは、1789 年の恩赦状を見てみよう。ここでは、11 月 25 日にデブリュイエ殿に与えられた赦免の書状を参照する¹²⁶。この頃から、「神の恩寵と国の憲法律によりてフランス人の王」という名称が登場している。これにはおそらく、同年 11 月 5 日の法律により、各法律の冒頭にこの言葉が掲げられることになったことが関係しているだろう。また、11 月 5 日の法律は、法律の末尾に「国の玉璽(sceaux de l'État)」が押され、国王の署名と副署が添えられると規定しているが¹²⁷、11 月 25 日の赦免の書状も、「朕の玉璽(notre sceal)」ではなく「国の玉璽」を押し、国王の署名と副署を添えることを明示している。さらに、この書状からすでに、「全権と王権をもって」という言葉が見られなくなっている。これとともに書かれていた、国王の「特別な恩寵(grâce especial)」という言葉はその後も用いられているが¹²⁸、1791 年 6 月 1 日の書状以降、ほとんど見られなくなった¹²⁹。また、「というのも、これが朕の嘉することだからである」の言葉も、1789 年 11 月の時点で恩赦状から姿を消した。ここから、国王が「神の恩寵によるフランスとナヴァールの国王」から「神の恩寵と国の憲法律によるフランス人の国王」に変化したことに伴い、国王と恩赦との関係にも変化が生じたと考えることができる。今や、国王自身が正義の源泉として恩赦を与えているのではなく、国家や法がその正当化根拠となっているのである。

次に参照するのは、1791 年 2 月 28 日にフランソワ・ガルニエに宛てられた赦免の書状である¹³⁰。ここでは、恩赦が与えられたので、検事などにたいし当該事件にかんする沈黙を命ずるという部分が見られなくなっている。ただ、前述の 6 月 1 日の書状には、その代わりに、「朕のすべての裁判官にこの永久の沈黙について命ずる」との一文が加えられており、また、6 月 15 日の書状など、それ以降の書状にも、裁判官や、国王委員と検事に沈黙を命じているものが見られるが¹³¹、7 月 28 日の書状で、このような言葉が削除されるに至

の 10 カートンのみを参照している。これらのカートンには、罪刑消滅、赦免、ガレー船徒刑からの呼戻し、出廷許可の書状などが収められているが、本稿では、比較を容易にするため、赦免の書状のみを検討する。これらのカートンに収められている書状のほとんどは、羊皮紙に書かれたものではなく、「原本」の印が押されたものであったが、1791 年 10 月 3 日のラヌロン兄弟への赦免(BB³⁰ 48)など、通常の紙に書かれた書状にも、羊皮紙の書状と同じように「送付(expédition)」の印が押されている例もあった。ただ、ラヌロン兄弟への書状には国王の署名や印璽が付けられておらず、本当に送付されたのかどうかは明らかではない。

¹²⁶ 資料 9 を参照。

¹²⁷ 1789 年 11 月 5 日=11 月 x 日のデクレ第 5 条を参照。『1791 年憲法の資料的研究』、93 ページ。

¹²⁸ 「全権」だけでなく、「特別な恩寵」という言葉も、教皇の言説に由来している。Rosenblieh, art. cit., p. 152.

¹²⁹ たとえば、BB³⁰ 45, 1791 年 6 月 1 日のニコラ・シュヴェエへの赦免の書状を参照。しかしながら、BB³⁰ 48, 1791 年 1 月 21 日のラジュアらへの赦免の書状には「特別な恩寵」の文字が見られる。また、この書状には、上から削除されてはいるが、裁判官にたいし沈黙を命ずる条項も書かれている。

¹³⁰ 資料 10 を参照。

¹³¹ その一例として、BB³⁰ 45, 1791 年 6 月 15 日のニコラ・メイエへの赦免の書状。

っている¹³²。2月28日の書状に戻ると、この頃から国王の署名と副署によりこの書状の効果が「ずっとゆるぎなく永続的なものになる」という言葉が書かれなくなっている。

革命期の赦免の書状は、以上のような変化を経てきた。この変遷をたどってみると、革命期にも国王により恩赦が与えられていたことは、直ちに国王が議会に反発していたことを意味するわけではないということがわかる。恩赦状は、おそらく法令に従って与えられており、また、恩赦の廃止が議論に上がる以前から、国王は自らの権威の低下を書状の文面に反映させていたのである。もし、国王が恩赦を用いて自らの求心力を取り戻そうとしていたのであれば、国王は書状に自らの偉大さを強調する言葉を多用したのではないだろうか。このことから、革命期の恩赦状の発行に、国王の戦略的意図はなかったとすることができるであろう。しかしながら、それは恩赦という行為が政治的な意義を失ったことを意味するわけではない。というのも、恩赦を廃止した議会自身が、赦しを用いて自らの正当性を主張しようとしていたからである。ただ、ここでは「恩赦」の言葉が正面から使われることはなかった。彼らは「大赦」を行ったのである。

(2) 恩赦と大赦

恩赦の廃止が決定された1791年6月4日から、恩赦が復活した共和暦10年テルミドール16日の間の12年間で、議会は大赦を少なくとも25回、すなわち、単純計算で1年あたり約2回も行った(表2)¹³³。これらの大赦は、大きく3つの場合に分けることができる。まず、1791年9月14日や9月23日、共和暦4年テルミドール18日(1794年8月5日)、共和暦4年ブリュメール4日(1795年10月26日)、共和暦10年フロレアル6日(1802年4月26日)などの、「革命にかんする犯罪」あるいは政治犯への大赦である。1792年9月17日の大赦は、決闘を申し込んだ者を対象としているが、大赦法の中身を見ると、その決闘は革命による意見の対立を原因としており、この大赦も同じ性質を有していたとすることができる¹³⁴。次に、1791年9月30日、共和暦2年フリメール8日(1793年11月28日)、共和暦4年フリメール7日(1795年11月28日)などの、反乱あるいは暴動にたいする大赦である。とりわけ、国民公会の時期には、このような大赦は、反乱を起こした「迷える人々(*peuple égaré*)」を子供とみなし、公会がパターナリスティックに彼らを「革命のレヴェルまで」引き上げることを意味した¹³⁵。実際、恐怖政治開始直前の1793年2月11日の大赦では、悪人に騙され、踊らされた結果、反乱を起こした「迷える人々」を釈放し

¹³² AN BB³⁰ 46, 1791年7月28日のラリギニ兄弟への赦免の書状を参照。

¹³³ Rulleau, *op. cit.*, p. 32. 一部の大赦の内容は、Poujaud, *op. cit.*, pp. 108-111 ; Viaud, *op. cit.*, pp. 92-95などを参照。

¹³⁴ Duvergier, *op. cit.*, t. 4, p. 545.

¹³⁵ Muller, C. A., *art. cit.*, p. 110. このような政策による精神的教育は、刑罰という国家的暴力を通じた身体的教育と相補的に作用することで、社会を型にはめることを目指した。

ている¹³⁶。総裁政府や執政政府の大赦は、主に反乱や暴動を対象としている。ただ、総裁政府による大赦は、反乱分子や亡命貴族など、例外規定が多く実効性に欠け、「社会的自殺」と評価された。その影響もあり、執政政府期には、広範な大赦が行われた¹³⁷。最後に、1791年9月28日、1793年2月12日、共和暦3年テルミドール10日（1795年7月28日）などの、軍人に対する大赦がある。

実は、アンシャン・レジーム期にも、同じような場合に罪刑消滅が行われていた¹³⁸。前にも少し述べたが、アンシャン・レジーム期には、ある地方の人々や脱走兵にたいし、国王の権威を傷つけたことについて、まとめて罪刑消滅を行うことが「大赦」と呼ばれたのである¹³⁹。そのため、革命期に議会が「大赦」を行ったことは、廃止されたはずの罪刑消滅が、名前を変えてそのまま生き延びたことを示しているようにさえ思われる。実際、ジャンクロは、慶事における大赦は、国王の即位時の恩赦を起源とすると述べているのである¹⁴⁰。

たしかに、恩赦の廃止を提案したルペルティエは、大赦の存在を認めていた。彼によると、ある特定の事実のみに適用される恩赦とは異なり、大赦は、人による差異を設けることなく一般的に行われるため、問題ではなかったのである¹⁴¹。語源的にも、恩赦と大赦は全く異なる概念に基づいているのであるから、囚人を解放するという外観だけにとらわれて、同じものだと考えることはできない。したがって、恩赦を廃止したからといって、直ちに大赦も禁止することにはならない。ただ、1791年憲法は、議会の大赦権について何も言及していない。ルペルティエは、立法府が大赦権をもつのは当然であると述べたが、憲法によりこの権限が与えられていない以上、立法府が大赦を行うことはできないし、憲法に規定されていない権限の存在をひとたび認めれば、統治機構はなし崩し的に新たな権限を自らに与え、またたく間に自由が奪われることになるだろう。たしかに、大赦は法律の形で与えられる。この点からすれば、立法府は無条件に大赦の権限を有するということも可能かもしれない。しかしながら、通常法律と大赦法は全く性質が異なるわけで、やはり、大赦権が無条件に立法権の中に含まれるとするのには、無理があるのではないだろうか。ゆえに、革命期に与えられた大赦は、極めて政治的な判断に基づいていたとすることができる。

¹³⁶ *Archives Parlementaire*, t. 58, pp. 449-450.

¹³⁷ Poujaud, *op. cit.*, p. 110.

¹³⁸ 第2章第1節(2)、第2節(1)注33、171を参照。

¹³⁹ Jousse, *Traité*, t. 2, p. 409.

¹⁴⁰ Jeanclos, Yves, *Dictionnaire de droit criminel et pénal*, Paris, 2010, p. 6.

¹⁴¹ *Archives Parlementaires*, t. 29, p. 737 ; *Œuvres de Lepeltier*, p. 229.

時期	議会	対象
1791年9月14日	立憲議会	革命にかんするすべての犯罪
1791年9月23日		アヴィニヨン、ヴナスク伯爵領における革命にかんするすべての犯罪
1791年9月28日		シャトー=ヴュー連隊の脱走兵
1791年9月30日		1788年5月1日以降の反乱で投獄・追放・ガレー船徒刑となった者
1791年11月13日	立法議会	1791年9月30日大赦をドルドーニュ県・シャラント県に適用
1791年12月31日		1791年9月30日大赦をシャトー=ヴュー連隊に適用
1792年3月26日		1791年9月23日と同じ
1792年9月3日		革命発生後に、小麦の自由取引にかんする法律に違反した者
1792年9月17日		決闘を申し込んだ者
1793年2月11日	国民公会	食料品にかんする暴動発生時における軽罪
1793年2月12日		封建的権利にかんする、軍隊などでの暴動における軽罪
共和暦2年プリメール8日 (1793年11月28日)		食料品の買占め・値上げにたいする暴動
共和暦2年テルミドール18日 (1794年8月5日)		反革命容疑者とされたすべての囚人
共和暦3年プリメール12日 (1794年12月2日)		ヴァンデ・ふくろう党の反乱参加者で1ヶ月以内に武器を捨てた者
共和暦3年ニヴォーズ29日 (1795年1月18日)		プリメール12日大赦をブレスト、シェルブールに適用
共和暦3年テルミドール10日 (1795年7月28日)		脱走兵
共和暦4年ブリュメール4日 (1795年10月26日)		純粋に革命にかんする犯罪
共和暦4年プリメール7日 (1795年11月28日)	総裁政府	ブリュメール4日の大赦を西部諸県の反乱に適用
共和暦4年ブリュクティドール8日 (1796年8月25日)		西部諸県の反乱で祖国の防衛のために武器をとった者
共和暦5年サン=キュロットの日1日 (1797年9月17日)		共和暦5年の第一次集会で逮捕・訴追された者
共和暦6年ブリュヴィオーズ25日 (1798年2月13日)		共和暦4年ブリュメール4日大赦をコルシカ島に適用
共和暦8年ニヴォーズ7日 (1799年12月28日)	統領政府	西部諸県住民で、すでに反乱から離脱した者
共和暦8年ヴァントーズ14日 (1800年3月3日)		西部諸県の反徒
共和暦8年テルミドール25日 (1800年8月13日)		共和暦8年ニヴォーズ23日の法律により憲法の適用外に置かれた者
共和暦10年プロレアル6日 (1802年4月26日)		亡命貴族

表2 1791年6月4日から共和暦10年テルミドール16日までの大赦の例

(Duvergier, J.-B., *Table générale, analytique et raisonnée des lois, décrets, ordonnances, réglemens, etc. : depuis 1788 jusques et y compris 1830, ouvrages faisant suite à la collection complète des lois : composé pour servir de table particulière à tous les recueils de lois, et surtout au bulletin officiel* t. 1, Paris, 1834, pp. 32-33 ; Viaud, *op. cit.* pp. 92-95
などを参照し、福田により作成)

このような大赦の中で注目に値するのが、1791年9月14日、共和暦2年テルミドール18日、そして共和暦4年ブリュメール4日のそれである。まず、1791年9月14日には、国王による憲法の裁可を受けて、革命にかんするあらゆる罪に赦しを与えられた。共和暦2年テルミドール18日の大赦は、この月の9日（7月27日）に起きたクーデタでロベスピエールが失脚したことを記念し、恐怖政治期に捕えられた人々を解放している。そして、共和暦4年ブリュメール4日の大赦は、共和暦3年憲法制定による国民公会解散の記念として、一部の亡命貴族を除いた政治犯に与えられた。つまり、これら3回の大赦はいずれも、革命の節目となる出来事を記念し、それ以前の体制により政治犯とされた人々に与えられているのである。さらに、これらの大赦には別の共通点があった。それは、革命を終わらせるという意図であった。

(3) 革命を終わらせるための大赦とその失敗

1791年9月14日、共和暦2年テルミドール18日、そして共和暦4年ブリュメール4日に行われた大赦は、革命を終わらせることを目的としていた。したがって、これらの大赦は、革命後の新しい時代のはじまりを告げるものであった。アレントによれば、はじまりというのはそれ自体神であり、新たな原理の形成であった¹⁴²。それゆえに、革命議会は「神の権利」である赦しを用いて、新たな原理からなる、新たなはじまりを宣言したのである。つまり、これらの大赦は、その時々政府が、どのような形で革命中の暴力を清算し、どのようにして新たな秩序を作り上げようとしていたのかを映し出している。しかしながら、実際には、これらの大赦により革命が終わることはなかった。なぜ、大赦により革命を終わらせることができなかったのだろうか。ここでは、前述の3回の大赦について考察することにより、その時の権力がどのような秩序を望み、またなぜその秩序を構築することに失敗したのかを考えてみたい。

1791年の大赦は、国王により、憲法の受諾と引き換えに提案された。彼は、9月13日の議会への書簡の中で、憲法の制定により革命が終結し、「一般的和解」が成立することを「すべてのフランス人の国王」として求めた。したがって、この大赦は立憲君主制の成立を意味している。しかしながら、国王によれば、憲法の完成にもかかわらず、最近の出版の濫用により、意見が無数の党派に分裂し、法律を含む、あらゆる権威は弱まる一方であった。ゆえに、法律への敬意を取り戻し、秩序を再建させ、すべての市民を結合させなければならない。国王にとって、自由な発言は無秩序の元凶であり、法律の支配とは相容れなかった。彼は、無秩序に立ち向かうためには、すべての人々の意見がひとつにまとまる必要があると考えていたのである。さらに国王は、法律を完全に執行するためには、過去の忘却が必要だと述べる。この忘却を通じて、意見の氾濫により違法行為に誘い込まれた人々に、

¹⁴² Arendt, *op. cit.*, p. 213. アレント前掲訳書、274 ページ。

国王がすべてのフランス人のものであることを示し、法律の権威を取り戻すのである¹⁴³。こうして、革命にかんするすべての刑事手続きの停止が決定されたのであった¹⁴⁴。

この大赦は、国王の勝利を意味しているように見える。その理由はふたつある。まず、ヴァーニッヒによれば、この大赦は、同年 6 月 22 日に起きた、国王のヴァレンヌへの逃亡の事実の読みかえを意味したからである¹⁴⁵。ラファイエットにより提案された大赦法の原案には、国王の逃亡を「国王の出発」と表現する箇所があったが、それでも、この案は歓声をもって採択された¹⁴⁶。というのも、この大赦は国王だけでなく、議会にとっても無益なものではなかったからである。国王の逃亡についてお茶を濁すことは、右派だけでなく、議会の分裂を恐れる左派にとっても好都合であった¹⁴⁷。こうして、翌日の 14 日に議会が確定法案を提出し、大赦法を成立させたのである。次に、この大赦が国王に有利であったように思われるのは、法令のタイトルや条文に、アンシャン・レジーム期の恩赦の中で国王の自由が最も広範に認められていた「罪刑消滅」の語が用いられていたからである。司法大臣も、国王委員への書簡の中で、この大赦のことを罪刑消滅と呼んでいる。さらに彼は、1791 年 10 月 29 日付の各裁判所への通達で、大赦を「恩赦」と表現した。しかも、当時の司法大臣は、6 月に恩赦の廃止を主張した、デュポールその人だった。

たしかに、デュポールは恩赦の復活の可能性を認めていた。また、この通達においても、「かつての状態から自由な状態への急激な移行」には、激しい動揺と無秩序が必然的に伴われると述べたうえで、「罪人の数と状況の性質が、彼らにとって身体刑の恐ろしさを不処罰よりも有害とする場合には」社会の利益は恩赦にあるとしている。「仁慈が法律への愛と敬意を取り戻させることができる時…それは公共善の偉大なる法律によって命じられる」のである。さらにデュポールは、大赦法の前文を引用して、この大赦は「愛国心、友愛、君主への愛着という共通感情のなかに」それまでの軋轢を解消するために行われると述べる。また、彼によれば、その精神は「落ち着きと平和を蘇らせ、過去の不和を思い出になるまで鎮め、偉大なる仁慈の行為により、法律の支配がはじまった時 (*les premiers moments*) を知らしめること」である。そして、この大赦により「一般的忘却の範」を示すのは、国王なのである¹⁴⁸。陸軍大臣もまた、この大赦が国王の「新たな仁慈のしるし」

¹⁴³ *Archives Parlementaires*, t. 30, pp. 620-621.

¹⁴⁴ 大赦法の法文は、資料 2 を参照。

¹⁴⁵ Wahnich, Sophie, *Écrire l'histoire des violences politique ou les amnistier*, dans *Une histoire politique de l'amnistie*, sous la direction de Sophie Wahnich, Paris, 2007, pp. 72-73. ヴァレンヌ逃亡事件から 201 年後の 2012 年 6 月 22 日に、ラジオ France Culture で放送された *La Fabrique de l'Histoire* で、ヴァーニッヒのこの著書が取り上げられた。なお、この文献は、前述のドラリュエ発言に関連して紹介された。

¹⁴⁶ *Archives Parlementaires*, t. 30, p. 621. この法案や国王の提案では「大赦」の語は使われておらず、14 日に確定法案を提出したブリオワ＝ボーメッツが、初めてこの言葉を用いた。*Ibid.*, p. 632.

¹⁴⁷ Martin, Jean-Clément, *La Révolution française, 1789-1799, une histoire socio-politique*, Paris, 2008, p. 137.

¹⁴⁸ *Archives Parlementaires*, t. 35, p. 102.

であると述べた¹⁴⁹。したがって、大臣たちの間では、この大赦が、事実上、国王の恩赦であるという認識が共有されていたと考えられる。また、大赦法の第 3 条は、国王が大赦の対象となる手続きや判決の一覧表(*État*)を司法大臣に送付するよう求めると定めているが、この手順はおそらく、アンシャン・レジーム期の国王の聖別戴冠式などにおける一般的罪刑消滅の場合と同様、一覧表に基づいた一斉の釈放を想定しており¹⁵⁰、ここからも、この大赦が国王の恩赦と同じようなイメージをもたれていたと推定することができる。

ところが、1791 年の大赦は、アンシャン・レジーム期の囚人解放と同様にはいかなかったようである。実は、この大赦法の適用を判断していたのは、国王政府ではなく、各地の裁判所であった。ところが、大赦法の第 1 条に規定された、「革命にかかわる事実」の内容が曖昧であったため、現場では混乱が生じた。こうして、執行にはばらつきが生じ、議会では大赦法の適用範囲にかんする議論が何度も行われた¹⁵¹。

また、地方からは、議会に向けて、大赦の執行の遅滞を訴える陳情がなされた。たとえば、大赦法の制定から約 1 か月後の 10 月 18 日には、ロワール川に近いドルドーニュ県の農民により、610 名の労働者がいまだ獄中にいるとの訴えがなされた¹⁵²。この訴えを受け、後にフランス民法典の 4 人の起草者のひとりとなるビゴ・ド・ブレアムヌーは、司法大臣に、15 日以内に答弁を行うことを要求した。ところが、大臣は 10 月 28 日と 11 月 16 日に、大赦は裁判所により行われるとの回答を繰り返した¹⁵³。彼がこの大赦のことを「恩赦」と述べた書簡が読み上げられたのは、11 月 16 日の発言の中であった。結局、この大赦にかんする議論は、9 月 12 日にフランスに合併されたばかりの、旧教皇領アヴィニオンにたいする大赦法の適用の可否という問題もあり、少なくとも、翌 1792 年の 3 月まで終わることはなかった¹⁵⁴。大赦が新たな秩序の誕生を告げるセレモニーとなるためには、同時にかつ大規模に行われなければならない。こうして、1791 年の大赦は、革命の終焉をもたらすことに失敗したのである。

¹⁴⁹ *Ibid.*, t. 34, p. 292.

¹⁵⁰ ルイ 16 世の聖別戴冠式や王太子の誕生の際に用いられた一覧表は、AN BB³⁰ 54 を参照。この表には、一定のひな形があったわけではない。たとえば、1781 年の王太子誕生による恩赦の際、ヴェルサイユの監獄では受益者の名前のみが書かれた名簿が作成されたが、別の監獄では、氏名とともに、判決を下した裁判所を示した名簿が作られた。

¹⁵¹ voir *Archives Parlementaires*, t. 51, p. 23. デュポールによると、1791 年 11 月 16 日の時点で、司法大臣に向けて 300 件以上の問合せがなされていた。*Ibid.*, t., 35, p. 101.

¹⁵² *Ibid.*, t. 34, pp. 267-268. しかし、別の箇所では、労働者の人数は 61 名となっている。たとえば、*Ibid.*, t. 35, p. 51 を参照。

¹⁵³ *Ibid.*, t. 34, p. 470, t. 35, pp. 101-102.

¹⁵⁴ 1791 年 9 月 14 日の大赦のアヴィニオンへの適用は、9 月 23 日の時点で決定されていた。しかしながら、パリから遠く離れたアヴィニオンへの伝達が遅れ、囚人の釈放は進んではいなかった。また、ガデ議員によると、大赦の執行の遅れの背景には、アヴィニオンのフランスへの合併が完成したのが 10 月 26 日で、9 月の時点では、議会は現地の権利との関係から、犯罪を追及することも、大赦を宣言することもできなかったという事実がある。*Archives Parlementaires*, t. 40, pp. 43, 54.

なお、別の大赦の提案の時ではあるが、1792年2月8日、ラキュエ議員は、恩赦の権利とは議会に「委任された権利の中で最も美しい権利」であると述べた¹⁵⁵。したがって、9月14日の大赦が目指した「一般的和解」は、それを行う者たちのレヴェルですでに崩壊していたとすることができるであろう。議会議事録の索引を参照する限り、革命の発生からこの大赦までに行われた唯一の大赦は、国璽尚書により起草された「王令」により行われていた¹⁵⁶。したがって、9月14日の大赦は、初めて議会による法案を採用した例であった。大赦法のタイトルにはabolitionの言葉が掲げられていたが、議員たちにとって、それはあくまで議会による「罪刑消滅」であり、国王は、そのきっかけを提示したに過ぎなかったのである。

執行段階での合意の欠如や法令の曖昧さといった問題は、共和暦2年の大赦にも共通して見られる。この大赦は、テルミドール9日（7月27日）のクーデタにより、ロベスピエールが失脚したことを受けて行われた。大赦に際し、国民公会は、囚人の逮捕の理由を本人やその両親などに明示することで、公平さをアピールしようとした¹⁵⁷。こうして、「真の忠実なジャコバン」による「テルミドール派」国民公会は、新たなスタートをきるはずであった¹⁵⁸。

大赦法の第1条は、一部を除いて、「[反革命の]容疑者として身柄を拘束されているすべての市民を釈放する」と定めており、ここから、ほとんどの囚人が解放されたような印象が与えられる。しかしながら、実際はそうではなかった。というのも、釈放にはジャコバン・クラブへの嘆願が必要であり、その可否の決定は、全国保安委員会の構成員個人の干渉を通じ、きわめて混乱した形で行われたからである¹⁵⁹。なぜ嘆願が必要だったのかというと、無条件に監獄を開放することで、大赦に相当しない人々も釈放されるかもしれないとの懸念があったからである¹⁶⁰。さらに、テルミドール派国民公会は、大赦により自分たちの友人や親せきを解放する一方で、恐怖政治を進めた人々を厳しく排除した。彼らは、恐怖政治を敷いたかつての国民公会との断絶を明らかにすることによって、初めてその正当性を主張することができたからである。こうして、恐怖政治の担い手たちは「テロリスト」と呼ばれ、革命裁判所で裁かれた結果、ギロチンに送られた。クーデタ後、国民公会では、「正義を議題に」がスローガンとして叫ばれたが、それは、ロベスピエールらの率いたかつての議会への復讐と一体をなしていた。したがって、この大赦は和解ではなかった。恐怖政治の被害者にたいする「正義」と恐怖政治への「復讐」、それが、この時の大赦の描

¹⁵⁵ *Ibid.*, t. 38, p. 276.

¹⁵⁶ 1789年8月17日の脱走兵にかんする王令。 *Ibid.*, t. 8, pp. 437-438.

¹⁵⁷ 大赦法の法文は、資料3を参照。

¹⁵⁸ Kennedy, Michael L., The “Last Stand” of Jacobin Clubs, *French Historical Studies*, v. 16, n. 2, 1989, p. 311.

¹⁵⁹ Furet, et al., *op. cit.*, pp. 428-429. フュレほか前掲訳書（3）、162ページ。Baczko, Bronislaw, *Comment sortir de la Terreur : Thermidor et la Révolution*, Paris, 1989, p. 102. バチコによると、テルミドール18日から23日の5日間で、478名の囚人が解放された。

¹⁶⁰ Baczko, *op. cit.*, pp. 99-100.

いていた新たな秩序だったのである¹⁶¹。

ところが、この狙いは、地方にも共有されていたわけではなかった。たとえば、南仏のマルセイユやモントーバンの急進的なジャコバン・クラブは、ロベスピエール失脚のニュースを受けた数日後、パリに委員を派遣し、貴族や穏健派が不処罰の利益を得ることのないよう求めた。さらに、翌月のフリュクティドール3日（8月20日）には、サヴォワ県のシャンベリのクラブが、革命政府の継続を求めて、パリのクラブに宛てた請願の写しを印刷して、各地のクラブに回し始めた。そして、最終的には200ヶ所のクラブがこの大赦に懸念を示した。

ただ、各地のクラブは、大赦それ自体に異議を唱えていたわけではない。フリュクティドール4日（8月21日）に行われたマルセイユのクラブの嘆願によれば、彼らは、釈放された者の名簿が作成されておらず、反革命派まで釈放された可能性があることを問題視していたのである¹⁶²。受益者名簿の作成は、国民公会でも、マラルメにより、テルミドール23日（8月10日）に主張されていた。この主張は、一度は反故にされたが、フリュクティドール7日（8月24日）のジャコバン・クラブで再び議論となっている。マラルメによれば、名簿の作成されていないこの大赦は、アリストクラシーと穏健派の勝利であった¹⁶³。結局、大赦に異議を唱えた人々にとって、今回の大赦は、一部の「愛国者の見てくれを被って、ロベスピエール主義の被害者だったと言い張る者」を逃がしているに過ぎなかったのである¹⁶⁴。ところが、クラブを代表して、名簿の作成を国民公会に訴えたレッスンは、議員たちにより、陰謀家でロベスピエールの継承者だと揶揄され、取り合ってはもらえなかったのであった¹⁶⁵。

共和暦3年の大赦の後も、国民公会はその政策を変更することはなかった。この年のヴァントーズ5日（1795年2月23日）の法律がテロリストらの居住地を定め、ジェルミナル21日（4月10日）の法律が彼らの武装を解除したため、人々は、事実上、彼らへの復讐を自由に行えるようになった。人々は、テロリストたちが捕われている監獄を襲いさえした¹⁶⁶。こうして、命からがら逃れたテロリストたちは、パリなどの大都市に集結した。

一方、ちょうどこの頃、革命発生以後、国外へ亡命していた貴族たちが帰国を始めた¹⁶⁷。また、パリでは、恐怖政治を憎む人々が王党派に近づいていった。王党派は徐々に力をつけ、共和暦4年ヴァンデミエール13日（10月5日）、ついに反乱をおこし、国民公会を包囲した。反乱はナポレオン・ボナパルトにより、その日のうちにほぼ鎮圧されたが、その

¹⁶¹ Baczko, Bronislaw, *Politiques de la Révolution française*, Paris, 2008, pp. 168-169.

¹⁶² Kennedy, art. cit., pp. 313-315, 317.

¹⁶³ Baczko, *Terreur*, p. 103 ; Aulard, François Victor Alphonse, *La société des jacobins*, t. VI, Paris, 1897 ; réimpression, New York, 1973, pp. 374-375 ; Kennedy, art. cit., p. 317.

¹⁶⁴ Aulard, *op. cit.*, p. 390.

¹⁶⁵ *Ibid.*, p. 380.

¹⁶⁶ Baczko, *Politiques*, pp. 217-226.

¹⁶⁷ Baczko, Bronislaw, *Briser la guillotine. Une amnistie thermidorienne, Crime, Histoire & Société*, v. 8, 2004, pp. 7-8.

勝利にはテロリストたちの協力が大きくかかわっていた。そのため、テルミドール派国民公会による政策はここで大きく変化した。これ以降、対立の構図は「国民公会+テロリスト」対「王党派」となるのである。

共和暦 4 年の大赦は、このような構図において行われた。ただ、構想の段階では、すべてのフランス人の和解が目指されていたようである。大赦を提案したボーダン、この大赦が宗教的セクトを含むすべての党派に認められるべきだと考えていた。たしかに、彼もまた、ヴァンデミエール 13 日などの反乱で国民公会が包囲されたことについて、王党派を批判した。しかしながら、彼は法律がすべての人に平等に適用されることを望んだ。ボーダンによると、あらゆる暴力は連鎖する。したがって、国民公会は、これを止めるために尽力しなければならない。ところが、死によって反乱分子の罪を償わせれば、家族の怒りをあおるだけで憎悪の連鎖が止まらなくなるし、厳罰は暴君が用いるものであって、新たな抵抗を生むだけである。すると、政府は強化されるどころか弱体化し、公共の安全も危うくなる。結局、刑罰を手加減なしで与えるべきなのは平和な時だけで、このような混乱の時期に必要なのは、赦しなのである¹⁶⁸。

ボーダンにとって、この大赦は、革命を終わらせるために不可欠であった。また、この大赦は、新憲法の制定と新議会の発足による、新しい秩序の形成と結びついていた¹⁶⁹。新しい議会の 3 分の 2 は現職から選出され、安定を維持することで憲法を確実に適用することが目指された。このことを定めたのが、フリュクティドール 5 日（8 月 22 日）に、憲法とともに採択された、いわゆる「3 分の 2 法」であった。大赦、憲法、3 分の 2 法は、ボーダンその人において結びつく。彼は憲法を起草した 11 人委員会のメンバーのひとりであり、さらに、「3 分の 2 法」を「革命を終わらせるため」の方法として提案していたのである¹⁷⁰。

ところで、この大赦法は、もうひとつの「新たなはじまり」を規定している。大赦法の第 1 条は、死刑の廃止を規定していたのである。死刑の廃止は、おそらく、革命の終焉を象徴づけるためのセレモニーという意味で、大赦とひとつをなしているだろう。また、彼にとって、死刑の廃止は君主制の廃止と結びついていた。つまり、人々に忘却を与えることで、国内の政治的対立を收拾し、革命の終焉と新たな国家の誕生を宣言するとともに、憎しみの連鎖の元凶となっていた死刑を廃止することにより、それを象徴づけるのである。そこで、彼は革命広場をコンコルド広場の名に、広場に至る道を革命通りの名に改めることを提案する。革命はコンコルド（和合）へと向かっていくのである。そして、この、多くの人々が血を流した和合の広場で、恐怖政治の象徴であるギロチンを、朝日が昇るとともに焼くのだと彼は考えていた¹⁷¹。

しかし、この死刑廃止のセレモニーに賛成を表明したのは、フィリップ＝ドルヴィルだけ

¹⁶⁸ *Moniteur*, 8 et 9 brumaire, An 4.

¹⁶⁹ Baczko, *Politiques*, pp. 240-241.

¹⁷⁰ *Moniteur*, 16 fructidor, An 3.

¹⁷¹ Baczko, *Briser la guillotine*, pp. 20-21.

だった。2日後に再開された議論でも、死刑を即座に、また、無条件的に廃止することに賛成したのは、シェニエだけであった。その他の議員たちは、ボーダンの寛容と死刑廃止の提案に、あからさまな不満を示した¹⁷²。結局、大赦の範囲には制約が加えられ、ヴァンデミエール13日の蜂起にかかわった人々や亡命貴族は除外された。そのうえ、死刑廃止も「一般的平和」まで持ち越されることになったのである。

実は、ボーダンが大赦を提案したその日、国民公会は、ヴァンデミエール13日の蜂起に参加した者、亡命貴族、王党派、宣誓拒否僧、そして亡命貴族の家族に追放を命ずる法律を制定していた。したがって、ボーダンの理想が受け入れられるはずはなかった。結局、国民公会は新たな「敵」を創設することなしに、かつての「敵」を受け入れることはできなかったのである。

さらに、今回の大赦も、一斉に執行されたというわけではなかった。しかも、マルセイユやトゥーロンでは、この大赦自体が無視された。恐怖政治期に投獄されていた人々は、大赦により恐怖政治の担い手たちを刑事告訴できなくなったため、民事訴訟であれば可能だとして、彼らに法外な損害賠償を請求した¹⁷³。政府もまた、この大赦を否定するかのようになり、「総裁政府の恐怖政治」と呼ばれる、亡命貴族や宣誓拒否僧を主なターゲットとする弾圧を繰り返した¹⁷⁴。議会でも、この大赦法は1791年のそれよりも曖昧だとの指摘がなされ、その適用範囲にかんする議論が1年以上続けられた。しかも、この議論の中で、立法府は大赦権をもつのかという、根本的な疑問さえ投げかけられたのである。

(4) 立法府は大赦権をもつのか？

国民公会解散の大赦から約10か月後の、共和暦4年フリュクティドール10日(1796年8月27日)、議会では¹⁷⁵、自らの大赦権を否定する発言がなされた¹⁷⁶。しかし、ルペルテ

¹⁷² *Moniteur*, 9 et 14 brumaire, An 4.

¹⁷³ *Procès-verbaux des séances du Conseil des Cinq-Cents*, fructidor, An 4, p. 418.

¹⁷⁴ Brown, Howard, G., *Mythes et massacres : reconsidérer la «terreur directoriale»*, *Annales historiques de la Révolution française*, n. 325, 2001.

¹⁷⁵ 共和暦4年の大赦と同時に国民公会は解散された。したがって、この時の政府は総裁政府であり、議会も、500名からなる五百人会と、250名からなる元老会の二院制と改められている。

¹⁷⁶ この年のテルミドール20日(8月7日)にも、フレデリック・エルマンが、西部諸県への大赦にかんする議論の中で、未決の犯罪にたいする大赦は、人権宣言による法の平等な適用に反し、既決の場合にも、憲法に反する者にたいし恩赦権(*droit d'aggracier*)を行使することになること、憲法制定国民議会により、憲法上の諸機関は恩赦権をもたないことがすでに確認されていること、複数の者に恩赦を行うことができれば、ひとりの者に恩赦を行うことも可能となり、あらゆる犯罪者が嘆願するに至ることの3点を理由として、議会の大赦権に反対している。*Moniteur*, 29 thermidor An 4. また、フリュクティドール8日(8月25日)にも、ダラックが、大赦は、立法府を法の上に立たせることを意味するため、憲法制定権力(*autorité constituante*)の篡奪であると述べた。彼によれば、大赦は、法の前の平等や法の遡及的効果の禁止といった、憲法的価値と社会契約を侵害する。ゆえ

イエによれば、議会の大赦権は自明だったはずである。にもかかわらず、なぜ、五百人会
は自らの大赦権に疑問を投げかけたのだろうか。

議会の大赦権にかんする議論のきっかけを作ったのは、この年のフロレアル 15 日（5 月
4 日）に、カミュによりなされた、ブリュメール 4 日大赦の範囲を拡大するとの提案であっ
た¹⁷⁷。この提案については、かねてから議論がなされており、その中には、立法府の大赦
権にかかわる発言も見られたが、フリュクティドール 10 日のデュプランティエの発言によ
り、4 日間にわたる集中的な議論の口火が切られた。彼は、共和暦 7 年の恩赦復活の提案の
際にも、恩赦は違憲だとしてこれに反対することになるが、彼にとって、恩赦と大赦は同
じものであった¹⁷⁸。したがって、主権者たる人民は、国王から恩赦権を剥奪したが、これ
は大赦権の剥奪をも意味していたと彼は言う。また、共和暦 3 年憲法により、立法府を含
むすべてのフランス人は恩赦権を禁じられ、復権も、法律により規定された方法に限定さ
れた。ゆえに、彼にとって、ブリュメール 4 日の大赦は、憲法にたいする侮辱であった。
彼によると、被告人から裁判される権利を奪うことは誰にもできず、議会は犯罪を犯罪で
なかったと言うことはできない。そもそも、大赦は、歴史的に、社会にたいする犯罪に向
けられており、社会全体により行われなければならない。したがって、大赦は、憎しみと
復讐を断ち切る必要があると社会全体が判断した時に、その社会自体により行われるので
ある¹⁷⁹。

翌日以降にも、デムーランやシメオンが、大赦の違憲性について意見を述べている。ま
ず、デムーランは、大赦はすでに命じられているので、議会の大赦権の有無にかんしては
立ち入るべきではないとしながらも、憲法が制定されてからは、議会はすべての権力を掌
握するわけではなく、憲法により与えられた権限しかもたないとして、議会の大赦権に反
対した。それと同時に、彼は、大赦権を禁じようとする人々は、恩赦と大赦を混同してい
ると指摘する。彼によると、恩赦は部分的で、常に責任(*faute*)を前提とする一方、大赦は
一般的で、忌むべきところがなく、赦しでもない。というのも、大赦は、党派的な熱狂(*fureur
des partis*)による政治的対立で生じた、あらゆる過ちや損害にたいする相互的な忘却だから
である。このような対立においては、当事者双方に責任があり、したがって彼らは何らか
の罰に相当するので、立法府により、忘却や和解、平和のための大赦が行われるのである。
たしかに、恩赦は、裁判官や法律の上に立つ主権者にしか行うことができないが、立法府
は、党派的な情熱により人々が道に迷った時には、すべての市民にたいする裁判手続きを

に大赦は、恩赦と同様、暴君が情熱に身を委ね、あらゆる犯罪を行うことを可能にする権
利であり、法律の厳格な執行のみにより維持される国家にとっては、自殺行為であった。
Moniteur, 14 fructidor An 4.なお、ダラックは、発言の中で大赦を「恩赦」と言い換えてお
り、フレデリック・エルマンも恩赦と大赦を混同している。

¹⁷⁷ *Moniteur*, 22 floréal An 4.

¹⁷⁸ *Ibid.*, 19 germinal An 7. この時の議論は、本章第 1 節（2）を参照。なお、ここでも彼
は恩赦が立法行為であると述べている。

¹⁷⁹ *Procès-verbaux*, p. 186 ; *Moniteur*, 16 fructidor An 4.

免除することが一般利益にかなうかどうか、判断することができるのである¹⁸⁰。次に、シメオンは、立法府による大赦は権力分立と矛盾していると述べた。彼によれば、大赦は和解であるので、諸個人の諸個人にたいする犯罪(*délit commis isolement par des individus contre d'autres individus*)の場合にしかこれを行うことはできない。しかしながら、個人間の犯罪(*delit privé*)は司法権の管轄(*ressort*)にあるので、立法権も執行権もそこに介入することは不可能である。ゆえに、大赦が行われうるのは、政治的で一般的な犯罪の場合に限られる。たとえば、内戦や反乱の場合だと、大赦は、勝者が寛大さをもって敗者と和解することを意味する。一方、個人間の犯罪の場合に関係するのは正義のみである。大赦の遡及効果は不正義であり、犯罪と無秩序を生み出す。つまり、大赦は、政治犯にたいしては政府の寛大さを意味するが、普通犯にたいしては弱さを表すに過ぎない。また、それは法律の上に立つ意思があることを含意するため、共和国に絶対政府の行為を置き、憲法を脅かす。さらに、大赦は公的精神を墮落させ、法律による制裁を破壊し、社会の秩序を脅かすのである¹⁸¹。

彼らの発言から見て取れるように、議論は大赦の何たるかに及んでいた。たしかに、これまで議会は、大赦を何度も行いながらも、その定義について十分に明らかにしてきたわけではなかった。おそらくそのため、議員たちの大赦観は分裂していた。11日(8月28日)に発言したドヌーヌによると、大赦は、偏りや例外なく、衡平をもって行われる刑法の修正であった。彼によると、刑法に規定されていない過ち(*erreur*)などに科せられた刑罰を取り除くことは、容赦ではなく正義に過ぎないから、大赦は刑法により予定された犯罪にたいしてしか行うことができない。また、それは和解の行為であり、立法者の情けではないのである。その翌日にも、トルーエが、大赦は迷える人々の「過ち」に適用されると述べている。しかしながら、彼によれば、この大赦は、そのような過ちにたいする「恩赦」であり、「容赦」と忘却により求められるのである¹⁸²。さらに、13日(8月30日)には、ボルヌが、件の大赦は「恩赦の法律」であると述べた。彼によれば、この大赦法は、国民公会の最後の裁定であり、その、名誉はあるが骨の折れる仕事の最後を飾るにふさわしい「仁慈の法律」である。それと同時に、大赦は、内戦など、国家にとっての一大事の際に与えられる、勝者から敗者への「恩赦状」であり、過去の行為の忘却なのであった¹⁸³。

恩赦が伝統的に「主権のしるし」とされてきたことを思い出すと、議員たちが恩赦と大赦を混同したうえで大赦を肯定したのは、彼らが自分たちを主権者だとみなしていたからだと推測できる。逆に、彼ら自身の主権を否定する発言もなされている。たとえば、12日(8月29日)にはルメレルが、一般意思の概念を持ち出して、このように述べている。一般意思は代表されるものではなく、代表制の性質上、代表の行為、すなわち法律が一般意

¹⁸⁰ *Moniteur*, 17 fructidor An 4.

¹⁸¹ ただ、シメオンは、大赦やすでに公布されているので、元のままの状態で執行しなければならないと述べている。

¹⁸² *Procès-verbaux*によると、この発言は11日に行われた。*Procès-verbaux*, pp. 198-199.

¹⁸³ *Moniteur*, 18 fructidor An 4.

思であると擬制されているに過ぎない¹⁸⁴。しかしながら、彼はこのことを理由に、議会の大赦権を退けるわけではない。むしろ彼は、大赦が有害となる可能性を認めながらも、憎しみを消すことでフランス人を和解させるという目的があれば、立法府の行為は一般意思を代表していると述べて、立法府による大赦を認めるのである。彼に続き、ラリヴィエールが、ルソーやベッカリーアを引き合いに出して、「恩赦を行う権利」すなわち、法律により与えられた刑罰を取り除く権利は、法律の上に立つ主権者のみがもつとして、議会の大赦権を否定した。彼によると、憲法をもたなかった国民公会でさえ大赦権を有していなかったのだから、憲法により権利を制限されている議会が大赦権をもつことはありえなかった¹⁸⁵。翌 13 日にも、シェニエが『社会契約論』に言及しているが、彼は立法府のみが大赦権をもつとしている¹⁸⁶。というのも、執行や司法がこの権利を持つとは誰も述べていないし、すべての能動市民により組織される第一次集会も、規模が大きすぎてこの種の問題に対応するにふさわしくないからである。彼によると、フランスのような規模の大きな国家では、立法権が人民の意思を代表し、彼らのために大赦法を制定し、彼らの名において赦しを与えるのである¹⁸⁷。

当時の政治状況を主眼とした発言もなされている。まず、11 日にはエシャセリオーが、この問題は政治的関係を含んでおり、時間が解決するものであるので、議会の場で論ずるべきではないとはしながらも、当時の政治的状況を理由として、広範な大赦に反対した。彼によると、大赦は迷える人々が、情熱にかきたてられた結果、犯した過ちのうち、刑法典により刑罰の規定されていないものに与えられる。したがって、大赦は、政治的意見を理由に無実の罪に問われた人々だけに行われなければならない¹⁸⁸。大赦が犯罪を生み出すとの意見は、その他の議員たちによっても出されている。発言者は明らかではないが、12 日には、大赦は犯罪にとっては勝利であり、被害者には侮辱となる(*triomphe pour le crime et une insulte de plus pour ses victims*)ので、大赦は、少なくとも平和の到来まで延期されなければならないとの主張が見られた¹⁸⁹。13 日にも、大赦により反乱分子が社会に復帰し、新たな陰謀を企て、その結果、立法府は再び大赦を行わざるを得なくなるとの意見が出されている。逆に、オブリなど、政治的理由から大赦を正当化する意見もあった。彼によれば、立法府の行為には必ず社会にたいする政治的影響があるので、大赦はその権限を

¹⁸⁴ この点、法律は「推定された一般意思」であるとして、「真の一般意思」である恩赦に道を譲るべきだとしたシャザルの発言を想起されたい。本章第 1 節 (2) を参照。

¹⁸⁵ また、彼は、仮に立法府が大赦権を有していたとしても、それを行使すべきではないと述べている。 *Moniteur*, 17 fructidor An 4.

¹⁸⁶ *Procès-verbaux* p. 231 では、ある議員が、大赦を「[加害者、被害者の] 双方 [裁判の?] 過ち(*tort*)と犯罪の両方を忘れること」と定義し、誤って大赦に容赦(*pardon*)の概念が結び付けられていると指摘している。この議員によると、この誤解の原因は、国王が、決して過ちを犯しえないと言い張りながら、大赦を濫用的に利用したことにあった。

¹⁸⁷ *Moniteur*, 20 fructidor An 4.

¹⁸⁸ *Ibid.*, 17 fructidor An 4.

¹⁸⁹ *Procès-verbaux*, p. 224.

踰越しているとは言えないのである¹⁹⁰。

最終的に、議会はドヌーの意見に与した。ただ、最終的な議論の中心となったのは、大赦を一般的に行うか、その範囲に制限を設けるかという問題であって、立法府の大赦権が積極的に宣言されたわけではなかった。ここまでの議論を見る限り、革命期に登場した大赦の概念は、それを行う議会の中でさえも明確に把握されていなかったと言うことができるだろう。大赦は、定義も正当性も曖昧なまま議論され、しばしば恩赦と混同されてもいたのである¹⁹¹。しかしながら、大赦により新たな体制を打ち出すためには、目指される秩序にたいする確信の共有と、それを正当化するような一体感を欠かすことはできない。むしろ、革命を終わらせるための大赦は、その目的通りに成功させるためではなく、革命を新たな形で「継続」させるために与えられていたのかもしれない。すなわち、大赦をあえて行うという能動的な行為により忘却を求めることで、革命を忘れ去ることはできない¹⁹²。これらの大赦は、革命による傷を清算するためではなく、過去の傷を忘れようと呼びかけることにより、その傷を代償として達成された「革命の成果」を思い出させるための行為だったのではないだろうか。

(5) ボナパルト体制の成立と赦し

革命議会だけでなく、ボナパルトも大赦を行っている。恩赦復活直前の共和暦 10 年フロレアル 6 日、亡命貴族にたいし大赦を行うとの元老院議決がなされたのである。これにより、共和暦 11 年の初日（1802 年 9 月 23 日）までに帰国し、政府への忠誠を誓った亡命貴族は赦しを与えられた¹⁹³。

この大赦は「事物の現在の状態により、正義により、国益により、憲法の精神に合致する点において命じられ」た。かつて、国内が分裂し、さらに、歴史上例を見ないほどの戦争をヨーロッパ全体と行っていた頃には、亡命貴族は厳しく排除されていた。しかし、戦争が終結した今、国内を統合して平和を固めなければならない。それは、「フランス人を結集させ、家族を安定させ、長い革命と不可分の諸悪を忘れさせることができるあらゆること」により行われる。また、その最も効果的な方法は、法律の厳しさを緩和することと、亡命貴族名簿からの名前の削除を確実に、遅滞なく行うことである。以上の理由により大赦は行われるが、これは「常に犯罪者よりも道に迷っている(*égaré*)、最も多くの人々には

¹⁹⁰ *Ibid.*, p. 186 ; *Moniteur*, 19 fructidor An 4.

¹⁹¹ 恩赦と大赦の違いは、少なくとも 1791 年の段階から議論されていた。12 月 31 日の議会で、ガラン・ド・クーロンは「大赦は立法の行為であり司法の行為ではない」とし、ゴイエも「大赦は犯罪者の恩赦ではなく、犯罪が全くなかったという、あるいは少なくともそれを全く認めないという宣言である」と述べている。 *Archives Parlementaires*, t. 36, pp. 714, 719.

¹⁹² Voir Ozouf, Mona, *Thermidor ou travail de l'oubli, L'école de la France. Essais sur la Révolution, l'utopie et l'enseignement*, Paris, 1984, p. 107.

¹⁹³ 大赦法の文面は、資料 5 を参照。

恩赦を与え(*fit grace*)、大罪人には、亡命貴族名簿に決定的にとどめることによって、処罰を下す」。つまり、この大赦は、革命により祖国を追われた貴族たちを、ボナパルトの秩序に組み込まれるという条件の下、フランスに帰還させることで、それまでとは一線を画したボナパルト体制を作りあげようとしていると言えることができるだろう。実際、彼は皇帝に即位した直後の1804年6月2日と、百日天下が開始してすぐの1815年3月12日にも、大赦を行っているのである¹⁹⁴。

さらに、恩赦の復活以前から、彼は、法律をかいくぐるようにして、事実上の恩赦を行っていた。ティエールによれば、1800年1月、反乱分子として知られるふくろう党員フロッテの逮捕の知らせがパリに伝わったとき、多くの嘆願者が第一執政を取り囲み、「彼らは恩赦に相当する手続きの停止を得た」¹⁹⁵。それだけでなく、彼は実際に恩赦を行っていたようである。恩赦復活直前の、共和暦10年ヴァンデミエール20日(1801年10月12日)の通達は、恩赦嘆願により判決の執行は妨げられないと規定したのである。

恩赦復活後には、共和暦12年ヴァンデミエール19日(1803年10月12日)に、6ヶ月ごとに、陸軍大臣の派遣した検査官が、各作業所(*atelier*)から恩赦に値する人物を担当大臣に報告し、大臣が第一執政に報告することを命ずるデクレが定められた¹⁹⁶。この法律は、ナポレオンの皇帝即位後にも適用されている。たとえば、1806年8月9日の恩赦状には、このデクレに従い、恩赦が行われたことが明記されている¹⁹⁷。さらに、共和暦13年メシドール13日(1805年7月2日)には、恩赦嘆願により判決の執行を停止することはできないとの通達が出された。コンセイユ・デタも、1807年1月3日に、恩赦は罰金の消滅をも導くとの意見を出し、25日には、恩赦の決定の前に支払われた罰金を返還することはできないと述べた。さらに、破棄院は1810年11月30日の判決により、恩赦が再審請求の妨げにはならないと宣言した¹⁹⁸。

さらに、ナポレオンは、恩赦の概念を拡大しさえした。前述の共和暦13年プリュヴィオーズ17日(1805年2月6日)の破棄院判決によれば、当時、執行猶予は恩赦の一種とみなされていたのである。この判決は、原審で、裁判官により執行猶予が言い渡されたとともに、恩赦嘆願が勧められたことを問題としたものであった。しかし、破棄院によれば、執行猶予は「恩赦を行う権利の第一の行為」であり、裁判所にそれを行う権限はなかった¹⁹⁹。ナポレオンは、このように広範な恩赦権を、当然のように行使する一方で、恩赦を自らの正当化のためにも用いていたようである。このことは、当時の恩赦状から見て取ることが

¹⁹⁴ Poujaud, *op. cit.*, pp. 111-112. さらに、1810年3月25日には皇帝の婚姻による大赦が、4月24日にも大陸列強(*puissances continentales*)に奉仕していた人々への大赦が行われている。

¹⁹⁵ Thiers, *op. cit.*, p. 207.

¹⁹⁶ Duvergier, *op. cit.*, t. 14, p. 416.

¹⁹⁷ AN BB³⁰ 180. なお、このカートンには全部で360通の書状が収められているが、その中には、資料12のように、この法律によらない恩赦も含まれている。

¹⁹⁸ Legoux, *op. cit.*, pp. 154-157.

¹⁹⁹ *Ibid.*, pp. 279-282 ; Merlin, *op. cit.*, t. 7, pp. 283-284.

できるだろう。ここで、1806年8月9日に、ジャンヌ・ラコンブに与えられた恩赦状を参照してみよう²⁰⁰。

ナポレオン期の書状は、一見すると、それ以前のものとは大きく異なっている。文面は、以前に比べてかなり簡略化され、事件の内容も省略されて、ほとんどの部分が定型句からなっている。さらに、定型部分はすべて活字化されており、受益者の名前などを空欄に記入するだけで書状を完成させることができるようになっている。用紙にも違いがあり、それ以前には、さまざまな大きさの羊皮紙が用いられたが²⁰¹、この頃の恩赦状は、およそA2サイズの、羊皮紙ではない通常の紙を、折らずにそのまま用いている。

ところが、書状の中身をよく見てみると、定型句の一部に、アンシャン・レジーム期の書状の名残を見つけることができる。たとえば、恩赦状の書き出しには、「ナポレオン、神の恩寵と帝国の諸憲法によりてフランス人の皇帝なり。ボルドーに所在する、ジロンド県の朕の刑事法院を構成する院長およびその構成員へ。朕はピエール・グルローの妻で、30歳の、ボルドーの下宿屋のおかみで、共和暦9年ブリュメール15日の貴院の判決により、家事使用人による窃盗の共犯の罪で懲役8年の有罪判決を言い渡され、ボルドーの監獄(maison de réclusion)に拘留されていた、ジャンヌ・ラコンブの、朕の恩赦状を得るための嘆願を受けた」と記しているが、「朕は…の嘆願を受けた」という形式や、嘆願者の名前に身分や職業などの情報も併せて明記されている点は、アンシャン・レジーム期と共通している。また、判決後に出されたものであれば、以前の書状でも、判決内容などが明記されていた²⁰²。さらに、書状の後半には、中世以来用いられてきた「法律の厳しさよりも慈悲を好むことを望み」という言葉も見られる²⁰³。以上より、ナポレオンは、かつての国王たちの恩赦を模倣していたと考えることができる。

このことは、恩赦状の後半に簡単に記されている、恩赦の決定から法廷における書状の授与までの手続きにも見て取ることができる。この部分と、現地から司法大臣への報告書によると²⁰⁴、コンセイユ・プリヴェでの議論を経て完成した恩赦状は、帝国の玉璽を押され、3日以内に裁判所に提示される。その後、受益者は、法院長、判事、判事補、検事長、書記の出席する公開の法廷において、直立かつ脱帽した状態で²⁰⁵、書状の読み上げを聞く。

²⁰⁰ BB³⁰ 180. これは普通裁判所による判決にたいする恩赦であり、共和暦12年ヴァンデミエール19日のデクレの対象ではない。

²⁰¹ ただし、本節(1)注125を参照。

²⁰² たとえば、BB³⁰ 50、1789年10月28日のフランソワ・ル・ブランへのガレー船徒刑からの呼戻しの書状を参照。

²⁰³ この言葉については、第1章(3)を参照。

²⁰⁴ 恩赦が認められると、該当する裁判所に執行命令の書状(lettre d'exécution)が送付され、その返答として、認可手続きや執行の様子が報告される。AN BB²¹ 28には、1808年4月20日の、オーギュスタン・フランソワ・ヴェルニエへの恩赦状の認可手続きにかんする報告書が収められている。

²⁰⁵ この時の認可手続きでは、受益者はかつてのように跪くことはない。ここから、恩赦を与える側とそれを受ける側との関係が、以前とは異なるものとなったようにも思われるが、

続いて、恩赦を与えられたことが登録簿に記入されると、法院長は書状を受刑者に渡し、この人を祝福するとともに、恩赦に相当する人間になるよう激励するのである。アンシャン・レジームにおいては、恩赦は国王国務会議での報告を経て決定され、完成した書状は、公開の法廷で認可されなければならなかった。また、アンシャン・レジーム期の書状にも、認可手続きを行うことが明示されていたが、ナポレオン期の書状にも、この手続きについて書かれていること自体、アンシャン・レジーム期の慣行に倣っていると言うことができるだろう。

しかし、以上に述べたことは、単なるアンシャン・レジームへの回帰を意味するわけではない。恩赦を嘆願する際、人々は彼を「皇帝かつ国王」と呼んだが²⁰⁶、彼自身は、革命の子とも名乗っていたのである。したがって、たしかに、ナポレオン・ボナパルトは、神の権利である赦しを用いて、自らの支配に正当性を与えようとしたが、彼はかつての国王たちのような「いとキリスト教的な、神としての王」になろうとしていたわけではなかったのである。ボナパルトが求めた「神」とは市民宗教としての民法典であった。民法典をはじめとする、フランスの再組織化のために行われた功績こそが、彼にとっての栄光のよりどころだったのである²⁰⁷。そして彼は、ルソーが理想とした、卓越した知性をもつ立法者として、神の権威に裏打ちされた法律の権威を用いて新たな社会を作り、そのことにより、自らを権威づけようとしたのである²⁰⁸。

いつごろから直立姿勢がとられるようになったのかは明らかではない。

²⁰⁶ たとえば、AN BB²¹ 78, 1811 年の、フィリップ・バルトとその妻による嘆願。

²⁰⁷ 石井三記「フランス民法典の運命」（石井三記編『コード・シヴィルの二〇〇年』創文社、2007 年、所収）7 ページ。

²⁰⁸ Yaya, Isabel, Napoleon as Lawgiver : The Renewal of an Enlightened Political Motif for the Iconographic Program of the Louvre's Cour Carrée, *French History*, v. 25, n. 3, 2011, pp. 321-322.

第5章 恩赦の近代史

19世紀、恩赦は憲法に規定されるようになった。革命期の無法状態を経て、恩赦は再び法の枠組みの中に入れられたのである。メルルは、恩赦権は「本質的に王権に属する」ものであり、共和制憲法においては、少なくとも制限を設けなければ存在すべきではないと述べたが¹、実際、この時代、恩赦はますます法的色彩を強めていった。また、世紀末になると、仮釈放や執行猶予の制度の導入を受け、再び恩赦廃止論が唱えられた。しかし、現実には恩赦が廃止されることはなく、それどころか、恩赦の数は、世紀後半のほうが多くなっている。なぜ、このようなパラドックスが生じたのだろうか。本章では、近代における恩赦の意義を考えてみたい。

第1節 法令に見る近代以降の恩赦

(1) 憲法に規定される恩赦権

19世紀、フランスは復古王政の成立以後、6度の政体転換を経験した。これらの政体はすべて憲法をもち、その中には恩赦にかんする規定も見られる。恩赦にかかわる条文をもつのは、まず、復古王政の1814年6月4日の憲章。次に、ナポレオンの100日天下の際の、1815年4月22日の帝国憲法付加法。七月王制期の1830年8月14日の憲章。1848年11月4日の第二共和制憲法。さらに、ルイ＝ナポレオン（ナポレオン3世）によるクーデタ後に定められた、1852年1月14日の憲法。第二帝制の成立を宣言した11月7日の元老院議決。それを修正した12月25日の元老院議決。それから、1870年5月21日の帝国憲法を定める元老院議決。そして、第三共和制憲法と呼ばれる3つの法律のひとつ、1875年2月25日の法律である。

1814年の憲章における恩赦は、アンシャン・レジームのそれを受け継いでいる。この憲章は、前文で、国王がルイ14世をはじめとする過去の国王たちを受け継ぎ、「神の摂理」により、王権停止後の「長い不在の後に」「呼び戻」されたと述べたうえで²、第57条により「すべての正義は国王から発する」と定め、第67条で、国王による恩赦と減刑の権利を規定した³。また、復古王制成立時の国王ルイ18世（在位1814年～1824年）が、「宗教は朕に殺人犯を赦すよう勧めうるのである」という言葉を残していることから⁴、復古王制における恩赦の、まさに復古的なイメージを読み取ることができるだろう⁵。

¹ Merle, *op. cit.*, p. 149.

² Duvergier, *op. cit.*, t. 19, p. 76. 中村義孝編訳『憲法史』、124 - 125 ページも参照。

³ 「国王は恩赦を行う権利と、減刑をする権利を有する。」*Ibid.*, pp. 85-86. 同、128 - 129 ページも参照。

⁴ Boissy, *op. cit.*, p. 374.

⁵ このことは、当時の恩赦状からも読み取ることができる。というのも、この頃の恩赦状には、フランス革命期に削除された、「全権と王権をもって」や「というのも、これが朕の嘉

復古王制は、1815 年 3 月 20 日から 6 月 22 日まで、ナポレオンの百日天下により中断した。この時定められた帝国憲法付加法第 57 条は、皇帝に、あらゆる犯罪に恩赦を行い、大赦を認める権利を与えた⁶。ただ、この憲法には、大赦の権利の所在は明示されてはいなかった。

1830 年の憲章第 58 条は、1814 年の憲章と同じように、国王による恩赦と減刑を認めた⁷。また、国王ルイ=フィリップ（在位 1830 年～1848 年）は積極的に恩赦を与え、1830 年 9 月 27 日の通達からは、死刑判決の場合、たとえ嘆願がなかったとしても、恩赦の可能性が検討されることとなった⁸。カルバツスによれば、その背景には国王の死刑嫌いがあった⁹。そんな国王にとって、恩赦は義務でさえあった。しかしながら、それは、国王が憐憫の情に突き動かされるままに恩赦を与えていたことを意味するわけではなく、この頃から、恩赦に大臣の関与が求められるようになった¹⁰。

1848 年になると、再び共和制が敷かれ、恩赦権は大統領の手に委ねられた。また、第二共和制憲法は、それまで曖昧になっていた恩赦と大赦の区別を明確化し、大赦は法律により行われることを明らかにした。さらに、恩赦を行うには、コンセイユ・デタの意見を聞かなければならないとした¹¹。この合議体は、1849 年の内部規則により、恩赦にかんする意見を表明する方法を定めている。それによれば、1 年の拘禁刑以下の場合は、その立法部門から選出された 5 名が、それ以上の刑罰であれば、立法部全員が諮問に参加し、死刑・終身刑・政治犯への恩赦の場合は、総会(*assemblée générale*)で諮問を行わなければならない¹²。

その後、1851 年 12 月 2 日のクーデタ、同月 20 日から 21 日にかけての国民投票を経て、ルイ=ナポレオンが独裁政権を樹立させると、1848 年憲法は改正された。この時定められ

することだからである」の言葉が復活しているからである。資料 13 に、1829 年 11 月 8 日の書状が掲載されているので、参照されたい。

⁶ 「皇帝は、軽罪についてさえも、恩赦を行い、また、大赦を認める権利を有する。」*Duvergier, op. cit.*, t. 19, p. 485. 中村『憲法史』、134 ページも参照。

⁷ 「国王は恩赦を行う権利と、減刑をする権利を有する。」*Ibid.*, t. 30, p. 185. 同、140 ページも参照。

⁸ Picot, Georges, *Le droit de grâce*, Rapport lu et discuté à la Société des prisons, le 28 juin 1899, *Revue pénitentiaire. Bulletin de la société générale des prisons*, Année 23, 1899, p. 921, note 2 ; Legoux, *op. cit.*, pp. 181-182.

⁹ Carbasse, Jean-Marie, *Histoire du droit pénal et de la justice criminelle*, Paris, 2000, p. 416.

¹⁰ Picot, *op. cit.*, pp. 921-922.

¹¹ 第二共和制憲法第 55 条「彼〔共和国大統領〕は、恩赦を行う権利を有するが、コンセイユ・デタの意見を徴した後でなければこの権利を行使することはできない。

大赦は法律によらなければ認められない。

司法高等法院により有罪とされた共和国大統領、大臣ならびにその他の者はすべて、国民議会によらなければ恩赦されない。」*Duvergier, op. cit.*, t. 48, pp. 586-588. 中村『憲法史』、147 - 148 ページも参照。

¹² 1850 年 6 月 15 日からは、終身労役刑の場合、総会での諮問が必要ではなくなった。*Sermet, op. cit.*, p. 135.

た 1852 年 1 月 14 日の憲法第 9 条は、「彼〔共和国大統領〕は恩赦権を持つ」とだけ規定し¹³、議会の大赦権や恩赦への制限を撤廃した。ただ、この年の 3 月 26 日には、3 名の特別政府委員に、ルイ＝ナポレオン自身のクーデタの中で犯された罪のために、有罪判決を言い渡された人々への恩赦権が委ねられている¹⁴。ルイ＝ナポレオンの恩赦権は、この年の 11 月 7 日の元老院議決により、帝制が宣言された後も維持された¹⁵。また、1 月 14 日の憲法を修正した 12 月 25 日の元老院議決は、第 1 条で、皇帝が恩赦を行い、大赦を認める権利を規定した¹⁶。これをさらに修正した、1870 年の元老院議決第 16 条も同様であった¹⁷。

帝制は普仏戦争の敗北により崩壊し、1870 年 9 月 4 日に共和制が宣言された。この時、臨時国防政府が組織され、恩赦権は、9 月 7 日のデクレにより、一時的に司法大臣に委ねられた¹⁸。その後、1871 年 6 月 17 日には、大臣会議の議長の手恩赦権が委ねられ、議会に大赦権が与えられた¹⁹。しかしながら、恩赦は、パリ・コミューンにかんする犯罪にしか認められなかった。さらに、恩赦を行う場合には、閣議の議長と、議会から派遣された 15 名からなる、恩赦委員会による合意が必要とされた²⁰。委員会はこの年の 6 月 30 日に発足したが、1876 年 3 月 8 日に、国民議会の解散とともに姿を消した²¹。

第三共和制憲法も、第二共和制憲法と同様、執行府に恩赦権を、議会に大赦権を与えた²²。しかしながら、この憲法は、大統領による恩赦に範囲や制限を設けてはいなかった。とはいえ、1875 年 2 月 25 日の法律第 3 条第 6 項は、共和国大統領のあらゆる行為に大臣の副署が必要と定めており、大統領は全くの専断により恩赦を行うことができたわけではなかった。さらに、翌年の 5 月には、司法大臣を首班とする、議会外の委員会が設置された。ただ、この委員会には諮問の権限しか与えられず、1879 年 3 月 3 日に、パリ・コミューン期のすべての犯罪にたいする大赦が行われると同時に解散した²³。

以上、19 世紀の諸憲法の恩赦にかんする規定の変遷を簡単にたどってみた。これらの条

¹³ Duvergier, *op. cit.*, t. 52, p. 21. 中村『憲法史』、154 ページも参照。

¹⁴ *Ibid.*, t. 52, pp. 263-264 ; Habib, Danis, *Grâces des condamnés des commissions mixtes de 1852. Inventaire-index des articles BB/30/462 a 479*, Paris, 1997, p. 14. この恩赦については、Mari, Eric de, *Grâce et politique. La grâce des condamnés de la commission mixte du département de l'Hérault : 1852-1859*, dans *Les modes de résolution des conflits entre gouvernants et gouvernés*, Bruxelles, 2009 を参照。

¹⁵ 第 7 条を参照。Duvergier, *op. cit.*, t. 52, p. 681. 中村『憲法史』、158 ページ。

¹⁶ *Ibid.*, p. 765. 同、160 ページも参照。

¹⁷ 「皇帝は、恩赦を行い、また、大赦を認める権利を有する。」*Ibid.*, t. 70, p. 126. 同、163 ページも参照。

¹⁸ *Ibid.*, t. 70, pp. 323-324. 大赦もまた、大臣会議への伝達の後、司法相により行われる。

¹⁹ *Ibid.*, t. 71, pp. 119-121.

²⁰ Rulleau, *op. cit.*, p. 43.

²¹ Picot, *op. cit.*, p. 927.

²² 1875 年 2 月 25 日の法律第 3 条第 2 項「彼〔共和国大統領〕は、恩赦を行う権利を有する。大赦は法律によらなければ認められない。」Duvergier, *op. cit.*, t. 75, p. 49. 中村『憲法史』、168 ページも参照。

²³ Rulleau, *op. cit.*, p. 44 ; Poujaud, *op. cit.*, p. 118.

文を見る限りでは、君主制の時期には、君主による広範かつ専断的な恩赦が認められ、共和制の時期には、コンセイユ・デタや恩赦委員会による諮問などの制限が設けられる傾向があったように思われる。しかしながら、恩赦の内容や、それが実際に与えられる手続きに注目してみると、君主制の時期と共和制の時期には、それほど決定的な違いは見られなかった。次は、第二帝制と第三共和制当時の文献や、実際に用いられた文書を用いて、それぞれの時期における恩赦を簡単に比較し、検討したい。

(2) 19 世紀の恩赦制度

19 世紀の恩赦には、アンシャン・レژیーム期のような種類の別は存在しない。この点は、1802 年の恩赦の復活以来共通している。恩赦を与える主体は、先に述べたように、政体の転換とともに変化しているが、基本的には、19 世紀にも、かつてと同様、恩赦は主権者による慈悲と考えられており²⁴、国王や大統領といった執行府がこれを行うことが多かった。ただ、世紀後半になると、国民主権を根拠として、議会在恩赦権を執行府に委任しているとの考え方も見られるようになった。この点については、後に改めて考察する。

アンシャン・レژیーム期には、恩赦不可能な犯罪が法定されていたが、19 世紀には、そのような犯罪は想定されていない。また、再犯の場合にも、恩赦が妨げられることはなかった²⁵。ただ、欠席裁判や判決後の逃亡の場合、恩赦嘆願は禁じられており²⁶、終局判決前の恩赦も認められなかった²⁷。

恩赦の効果は、刑罰の免除である。また、主刑のみなど、その範囲は自由に決められた²⁸。取り去る刑罰の量もさまざまであり、完全な恩赦(*grâce entière*)・刑期の削減(*réduction*)・減刑(*commutation*)の 3 つの場合に分けられた²⁹。完全な恩赦と刑期の削減は、読んで字のごとしである。完全な恩赦は刑のすべてを、刑期の削減は刑の一部を免除する。減刑は、一度言い渡された刑罰を、別の法定刑に変更することを意味した。減刑の幅は、比較的自由に定めることができるが³⁰、新しく科せられる刑は、元の刑と同じ性質のものでなければ

²⁴ たとえば、Legoux, *op. cit.*, p. 3 ; Merle, *op. cit.*, p. 150.

²⁵ ただし、恩赦には、遡及的に犯罪を消滅させる効果はないので、恩赦後に再び罪を犯した場合には、再犯者にたいする刑罰が与えられる。Legoux, *op. cit.*, p. 17.

²⁶ 欠席裁判時の恩赦嘆願の禁止は、1828 年 10 月 28 日に、司法大臣により決定された。さらに、1848 年 7 月 4 日の通達では、欠席者は投獄された状態でしか恩赦を嘆願することができないとされた。判決後に逃亡した者による嘆願は、1836 年 8 月 27 日の司法大臣の決定で禁止されている。Legoux, *op. cit.*, pp. 180, 187, 196.

²⁷ Sermet, *op. cit.*, p. 173. 現代では、このような恩赦も可能である。Jeanclos, *Droit pénal européen*, p. 524.

²⁸ 名誉刑のみの場合には、恩赦は不可能である。Merle, *op. cit.*, p. 159.

²⁹ ただ、後掲する表 3 から明らかになるように、刑期の削減と減刑は、実務の上ではしばしば同視されていたようである。

³⁰ しかも、1849 年 11 月 26 日のコンセイユ・デタ意見や 1875 年 8 月 7 日の通達などによると、「減刑」により刑をより重くしたり、法定刑以外の刑を科したりすることも認められ

ならない。ゆえに、普通犯にたいする刑罰を、政治犯にたいする刑罰に軽減することは認められなかった³¹。また、恩赦により罰金も取り去ることができたが³²、訴訟費用や損害賠償は恩赦の対象とはならなかった³³。

アンシャン・レジーム期には、条件付きで恩赦が与えられることもしばしばあったが、19 世紀になると、そのような恩赦は大きく減少した³⁴。条件が課される場合には、一定期間の投獄や、国外への立ち退きなどが求められた³⁵。ただ、恩赦の前提として、訴訟費用など、国庫への支払いを済ませなければならなかった³⁶。

以上、19 世紀の恩赦の内容を大まかにまとめてみた。では、恩赦を獲得するにはどのような手続きを踏む必要があったのだろうか。恩赦は、古来嘆願により与えられることが多かったが、19 世紀においてもそれは同じである。第二帝制期においては、嘆願は、原則として皇帝にたいし行われたが、皇妃など、皇帝一族のその他の構成員にたいしなされることもあった。一方、第三共和制期には、大統領に向けて嘆願が行われた。ただ、両方の時代とも、大臣に嘆願が行われることもあった³⁷。嘆願をするのは、多くのケースでは罪人自身であったが、それ以外にも、家族や友人などの利害関係者が可能であった³⁸。さらに、陪審員による恩赦嘆願も認められていた³⁹。また、裁判官も、当該事件の担当でなければ、嘆願者に有利な情報を個人的に司法大臣に書き送ったり、嘆願状の隅に書き込みをしたりすることができた⁴⁰。

死刑の場合には、嘆願がなかったとしても、重罪院長により、当該事件にかんする報告書が作成され、恩赦の可能性が検討された⁴¹。また、第二帝政の頃も第三共和制の頃も、死

た。このような「減刑」は、第二帝制期の文献では否定されているが、第三共和制期の学位論文では、5 年の労役刑を 10 年の懲役に変えるなど、より下位の刑にする代わりに、刑期を延長することは可能とされている。Legoux, *op. cit.*, pp. 77-78 ; Sermet, *op. cit.*, p. 213-214.

³¹ Legoux, *op. cit.*, p. 78 ; Sermet, *op. cit.*, p. 216.

³² 七月王制期であるが、資料 14 で紹介されている事例では、実際に罰金が免除されている。

³³ Legoux, *op. cit.*, p. 75 ; Sermet, *op. cit.*, pp. 191-192. voir aussi Merle, *op. cit.*, p. 163. 訴訟費用にかんしては、1818 年 12 月 18 日に、恩赦の対象とはならないとの決定が司法大臣によりなされている。

³⁴ Sermet, *op. cit.*, p. 222.

³⁵ Legoux, *op. cit.*, p. 79.

³⁶ Sermet, *op. cit.*, p. 223.

³⁷ Legoux, *op. cit.*, p. 31 ; Sermet, *op. cit.*, p. 235.

³⁸ Sermet, *op. cit.*, p. 231.

³⁹ *Ibid.*, p. 234.

⁴⁰ Legoux, *op. cit.*, p. 29. 第三共和制になると、本人による嘆願の場合に限り、司法官による意見の書き込みは認められなくなる。Sermet, *op. cit.*, p. 234.

⁴¹ 1826 年から 1899 年にかけての、死刑囚への恩赦嘆願にかんする資料は、AN BB²⁴ 2001-2084 に収められている。これらの資料を見る限り、少なくとも第二帝制以降には、死刑判決後、恩赦嘆願に先んじて破棄申立が行われていたようである。voir AN BB²⁴ 2032, 2047. 死刑判決の際の恩赦の手続きについて、詳しくは Habib, Danis, *BB/24/2001-2084. Grâces des condamnés à mort (1826-1899)*, Paris, 1996-2006, pp. 4-5 を参照。

刑以外の刑罰の場合、重罪院は会期の終わりに、自分たちが扱った事件にかんする恩赦の可能性を司法大臣に報告することになっており、この作業を通じて恩赦が与えられることもあった⁴²。

嘆願状には、特に形式はなく、有罪判決の原因となった事件の内容、判決を言い渡した裁判所、判決の日付、嘆願の根拠となる理由などが書かれた。できあがった嘆願状は、司法省の恩赦部と呼ばれる部署に送られる⁴³。ここで、恩赦嘆願の理由が正当だと判断されると、嘆願は判決を言い渡した裁判所の検事長に送られ、恩赦の可否についての審理が行われる⁴⁴。1875年6月25日以前には、審理に至る前に恩赦が却下されることもあったが、この日出された通達により、一部の場合を除いて、審理をすることなく嘆願を切り捨てることは禁じられた⁴⁵。審理では、まず、有罪判決が下された日、それを言い渡した裁判所、刑罰、収監の場所、嘆願者の氏名・職業・年齢などの説明が求められる。また、市町村や監獄に問い合わせ、罪人の素行にかんする情報も集められる⁴⁶。これらの情報は表にまとめられる⁴⁷。

その後、検事長は私訴原告人に恩赦のことを通知し⁴⁸、また、自らの意見を付して司法省に報告を行う。この後、恩赦部で新たに報告書が作成され、司法大臣の判断を経て、皇帝や大統領の決定が下された⁴⁹。また、死刑判決の場合、1840年ごろには、司法大臣が大臣官房長(*chef de cabinet du ministre*)や部長などからなる省内の評議会を開き、ここで出された意見に基づいて、皇帝あるいは大統領に報告がなされ、最終決定へと至るようになった⁵⁰。1871年と1876年の恩赦委員会が活動したのも、司法大臣への報告後の段階であっ

⁴² Sermet, *op. cit.*, p. 244.

⁴³ この部署は、1814年に司法省に設置された。Habib, Danis, *État général des fonds des Archives nationales (Paris), Mise à jour 2007, BB²¹ grâces accordées*, Paris, 2006, p. 1

⁴⁴ Legoux, *op. cit.*, pp. 32-33.

⁴⁵ Sermet, *op. cit.*, pp. 239-240.

⁴⁶ 19世紀になって初めて、収監中の振舞が恩赦の決定の際に考慮されるようになったわけではない。アンシャン・レژیム期から、例外的な刑罰として投獄が科されることがあったが、それにたいする恩赦の場合には、ほとんど必ず、監獄の側による嘆願者の評価が求められていた。Abad, *op. cit.*, pp. 534-535.

⁴⁷ 管見の限り、第二帝制期と第三共和制期に用いられた表の、大まかな構成としては、以下に述べる8つの項目と司法大臣の決定、犯罪事実の分析、検事長の見解などからなっており、共通する点が多い。ただ、8つの項目の内容は若干異なっている。第二帝制期には、①受刑者の氏名・家庭状況②生年月日・出生地・職業③犯罪の内容④刑罰の内容・適用された条文⑤判決を言い渡した裁判所⑥判決が下された日⑦勾留期間⑧収監地・刑期の開始日が書かれていた。第三共和制期になると、①受刑者の氏名・職業・生年月日・出生地②判決を言い渡した裁判所③判決が下された日・判決理由・終局判決か否か・刑罰の内容・適用された条文④勾留期間・監獄への出発の日・収監地・判決後の行状⑤罰金・賠償金の支払いの有無⑥家庭状況⑦普段の行状⑧前科が明記された。AN BB²⁴ 724 ; AN BB²⁴ 876. なお、同様な表は、遅くとも第二共和制期から用いられている。AN BB²² 101-111.

⁴⁸ Merle, *op. cit.*, p. 168.

⁴⁹ Legoux, *op. cit.*, pp. 46-47 ; Sermet, *op. cit.*, p. 248 ; Rulleau, *op. cit.*, p. 60.

⁵⁰ Picot, *op. cit.*, pp. 925, 927-928 ; Rulleau, *op. cit.*, p. 60. たとえ、ここまでの審査の中で

たのではないだろうか⁵¹。

完成した恩赦状は、かつては裁判所での認可手続きを経て初めて効力をもったが、19 世紀になると、認可手続きの意義は著しく低下した。1831 年 8 月 24 日の通達により、死刑以外の場合には、原則として書状は作成されなくなり⁵²、1841 年 5 月 21 日には、死刑の場合を除いて、認可手続きさえ行われなくなったのである⁵³。さらに、アンシャン・レジームにおいては、たとえ恩赦状が得られたとしても、裁判所がそれを認可せず反故にしてしまう可能性もあったが、19 世紀には、認可手続きは単なる形式となった。認可を行うのは、当該事件を管轄した控訴院で、法院の構成員全員と検事長の出席のもと、公開で行われた。手続きの内容は、ナポレオン期のそれとほとんど同じである。受益者は直立、脱帽した状態で出席し、恩赦の決定が読み上げられるのを聞いた後、法院長により書状の認可を宣言される。受益者は、希望すれば恩赦状の謄本を手にもすることもできる⁵⁴。死刑判決以外の場合には、恩赦の通知は検事長などにより行われる。この時、受益者は、恩赦の事実が書き足された原審判決の抄本を手に入れることが可能であった。ただ、これを請求するには、受益者自身が費用を払わなければならなかった⁵⁵。また、恩赦を得ても、受刑者は直ちに完全な自由の身になるわけではなく、追放刑や労役刑、懲役刑の終了後と同様、高等警察の監視の下に置かれた⁵⁶。

恩赦に否定的な見解に至ったとしても、皇帝への報告は行われた。たとえば、AN BB²⁴ 2032, 1863 年 6 月 6 日の、ジョゼフ・ヴェルデへの恩赦にかんする報告書を参照。

⁵¹ Picot, *op. cit.*, p. 51.

⁵² Legoux, *op. cit.*, p. 183. 少なくとも、1835 年 4 月 29 日には、死刑以外の場合にも恩赦状が作成されている。AN F⁷ 10217. この時の書状のひとつは、資料 14 を参照。

⁵³ Legoux, *op. cit.*, p. 192.

⁵⁴ 資料 15 には、第二帝制期の恩赦状が掲載されているが、その文面に注目されたい。なお、当該事例では、恩赦は却下されている。Legoux, *op. cit.*, p. 76 ; BB²⁴ 2032.

⁵⁵ Sermet, *op. cit.*, pp. 254-258 ; Legoux, *op. cit.*, pp. 207-208.

⁵⁶ 1832 年に改正された、刑法典第 44 条、第 47 - 50 条によると、当時の高等警察の監視は、立ち入り禁止と住居の指定を合わせたようなもので、その住居に至るまでの道のりも決められていた。これは、労役刑や懲役刑の場合は刑期満了後に、追放刑の場合はその刑期の間に適用された。1832 年以前には、この監視は、政府や利害関係者が、受刑者の良好な素行にたいする保証金を要求し、それが支払われない場合には、受刑者の一定の場所への隔離、あるいは指定された場所への居住を命ずることができる権利を意味した。

Duvergier, *op. cit.*, t. 32, p. 133 ; *Les Codes français, Code pénal*, pp. 8-10. 中村『ナポレオン刑事法典』164、167 - 169 ページ。なお、七月王制期になるが、1841 年 4 月 30 日に恩赦を認められたジュール・ロンゲにたいする監視の報告書が、この年の 6 月 12 日に、内務省から司法大臣に向けて提出されている。AN BB²¹ 439.

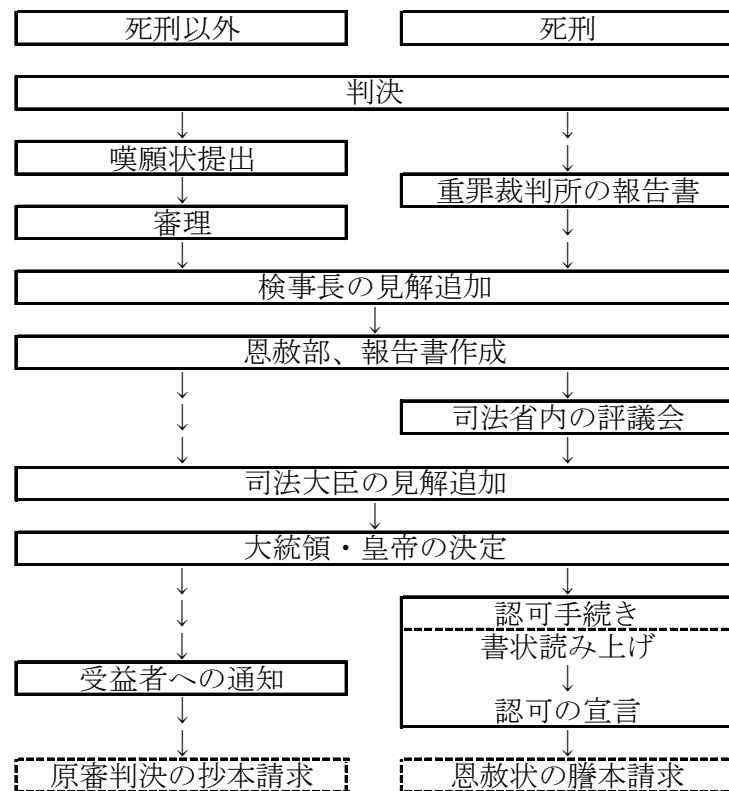


図 6 19 世紀後半の個別的恩赦の手続き

以上、第二帝制期と第三共和制期の恩赦手続きをごく簡単に確認した。それによれば、恩赦までの手続きに決定的な違いはなかった。また、両方の時期を通じて、死刑や重罪の場合には積極的に恩赦の可能性が検討され、時には、嘆願がなかった場合でさえ、職権的に恩赦が与えられたことにも注目したい。このことから、恩赦が刑の緩和のためにも用いられていたことがわかる。たしかに、アンシャン・レジームにおいても、赦免が正当防衛や過失による殺人にたいする死刑を回避するために用いられていた。ただ、アンシャン・レジームの恩赦は、儀式的な認可手続きを経なければ与えられず、また、こうして与えられた書状には、国王の署名と玉璽が添えられており、赦された人々にとって、それはまさに国王の慈悲であった。一方、19 世紀においては、認可手続きは形骸化し、死刑以外の場合には恩赦状さえ与えられなくなった。したがって、この時代、恩赦は為政者の慈悲という性格を薄めていったのである。

第2節 19世紀の恩赦をめぐる思想

恩赦は、時代を下るごとに刑事政策の一種として捉えられるようになっていった。その一方で、1814年の憲章により再び打ち出された、伝統的な恩赦のイメージは根強く残り⁵⁷、共和制においても、かつて国王が担った執行権を担当する大統領が恩赦を行うことは当然視された⁵⁸。伝統的な恩赦のイメージが生き残っていたことは、形ばかりのものに過ぎなくなったとはいえ、アンシャン・レジーム以来の認可手続きが19世紀にも維持されていたことから見て取れる。本節では、19世紀の恩赦をめぐる、このような思想のアンビヴァレンスについて検討したい。

(1) 恩赦の脱君主化？

19世紀の恩赦を取り巻く思想の微妙さは、恩赦と君主制との結びつきの変遷から汲み取ることができる。このことは、恩赦と大赦の関係についての議論に表れている。というのも、恩赦とは違い、大赦は革命期に、議会によりその存在が強調され、現在も、フランスだけでなく、多くの国で議会により行われているからである。ところが、大赦と議会の結びつきは自明ではなかった。1839年7月19日の破棄院判決は、1830年の憲章の定める「恩赦」には、大赦も含まれると述べたのである⁵⁹。したがって、この判決によれば、恩赦も大赦も国王により行われる。恩赦権と大赦権の所在については、1816年からすでに議論が行われていた。ただ、この時には、国王による大赦が当然視されていた。ルイ18世は、議会の関与なく出すことができるオルドナンスを利用して、大赦をしばしば行ない、議会の側も、大赦権は主権たる王権、より具体的には、至高の行政官(*souverain administrateur*)としての国王のものだと述べたのである⁶⁰。

同様の議論は1834年にも行われたが、ここではモランが、恩赦権が国王に、大赦権が議会にあることを前提に、前者が国王の恩恵であるのにたいし、後者は混乱の忘却であると同時に、法律の違反であると主張した。また、恩赦は濫用しえたとしても人々に許されるが、大赦は何の有用な結果ももたらさないと彼は言う。彼によれば、恩赦とは、人間性を前にして王権をより偉大にする仁慈の魔法であり、国王だけがこの権利を拡大することができる。また、恩赦は、有罪をすでに言い渡された者にたいする法律の効力を弱めるにとどまるが、大赦は、いまだ有罪を言い渡されていない者を裁判から逃れさせる。しかしながら、たとえ国王であっても、裁判の流れを止めることはできず、したがって、立法府にもそれを行うことはできない。そもそも、大赦権は、憲章のどこにも規定されておらず、権力分立に反するのである。

⁵⁷ Rulleau, *op. cit.*, pp. 48-49.

⁵⁸ *Ibid.*, p. 45.

⁵⁹ *Recueil général des lois et des arrêts*, t. 39, pp. 984-985.

⁶⁰ Poujaud, *op. cit.*, pp. 112-113.

また、パジェスは、恩赦権を根拠に国王の大赦権を主張することは詭弁だと述べた。というのは、いかなる権力も、法律による判決を免れさせることは不可能であり、それを行うには、新たな法律を制定する以外にはないからである。ゆえに彼は、大赦の権利は議会にあると考える。彼によれば、国王のオルドナンスは判決を消すものであって、法律を停止させることはできない。しかしながら、パジェスの大赦は、議会のみによって行使されるものではない。大赦は、国民議会が国王にたいし、この大赦が時期にかなわず、権力に害を加えることはないかどうか伺いを立て、反対に、国王が議会にたいし、それが自由に害を与えはしないか尋ねることで行われるのである。さらに、サドは恩赦と大赦の区別について、それぞれの適用範囲を区別して議論している。彼によれば、恩赦は軽微な犯罪か、一人あるいは少人数による犯罪に与えられる。一方、大赦は集団による重大な政治犯罪で、長期にわたり行われたものに与えられるのである。また、ジャンヴィエは、恩赦と大赦それぞれの効果について論じた。彼によれば、たしかに恩赦と大赦は類似しているが、大赦は例外を認めず一塊に(en masse)行われ、恩赦は例外を設けて細かく(en détail)行われる。また、大赦は罪刑の消滅あるいは忘却であるので、過去にさかのぼって効力をもつ一方、恩赦は同情あるいは容赦であることから、将来的な効果しか持たず、刑罰を取り去るにとどまるのである⁶¹。おそらく、サドやジャンヴィエのような分類が当時の通説であったと思われる。というのも、1828年のメルラン『法学辞典』や1839年の破棄院判決は、大赦を恩赦の一種とし、その効果や規模において区別を行っているからである⁶²。つまり、ここでは、誰が恩赦や大赦を行うかは問題とされていない。

第三共和制期になると、議論はさらに変化する。前述の、1871年6月17日の法律が、恩赦権は、議会により大臣会議の議長に委任されると規定したのである。このことにかんして、マルセールは、公法学者たちが恩赦権は主権に属するとしていることを指摘したうえで、共和制においても、執行府の長により恩赦権が行使されてきたと述べた⁶³。彼は、「主権の要素」である恩赦権は、あらゆる場合において「偉大な(illustre)執行権の長」に委ねられるべきだと考えていたのである。しかしながら、それは単に、彼が伝統的な恩赦権を支持していたからではない。彼が問題視していたのは、議会から選出された委員会が、パリ・コミューンに関係した政治犯への恩赦にかかわることであった。なぜなら、彼によれば、この委員会は匿名なので、恩赦にたいする責任が消失するからである。

これにたいし、バドビーは、恩赦にかかわるよう求められることは、責任を求められることと同じだと言葉を返した。彼によれば、主権的権利、すなわち恩赦権を行使するのは議会である。議会は、原則的には権利を委任するが、その一部を留保することも求められているのである。彼の議論は、アンシャン・レジームの留保裁判権を想起させる。しかしながら、かつて「主権のしるし」とされていた恩赦権は、今や委任可能な権利となってい

⁶¹ *Moniteur*, 30 décembre 1834.

⁶² Merlin, *op. cit.*, t. 1, p. 326 ; *Recueil général des lois et des arrêts*, t. 39, pp. 984-985.

⁶³ マルセールによると、大赦とは、より広範な恩赦である。

るのである。

続いて、ベルトーは、恩赦権は常に王権に属すると考えられてきたと述べた。しかしながら、過去においても、それは国王の立法権に由来するものではなかった。アンシャン・レジーム期、国王はすべての権力を一手に担っていたが、立法権はパルルマン法院の法令登録によるコントロールの下にあったからである。一方、国王の執行権には、何の制限も課されていなかったと彼は言う。ここから、彼は国王の恩赦権が執行権に由来するものであったと考えていたとすることができる。なぜなら、彼は、これに続いて、パルルマン法院は恩赦権をコントロールしようとすることはなかったと指摘しているからである。さらに彼は、19世紀以降のあらゆる憲法や法令は、執行府が恩赦権をもつと前提していると述べたのであった。

これに反論して、バドビーは、執行権の長が選挙ではなく、議会によって選出されることを理由に、議会が唯一の主権者であって、執行府は罷免されうる委任官僚(*délégué révocable*)に過ぎないと主張した。彼によれば、執行府がもつあらゆる権力は、議会により委任されており、恩赦権も例外ではないのである⁶⁴。

ところで、この法律は、議会の大赦権についても規定している。それと同時に、パリ・コミュン下での犯罪に恩赦を行うには、議会から選出された委員会の同意が必要だとしており、ここから、恩赦にも大赦にも議会の意向が反映されたことがわかる。しかも、この法律によると、執行府と立法府の意見が合わなかった場合、恩赦は却下されるが、ここに定められている恩赦の嘆願は、まず司法大臣により審査されてから委員会にかけられるので、両者が合意に至らなかった場合とは、委員会が恩赦に反対した場合に限られる。したがって、事実上、恩赦も大赦も議会の判断により決定されるのである。

かつて「神の権利」と呼ばれ、国王に独占された恩赦権は、フランス革命に伴い恩赦と大赦に分離され、また、共和制の成立により、議会をその源泉とするようになったのだろうか。必ずしもそうではなく、恩赦と君主との結びつきはその後も根強く残っていく。1879年3月3日の、パリ・コミュンの反乱にたいする大赦についての国民議会での議論の際、ルイ・ブランは、大赦は共和的本質をもち、恩赦は君主制的な性格をもつと述べた。彼によれば、政府は大赦により強化され、威信を得る。では、共和制においては共和的な大赦が用いられるということになるのだろうか。そうではなかった。大赦を単なる恩赦の従属物にしてはならないと主張したブランにたいし、法案を提出したアンドリュウは、大赦は恩赦に従属し、これを与えられた者についてしか行われないと述べ、司法大臣ル・ロワイエも、大赦は恩赦の結果に過ぎないとし、法文には彼らの意見が反映されたのである⁶⁵。

⁶⁴ Rulleau, *op. cit.*, pp. 40-43 ; Duvergier, *op. cit.*, t. 71, p. 120, note 1.

⁶⁵ Duvergier, *op. cit.*, t. 79, pp. 40-41, 44, 47. voir aussi Connan, *art. cit.*, pp. 1339-1341.

(2) 刑事政策としての恩赦

恩赦と君主との結びつきの弱まりは、ギゾーの『政治的分野における死刑について』(1822年)第10章に、既に見て取ることができる。彼によれば、恩赦は純粋に君主的な権利であるというわけではなく、大臣の責任を伴う。しかし、憲法制定国民議会は、この点を見誤ったために、恩赦を廃止するという大きな間違いを犯した。彼によると、立憲君主制において、国王の不可侵性が大臣の責任に基づいているときには、彼らの責任なしに、国王はいかなる権力ももたず、いかなる行為もなすことができない。恩赦は、君主の個人的好意に過ぎないものではなく、国王裁判権の名残である。かつて国王の手に委ねられていた裁判権は、社会の発展とともに彼の手から離れ、赦す権利だけが残されたのである。そして、正義を必要とした社会は、恣意の危険を避けるために、確固たる法律や独立した裁判官を作り出し、判決から個人の意思を排しようとした。ところが、法律はすべてを包含することができず、その不備を補うために、ふたたび人の良心を用いることとなった。この良心というのが、恩赦である。

人間はこの循環から逃れることはできないので、恣意が必要であることを受け入れ、責任を付与することで、それを改善しなければならない。実際、国王は恩赦を行う際、大臣たちの意見に従っているし、嘆願は、国王の手に渡る前に、司法省で検討されている。ギゾーにとって、恩赦はもはや、君主の特権というよりは政治的道具である。また、彼によれば、恩赦は政治犯に限られるべきである。というのも、政治犯には冤罪がありえ、さらに、この犯罪への恩赦は、普通犯の場合とは異なり、権威や法律の信頼性を揺さぶることはないからである。そのうえ、恩赦があれば、陪審員や裁判官は厳しい判断をすることに躊躇せず、自由に判断を下すことができるのである⁶⁶。

法律を補うための刑事政策的な恩赦という考えは、19世紀末の思想にも見て取ることができる。1899年6月28日の全国監獄協会で、ピコは、伝統による正当化がなければ、恩赦は、組織化された社会のあらゆる原理と矛盾しているとの批判を加えながらも、人間の理性は、誤りや思いがけない出来事を回避したり予測したりすることはできないことを指摘し、誤りからの救済手段、あるいは悔い改めへの褒美としての、恩赦の存在を認めている。彼によると、仮に完全な政府と誤りえない司法が存在すれば、恩赦廃止論は魅力的である。しかし実際には、法律や裁判官がすべてを予測することは不可能であり、恩赦が必要となる。ところが、恩赦は濫用に結びつきやすい。そこでピコは、恩赦委員会の設置を提案する。

恩赦委員会は、コンセイユ・デタ評定官、破棄院評定官各2名と、司法省の部長らからなり、司法大臣に恩赦状への副署を求める時に意見を提出する。委員会は、毎週40名から50名の候補者の名前を記載したデクレ案と、50冊の資料を参照し、事件の重大さの順に、その場で意見を述べる。あるいは、担当を一人選んで資料を検討し、次の週に報告を行う

⁶⁶ Guizot, François, *De la peine de mort en matière politique*, Paris, 1822 ; réimpression, Paris, 1984, pp. 193-198.

こともできる。これらの意見は、理由を明示したうえで司法大臣に提示され、彼の判断へとつながられる。こうして判断された恩赦は、その理由の要約とともに、官報に公開される。

前述のように、このような諮問機関は、それまでも 1871 年と 1976 年の 2 回設置されていた。それに、1849 年にも、コンセイユ・デタが、同様な役割を担うことが定められていた。ところが、コンセイユ・デタは、1 年あたり、平均して 8000 件近くの事件を扱い、1871 年の委員会は、6 月 30 日から 1876 年 5 月 8 日までに受理した 6646 件の事件のうち、およそ半数の 3224 件に恩赦を認めた。死刑判決に限って言えば、その数は全 110 件のうち 84 件に上った。1876 年の委員会も、1879 年の廃止までに、およそ 3500 人の恩赦を認めた。つまり、恩赦の乱発に歯止めをかけるために成立したはずの委員会は、十分に機能しているとは言えなかったのである。しかし、ピコによれば、新たな委員会を置くことで恩赦にも判例ができ、これにより、大統領は固定的で保障された恩赦が可能になるし、誤りも少なくなる。また、委員会はむやみやたらな嘆願や議員たちの介入を防ぎ、司法大臣の良心と責任を守ることができる。さらに裁判所は、突然の気まぐれな恩赦により判決を無効にされることがなくなり、支持者を容疑者とされた政治家の復讐から身を守ることもできるのである⁶⁷。

一方、この直後にコレージュ・ド・フランス教授となるタルドは、恩赦裁判所の設置を提案した。彼によれば、恩赦は長い間、主権者の恣意的な権利の行使と考えられてきたが、今や、ますます法的な性格をもつようになってきている。というのも、恩赦は執行猶予や仮釈放と密接に関連しているからである。これらの制度は、恩赦が枝分かれしたものである。執行猶予は、有罪を言い渡す裁判官により条件を付して与えられる、事前の恩赦と言うことができ、恩赦をほとんど、あるいはまったく法的なものにする。また、仮釈放は、1885 年の成立以来、恩赦嘆願の数を減少させている。こうして、恩赦は大統領の気まぐれではなく、判例を参照して、理由をつけた意見により行われるようになるのである。このような意味での恩赦が発展すれば、恩赦裁判所を置くことが重要となるだろう。ここで恩赦の理由が明示されることにより、裁判される側にたいする保証ができるのである。また、大統領は恩赦裁判所よりも厳しい判断を下すことはないので、恩赦裁判所と大統領の意見が異なるのは、裁判所が恩赦を却下した時に限られ、意見の不一致が続いた場合には、裁判所の側が辞職をすることで、大統領の濫用を牽制することができるのである⁶⁸。

ただ、実際には、ここに言う恩赦委員会や恩赦裁判所が成立することはなかった。それどころか、仮釈放が恩赦に取って代わるとして、恩赦不要論を唱えた参加者もいた。さらに、ちょうど同じころ、イタリアでも、ロンブローゾやガロファーロといった、新派刑法学の論者が恩赦批判を繰り広げていた。今度は、19 世紀末の恩赦廃止論について検討する。

⁶⁷ Picot, *op. cit.*, pp. 926-933.

⁶⁸ *Revue penitentiaire. Bulletin de la societe generale des prisons*, Annee 23, 1899, pp. 946-947.

(3) 19 世紀末の恩赦廃止論

19 世紀末、恩赦は執行猶予や仮釈放と結び付けられ、より法的なものと考えられるようになった。刑の執行を一部または全部免除するという点のみに注目すれば、恩赦とこれらの制度には何ら違いはない。そうであれば、恩赦はこれらの手段により代替されうるのではなかろうか。実際、1899 年の全国監獄協会では、そのような意見も述べられている。

たとえば、グラニエは、ほとんどの場合、仮釈放は恩赦に取って代わることができると言った。まず、集団的恩赦について言えば、内務大臣は、恩赦の候補者のリストを各知事に求める際、なぜその候補者が仮釈放の対象とはならないのか、理由を示すよう求めている。また、彼によると、1888 年の内務省通達も、仮釈放が可能な時には、恩赦よりもそちらを行う方が好ましいと述べている⁶⁹。次に、個別的恩赦の場合についても、内務大臣は、仮釈放の観点から嘆願書類を検討する方が有益だとしていると彼は言う⁷⁰。さらに彼は、仮釈放が恩赦の代わりとなることを歴史的に論証しようとする。彼によれば、復古王制期にも、宗教施設で刑期を過ごし、振舞いが改善しなければそこから追い出される条件の恩赦が行われていた⁷¹。また、アンシャン・レジーム期のガレー船徒刑からの呼戻しも、当局による監視と、居住地やそこまでの道のりの指定を条件としており、さらに、ここで用いられる手形は、仮釈放の書式と類似していると言うのである⁷²。

しかしながら、死刑の場合には仮釈放を用いることはできない。また、ギゾーの議論を思い出すと⁷³、恩赦には冤罪を防ぐという意義があり、この目的には、仮釈放では対応することができない。この点について、ラルノードは、このような場合には、恩赦ではなく再審を用いればよいと述べた。彼にとって恩赦は、もはや単なる過去の残滓であって、消滅すべきなのである。また、彼によれば、恩赦と仮釈放は、ともに罪刑の均衡を目指しており、これを達成するためには後者の方が優れている。彼において、恩赦は前近代的な法制

⁶⁹ おそらく、これは、6 月 28 日の通達のことを指している。それによると、検事局長は恩赦を行う際、仮釈放が法的に可能な場合には、その可能性について意見を述べなければならない。ただ、メルルによれば、この通達は内務省ではなく司法省で出されている。Merle, *op. cit.*, p. 182.

⁷⁰ グラニエによると、内務大臣はこの書類を司法大臣から受け取る。しかしながら、当時の学位論文での説明を見る限り、個別的恩赦の手続きに内務大臣はほとんど登場せず、グラニエが手続きのどの部分を指しているのかは判然としない。Sermet, *op. cit.*, pp. 241-245, 248-251. 仮釈放の手続きは Lacomme, Henri, *Comparaison entre le droit de grâce et la libération conditionnelle*, thèse pour le doctorat en droit, Toulouse, 1910, pp. 129-134 を参照。

⁷¹ この施設は、20 歳以下の受刑者にたいし、第二帝制期も行われていた。Sermet, *op. cit.*, p. 224 ; Legoux, *op. cit.*, pp. 79-80.

⁷² *Revue pénitentiaire*, pp. 956-957.

⁷³ Guizot, *op. cit.*, pp. 193-198.

して用いられた。また、この恩赦は第二帝制期にも行われていたようである。Sermet, *op. cit.*, p. 224 ; Legoux, *op. cit.*, pp. 79-80.

⁷⁴ *Revue pénitentiaire*, pp. 956-957. しかしながら、19 世紀にも、恩赦の後に高等警察による監視をつけることで、同じような措置が取られていた。本章第 1 節 (2) 注 56 を参照。

⁷⁵ Guizot, *op. cit.*, pp. 193-198.

の採る方法で、さまざまに使用されうる野卑な道具である。したがって、立法が改良され、より複合的となり、また、その目的により合致する、より専門化された手段ができれば、恩赦は必要ではないと彼は言う。さらに彼は、恩赦は、議会制において一層危険となるとも主張する。というのも、そこでは、大臣たちが、恩赦にかかわることで議員たちに影響力を行使し、議員たちも、選挙民にたいして影響を及ぼすからである。しかも、政治家たちが司法大臣に働きかけて恩赦を得ようとするねらいは、正義とは全く関係がない。こうして彼は、革命期の憲法制定国民議会が、刑罰の平等のために恩赦を廃止したことに理解を示す。ただ、彼によれば、当時の議員たちは、執行権だけを危険視して恩赦を廃止したが、議会主義体制は、執行権を恩赦から退けることで、その危険を二倍に高めたのである⁷⁴。

再審の存在を考慮に入れた恩赦廃止論は、イタリアでも、新派刑法学の論者たちによって唱えられていた。たとえば、ガロファーロは、『犯罪学』（1855年）において、裁判における誤りは再審により正すことができるので、恩赦はもはや必要ないと述べた。彼によれば、諸制度の発展に従って廃止された、さまざまな古い特権よりも、恩赦が長く存続していることは不可解である。しかしながら、彼は恩赦を完全に否定しているわけではない。というのも、彼は、もし、例外的な状況に限って恩赦が行われるのであれば、それは冤罪を正したり、法律を緩和したりする方法として、正当化されうると考えているからである。また、恩赦は本来、国家元首による最終審であり、手続きや憲法の分野での検討という点では維持することもできると彼は言う。さらに、彼が恩赦を否定するのは普通犯にかんしてであって、政治犯などにたいしては、これを行うこともできるのである。

ところが、彼によると、恩赦は今や仁慈や寛容、あるいは慈悲の行為と考えられており、罪人に与えられた刑罰の有用性や、それを緩和あるいは免除することによる危険には考慮がなされていない。また、恩赦による釈放の期待があれば、罪人は気楽に次の犯罪を行うので、市民にとって有害である。したがって、政府には、よき裁判によって、その害を埋め合わせる責任がある。彼にとって、刑罰は社会的安全（*sicurezza sociale*）からの必要な排除である。ゆえに、恩赦は、犯罪者との接触を避けるという、市民の権利を侵害しているのである。

さらに彼は、大赦は恩赦よりも有害であると述べる。というのも、大赦は例外的な状況に限定されず、多くの人々に区別なく与えられるからである。また、たとえ同じ犯罪であったとしても、それが大赦の前日や翌日であれば犯罪とされ、当日であれば無罪の法的擬制がなされる点にも批判を加えている。そのうえ彼は、大赦が刑罰を免除するだけでなく、それが言い渡されたことをも覆すと指摘する。そもそも、一人の意思により、それまでであった犯罪を消滅させ、また、将来の裁判官が再犯だと言い渡せないようにすることは、想像もできないのである⁷⁵。

⁷⁴ *Revue penitentiaire*, p. 938.

⁷⁵ Garofalo, Raffaele, *Criminologia : studio sul delitto, sulle sue cause e sui mezzi di repressione*, Torino, 1885, pp. 291-296.

ロンブローゾも、再審に言及しながら恩赦を批判している。彼の『イタリアにおける犯罪の増加とそれを止める方法について』（1879年）によれば、恩赦権は「不合理で恣意的」である。刑事システムは、論理よりも、社会の差し迫った必要性に基づいているので、社会の利益という目的を果たすためにも、より迅速な方法を用いなければならないからである。その利益のひとつは、改善された犯罪者の社会への復帰であるが、それは、恣意や濫用なしに行われなければならない。というのも、恣意や濫用による復帰は、犯罪の増加を招くからである。したがって、恩赦を政治犯などに限定するといった、何らかの歯止めを設けることが望ましい。また、冤罪の場合には、恩赦ではなく再審を用いばよい。さらに、大赦も法典から削除されなければならない。なぜなら、これらの制度は、正義の実践にも理論にも反するからである⁷⁶。

執行猶予の導入を理由に、恩赦を批判する論者もいる。たとえば、レンヌ裁判所判事のグラッセリである。彼の『恩赦権』（1898年）は、まず、刑事司法を客観的なものと主観的なものに分類し、恩赦は本来、主観的司法に属すると主張する。主観的司法とは、犯罪者の人となりや犯行の動機から判断を下す作用のことであり、客観的司法は、犯罪そのもののみに注目し、違法行為を厳格な法に当てはめた結果、導き出された固定刑を科す作用である。しかしながら、主観的司法は、長い間隠れてしまっており、裁判官にこの権限は与えられていなかった。ゆえに、この頃には、主権者たる国王の恩赦が必要であった。

彼によれば、恩赦は一種の主観的破棄(cassation)である。また、恩赦権は、裁判権と同じ者により保有されなければ、存在意義をもたない。ところが、今や恩赦は、国家元首による際限のない気まぐれや不平等、不正義の残滓となってしまった。しかしながら、執行猶予制度の成立により、主観的司法と客観的司法の両方が、裁判官の手に委ねられるようになった。ゆえに、主権者による恩赦は、裁判官による釈放と二重になるため不要であり、法律と刑事手続きにおける平等に欠缺をもたらすので有害であり、そして、単なる好意や気まぐれとなるので不正である。さらに彼は、受刑者についても、行刑裁判所(tribunal pénitentiaire)を設置し、そこに釈放の権限を与えることを提案する。つまり、有罪判決を下された者は、裁判によってしか放免されないのである⁷⁷。

以上のように、19世紀末の恩赦廃止論は、恩赦に代替する法的手段の存在をその主張の根拠とした。これらの手段のうち、19世紀末に導入された、仮釈放や執行猶予の影響は、統計からも見て取ることができる。次節では、19世紀における恩赦を統計的に考察したい。

⁷⁶ Lombroso, Cesare, *Sull'incremento del delitto in Italia e sui mezzi per arrestarlo*, Torino, 1879, pp. 127-128.

⁷⁷ Guérin de la Grasserie, Raoul-Robert-Marie, *Le droit de grâce*, Firenze, 1898, pp. 1-7, 19-20.

第3節 政体の変遷と恩赦

(1) 統計からみる恩赦

フランスでは、1825年から毎年、『フランスにおける刑事司法行政の一般報告』という統計資料が出されている⁷⁸。この統計には、1837年から、集団的恩赦にかんする記録も掲載されるようになった。そこからは、恩赦された人数だけでなく、性別の内訳、恩赦の内容、それぞれの流刑地と中央監獄の収容者の数なども見て取ることができる⁷⁹。また、1873年から1898年までは、個別的恩赦の数も収録されており、1877年までの5年間については、集団的恩赦と同様、その内訳まで示されている。本節では、この統計を用いて、19世紀の恩赦の実態について検討し、最終的には、政体の変遷と恩赦との関係を考えてみたい。

19世紀の集団的恩赦は、1818年2月6日のオルドナンスを原型としている。この法令により、毎年5月1日までに、各知事は、善行と勤勉さのために、恩赦に相当するとされた罪人のリストを、監獄を管轄する内務大臣に提出することを命じられた(第2条)。このリストは、内務大臣の考察とともに、司法大臣に提出される(第3条)。この後、司法大臣は、検事長らにより用意された資料を検討し、聖王ルイの命日である8月25日、国王による決定を仰ぐのである(第4条)⁸⁰。

ルグーによれば、集団的恩赦は寛容、すなわち、主権の直接的で自発的な発現からなっていた⁸¹。実際、この恩赦は、アンシャン・レジーム期の罪刑消滅と同様、慶事などの場合に行われることもあった。集団的恩赦が行われた日は、その時々政府にとって重要な意味を有していたと言うことができる。復古王制末期には、1826年8月18日のオルドナンスにより、ルイ9世の命日の恩赦は、11月4日の聖シャルルの日に行われるようになった⁸²。また、七月王制期には、1833年4月13日の通達により、国王ルイ＝フィリップの即位記念日の8月9日に、恩赦を行うことが定められた⁸³。第二共和制の時期には、5月4日に恩

⁷⁸ *Compte général de l'administration de la justice criminelle en France*, Paris, 1827-1902.

⁷⁹ ただ、しばしば記述されている項目が変更されており、年によっては把握できない情報もある。また、本稿では19世紀における恩赦の実施状況の推移のみを扱っているため、1901年以降の掲載状況については確認していない。

⁸⁰ Duvergier, *op. cit.*, t. 21, pp. 366-367. 1834年7月6日まで、植民地の受刑者はこの恩赦の対象とはみなされていなかった。Sermet, *op. cit.*, p. 227.

⁸¹ Legoux, *op. cit.*, p. 54.

⁸² Sermet, *op. cit.*, p. 227. 聖シャルルとは誰か、また、なぜ恩赦がこの日に改められたかは定かではない。

⁸³ このような、何かの記念となる恩赦が、個別的に行われる場合もあったようである。たとえば、1841年には、5月1日のパリ伯の洗礼の記念による恩赦が行われたが、5月8日の時点で、ジュール・ロンゲへの恩赦が執行されている一方で、5月12日にも、司法大臣の指令により、この洗礼を記念した恩赦をオルビリー(horbilly)のコミュニーの住民にたいし与えるよう命じられている。AN BB²¹ 439-440. これにたいし、国王の即位日の恩赦の場合には、同様の指令には、1818年2月6日のオルドナンスによる恩赦であること、即位記念日の8月9日に執行すべきことが明示されていた。たとえば、AN F⁷ 12017, 1839年8月7日の指令を参照。

赦が行われた。この日は、1848年の二月革命により解散されていた議会が復活した日であった。また、帝制開始直前の1852年2月16日には、当時まだ大統領だったルイ＝ナポレオンが、叔父ナポレオン1世の誕生日の8月15日に恩赦を行うことを定めた。しかも、この日は、年に一度の祝日とされた⁸⁴。8月15日の恩赦は、第二帝制期にも継続して行われている⁸⁵。第三共和制期になると、1871年5月5日に、農繁期との理由から、6月末に集団的恩赦が行われることが定められた。しかしながら、1880年に7月14日が祝日となると、翌年からは、1月1日、7月14日、そして、新大統領選出の時に恩赦が行われるようになった⁸⁶。集団的恩赦は、労役刑、懲役刑、拘禁刑を対象としたが、第三共和制初期には、比較的軽微な犯罪のみを対象とする集団的恩赦も行われた。このことを定めた1873年12月1日の通達によると、この恩赦は年に3回行われ、主に短期の自由刑により県の監獄に入れられた者のうち、初犯の者を対象とした。しかしながら、この恩赦は1876年5月29日の通達により廃止された⁸⁷。

集団的恩赦の対象者は、アンシャン・レジーム期と同様、候補者リストから選出された。対象となる受刑者は、有期刑の場合は刑期の半分を、無期刑の場合は10年を経過していなければならなかった。ここには、一度恩赦された者も含まれた。その場合は、残された刑期の半分を経過している必要があった⁸⁸。死刑の場合には、個別的恩赦のみが与えられた。該当する受刑者のリストは、初めは体刑・名誉刑と軽罪にたいする刑の2種類に分かれていた。しかし、後にこれらはひとつに統合され、1838年1月20日の通達により、8項目からなる表となった。この通達によれば、8つの項目は、①候補者の氏名、②有罪判決の理由となった犯罪、③有罪判決の日付、④判決を言い渡した裁判所、⑤刑罰の内容、⑥恩赦当日の時点で残っている刑期、⑦犯罪時の年齢、そして⑧自由考察である⁸⁹。⑧の自由考察欄には、囚人の振舞いについての情報や、検事長の意見が記入される。その他の欄は監獄で記入された。さらに、監獄からは、個々の受刑者にたいし、どのような恩赦が可能なのか、いかなる資格により恩赦がなされるのかが示された。こうして完成した表は、各県の知事

⁸⁴ Legoux, *op. cit.* p. 200 ; Duvergier, *op. cit.*, t. 52, p. 110.

⁸⁵ Legoux, *op. cit.* p. 54.

⁸⁶ Dainville-Barbiche, Ségolène, *Grâce collectives, amnistie, 1865, 1868-1928, BB²² 191 à 222. Répertoire numérique détaillé*, Paris, 2002, p. 3 ; Rulleau, *op. cit.*, p. 54. voir aussi Conan, art. cit., p. 1328.

⁸⁷ Dainville-Barbiche, Ségolène et al., *Grâce individuelles, grâce trimestrielles 1819-1955, répertoire numérique détaillé des articles BB/24/1124 à 1138*, Paris, 2004 et 2008, pp. 2-3. この恩赦にかんする資料は、AN BB²⁴ 795 に収められている。1873年12月1日の通達もここに含まれているが、それによると、この恩赦は、内務大臣の命により、監獄ごとに候補者一覧が作成され、知事らの承認を得て、判決を下した場所の検事局長に送付され、事実や見解などが書き足された後、3・6・9・12月の15日までに司法省に届けられるという一連の流れを経て、1・4・7・10月の1日に行われる。

⁸⁸ Sermet, *op. cit.*, p. 246.

⁸⁹ Legoux, *op. cit.*, pp. 54-55. この表の形式は、*Ibid.*, p. 278 を参照。この時期に実際に使用された表は、たとえば AN BB³⁰ 101-111 ; BB²⁴ 724 ; BB²⁴ 876 に収められている。

に送付される。知事は、自らの意見を示すとともに、不適当な候補者を削除することができる。続いてこのリストは、内務大臣を経て司法大臣に送付される。司法大臣は、判決を下した裁判所の検事長にリストを渡す。リストを受け取ると、各裁判所の検事局長らは、事件についての報告書を作成する。一連の資料は、司法省の恩赦部を経て、そこで作成された報告書とともに、司法大臣に送付され、最終決定へと至った（図 7）⁹⁰。

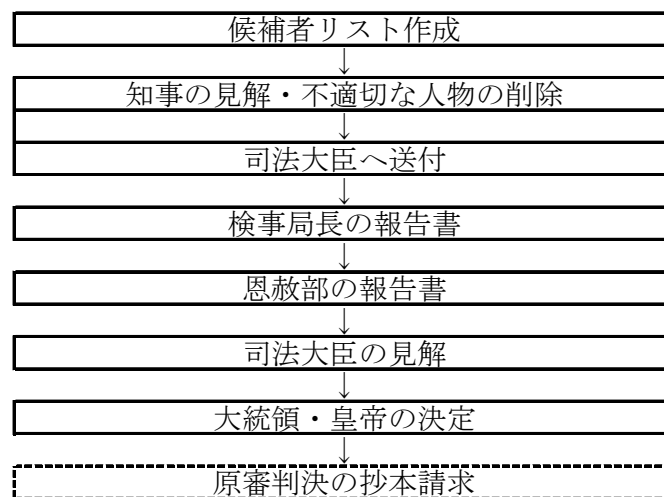


図 7 19 世紀後半における集団的恩赦の手続き

表 3 と図 8 は、1837 年から 1900 年までの集団的恩赦と、1873 年から 1900 年までの個別的恩赦、そして、流刑地および中央監獄における収容者数の推移である⁹¹。まず、集団的恩赦のグラフを見ると、1848 年、1852 年、1856 年の箇所にある山が目を引く。1848 年の恩赦は、議会による共和制の宣言とともに行われた⁹²。ここから、この年の恩赦が、新たな体制の成立を祝賀していたことがわかる。

1852 年に恩赦数が増加した背景には、おそらく、前述の 8 月 15 日恩赦の成立があるだろう。また、1851 年以降、『一般報告』は、集団的恩赦の日付を明らかにしていないので、第二共和制の成立時と同様、12 月 2 日の皇帝の即位時にも、祝賀の恩赦が行われた可能性が考えられる。実際、フランス国立古文書館で、1852 年 12 月 1 日を残りの刑期の起算点とする、前述の 8 項目の表が発見された。同じ年には、8 月 15 日を起算点とする表も作成されていることから、この年には、少なくとも 2 回恩赦が行われていると推測される⁹³。

⁹⁰ Legoux, *op. cit.*, pp. 56-59 ; Sermet, *op. cit.*, pp. 246-249.

⁹¹ 1861 年のみ、統計に示されている中央監獄等とその他の監獄それぞれにおける恩赦数を足し合わせた数と、恩赦の全体数が一致しなかった。

⁹² *Compte général de l'administration de la justice criminelle en France pendant l'année 1848*, Paris, 1850, pp. 288-289.

⁹³ AN BB²² 101-111.

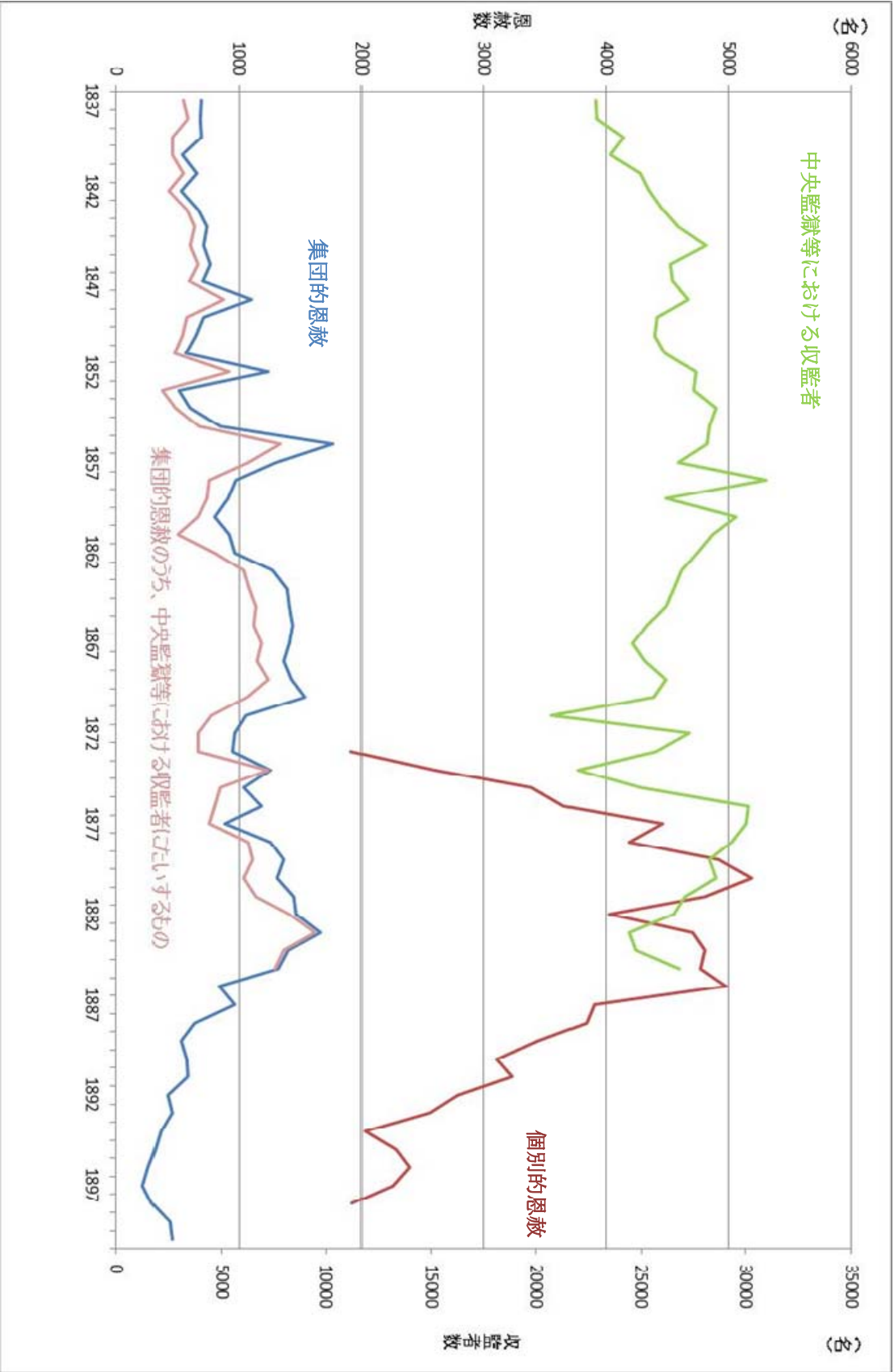


図 8 19 世紀における恩赦数と中央監獄等の収容者数
(*Compte général de l'administration de la justice criminelle en France.*)

1856 年は、参照した期間のうちで、最も多くの受刑者に集団的恩赦が与えられている。この年、フランスはクリミア戦争に勝利した。おそらく、この増加は、戦争の勝利が恩赦により祝されたことを示しているだろう。アンシャン・レジーム期には、兵士の増員のために恩赦が行われることもあったが、19 世紀には、そのような恩赦の利用はなかったように思われる。というのも、フランスはこの戦争に 1854 年から介入したが、戦争中の恩赦数は、それ以前と比べて増加してはいないからである。また、1870 年から 71 年にかけての普仏戦争や、1884 年から 85 年にかけての清仏戦争などの時期にも、恩赦の数は増加していない。

加えて、恩赦は、刑事施設の収容者数を調整するために用いられることもなかったようである⁹⁴。図 8 を見る限り、中央監獄や流刑地における囚人の数と恩赦数に、相関関係を見て取ることはできないからである。ただ、集団的恩赦の候補者リストを作成する際、各監獄は、収監者全体の 10% よりも多くの受刑者を選出することはできなかった⁹⁵。

1899 年の全国監獄協会で、ピコは、それまでの恩赦委員会が機能していなかったことをふまえて発言していたが、実際にはどうだったのだろうか。まず、1871 年から 1876 年の委員会について見てみよう。1870 年には、1547 名が集団的恩赦を与えられた。これにたいし、1871 年には、恩赦を認められた人数は 1055 名となり、1872 年には 964 名にまで減少した。1874 年には、1200 名を超える人々に恩赦が行われたが、1875 年には、再び 1000 名ほどに抑えられている。ここから、委員会は、ある程度、恩赦の抑制に成功していると言っているかもしれない。ただ、個別的恩赦の数も見ると、委員会はそれほど大きな役割を果たしてはいなかったことがわかる。1873 年の個別的恩赦は、1915 名に与えられたが、1874 年には 2603 名へと増加し、その数は 1876 年まで上昇し続けるのである。

1876 年から 1879 年の委員会はどうか。1877 年には、884 名に集団的恩赦を与えられた。したがって、前年の 1189 名よりも 300 名ほど減少している。ところが、1878 年には 1260 名となり、その翌年になると、1369 名にまで増えている。個別的恩赦も、1876 年には 3660 名にたいし行われたが、翌年には、恩赦された人数は 4460 名となり、さらに、1879 年には 4921 名に至っている。

一方、1848 年憲法の規定した、コンセイユ・デタによる意見の表明は、恩赦数の抑制に一役買っていたようにも思われる。意見の提出の際に用いられたのは、予め印刷された穴埋め式の様式に、受益者の氏名や刑罰、それを言い渡した裁判所とその日付などが書かれた紙一枚だけであつたため、一見すると、ここでの審査は形式的なものであつたようにも思われる⁹⁶。しかし、恩赦数の変動を見てみると、1849 年と 1850 年の集団的恩赦の人数は

⁹⁴ 現代のフランスでは、このような目的のために恩赦が行われることもある。渡邊文幸「法務省検察庁研究—恩赦制度と運用—」『月刊官界』第 23 巻第 7 号、1997 年、271 ページ。

⁹⁵ Sermet, *op. cit.*, p. 246.

⁹⁶ コンセイユ・デタによる書式は、AN BB²¹ 530 ; BB²² 101-111 などに収められている。

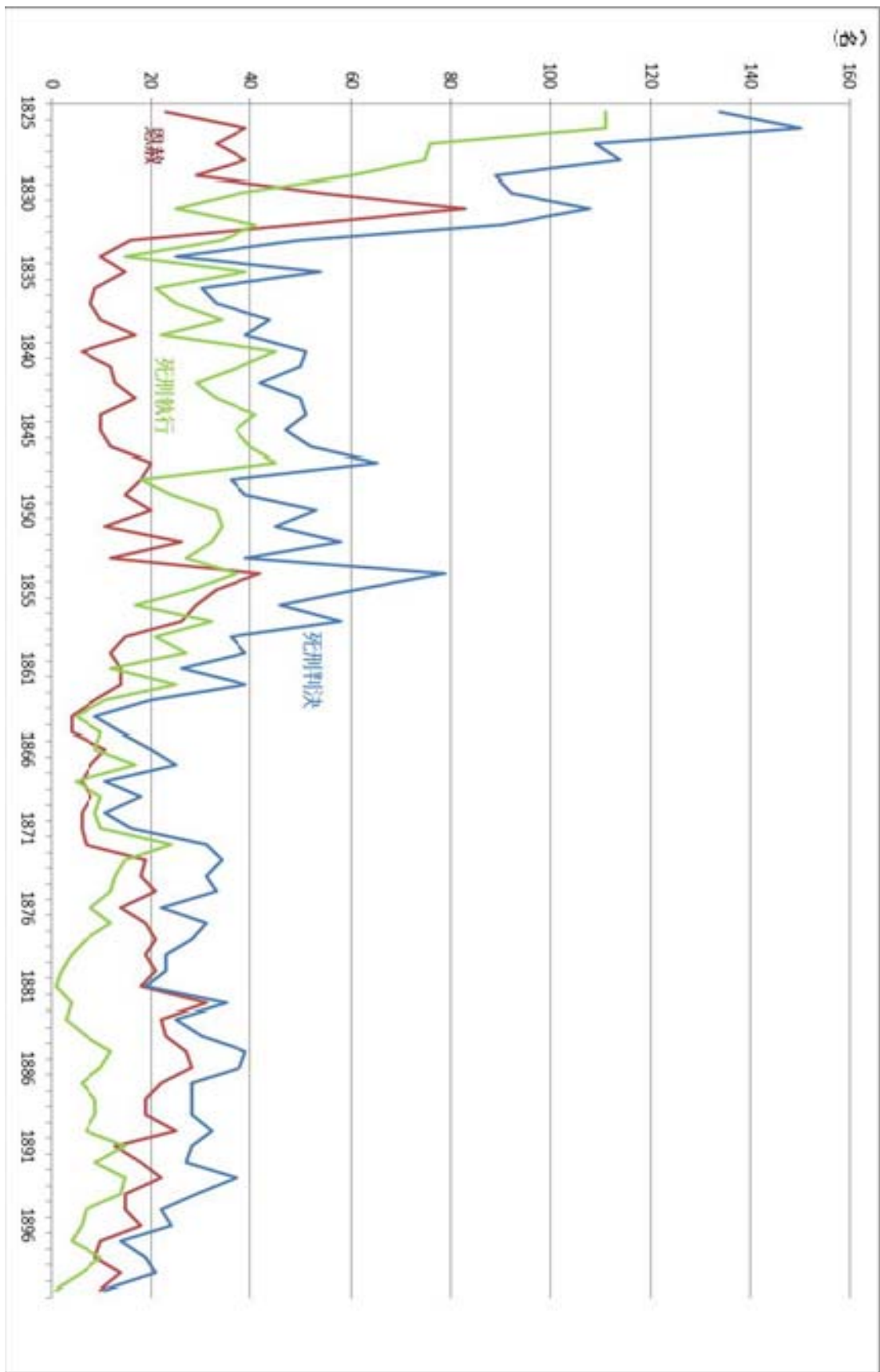


図 9 19 世紀における死刑判決への恩赦数

(Astruc et al. *op. cit.*, pp. 99-103.)

(名)

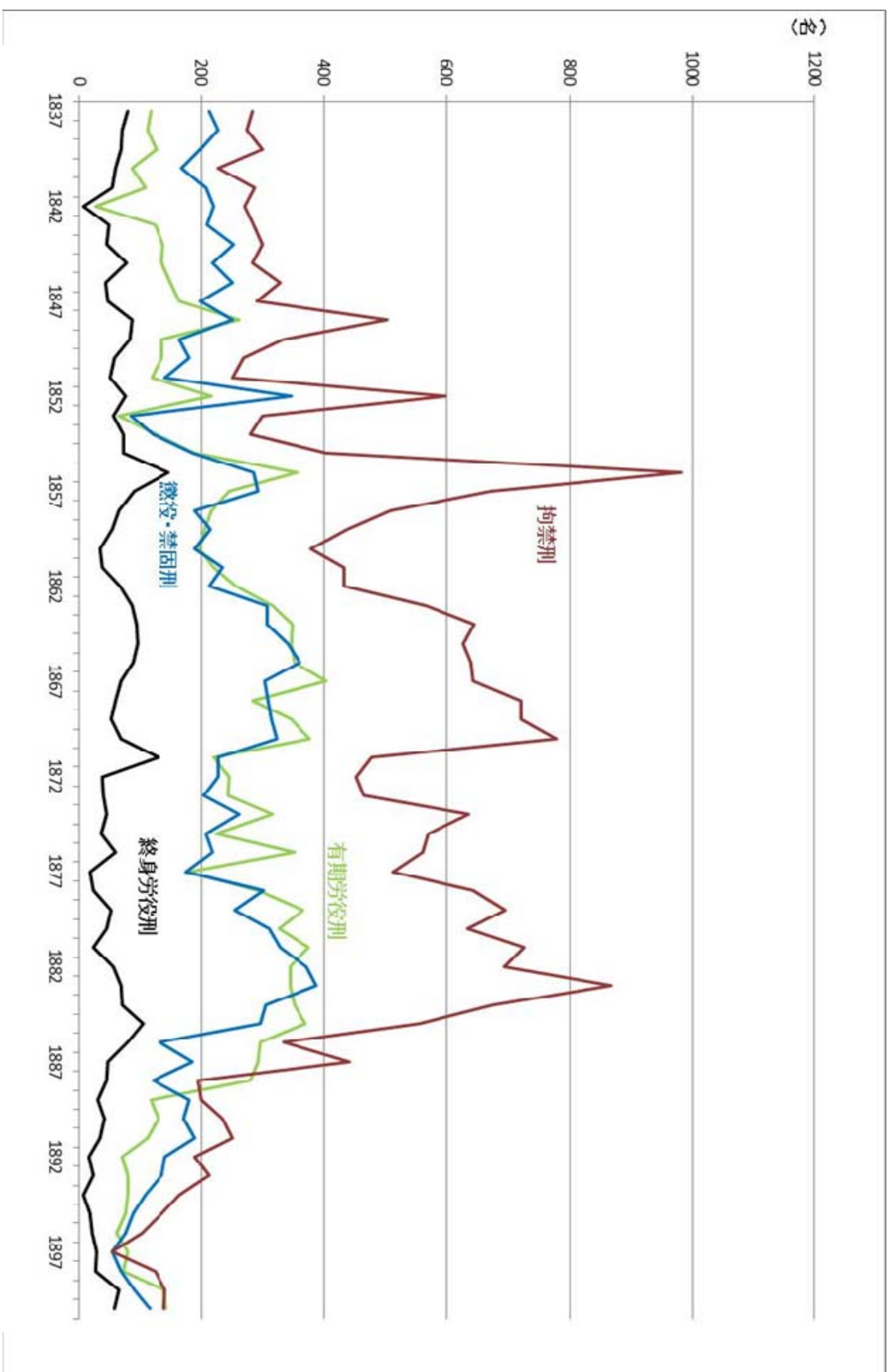


図 10 19 世紀における集団的恩赦の刑罰別内訳
(*Compte général de l'administration de la justice criminelle en France*, 以下同)

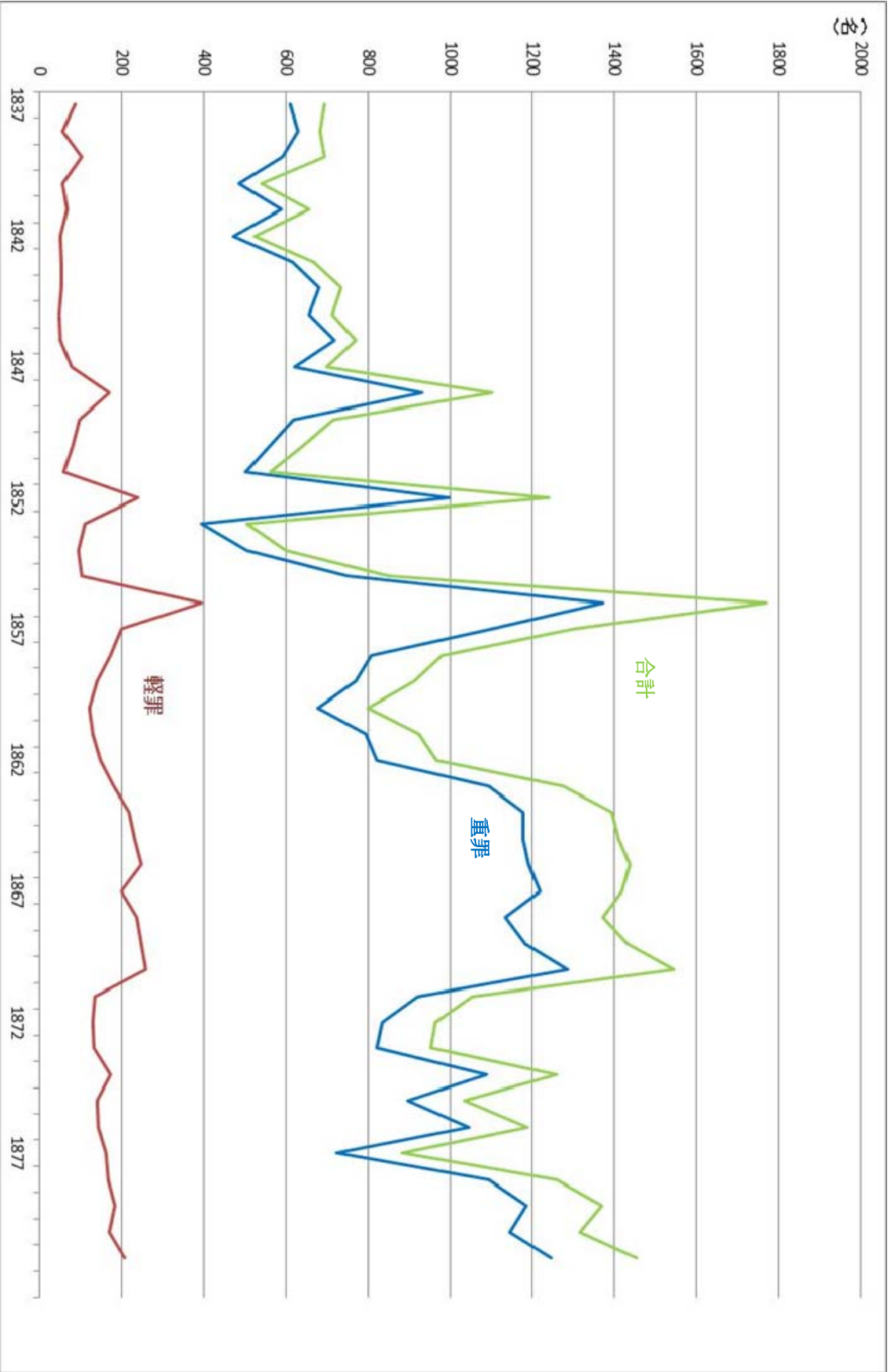


図 11 集団的恩赦における軽罪と重罪の数 (1837 年～1881 年)

それぞれ 715 名と 643 名であり、1851 年には 561 名となっている。図 8 からわかるように、これは、19 世紀全体を通じた中でも、かなり低い水準であった。ただ、七月王制期には、これよりも集団的恩赦の数が少なかった年が、少なくとも 2 年あった。また、第二共和制期と七月王制期の、1 年あたりの死刑囚にたいする恩赦数は、ほぼ同じであった。1830 年に限って、死刑囚にたいする恩赦の数が跳ね上がっていることをかんがみれば、七月王制期よりも、第二共和制期の方が、死刑囚に対する恩赦が頻繁に与えられたとさえ言うことができるだろう（図 9）⁹⁷。

図 8 からわかるように、1886 年以降、恩赦の数は一転して減少傾向となる。この点については後に述べることとして、今度は、刑罰の内容に注目して、集団的恩赦の数の推移を見てみよう。図 10 によれば、ほぼすべての年において最も多かったのは、拘禁刑にたいする恩赦であった。最も少なかったのは、終身労役刑にたいする恩赦である。拘禁刑は、軽罪にたいし与えられる刑罰なので、一見すると、19 世紀には、恩赦は軽罪を中心に行われたようにも思われる。ところが、集団的恩赦の大半は、重罪にたいし与えられていた（図 11）⁹⁸。これはおそらく、多くの受刑者が、一度別の刑罰を拘禁刑に減刑され、さらに恩赦を与えられていたからではないだろうか。

続いて、集団的恩赦の対象となった犯罪に目を向けてみよう。ほぼすべての年で、最も多かったのは窃盗への恩赦であった（図 12、13）。それ以外では、殺人⁹⁹、傷害¹⁰⁰、性犯罪などの¹⁰¹、人身犯への恩赦が多い。19 世紀末、恩赦数が全体的に減少する中で、殺人にたいする恩赦の数の変動の幅が、比較的小さかったことは注目に値する。ここから、19 世紀末になっても、恩赦の伝統的なイメージが根強く残っていたことが見て取れるだろう。

放火や毒殺、背任、詐欺破産、通貨あるいは文書の偽造といった犯罪も、ほとんど毎年恩赦の対象となっている。これらの犯罪の中では、文書偽造への恩赦の数が多し。その他の犯罪への恩赦は、少ない年では 10 件に届かず、多い年でも 5、60 件程度である。墮胎や嬰兒殺といった女性に多い犯罪も¹⁰²、多くの年で恩赦の対象となっている（図 14）。墮胎への恩赦の数は、多い時でも年に 10 数件であったが、嬰兒殺への恩赦は、多い時では年に 100 件を超えることもあった。

嬰兒殺への恩赦は、1863 年を境に増加している。それ以前は、この犯罪への恩赦は、年に 50 件を超えることはめったになかった。このような増加は、集団的恩赦の数全体にも見て取ることができる。実は、この年、刑法の改正が行われ、いくつかの重罪が軽罪へと改

⁹⁷ ガルノによると、シャルル 10 世時代の 1826 年から 1830 年にかけての、死刑囚にたいする恩赦の割合は、36%であった。Garnot, *op. cit.*, p. 436.

⁹⁸ 1882 年から、重罪と軽罪は区別なく記載されるようになった。しかしながら、突然恩赦の傾向が変わるとは考えにくい。したがって、19 世紀末になっても、それ以前と同様、重罪を中心に恩赦が与えられていたと推測できる。

⁹⁹ 殺人には、故殺・謀殺・尊属殺とその未遂が含まれる。

¹⁰⁰ 傷害致死も含まれる。

¹⁰¹ 強姦あるいは強制わいせつのこと。

¹⁰² ごくわずかであるが、これらの犯罪にかんし、男性も恩赦されている。

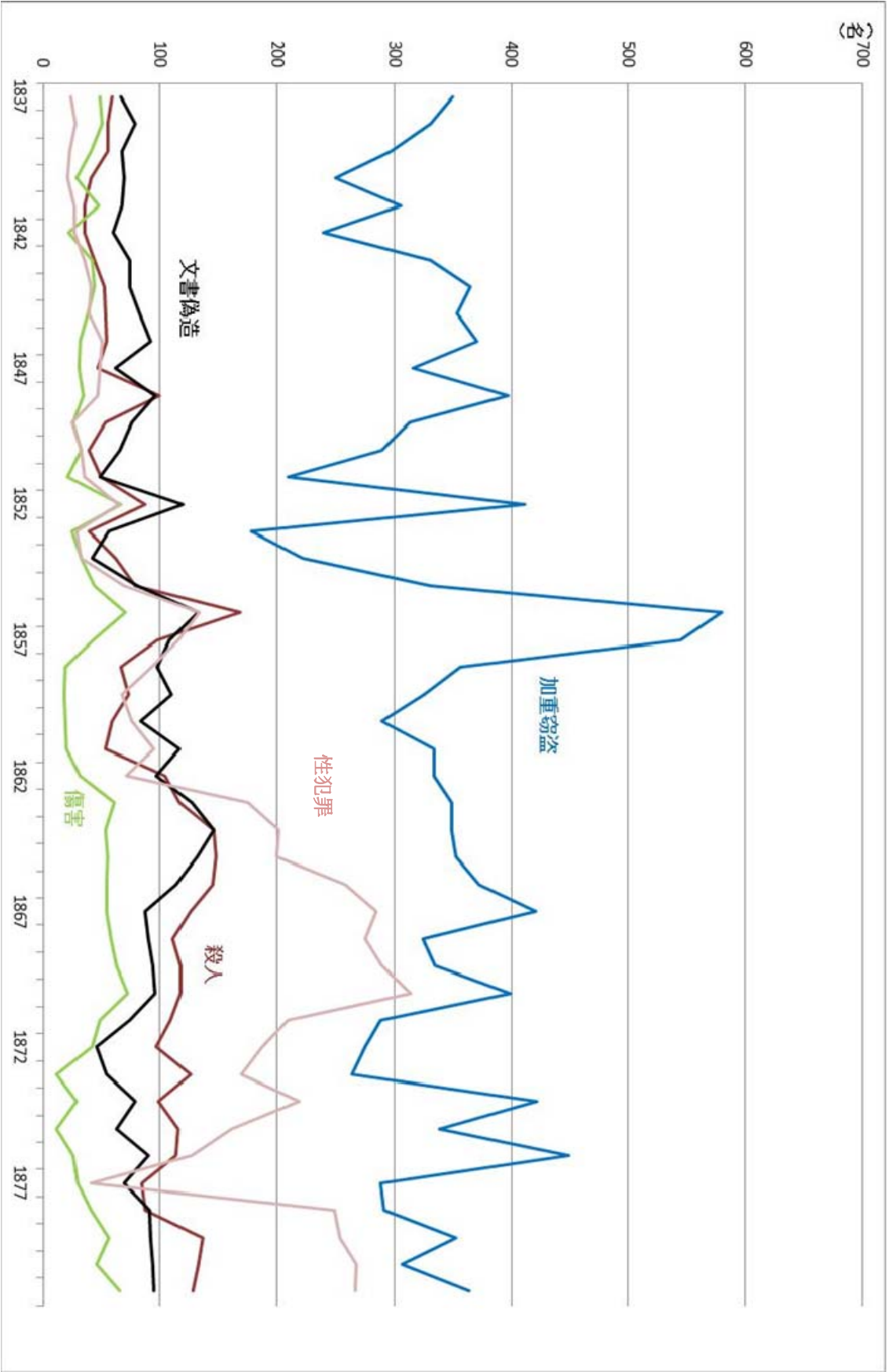


図 12 集団的恩赦の対象となった主な重罪の数 (1837 年～1881 年)

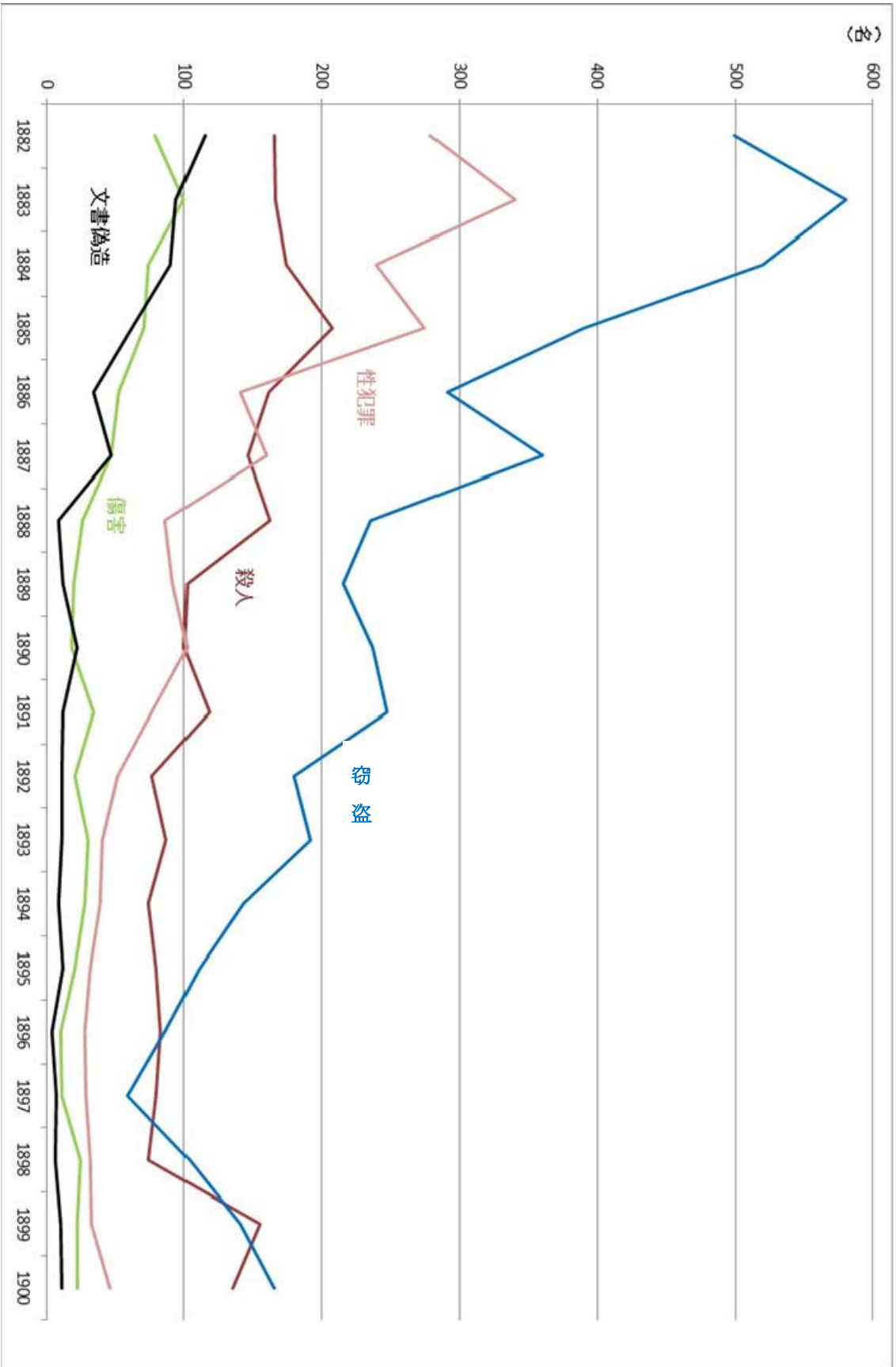


図 13 集団的恩赦の対象となった主な犯罪の数（1882 年～1900 年）

(名)

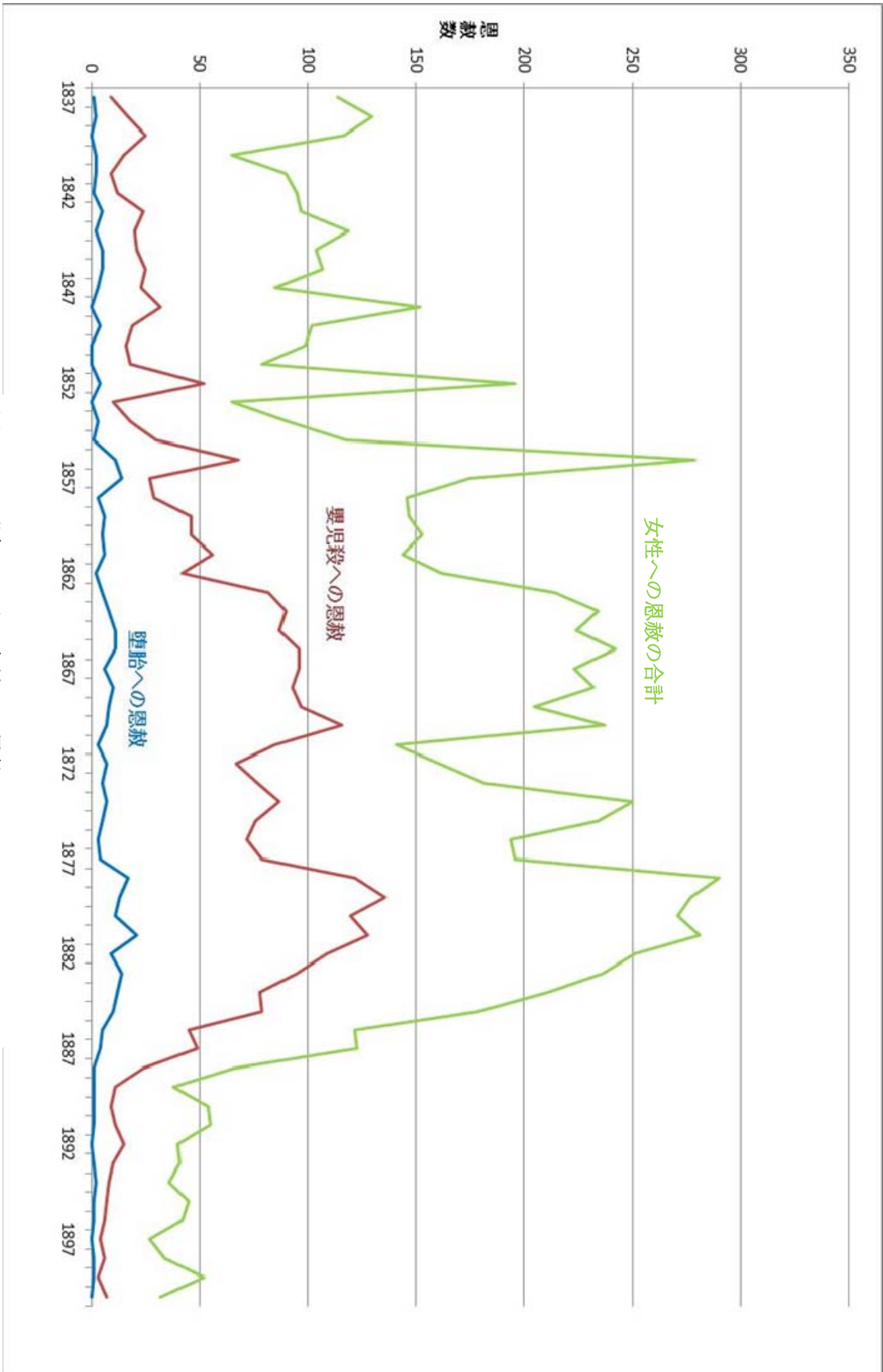


図 14 19 世紀における女性への恩赦

められた。また、恩赦の数が減少し始めた 1880 年代半ばには、仮釈放制度が成立している。カルバッスは、19 世紀は刑法の「改革の世紀」であったと述べたが¹⁰³、このような改革は恩赦に何らかの影響をもたらしたのだろうか。

(2)「改革の世紀」における恩赦

1810 年刑法典の制定以来、初めて行われた重要な改正は、1824 年 6 月 25 日の法律による、酌量減刑の導入であろう¹⁰⁴。ただ、この法律は、酌量減刑の対象となる犯罪を限定しており、さらに、減刑を決定するのは重罪院の裁判官に限られていたため、それが認められないこともあった。というのも、この制度の目的は、陪審による無罪の評決の回避だったからである。1810 年刑法典は、重罪にたいする刑罰を厳密に固定化していた¹⁰⁵。そのため、陪審員たちは、犯罪の状況を考慮した結果、法定刑が厳しすぎると判断した場合、有罪相当の事件にも無罪の評決を下した。一方、検事の側は、法定刑の重さをあからさまに懸念した場合には、偽証罪に問うとして、陪審員たちに圧力をかけたのであった¹⁰⁶。1824 年の法律以後も、陪審による無罪の評決は続いたため、1832 年 4 月 28 日の法律により、酌量減刑の可否を判断する役割は、陪審に与えられた¹⁰⁷。さらに、この法律は、10 の犯罪について死刑を廃止した¹⁰⁸。その結果、1831 年には 37%だった無罪率は、25%程度にまで低下した¹⁰⁹。

このような改正は、恩赦にいかなる影響を与えたのだろうか。集団的恩赦にかんしては、管見の限りでは明らかではない。しかしながら、個別的恩赦について言えば、死刑判決への恩赦が、1833 年には、前年の約 3 分の 1 に減少している（図 9）。1832 年には、49 名の死刑囚に恩赦が与えられたが、1833 年には 16 名、さらに、1834 年には 10 名となっているのである。死刑判決それ自体も、1832 年には 90 件であったが、1833 年には 50 件、1834 年には 25 件に数を減らしている¹¹⁰。

陪審による無罪の評決の問題は、19 世紀の一連の改正におけるキーワードである。たとえば、陪審員の選任方法は、徐々に厳格な形へと変更された¹¹¹。また、一部の犯罪を陪審制の対象外とすることで、そもそも、陪審員の介入を阻止するという方策も取られた。そ

¹⁰³ Carbasse, *op. cit.*, p. 405.

¹⁰⁴ Duvergier, *op. cit.*, t. 24, p. 517.

¹⁰⁵ Carbasse, *op. cit.*, p. 408.

¹⁰⁶ Gruel, Louis, *Pardons et châtiments*, Paris, 1991, p. 23.

¹⁰⁷ Duvergier, *op. cit.*, t. 32, pp. 149-150. 中村『ナポレオン刑事法典』338 - 339 ページ。

¹⁰⁸ Astruc, Philippe et al., *L'abolition de la peine capital en France (9 octobre 1981)*, Paris, 2011, pp. 43-44.

¹⁰⁹ Gruel, *op. cit.*, p. 25.

¹¹⁰ Astruc et al. *op. cit.*, pp. 99, 112.

¹¹¹ Alline, Jean-Pierre, *Gouverner le crime. Les politiques criminelles françaises de la Révolution au XXI^e siècle. 1. L'ordre des notables 1789-1920*, Paris, 2011, pp. 81-82.

のひとつが、1863年5月13日の法律による、一部の重罪の軽罪化であった¹¹²。これにより、20の重罪にたいする刑罰が拘禁刑に改められた。こうして、第二共和制の頃には40%にまで上昇した無罪率は、第二帝政末期からパリ・コミューンにかけての時期には、20%まで減少した¹¹³。

1863年の法律は、一見すると、恩赦にも影響を与えているように思われる。1862年から63年にかけて、集団的恩赦の数が、約1.3倍に増加しているのである(図8)。しかも、これ以降、1886年まで、毎年の恩赦数は高い水準を保っている。しかしながら、この時に数を増やしたのは、重罪にたいする恩赦であって、軽罪にたいする恩赦の数に大きな変動はなかった(図11)。また、刑罰別の内訳を見ると、拘禁刑以外の刑罰にたいする恩赦も、この時に増加していることがわかる(図10)。

1886年に集団的恩赦の数が減少したのは、おそらく、1885年8月14日の法律が、仮釈放を導入したことと関係しているだろう。この法律は、復権の制度の改正も含んでおり、悔い改めた受刑者を社会に戻し、再犯を防ぐことを目的としていた¹¹⁴。1891年3月26日の法律による執行猶予の導入も、再犯の防止を目的としていた。この法律によると、軽罪を犯した者が初犯であれば、5年間の執行猶予を与えられ、その間に再び罪を犯した場合には、初めの犯罪と次の犯罪にたいする刑罰がそれぞれ与えられた。また、刑期満了後か時効が成立した後、5年以内に再び犯罪を行った場合にも、犯人はより重く罰せられた¹¹⁵。

これらの制度による影響を具体的に見てみると、1885年には、1324名に集団的恩赦が与えられたが、翌年には841名にまで減少している。1887年には、集団的恩赦の数は100件ほど増加するが、それ以後は少しずつ数を減らし、1890年には577名、1891年には587名、1892年には417名となる。そして、1897年には217名にまで落ち込んだ。

個別的恩赦の数を見ても、1886年には、前年の4774名と比べて、およそ20名増加したものの、1887年になると、そこから約1000名減少して3901名となる。1890年には3108名、1891年には3235名に恩赦が与えられ、1892年になると2787名にまで減少する。そして、1898年には2000名を下回るのである(図8)。

一方、仮釈放の件数は、1886年には212名であったものの、翌年には492名、1888年には1459名にまでのぼり、その後も、1900年まで1400~1800名程度を推移することになる¹¹⁶。また、執行猶予は、1891年の時点で11807件であったが、1900年には31491件にまで上昇した。これらの制度の導入は、犯罪の抑制にも結び付いている。1890年には180,000件以上であった普通犯の件数は、1900年になると150,000件にまで減少している

¹¹² Duvergier, *op. cit.*, t. 63, pp. 418-488.

¹¹³ Gruel, *op. cit.*, pp. 27-28.

¹¹⁴ Alline, *op. cit.*, pp. 201-202.

¹¹⁵ Duvergier, *op. cit.*, t. 91, pp. 54-60. 中村『ナポレオン刑事法典』、172 - 173 ページも参照。voir aussi Alline, *op. cit.*, p. 202.

¹¹⁶ Lacomme, *op. cit.*, pp. 163-166.

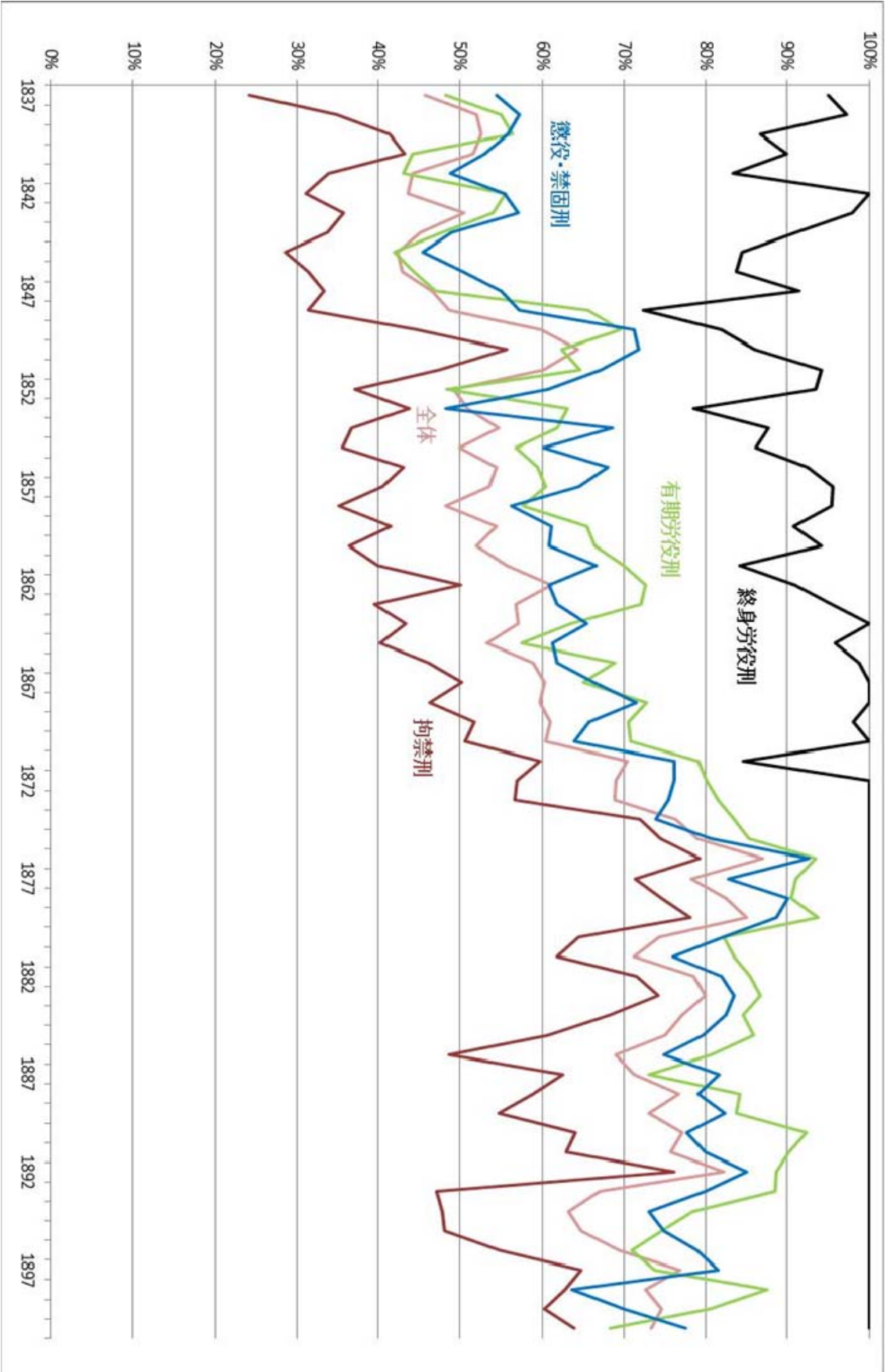


図 15 19 世紀の集団的恩赦における刑の軽減の割合

のである¹¹⁷。これらのことから、19 世紀末の恩赦数の減少は、犯罪や刑罰の執行の数が少なくなったことと関連していると言えることができるだろう。

以上より、19 世紀、恩赦は受刑者の改善や、刑の個別化のために用いられていたと言えることができるだろう。恩赦のこのような意義は、とりわけ、第三共和制の時期に顕著に表れていたと考えられる。というのも、第二帝制の崩壊後に、集団的恩赦における、刑期の削減や減刑の割合が上昇しているからである(図 15)。刑の軽減の割合が最も高くなるのは、第三共和制憲法が成立した 1875 年である。それ以後、この割合は緩やかに下降するが、全体的に見れば、第三共和制期は、それ以前と比べて、恩赦による刑の軽減の割合が高くなっているのである。

ゆえに、今や恩赦は、一度に多くの囚人を釈放することで、政府の寛大さを華々しく表現する役割というよりは、改善した犯罪者に、釈放の日を予定よりも早めるという褒美を与えることで、彼らの変化を促す役割を担っていると考えられることができる。この時、恩赦の可否を判断するために重要なのは、犯罪の内容それ自体よりもむしろ、刑事施設における受刑者の振舞いである。また、これを評価するのは、彼らを日々監視する監獄である。赦しを与える者が権力をもつ者と一致するのであれば、ここで真の権力を行使しているのは、そのような末端の機関であると言えることができるかもしれない。しかしながら、重要なのは、再審や仮釈放、あるいは執行猶予とは異なり、恩赦は、あくまで主権者、あるいは国家元首の名の下に与えられる慈悲だということである。おそらくそのことが、これらの法的措置の存在にもかかわらず、恩赦が存続した背景にあるのではないだろうか。

(3) 共和制と恩赦

これまで、統計を用いて、19 世紀の恩赦について検討してきたが、それによれば、恩赦は、しばしば前近代的な制度だと批判されていたにもかかわらず、世紀後半に広く用いられていた。とりわけ、第三共和制の時期には、恩赦を抑制する制度が設けられたにもかかわらず、仮釈放や執行猶予の導入まで、毎年多くの受刑者に恩赦が与えられていた。かつて、モンテスキューは『法の精神』において、恩赦は君主制と親和的であり、共和制においてはそれほど必要ではないと述べたが¹¹⁸、実際には、共和制こそが恩赦と親和的なのではないだろうか。

たしかに、統計を見る限り、1 年あたりの集団的恩赦の数が最も多かったのは第二帝政期であった。この時代には、毎年、平均しておよそ 1160 名に集団的恩赦が与えられた。一方、第三共和制期においては、1 年あたり 900 名弱にとどまっている。ただ、仮釈放導入前に限って言えば、1 年あたりの平均値はおよそ 1240 名となる。さらに、個別的恩赦について見

¹¹⁷ Aubry, Octave, *De la loi de pardon en matière pénale*, thèse pour le doctorat en droit, Paris, 1908, pp, 48-49, 55.

¹¹⁸ *Œuvres complètes de Montesquieu*, t. 1, p. 126. モンテスキュー『法の精神（上）』、194 ページ。

ると、1873 年を境に、死刑判決にたいする恩赦の数が、実際の執行の数を上回るようになったのである（図 9）。

第二共和制期には、議会の復活と同時に、多くの人々に恩赦が与えられた。さらに、二月革命により共和制が宣言された 2 月 25 日から、5 月 5 日までのおよそ 2 ヶ月の間に、少なくとも 6 回の大赦が行われている¹¹⁹。この大赦は、議会ではなく、11 名からなる臨時政府により行われた。というのも、議会の復活まで、臨時政府が立法権と執行権の両方を担っていたからである。19 世紀前半の議員たちにとって、大赦は「平和の回復のシンボル」であり、内乱を経て成立した新政府が、権力と秩序の安定や人々の支持などを宣言する「試金石」であった¹²⁰。したがって、このような不安定な時期に大赦が多く行われたことは、政府が革命による混乱を一度清算し、新たな秩序を作り上げようとしたことを表しているだろう。

革命後に大赦が何度も行われたという点では、七月王制も共通している。『フランス法事典』（1888 - 1906 年）によると、七月王政が成立した 1830 年には、七月革命により復古王政が崩壊した 8 月 2 日から、10 月 1 日まで立て続けに 11 回の大赦が行われた¹²¹。ただ、この事典によれば、第二共和制期と七月王政期の毎年の大赦の平均数はほぼ同じである。すなわち、大まかな計算にはなるが、第二共和制期は 1 年あたり約 2.26 回の大赦を行ったのにたいし、七月王政期は約 2.36 回であった。

『フランス法事典』によると、第二帝制や第三共和制の成立時にも大赦が行われている¹²²。また、図 5 によれば、第三共和制が宣言された 1870 年にも、集団的恩赦の数が上昇している。この年の集団的恩赦の数は、調査期間を通じて 3 番目に多かった。実は、集団的恩赦の数が多かった年は、第三共和制期に集中している。2 番目に多くの集団的恩赦が行われたのは、1883 年であった。4 番目は、1882 年である。一方、仮釈放導入以前で、集団的恩赦の数が少なかった年は、君主制の時期に集中している。最も小規模な集団的恩赦が行われたのは、第二帝制期の 1853 年であった。2 番目と 3 番目に少なかったのは、七月王制期の 1842 年と 1840 年であり、4 番目によく、第二共和制期の 1851 年が登場する。ちなみ

¹¹⁹ Conan, art. cit., p. 1310, note 25.

¹²⁰ 1834 年 12 月 29 日の議論における、サドとパジェスの発言を参照。 *Moniteur*, 30 décembre 1834.

¹²¹ *Répertoire général alphabétique du droit français*, publié sous la direction de Ed. Fuzier-Herman, t. 3, Paris, 1888-1895, p. 152. 『フランス法事典』によれば、復古王制成立時には、大赦はそれほど頻繁には行われていない。ただ、百日天下後の 1816 年に、ルイ 16 世の裁判で死刑に賛成した者や、百日天下に関与した者を除く、「反逆とナポレオン・ボナパルトの篡奪」に関与した者すべてを対象とする大赦が行われていることは、注目に値するだろう。この大赦法については、遅塚忠躬「王政復古期の「国王弑逆者」」（同『フランス革命とヨーロッパ近代』同文館出版、1996 年、所収）を参照。大赦法の条文は、Duvergier, *op. cit.*, t. 20, pp. 237-238 に掲載されているが、プジョーは、この大赦の際、罪刑消滅の書状が交付されたと述べている。彼によると、ここで与えられたものを最後に、罪刑消滅は姿を消した。Poujaud, *op. cit.*, p. 113.

¹²² *Répertoire général alphabétique*, pp. 152-154.

に、ティエールによれば、この年の 1 月 3 日に、反大統領派のシャンガルニエ将軍が罷免されたことをもって、「帝政が樹立された」¹²³。また、12 月 2 日には、ルイ＝ナポレオンによるクーデタが行われ、事実上、第二共和制は終焉を迎えたのであった¹²⁴。

以上から、モンテスキューの言葉は、必ずしも自明ではなかったとすることができる。むしろ、君主という、血統と宗教に裏打ちされた正当化根拠をもたない共和政体こそが、自らの存在を正当化するために、「神の権利」に頼ったとすることができるかもしれない。

19 世紀、恩赦は、一方では法的性格を強め、他方では政治的性格を維持した。そういった意味では、1899 年 9 月 19 日、ドレフュス事件に、恩赦によりいったん区切りがつけられたことは示唆的である¹²⁵。この年の 6 月 4 日、破棄院はドレフュスの有罪判決を破棄し、軍法会議へ移送した。ところが、9 月 9 日に再び有罪判決が下されたため、政府は恩赦に踏み切ったのであった。この頃、ドレフュス有罪の証拠のひとつとなった書簡の偽造が明らかとなり、ゾラをはじめとする、ドレフュスの無罪を主張する人々の活動が、実を結びつつあった。したがって、この恩赦は、ドレフュスの有罪に疑いが差し挟まれたにもかかわらず、軍部の政治的判断により、原審判決が維持されたことにたいする反論を意味している。つまり、この恩赦は、政治的判断により歪められた法的事実を、政治的判断により正そうとしたとすることができるのである。

¹²³ *Discours parlementaires de M. Thiers*, publié par M. Calmon, troisième partie (1850-1864), t. 9, Paris, 1880, p. 114.

¹²⁴ 柴田三千雄ほか編『世界歴史体系 フランス史 3 19 世紀半ば～現在』山川出版社、1995 年、100 - 101 ページ。

¹²⁵ ドレフュス事件については、渡辺一民『ドレーフュス事件 政治体験から文学創造への道程』筑摩書房、1972 年、を参照。

おわりに

本稿では、古代ローマから 19 世紀までのフランスにおける、主権の一側面としての恩赦を、法制・思想・実態の 3 側面から考察してきた。このような性質上、本稿では、最近フランスで注目され始めた、恩赦の裁判外手続としての側面は¹、ほとんど考慮されていない。これらの研究によれば、恩赦は、和解を促すために与えられることもあり、あるいは、当事者自身が、すでに成立した和解を恩赦という権威により裏打ちし、復讐を回避するために、これを利用することもあった。しかしながら、本研究は、恩赦を与える王権と恩赦を嘆願する個人との関係を考察するにとどまっており、紛争当事者間の関係には、ほとんど言及していない。

また、本研究では、王権と地方権力との関係、とりわけ、フランス革命直前まで自治権を有していた、いわゆる「三部会地方」との関係が検討されていない。近年、「フランス絶対王政」という、教科書的なイメージにくさびを打ち込むような研究が盛んに行われており、恩赦にかんしても、地方権力との競合関係や協力関係が明らかにされているが、本研究は、主権概念の変遷と恩赦の関係を主眼に置いていることもあり、このような研究動向を十分に取り入れるには至らなかった。

さらに、近年には、本研究以外に、フランス革命以後の恩赦を扱った研究がほとんど存在しないこともあり、とりわけ 19 世紀の恩赦については、実際の事例を分析することができなかった。また、19 世紀における恩赦の法的側面についても、憲法の規定や法学書の記述が参照されただけであり、その土台をなす目的や意図などの部分には十分に踏み込まれていない。ただ、この時期の恩赦状や、当時の制度を規定した通達などの一次資料は、他の時代と比べて多く残されており、保存状態も比較的良いものがあるので、今後の研究の進展が期待されるところである。

このように、本稿での考察は、十分なものとは程遠い状態にはあるが、以下、これまでの考察を簡単にまとめておきたい。

恩赦は古来、「神の権利」であり、一般的には、法による通常の手続きにたいする例外的な制度と考えられてきた。しかしながら、ほとんどの時代において、恩赦を規定する法が存在し²、とりわけ、アンシャン・レジーム期には、その定義や手続きまで法定されていた。国王の恩赦権それ自体もまた、単に彼が国王であるという事実のみにより自明視されたわけではなく、ローマ法やカノン法に由来する言説を駆使し、歴史的に培われたものであった。一方、フランス革命期の 1791 年刑法典による恩赦廃止と、共和暦 10 年の恩赦復活を経て、19 世紀になると、恩赦権の所在こそ憲法により定められはしたが、それ以外の点に

¹ たとえば、2007 年には、ブリュッセルでフランス、ベルギー、オランダの若手研究者らにより、このテーマに関心のひとつとするセッションが開催された。その成果が、*Préférant miséricorde à rigueur de justice* である。

² わが国では、江戸時代より「赦律」が存在し、明治から大正にかけて制定された恩赦令を経て、現在にも恩赦法が定められている。

については、確固たる法の規定は見られなくなった。アンシャン・レジーム期の 1670 年刑事王令が、恩赦のために一章を割いていたのとは対照的に、1808 年治罪法典も、1810 年刑法典も、恩赦についてほとんど言及せず、恩赦不可能な犯罪をはじめとする恩赦への制限も、多くがフランス革命を機に姿を消したのである。

このことは、恩赦が君主制的であり、前近代的であるという通説的理解とは逆行しているように思われる。つまり、法規定のみに注目すれば、アンシャン・レジーム期よりも近代のほうがむしろ、恣意的な恩赦を認めていたとすることができるのである。

法制のレヴェルから一段下がり、思想のレヴェルにおいてはどうか。アンシャン・レジーム期には、恩赦はイデオロギー的に重要な役割を担っていた。たとえば、ボダン『国家論』において、恩赦を「主権の第 5 のしるし」と位置付けた。彼によれば、主権は「絶対的かつ永続的」で、ただひとりの国王のみがもつべきものであった。したがって、恩赦は、神の地上における似姿である国王以外の誰にも行われてはならなかった。一方、彼は刑罰権を「主権のしるし」には数えていない。というのも、国王がその権力を安定的に維持するためには、臣民に好かれていた必要があったからである。これより、主権国家の核となる部分には、刑罰ではなく恩赦があったとすることができる。この考えは、当時の王権にも共有されていた。王権は、過酷な公開刑により人々に恐怖を与え、彼らの服従を獲得しながらも、実際の処刑は執行人の手に委ね、刑罰にたいする人々の憎悪を、彼ひとりに集約させた。そして、自らは、受刑者の命を救う時にだけ、恩赦状という形で観衆の前に登場し、「赦しを与える神」の座を手にしたのである。

ここからすれば、王権の衰退する 18 世紀後半に恩赦廃止論が登場したことは、当然の帰結であったと言えるかもしれない。しかしながら、ベッカリーアをはじめとする恩赦廃止論者は、恩赦が王権と結びついているからではなく、緩和された確実な刑罰からなる、彼らの理想とする刑法に矛盾しているから、その廃止を求めたにすぎなかった。実際、モンテスキューやロックなど、いわゆる「近代」の側に分類される思想家たちも恩赦を称賛しており、その一方で、ベッカリーアが名指しで批判したカルプツォフは、恩赦を批判したのである。

恩赦が、必ずしも君主制と不可分一体の関係にあるわけではないということは、恩赦廃止の際の議論からも見て取れるだろう。この時、恩赦の廃止と君主制の廃止を結びつけた議員はひとりもおらず、それどころか、彼らは国王への忠誠さえ口にしていて。また、恩赦復活後、思想的に全く逆の立場にいるコンスタンとメーストルが、同様な根拠により恩赦を支持していたことも、恩赦と君主制との結びつきを相対化するに足る事実だと言えることができるだろう。

恩赦の実態からは、恩赦と各時代の権力のあり方との関係が明らかとなった。16 世紀から 17 世紀にかけての、近代主権国家としてのフランスの形成の過程においては、恩赦は画一的な「臣民」の形成のために用いられた。たとえば、国王は、新たに領土として組み込まれた都市を訪れ、華々しい入市式を行うとともに、囚人を解放し、現地の人々を懐柔し

た。このとき人々が恩赦を嘆願したことは、彼らが国王を主君と認めていることを意味した。また、王権は、恩赦嘆願の際のディスクールを通じて「善きフランス人」の典型を人々に知らしめた。つまり、嘆願状の中で人々は、刑罰を免れるために、厳しく処罰するには忍びない「善人」を演じながら、知らず知らずのうちに「臣民」の型にはめ込まれていったのである。

ところが、18世紀になると、恩赦を取り巻く状況に変化が訪れる。嘆願状には、理想的臣民とは程遠い、嘆願者自らの弱さを吐露する内容が多く見られるようになった。また、恩赦は伝統的に、殺人など死刑に相当する重罪に与えられていたが、この頃には、軽微な財産犯が恩赦の中心となった。さらに、人々は、罪刑が明らかに均衡していないと考えた時には、処刑場で暴動を起こし、「主権のしるし」であり、国王以外の者によって与えられてはならない恩赦を、力づくで行わせた。そのうえ、彼らは、本来は受刑者にたいする慈悲であるはずの恩赦を、自分たちの家の名誉のために利用しさえした。これらのことから、18世紀には、人々にとっての、「国王の正義」の意味合いが変化していたことがわかる。とりわけ、人々が処刑を止めたことは、彼らによる国王の正義の否定を意味した。ただ、このことをもって、君主制それ自体の正当性が崩壊したと言うことはできない。というのも、人々は初めから受刑者を力づくで救出しようとして刑場に赴いたわけではなかったからである。彼らは、刑場で恩赦を求めながらも、それが叶わなかったから、強硬手段に及んだに過ぎなかった。もし、人々が国王の存在に否定的な感情をもっていたとしたら、彼らは恩赦を求めただろうか。

ともあれ、18世紀後半における恩赦の変容が、この時期における王権の衰退を反映していたことは否定できない。権力の変遷と恩赦との密接な関係は、革命期の恩赦の実態からも見て取ることができる。1791年刑法典による恩赦の廃止は、それ以前に裁かれた犯罪には影響を与えなかったため、革命初期には、依然として国王により恩赦が行われていた。ところが、その文面には、王権の衰退が明らかに反映されていたのである。

やはり、恩赦と君主制は不可分一体のものであったのだろうか。ところが、革命期には、恩赦権の根拠は人民の主権へと移転し、その結果、人民の恩赦権が叫ばれた。さらに、人民の代表としての議会が恩赦権をもつと想定されることもあった。実際、革命議会は、恩赦廃止の後も、「大赦」の名の下、事実上の恩赦を何度も行った。しかも、議員たち自身が、時に大赦を「恩赦」と呼びさえもした。よって、恩赦は君主制と一体のものではなかった。さらにいえば、恩赦は前近代特有のものでもなかった。恩赦の復活後、時代を下るごとに、この手段は積極的に利用されるようになり、1年あたりの恩赦数は、1870年に始まる第三共和制の時期にピークを迎えたのである。その背景には、恩赦による刑期の調整があった。当時の恩赦は、受刑者の社会復帰の促進という、刑事政策的な性格も有していた。ゆえに、同じ目的をもつ、仮釈放や執行猶予の制度が19世紀末に導入されると、恩赦の数は減少した。さらに、これらの制度の存在を理由に、恩赦の廃止を求める声も上がった。しかしながら、これらの事実は、共和制と恩赦との相反性を意味するわけではない。むしろ、この

ことは、恩赦が共和制においても、依然として重要視されていたことを証明している。というのも、このような、恩赦にとって代わる措置や廃止論の存在にもかかわらず、恩赦は存続したからである。つまり、たとえ恩赦が、別の法的措置により代替されたとしても、そのことをもって、恩赦の存在意義が完全に否定されることはなかったのである。恩赦と仮釈放などの制度との最も大きな違いは、恩赦が、あくまで国家元首の慈悲だということにある。これより、共和制においても、恩赦という、超法的なものの意義が失われることはなかったと言うことができる。

このことは、恩赦が、もともとは刑罰とともに、権力の究極的な部分をなす生殺与奪の権の一端を担っていたことと関係しているだろう。恩赦のこの性格は、アンシャン・レジーム期の、処刑直前の恩赦の場面に、最も劇的な形で表れる。大勢の人々が固唾を飲んで、受刑者の死を見届けようとする刑場に届けられる恩赦状は、国王の署名と玉璽のついた紙一枚が、人の生死を恣にするを人々に痛感させ、彼らをその力の前にひれ伏させたのである。この瞬間は、権力と刑事法との関係を集約している。これより、今後は、公開処刑という視点から、この関係を明らかにする必要があるだろう。

実は、「処刑直前の恩赦」が行われたのは、アンシャン・レジーム期だけではない。1906年から1908年にかけて、死刑廃止論者のファリエール大統領は、あらゆる死刑判決に恩赦を与え、事実上の死刑廃止を実現させた³。たしかに、この恩赦は、かつての処刑直前の恩赦のようドラマティックなものではない。それに、この赦しは、立法的手段により死刑廃止という目的を果たすことのできない大統領が、その目標に到達するための道具として用いたものに過ぎない。しかしながら、重要なのは、人の根本的権利である生命の権利が、大統領の個人的信条により左右されていることである。つまり、受刑者の生死が、まさに表裏一体のものとして、恩赦権をもつ者の手に委ねられているという点において、この恩赦は、かつての国王による処刑直前の恩赦と共通している。さらにいえば、大統領は、刑罰によりその生殺与奪の権を行使することはない。というのも、刑罰よりもむしろ、恩赦こそが「神の権利」であり、「主権のしるし」だからである。また、それゆえに、恩赦は、それを行う者の権力の証明ともなるのである。

以上より、なぜ、「君主制的」で「前近代的」とされる恩赦が、共和制においても廃止されなかったのかが明らかとなる。国王のように、神や歴史という超越的な根拠をもたない共和制は、自らの存在を正当化するために恩赦に頼らなければならなかったのである。

ゆえに、1879年に始まる、大統領選後の恩赦は、まさに「共和国的伝統」であつたと言えることができるだろう。また、この恩赦が廃止された翌年の2008年に、サルコジ大統領により行われたマルシアニへの恩赦は、必然的なものだったとさえ言えるかもしれない。集団的恩赦を排した大統領は、自らの正当性を裏付けるために、恩赦を与えざるをえなかったのではないだろうか。

³ Taïeb, Emmanuel, *La guillotine au secret*, Paris, 2011, pp. 75-76, voir aussi p. 28, Graphique 1.

資料一覧

資料 1	1670 年刑事王令第 16 章	213
資料 2	1791 年 9 月 14 日の「革命にかかわる事実について行われたあらゆる訴訟手続きを消滅(abolition)…させるデクレ」	217
資料 3	共和暦 2 年テルミドール 18 日 (1794 年 8 月 5 日) の「[反革命の] 容疑者として身柄を拘束された市民にかかわるデクレ」	218
資料 4	共和暦 4 年ブリュメール 4 日 (1795 年 10 月 26 日) の「一般的平和の公布の日以降の死刑の廃止と、純粋に革命にかかわる訴訟手続きの消滅(abolition)にかんするデクレ」	219
資料 5	共和暦 10 年フロREAL 6 日 (1802 年 8 月 4 日) の元老院議決	220
資料 6	ジャン・カジエにたいする赦免の書状 (1673 年 3 月 18 日)	223
資料 7	ニコラ・トリドンにたいする赦免の書状 (1692 年 6 月 6 日)	225
資料 8	エティエンヌ・ゴンボーにたいする赦免の書状 (1775 年 8 月 30 日)	227
資料 9	デフリュイエ殿にたいする赦免の書状 (一部抜粋) (1789 年 11 月 25 日)	230
資料 10	フランソワ・ガルニエにたいする赦免の書状 (一部抜粋) (1791 年 2 月 28 日)	231
資料 11	ピエール・ルイ・アントワヌ・ジャン＝バティスト・サン＝ヴィリエにたいする赦免の書状 (1792 年 1 月 11 日)	232
資料 12	ジャンヌ・ラコンブにたいする恩赦状 (1806 年 8 月 9 日)	235
資料 13	ジャン・ピジェらにたいする恩赦状 (1829 年 11 月 8 日)	237
資料 14	クラリッス・ロブロフらにたいする恩赦状 (1835 年 4 月 29 日)	239
資料 15	ジョゼフ・ヴェルデにたいする恩赦を命ずる書状 (1863 年 6 月棄却)	242

資料1 1670年刑事王令第16章「罪刑消滅、赦免、容赦、出廷許可、追放刑およびガレ一船徒刑からの呼び戻し、減刑、復権および再審の書状について」⁴

第1条（罪刑消滅の書状の認可）

罪刑消滅の書状が送付される朕の法院およびその他の裁判官に、書状が有罪証拠や証人尋問と一致した場合には、即座に認可することを命ずる。しかし、犯罪の残酷さにかんして発見したことを朕の法院は朕に建言し、またその他の裁判官は大法官に提示することができる。

第2条（赦免の書状）

赦免の書状は、過失致死のみ、もしくは生命の正当防衛の必要からなされた殺人に与えられる。

第3条（容赦の書状）

容赦の書状は、死刑には相当しないが、宥恕されえない場合に玉璽を押される。

第4条（恩赦不可能な犯罪）

いかなる罪刑消滅の書状も決闘、予謀を伴う殺人には、正犯でもそれを幫助した者でも、それらが犯されえたきかけまたは口実が、けんかの仕返しであれその他のことであれ、与えられないし、金銭あるいはその他のものによって、殺害し、侮辱し、傷害を与え、もしくは犯罪による囚人を裁判所の手から奪還するために雇われた者にも、彼らを雇ったかそうするよう教唆した者で、陰謀もしくは未遂だけの場合、さらにその結果が生ずるおそれしかなかった場合であったとしても与えられない。暴力により犯された誘拐にも、朕の司法官、執達吏、裁判にかんする何らかの行為に携わる役人に傷害を与えたもしくは侮辱した者にも与えられない。また、もし罪刑消滅の書状あるいは赦免の書状が上記の場合に送付されたときは、朕の法院は朕に建言をし、朕のその他の裁判官は朕の大法官にこれにかんして彼らが判断していることを提示することができる。

第5条（大尚書局で玉璽が押される書状）

罪刑消滅の書状、5年の欠席の後の出廷許可の書状、追放刑およびガレ一船徒刑からの呼び戻しの書状、減刑の書状、受刑者の財産と評判の復権の書状、そして再審の書状は、朕の大尚書局においてのみ玉璽を押される。

第6条（花押の下に資料が添付される書状）

パルルマン法院の有罪判決およびその他の裁判所による有罪判決は追放刑およびガレ一船徒刑からの呼び戻しの書状、減刑の書状、復権の書状の花押に添付されるが、これを欠いた場合は、取得者はそれを利用することはできず、また裁判官はそれを考慮してはならない。

⁴ 見出しは *Procès-verbal*, pp. 185-201 ; *Bornier, op. cit* , pp. 227-263 を参照に、福田による作成。なお、塙は第25条後半部分を、「以下の文は訳者にとり難解故に訳を省略する」としており、鈴木も第10条、第12条、第15条、第25条に「？」を付けている。

第7条（呼び戻しの書状などの認可）

朕の裁判官、さらに朕の法院は、彼らに送付された、追放刑およびガレー船徒刑からの呼び戻し、減刑、そして復権の書状を、その内容が有罪証拠や証人尋問と一致するか審査することなく認可することを命ずる。ただし、朕にたいして、裁判官が適当であると判断したことを、朕の法院を通じて提示することは除く。

第8条（再審の書状）

再審の書状を得るには、受刑者は嘆願状によって事実を状況とともに報告しなければならない。この嘆願状は、朕の国务会議で報告され、会議が適当と判断すれば、朕の王宮の訴願審査官に、意見を得るために送付され、そのあと、この意見が朕の国务会議で報告される。そして当該書状が公正であれば、送付され、玉璽が押されることが、国王国务会議裁決により命じられる。またこの結果として、それらは朕の尚書局秘書官の署名を受ける。

第9条（再審の書状に添付される書類）

朕の王宮の訴願審査官の意見と朕の国务会議の裁決は、再審の書状の花押に添付され、送付は事件を管轄した朕の裁判所になされる。

第10条（新証拠の提出）

両当事者は、書状が送付された裁判官にたいし、嘆願状に添付された新たな書類を提出することができ、その写しが相手方当事者に与えられる。それに返答するための書類もまた嘆願状によって行われ、その写しも定められた期間内に同様に与えられる。この期間が満了し、すべてが朕の検事に伝達された後、提出されたことにかんして、書状の判決が下される。

第11条（貴族の身分の表示）

貴族によって得られた赦免、容赦、出廷許可、追放刑およびガレー船徒刑からの呼び戻し、減刑、復権、再審の書状においては、彼らは名を挙げて自分の身分を示さなければならない。これに従わなかった場合無効となる。

第12条（貴族によって得られた書状の送付）

貴族によって得られた書状は、ひとつひとつ裁判管轄と事件の性質に従って、朕の法院のみに送付される。ただし、私訴原告人が要求し、法院が適当と判断すれば、審理を各地に移送することができる。

第13条（平民によって得られた書状の送付）

平民の身分にある者により得られた書状の送付は、上座裁判所のある場所の朕のバイイもしくはセネシャルになされる。上座裁判所の全くない地方においては、送付は明らかに朕の法院に属する裁判官になされ、他にはなされない。これに従わなかった場合、判決は無効となる。

第14条（管轄にかんする制限）

しかしながら、貴族によって得られた書状も、管轄権を有すると判断された場合には、上座裁判所に送付されうる。

第 15 条（書状の提出における投獄の義務）

罪刑消滅、赦免、容赦、出廷許可の書状は、それを得た者が実際に投獄もしくは勾留されていなければ、その者により提出されることはできない。また、身柄拘束令状が当該書状には添付され、審理の間ずっと、当該書状にたいする終局判決が下されるまでその受領者を監獄にとどめる。いかなる裁判官も、保釈金もしくはその他により彼らを解放してはならない。これに反した場合、職務の停止、被告人にたいして下される有罪判決への罰金の支払いが科される。

第 16 条（提出期間）

書状は取得の日から 3 ヶ月以内に提出される。この期間を満了した場合、裁判官はそれを考慮してはならない。また、取得者は新たにそれを得ることも、その期間を回復することもできない。

第 17 条（命令の執行との関係）

書状の取得と通達は、当該書状が送付される裁判官の監獄に被告人が実際に入った状態となるまで、命令の執行、審理、判決そして欠席判決の執行を妨げることはない。

第 18 条（すべての手続きの書記への伝達）

有罪証拠と証人尋問その他訴訟手続きの全書類、さらに当該書状の取得以降の手続きは、送付がなされた裁判所の書記に直ちに伝達される。以上のことは、再審の書状についても生ずる。

第 19 条（書状の私訴原告人への通達）

書状は私訴原告人に通達され、その写しが裁判官の命令による召喚状とともに与えられ、それにより、私訴原告人に異議申し立ての方法を与え、認可を進める。また、期日前に手続きを進めることに、私訴原告人が署名と正式な通達をもって同意した場合に限り、朕の 1667 年 4 月のオルドナンスに規定されている形式と期限が遵守される。

第 20 条（書状の国王検事への伝達）

書状が、訴訟の全行程とまとめて、朕の検事に伝達されなければ、書状の判決に進むことはできない。

第 21 条（提出の方法）

罪刑消滅、赦免、容赦の書状の嘆願者は、帽子を脱いで跪いた状態で、当該書状を法廷に提出し、それが彼らの前で読み上げられた後、真実を記載していること、嘆願者がそれを得るために税を支払ったこと、それから当該書状を利用したいことを宣言する。この後、嘆願者は監獄へ送り戻される。

第 22 条（書状の提出後の許可事項）

朕の検事と、私訴原告人がいた場合には私訴原告人は、赦免および容赦の書状の提出があっても、追加で証人尋問や、検真や対質を行うことができる。

第 23 条（書状の提出において物を受け取ることの禁止）

朕の刑事代行官ならびにその他の裁判官、書記官そして執達吏は、当該書状の掲示、読み

上げまたは公示のため、もしくは法廷に案内あるいは入れるためなど、いかなる口実があつたとしても、物を要求したり受け取ったりすることはできない。たとえそれが自発的に送られた物であっても、同様である。これに違反した場合には、公金横領の罪として処罰され、4 倍額の返還が命じられる。

第 24 条（監獄における尋問）

書状の嘆願者は、報告判事によって、有罪証拠と証人尋問の結果たる事実について監獄内で尋問される。

第 25 条（すべての有罪証拠を見ずに認可することの禁止）

いかなる裁判官も、朕の法院の裁判官でさえも、すべての証人尋問と有罪証拠が朕の検事に持参され、伝達され、朕の裁判官により確認され、検討された後でなければ、これらの書状の認可を行うことはできない。これは、書記にたいして当該書状を持参するよう督促があつた場合や、書状の嘆願者が十分に注意したことを証明した場合でも同様であるが、執行力を与えたり、遅滞している書記に別の刑罰を与える場合は、この限りでない。

第 26 条（法廷での尋問）

受領者は法廷で、セレットの上で判決の前に尋問され、またその調書は書記の手によって記載され、上訴の場合には朕の法院に訴訟とともに送付される。

第 27 条（否認の場合）

赦免状や恩赦状が恩赦不可能の事件の場合に獲得されたり、その内容が有罪証拠と一致していない場合には、書状の取得者はその請求を却下される。

第 28 条（敗訴した者の罰金）

再審の書状の受領者で敗訴した者は、朕にたいする 300 リーヴルの罰金と相手方にたいする 150 リーヴルの罰金が科される。

(Ordonnance de Louis XIV. roy de France et de Navarre : Donnée à Saint Germain en Laye au mois d'aoust 1670 pour les matieres criminelles, pp. 99-109.)

資料 2 1791 年 9 月 14 日の「革命にかかわる事実について行われたあらゆる訴訟手続きを消滅 (abolition) …させるデクレ」

国民議会は、フランス革命の目的は帝国に憲法をもたらすことであつたため、憲法が完成され、国王に受諾された、まさにその時に革命は終了すべきと考え、

それ以降は、憲法上の諸機関と法律に抵抗することは有罪である一方、国民の意思が未だ一般的に認められておらず、公式に宣言されてもいなかった時に、その意思に向けられていた反対の跡を忘れることこそフランス国民にふさわしく、さらに、愛国心、友愛、そしてこの寛大な忘却の範をお示しになった君主への愛着という共通感情のなかにあらゆる軋轢を消失させる時がついに来たと考え、以下のように定める。

第 1 条 いかなる事が対象であつたとしても、革命にかかわる事実について行われたあらゆる訴訟手続き、およびそのような手続きに基づいて下されたすべての判決は不可逆的に消滅する。

第 2 条 すべての警察官および裁判官は、前条に記載された事実にたいしいかなる手続きを開始することも、開始された手続きを今後続行することもできない。

第 3 条 国王は、司法大臣に命令を与え、この罪刑消滅に含まれる手続きや判決の、国王委員により証印を押された一覧表を、各裁判所の裁判官から送付させるよう懇願される。なお、大臣は前述の一覧表の引き渡しを立法府に保証する。

第 4 条 (省略)

第 5 条 (省略)

(Duvergier, *op. cit.*, t. 3, pp.307-308.)

資料 3 共和暦 2 年テルミドール 18 日（1794 年 8 月 5 日）の「〔反革命の〕容疑者として身柄を拘束された市民にかかわるデクレ」

第 1 条 全国保安委員会は、1793 年 9 月 17 日の法律により示されていない理由により〔反革命の〕容疑者として身柄を拘束されているすべての市民を釈放する責任を負う。

第 2 条 共和国のすべての監視委員会もしくは革命委員会は、身柄を拘束されている者か、その両親もしくは友人に、逮捕理由の写しを渡さなければならない。

第 3 条 人民の代表者および公安委員会と全国保安委員会により発せられた逮捕状の理由も、同様に身柄を拘束されている者か、彼らの両親もしくは友人に伝達される。

(Duvergier, *op. cit.*, t. 7, p. 295)

資料 4 共和暦 4 年ブリュメール 4 日（1795 年 10 月 26 日）の「一般的平和の公布の日以降の死刑の廃止と、純粋に革命にかかわる訴訟手続きの消滅（abolition）にかんするデクレ」

第 1 条 一般的平和の公布の日以降、フランス共和国において死刑は廃止される。

第 2 条 革命広場は今後コンコルド広場の名をもつ。この広場へ導く通りは革命通りの名をもつ。

第 3 条 国民公会は、本日から、純粋に革命にかかわる事実についてのすべての起訴もしくは逮捕の命令、執行された、もしくはされていないすべての逮捕状、すべての訴訟手続き、訴追、判決を消滅させる。これらの同じ事件に際して身柄を拘束された者は直ちに解放される。ただし、それは彼らにたいし先のヴァンデミエール 13 日の陰謀にかかわる訴追事項が全くない場合に限られる。

第 4 条 革命のさなかに犯され、刑法典に規定されている犯罪は、それぞれにたいしてそこで言い渡されている刑罰をもって罰せられる。

第 5 条 あらゆる混合起訴、すなわち革命にかかわる事実であると同時に刑法典に規定された犯罪でもある場合には、予審手続きおよび判決はこれらの[刑法典に定められた]犯罪にかんしてのみ行われる。

第 6 条（省略）

第 7 条（省略）

第 8 条 以下は完全に大赦から除外される。

1 ヴァンデミエールの陰謀の事実について欠席裁判で有罪判決を言い渡された者。

2 同じ陰謀について予審手続きが開始され、もしくは証拠が得られている者、あるいは証拠が後から得られそうな者。

3 国外追放されたもしくはそれを免れえない聖職者。

4 偽のアッシニア紙幣および貨幣を製造した者。

5 共和国の領土に戻った、もしくはそうでない亡命貴族。

第 9 条 （省略）

(Duvergier, *op. cit.*, t. 8, pp. 540-541.)

資料 5 共和暦 10 年フロリアル 6 日（1802 年 4 月 26 日）の元老院議決

元老院は、[共和暦 8 年（1799 年）] 憲法第 90 条により規定される構成員の数 [全体の 3 分の 2] をもって招集され、

先のジェルミナル 26 日の、共和国執政によりコンセイユ・デタに送られた亡命貴族にかんする大赦法案(*projet d'acte d'amnistie*)を含むコンセイユ・デタの審議の記録の抄本と、この法案にかんする、第一執政により承認されたコンセイユ・デタの意見で、議決の主題とするために大赦法案を元老院に提出することを目的とした意見をかんがみて、

同様に、今月 4 日の、第一執政のアレテ、これにより 3 名のコンセイユ・デタ評定官が元老院に大赦法案を提出し、その動機を説明するために指名されたアレテをかんがみて、

前述の法案のさまざまな規定を決定した動機について、政府の代弁者の話を聞いた後、

この点について、今月 4 日の会議で指名された特別委員会により、元老院になされた報告について審議を行い、

提案された方法は事物の現在の状態により、正義により、国益により、憲法の精神に合致する点において命じられるという理由で、

また、亡命貴族にかんする法律が出されたさまざまな時期、フランスは内部の分裂により引き裂かれており、ほぼ全ヨーロッパにたいして歴史上例を見ない、また厳格で特別な規定を必要とする戦争に耐え忍んでいたという理由で、

今日平和が外部に成立したため、フランス人を結集させ、家族を安定させ、長い革命と不可分の諸悪を忘れさせることができるあらゆることによって、内部を強固にすることが重要であることから、

法律の厳しさを緩和し、[亡命貴族名簿からの] 削除のために作成された形式の結果たる不確実と遅延を止めるという方法よりも内部の平和をうまく固めるものはないことから、この方法は、常に犯罪者よりも道に迷っている、最も多くの人々には恩赦を与え、大罪人には、亡命貴族名簿に決定的にとどめることによって、処罰を下す大赦でしかありえないという理由により、

この大赦は、仁慈により着想されたが、それ自体において公正で、公安を保ち(*tranquillisantes pour la sûreté publique*)、また国益と賢明に結び付けられた条件の下でしか認められないことから、

大赦のある諸規定は、共和国とともになされた行為をあらゆる攻撃から守り、再び国家財産の売却の保証を認めるが、その財産の維持は常に執政たちの関心の特別な対象であったのと同様、元老院にとってもそうであったことから、

元老院は以下のように定める。

第 1 章 亡命貴族の人格にかんする諸規定

第1条 大赦は、亡命の事実にたいし、その罪に問われ、〔亡命者名簿から〕決定的に削除されていないすべての個人に与えられる。

第2条 前述の個人でフランスに全くいない者は、共和暦11年ヴァンデミエール1日以前に帰国しなければならない。

第3条 彼らの帰国の際に、彼らは、この目的のためにカレー、ブリュッセル、マインツ、ストラスブール、ジュネーヴ、ニース、バイヨンヌ、ペルピニャン、そしてボルドーの町に派遣された親任官の前で、大赦によって共和国の領土に戻ることを宣言する。

第4条 この宣言につづいて、憲法により樹立された政府に忠実であり、直接的にも間接的にも、国家の敵とのいかなる交際も通信も維持しないとの宣誓が行われる。

第5条 外国の実力、要職、称号、勲章、俸給、年金を受け取った者は、同じ親任官の前でそれを宣言しなければならず、また、それらをはっきりと放棄しなければならない。

第6条 彼らが共和暦11年ヴァンデミエール1日までにフランスに帰国せず、先の数条により課された条件を満たさなかった場合、もし、定められた期間に帰国することができない状態にあったことを示さるべき形式により(en bonne forme)報告せず、さらに、同じ期間の満了の前に、彼らのいる国に送られた共和国の役人の前で、上に説明されたその他の条件を満たしたことを立証しなければ、彼らはこの大赦の恩恵を失い、また、亡命者名簿に決定的に維持されたままとなる。

第7条 現在フランスの領土にいる者は、権利の剥奪と亡命貴族名簿への決定的な維持という同じ刑罰でもって、この法律の公布から数えて1ヶ月以内に、彼らのいる県の県会に席を占める知事の前で、同じ宣言と宣誓そして放棄をしなければならない。

第8条 (省略)

第9条 (省略)

第10条 以下の者はこの大赦から除外される。1. 反共和国の武装集団の首領であった個人。2. 敵の軍隊において階級をもっていた個人。3. 共和国の成立以来、かつてのフランスの君主たちの屋敷で要職を維持していた個人。4. 内戦あるいは対外戦争の推進者または密偵であった、もしくは現在そうであると知られている者。5. 共和国への裏切りで有罪とされた陸軍もしくは海軍の指揮官、ならびに人民の代表。また、正当な権威を無視して辞職を拒否した大司教もしくは司教⁵。

第11条 前条で指名された個人は、決定的に亡命貴族名簿に維持される。しかしながら、その人数は1000名を超えることはなく、また、そのうち500名は、共和暦10年のうちに必ず指名される。

第12条 大赦された亡命貴族は、共和暦9年ヴァンデミエール28日の執政のアレテ以来決定的に〔亡命者名簿から〕除去され、削除された者と同様に、削除、除去、もしくは大赦の証明書の送付の日から10年の間、政府の特別な監視の下に置かれる。

⁵ 1790年7月12日=8月24日の聖職者民事基本法が定める宣誓を行わなかった聖職者のことである。

第 13 条 (省略)

第 14 条 (省略)

第 15 条 (省略)

第 2 章 財産にかんする諸規定 (省略)

(Duvergier, *op. cit.*, t. 13, pp. 397-401.)

資料 6 ジャン・カジエにたいする赦免の書状（1673 年 3 月 18 日）⁶

ルイ、神の恩寵によりてフランスとナヴァール王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ。朕はサン＝ゴバン（サン＝ゴバン）の町に住む木こりで、5 人の子供たちを抱えるジャン・カジエのつつましき嘆願を受けた。その内容は、1670 年 2 月 16 日に、若い方のジャン・ダモワジエが、女性と前述のサン＝ゴバンの広場の見世物に向かっていた時に(*passant a la parade*)、嘆願者を刀身で殴り、痛い目にあわせ、また前述の抜き身の剣をずっと握り続け、彼がジャン・ゲリエなる者の家の中に逃げ込み、危機を脱するまで追いかけたが、それは、彼が他の誰もがしていたように、いくつかの雪玉を投げつけたためであった。そして前述の日、嘆願者はジャン・カルパンティエ、その妻アンヌ・ティロ、ジャン・クルタン、そしてその妻クロディーヌ・カルパンティエに夕食をごちそうし、夕食の後夜 10 時ごろに、前述のカジエは彼の家の方へ赴き、そこで彼は立ち聞きしていた人々を見つけ、誰が扉の所でそんなふう聞いていたのか尋ねると、彼は前述の若い方のクロード・ダモワジエ（クロード・ダモワジエ）「おそらく「ジャン・ダモワジエ」と同一人物である」により、それは俺だと答えられた。彼はこれらの言葉を叫び、前述のカルパンティエとクルタンとともに家を出た前述のカジエにこう言った。「扉を開けろ、この臆病者め、それから俺の方に出やがれ。」このことが前述のカジエとその連れに聞かれると、前述のクルタンは持っていた短筒をつかみ、一発放ち、それにより前述のダモワジエは不運にも撃たれ、一日後に死亡した。そして、上に述べられているように、嘆願者は手に全く武器を持っておらず、前述のダモワジエを撃ってもいないにもかかわらず、ラ・フェールの裁判官は、証人尋問と彼により特別に行われた手続きにおいてそのことに気づかず、彼について、争いの張本人でも前述の死者の死亡の原因でもないにもかかわらず、また、裁判官は逮捕をする権限を有していないにもかかわらず、このことにかんして必要な朕の恩赦、容赦、そして赦免の書状を彼が得るために、朕に嘆願することを認めなかった。

これらの理由により、正義の厳しさよりも慈悲が好まれることを願い、朕の特別な恩寵と全権と王権をもって放免し、赦免し、容赦した。また、この書状により、前述の嘆願者にたいし上に示された通りの事実そして事件を、また前述の事件を理由に朕と正義にたいして招来されうることによる(*en quoy*)、またそれを理由とする身体的・民事的・刑事的なあらゆる刑罰、罰金、汚辱の制裁(*offences*)とともに放免し、赦免し、容赦する。また、彼をその地方でのよき評判および名声と未だ没収されていない財産、仮に行われていたり偶然になされたとしても、事前に私訴原告人に行われた償いを回復させ、あらゆる不出頭、命令、判決、裁判欠席そして彼にたいして与えられた下級裁判所の判決を無効とし、現在

⁶ 書状の現物には、段落は設けられておらず、全文が続けて書かれている。しかしながら、「これらの理由により(*A ces causes*)」など、上記の訳では段落の冒頭となる部分が、書状の現物では大文字で示されていたことや、19 世紀の書状の形式を考慮し、このような体裁を取った。

と将来における朕の検事長とそれに代わる者たち、またそのほかのすべての者に、この永久の沈黙にかんして命令する。

よって、ヴェルマンドワの朕のバイイ裁判官もしくはその刑事代行官と前述のラ・フェール付きの役人、すなわち上記に説明した事件が生じた場所を管轄する者に、この書状である朕の恩赦、赦免そして容赦の書状を認可し、前述の嘆願者にそのなかの内容を完全にかつ平和にかつ永遠に享受させまた用いらせ、反対に争いごとや差し支えをすべて消し去り、また消し去らせることを命ずる。また、これをずっとゆるぎなく永続的なものにするために、朕はわが玉璽をこの書状に押印させた。ただ、これは朕の権利をその他の点について、他の人の権利をあらゆる点において損なうものではない。というのは、これが朕の嘉することだからである。パリにて、至福 1673 年かつ朕の治世の 30 年目の 3 月に与える。

(Foviaux, *op. cit.*, pp. 142-144, planche I.)

資料7 ニコラ・トリドンにたいする赦免の書状（1692年6月6日）

ルイ、神の恩寵によりてフランスとナヴァール王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ。朕は、ブルボネ地方のムーランに住む、20歳あるいはそのくらいのニコラ・トリドンのつつましき嘆願を受けた。その内容は、1686年6月3日月曜日に、ノワヤンの町で、彼はジルベール・ギョマン、アントワヌ・ド・ラヴァール、そしてジルベール・オフレールという名の人々とボール遊びをしており、そのあと皆で午後2時に前述の町の酒場へ行き、そこに入ると彼らはワインを頼み、テーブルに着いた。何杯か飲んだ後、前述のギョマンは嘆願者が自分に7、8ソルと4日分の日給の借りがあることと、それを支払わなければならないことを嘆願者に言う気になった。嘆願者は彼に、金はあるがここはそんなことを求める場ではなく、彼はろくでなし(coquin)だと答えた。それにたいし前述のギョマンは、嘆願者に、彼はペテン師で破産者であると応酬し、同時に木の取り皿をテーブルからつかんで、それを嘆願者に投げつけたが、それは当たらなかったため、このギョマンは彼らが飲んでいて部屋にあった暖炉へ走ったが、これは何かを身につけて、前述の暖炉に追いかけてくる嘆願者をそれで痛い目にあわせるためであった。その[暖炉の]一角に嘆願者は暖炉用のシャベルを見つけ、彼は脅しを交えた言葉で彼をずっとこのしり続けている前述のギョマンの前でそれをつかんだ。嘆願者は前述のシャベルを手にとっていたので、彼は前述のギョマンの頭に一発だけ喰らわせたところ、彼は目を回して鉄の薪台の上に倒れ、この転倒で彼は多くの血を流して失神したままでいるほど大きく額を怪我した。さらに前述のギョマンが意識を取り戻すと、傷について心配されたが、彼はその傷のために3日[後一原注]に死亡することになった。このことは嘆願者を深く残念がらせ気分を損ねさせた。彼はそのような不幸のことを少しも考えておらず、前述のギョマンともめ事も争いも全くなかった。しかし、それが事故によるものであったというのに、彼は何の予謀もなかったというのに、また、前述のギョマンは嘆願者が与えた一撃というよりもむしろ、鉄の薪台の上にした転倒のために亡くなったというのに、彼は尋問され、以下のことを命じられた。これは、国を去り朕の恩赦、容赦、そして赦免の書状なくしてはあえて帰還できないことを義務づけていた。彼はこれらの書状を認めるようつつましく嘆願した(il nous a fait supplier luy vouloir accorder)。

これらの理由により、正義の厳しさよりも慈悲を好むことを願い、朕は前述の嘆願者を放免し、赦免し、容赦し、また、朕の特別な恩寵と全権と王権をもって、この書状により、上に説明された通りの事実そして事件を、朕と正義にたいして招来されうることによる、またそれを理由とする身体的・民事的・刑事的なあらゆる刑罰、罰金、汚辱の制裁とともに放免し、赦免し、容赦する。また、あらゆる命令、不出頭、裁判欠席、判決、その結果として生ずる下級裁判所の判決とパルルマン法院の判決を無効とする。さらに、彼の名声と、未だ没収されていない財産、仮に行われていたり偶然になされたとしても、事前に私訴原告人に行われた償いを取り戻し返還する。そして現在と将来における朕の検事長とそ

れに代わる者たち、またそのほかのすべての者に、この永久の沈黙にかんして命令する。

よって、ブルボネのセネシャル裁判官もしくはその刑事代行官とムーラン付きの役人、すなわち前述の事実と事件が生じた場所を管轄する者に、この書状である朕の恩赦、容赦そして赦免の書状を認可し、前述の嘆願者にその内容を完全にかつ平和にかつ永遠に享受させまた用いらせ、反対に争いごとや差し支えをすべて消し去り、また消し去らせることを命ずる。そのかわり、嘆願者は 3 ヶ月のうちにこの書状の認可のために貴院に再出頭しなければならない。これに反した場合、これは無効となる。というのは、これが朕の嘉することだからである。また、これをずっとゆるぎなく永続的なものにするために、朕はわが玉璽をこの書状に押印させた。パリにて、至福 1692 年かつ朕の治世の 50 年目の 6 月に与える。

(Foviaux, *op. cit.*, pp. 144-146, planche II.)

資料 8 エティエンヌ・ゴンボーにたいする赦免の書状（1775 年 8 月 30 日）

ルイ、神の恩寵によりてフランスとナヴァール王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ。朕の前任者たる国王たちに倣い、朕の聖別戴冠式を仁慈のしるしにより際立たせることを願って、朕は、朕により派遣された親任官に必要な命令と指示を与え、朕のランス滞在中にこの都市の監獄に勾留されていたか自発的に身をゆだねた受刑者で、朕の寛恕を懇願するために出頭した者の中で、その犯罪がその可能性をもちうると判断された者の刑事訴追を検討し、また尋問を行ったところ、朕は室内装飾業者の徒弟で、前は総連隊長(colonel général)の連隊の竜騎兵であった、カトリック的・使徒的・ローマ的宗教の信仰を告白するエティエンヌ・ゴンボーのつつましき嘆願を受けた。その内容は、1768 年 2 月に半年休暇でパリにいて、彼は両替橋の居酒屋の中で組立工のスジュールネという名の者と争った。この居酒屋から出るとスジュールネは嘆願者をつかまえにルイ 15 世広場へ来て(vi[e]nt joindre le suppliant à la place de Louis XV)、剣を手に挑発し、彼に身を守れと強いた。スジュールネは怪我をして少し後に死亡した。嘆願者は訴追され審理されて、この機会に自分の連隊へ戻った。彼は完全なる除隊をもって、それ以来そこから立ち去った。しかし命令により、彼はランスの町の監獄に行き、そこで朕の仁慈を懇願した。これらの原因による。

(AN BB³⁰ 54)

Remimby à M^{me}
Gombault

Grâce accordée au
S^{me}
S^{me} la 2^e.
Ann. 1771

ARCHIVES
NATIONALES
Louis par la grace de Dieu Roi
de France et des Navarre à tous présents et
avenir salut à l'exemple des Rois nos
prédécesseurs cesirant signaler notre sacre
par ces marques de clemence. Nous
avons donné les ordres et les instructions
nécessaires aux Commisaires par nous députés
pour examiner les journaux criminels
et procéder aux interrogatoires des coupables
qui étoient détenus ou se sont remis
volontairement. Dans les prisons de Rennes
lors de notre présence dans cette Ville; et
dans le nombre de ceux qui se sont présentés
pour implorer notre indulgence sont les
crimes ont été jugés pourvoir en être
susceptibles nous avons reçu l'humble
supplication de Etienne Gombault
garçon tapinier ci devant Dragon dans le
Régiment du Colonel Général faisant
profession de la Religion Catholique apostolique
et romaine Contenant qu'en l'année 1768 étant
à Paris en passant il prit querelle avec le
nommé sejourneux mis en cage dans un
cabaret au Pont au Change. sorti de ce cabaret
sejourneux vint joindre le Suppliant à la

M. Le Roy

place de Louis XV, le provocua mit
l'épée à la main et le forçada se leffendre.
Le jourmet fut blene et mourut quelque
temps après. Le suppliant instruit des
poursuites faites à cette occasion retourna
à son regiment. Il en est forti' depuis
avec un congé absolu, mais étant sans
les lains d'un decret il fut tenu au
prison de la Ville de Reims pour être
aportée d'y implorer notre clemence
à ces causes. /

資料 9 デフリュイエ殿にたいする赦免の書状（一部抜粋）（1789 年 11 月 25 日）

ルイ、神の恩寵と国の憲法律によりてフランス人の王なり。現在と将来におけるすべての人に幸あれ。朕はアングレームのメッシュュー小教区に通常住んでいる貴族で、カトリック的・使徒的・ローマ的宗教の信仰を告白するデフリュイエ殿のつつましき嘆願を受けた。その内容は…そして彼は朕の恩赦、赦免、そして容赦の書状を手に入れることなくしてはあえて再出頭しなかった。彼はこれらの書状を認めるようとてもつつましく嘆願した。

これらの理由により、法律の厳しさよりも慈悲を好むことを望み、朕は前述のデフリュイエ殿を放免し、赦免し、容赦し、また、朕の特別な恩寵をもって、朕の手により署名されたこの書状により、上に説明された事実を、朕と正義にたいして招来されうることを理由とする身体的・民事的・刑事的なあらゆる刑罰、罰金、懲罰とともに放免し、赦免し、容赦する。また、あらゆる命令、不出頭、欠席裁判、判決、その結果として生じ(s'en fait ensuivre)、また生じうる下級裁判所の判決とパルルマン法院の判決を無効とする。さらに、彼のよき評判および名声と、未だ没収されていない財産、仮に行われていたり偶然になされたとしても、事前に私訴原告人に行われた償いを与え返還する。そして、現在と将来における朕の検事長とそれに代わる者たち、またそのほかのすべての者にこの沈黙にかんして命令する。

アングレームのセネシャル裁判所の朕の刑事代行官たる評定官、すなわち前述の事件が生じた場所を管轄する者に、この書状である朕の恩赦、赦免、そして容赦の書状を認可し、嘆願者にその内容を完全にかつ平和にかつ永遠に享受させまた用いらせ、反対に争い事や差し支えをすべて消し去り、また消し去らせることを命ずる。そのかわり、彼は 3 ヶ月のうちに身を整えて朕の書状を貴院に提出しなければならず、これに反した場合、それらの効果は失われる。また〔彼は〕3 ヶ月間監獄にとどまらなければならない。上記に基づき、また、これをずっとゆるぎなく永続的なものにするために、朕はこれらの書状に署名し、副署をさせ、そこに朕は国の玉璽を押印させた。パリにて、至福 1789 年かつ朕の治世の 16 年目の 11 月に与える。

(AN BB³⁰ 50)

資料 10 フランソワ・ガルニエにたいする赦免の書状（一部抜粋）（1791 年 2 月 28 日）

ルイ、神の恩寵と国の憲法律によりてフランス人の王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ。朕はボルドーに住んでいる、リユーモワことフランソワ・ガルニエのつましき嘆願を受けた。その内容は…彼はこのことにかんして必要な朕の赦免の書状を朕から手に入れることなくしてはあえて再出しなかった。彼はこれらの書状を認めるようともつつましく嘆願した。

これらの理由により、法律の厳しさよりも慈悲を好むことを望み、朕は前述のリユーモワことフランソワ・ガルニエを赦免し、放免し、容赦し、また、朕の特別な恩寵をもって、朕の手により署名されたこの書状により、上に説明されたような事実そして事件を、朕と正義にたいして招来されうることを理由とする身体的・民事的・刑事的なあらゆる刑罰、罰金、汚辱の制裁とともに放免し、赦免し、容赦する。また、あらゆる命令、不出頭、欠席裁判、判決、もしいずれかがその結果生じたのであれば、下級裁判所の判決とパルルマン法院の判決を無効とする。さらに、彼の名声と、未だ没収されていない財産、仮に行われていたり偶然になされたとしても、事前に私訴原告人に行われた償いを与え返還する。

ボルドーのディストリクト裁判所を受け持つ人々、すなわち上記の事件が生じた場所を管轄する者に、この書状である朕の恩赦、赦免、そして容赦の書状を認可し、前述の嘆願者にその内容を完全にかつ平和にかつ永遠に享受させまた用いらせ、反対に争い事や差し支えをすべて消し去りまた消し去らせることを命ずる。そのかわり、前述の提出者は 3 ヶ月間監獄にとどまり、身を保ち、そして 3 ヶ月以内に裁判所に書状の認可を求め(*poursuivre*)なければならない。これに反した場合、それらの効果は無効となる。上記に基づき、朕はここに言う書状に署名し、副署をさせ、そこに朕は国の玉璽を押印した。至福 1791 年かつ朕の治世の 17 年目の 2 月 28 日に与える。

(AN BB³⁰ 53)

資料 11 ピエール・ルイ・アントワヌ・ジャン＝バティスト・サン＝ヴィリエにたいする赦免の書状（1792 年 1 月 11 日）

ルイ、神の恩寵と国の憲法律によりてフランス人の王なり。現在と将来におけるすべての者に幸あれ。朕は、カンブレーの国民コレージュ(college national)教授、ピエール・ルイ・アントワヌ・ジャン＝バティスト・サン＝ヴィリエのつつましき嘆願を受けた。その内容は、1791 年 8 月 28 日に彼はパレ＝ロワイヤル 45 番地に住むカボ嬢の家にはいたが、彼はデュムーランという名の者との新たな殴り合いを避けるため、前述の女性の度重なる懇願がなければそこに行かなかった。彼は数日前、前述のデュムーランと、この人がそこに来ないという確約にかんして争いを始めたのだが、この人はそこにとどまっていたのである。前述のデュムーランが大きな音を立てて到着の気配を示し、前述のカボ嬢の下女により彼から守られた門を打ち破り、怒り狂って入ってきて(entra furieux)、嘆願者に杖で一撃を与え、さらに最も強いやり方で前述のカボ嬢を痛い目に合わせた時、嘆願者は、これほど乱暴な扱いを目にしてかきたてられた怒りによりまず取った行動として、彼が持つ習慣のあったピストルを使い、前述のデュムーランに向かって撃ったところ、彼はあまりに命にかかわるほどけがをしたので、数時間後に死亡した。この不幸は裁判官が嘆願者を予審する原因となったが、彼は法律の厳しさを恐れていたため、恩赦、赦免、そして容赦の書状を彼に認める効果のある朕の仁慈に頼るよう助言され、彼はこれらの書状を認めるようとてもつつましく嘆願した。

これらの理由により、正義よりも慈悲を好むことを望み、朕は前述のピエール・ルイ・アントワヌ・ジャン＝バティスト・サン＝ヴィリエを放免し、赦免し、容赦し、また、朕の手により署名されたこの書状により、上に説明されたような事実そして事件を、朕と正義にたいして招来されえたことを理由とする身体的・民事的・刑事的なあらゆる刑罰、罰金、汚辱の制裁とともに放免し、赦免し、容赦する。また、あらゆる命令、不出頭、裁判欠席、判決、その結果として生じうる下級裁判所の判決とパルルマン法院の判決を無効とする。さらに、彼の名声と、未だ没収されていない財産、仮に行われていたり偶然になされたとしても、事前に私訴原告人に行われた償いを取り戻し返還する。

1791 年 3 月 14 日の法律によりパリに設立された第一重罪裁判所(Premier Tribunal criminel)の判事たちに、この書状を認可させ、前述のサン＝ヴィリエにその内容を完全にかつ平和にかつ永遠に享受させまた用いらせ、反対する争い事や差し支えをすべて消し去りまた消し去らせることを命ずる。そのかわり、嘆願者は 3 ヶ月のうちに出頭してこの書状の認可を求めなければならない。これに反した場合、それらの効果は失われる。上記に基づき、朕はこれらの書状に署名をし、副署をさせ、そこに朕は国の玉璽を押印させた。パリにて、至福 1791 年かつ朕の治世の 18 年目の 1 月に与える。

(AN BB³⁰ 49)

Remission à Pierre Louis
Antoine Jean Baptiste S^r Silliers



Celle du 14. janvier 1792

LOUIS par la grace de Dieu et par la Loi
constitutionnelle de L'Etat Roi des Français a tous présents
et avenir, Salut, nous avons reçu l'humble Supplication
Pierre Louis Antoine Jean Baptiste S^r Silliers Professeur
au Collège national de Cambrai contenant que le Vingt
huit Ours mil Sept cent quatre vingt onze étant chez la
J^{de} Cabot demeurante au Palais Royal N^o 45. et ne si étant
trouvée que sur les instances restées de la d^{te} D^{te} a fini d'envoyer
une nouvelle rixe avec le nommé Dumontin avec lequel il
se tenait prié de querelle quelques jours auparavant sur l'assurance
que le d^r Dumontin ne viendrait pas y rester, lorsque
le d^r Dumontin ~~se présenta~~ entra furieux donna des coups
de sa main au Suppliant et maltraita de la manière la plus
forte la d^{te} Cabot. le Suppliant d'un premier mouvement
de colère car il par des traitements aussi violents fit usage
d'un pistolet qu'il avoit continué de porter et se tira contre
le d^r Dumontin qui en fut si dangereusement blessé qu'il
mourut quelques heures après. ce malheur ayant donné
aux juges d'informes contre le Suppliant qui craignant la
rigueur des loix a été conseillé de recourir à votre clémence
et l'effet de luy accordé des lettres de grâce remission et pardon
lesquelles j'ai osé humblement faire Supplir de luy
accorder à ces causes. Voulant préférer miséricorde à justice
nous avons ordonné Pierre Louis Antoine Jean Baptiste S^r Silliers
qu'ilte Remise et Pardonner et par ces présentes signer de
notre main qu'ilte Remette et pardonne le fait et les

Archives
Antiques
+
Dumontin avec
grand bruit forçant
la porte qui luy
était défendue par
la servante de la d^{te}
J^{de} Cabot et

資料 12 ジャンヌ・ラコンブにたいする恩赦状（1806 年 8 月 9 日）

ナポレオン、神の恩寵と帝国の諸憲法によりてフランス人の皇帝なり。ボルドーに所在する、ジロンド県の朕の刑事法院を構成する院長およびその構成員へ。朕はピエール・グルローの妻で、30 歳の、ボルドーの下宿屋のおかみで、共和暦 9 年ブリュメール 15 日の貴院の判決により、家事使用人による窃盗の共犯の罪で懲役 8 年の有罪判決を言い渡され、ボルドーの監獄に拘留されていた、ジャンヌ・ラコンブの、朕の恩赦状を得るための嘆願を受けた。また、さまざまな事情により、朕は彼女に朕の仁慈の効果を感じさせようと考えることができると認めたため、朕は 1806 年 8 月 9 日に、サン＝クロードの朕の宮殿におけるconseil・privéに、帝国大書記長(archichancelier)と財務総監(architrésorier)である公たち(princes)と、朕の大判事つまり司法大臣と、朕の外務大臣と内務大臣、すなわち元老院議員のペリニオン元帥とドラプラス氏、朕のconseil・député評定官のレニョー・ド・サン＝ジャン＝ダンゲリ氏とドフェルモン氏、朕のconseil・député評定官で破棄院長のミュレル氏、そして同法院の部長評定官バリ氏を招集した。朕の大法官つまり司法大臣の報告とconseil・privéの他の構成員の意見を聞いた後、法律の厳しさよりも慈悲を好むことを望み、朕は完全で全体的な(plain et entière)恩赦を、前述のピエール・グルローの妻ジャンヌ・ラコンブに与えることを宣言したし、宣言する。ただし、私訴原告人の権利には全く損害を与えない。

この書状が、帝国の玉璽を押され、前述の法院に派遣された朕の検事長による受領から数えて 3 日以内に、書状を得た者が連れてこられ、その県の憲兵隊の主任警部の出席の下、直立し、帽子を取って読み上げを聞く公開の法廷で、検事長から貴院に提出され、続いて、前述の書状が、同じ検事長の要請により、有罪の法院判決の原本の余白に描かれた注釈とともに、貴院の登録簿に写し取られることを命ずる。

サン＝クロードにて、帝国の玉璽の下 1806 年 8 月 9 日に与える。

(AN BB³⁰ 180)

Napoléon, par la grâce de Dieu et des Constitutions de l'Empire, Empereur des Français.

et les Président et Membres composant notre Cour de justice criminelle _____ du Département de la Guinée
sont à PortBout.

[illegible][illegible]

Don't do what I do! — good to send to Empire, to read about, and find out why

Du pauvre nous dis-je - l'enchaîné de l'Empire,

Edinburgh

For I. Empereur;

Le Grand-Juge Ministre de la Justice.

Phyllis

Le Secrétaire d'Etat,

1871
 1872
 1873
 1874
 1875
 1876
 1877
 1878
 1879
 1880
 1881
 1882
 1883
 1884
 1885
 1886
 1887
 1888
 1889
 1890
 1891
 1892
 1893
 1894
 1895
 1896
 1897
 1898
 1899
 1900
 1901
 1902
 1903
 1904
 1905
 1906
 1907
 1908
 1909
 1910
 1911
 1912
 1913
 1914
 1915
 1916
 1917
 1918
 1919
 1920
 1921
 1922
 1923
 1924
 1925
 1926
 1927
 1928
 1929
 1930
 1931
 1932
 1933
 1934
 1935
 1936
 1937
 1938
 1939
 1940
 1941
 1942
 1943
 1944
 1945
 1946
 1947
 1948
 1949
 1950
 1951
 1952
 1953
 1954
 1955
 1956
 1957
 1958
 1959
 1960
 1961
 1962
 1963
 1964
 1965
 1966
 1967
 1968
 1969
 1970
 1971
 1972
 1973
 1974
 1975
 1976
 1977
 1978
 1979
 1980
 1981
 1982
 1983
 1984
 1985
 1986
 1987
 1988
 1989
 1990
 1991
 1992
 1993
 1994
 1995
 1996
 1997
 1998
 1999
 2000
 2001
 2002
 2003
 2004
 2005
 2006
 2007
 2008
 2009
 2010
 2011
 2012
 2013
 2014
 2015
 2016
 2017
 2018
 2019
 2020
 2021
 2022
 2023
 2024
 2025
 2026
 2027
 2028
 2029
 2030
 2031
 2032
 2033
 2034
 2035
 2036
 2037
 2038
 2039
 2040
 2041
 2042
 2043
 2044
 2045
 2046
 2047
 2048
 2049
 2050
 2051
 2052
 2053
 2054
 2055
 2056
 2057
 2058
 2059
 2060
 2061
 2062
 2063
 2064
 2065
 2066
 2067
 2068
 2069
 2070
 2071
 2072
 2073
 2074
 2075
 2076
 2077
 2078
 2079
 2080
 2081
 2082
 2083
 2084
 2085
 2086
 2087
 2088
 2089
 2090
 2091
 2092
 2093
 2094
 2095
 2096
 2097
 2098
 2099
 2100
 2101
 2102
 2103
 2104
 2105
 2106
 2107
 2108
 2109
 2110
 2111
 2112
 2113
 2114
 2115
 2116
 2117
 2118
 2119
 2120
 2121
 2122
 2123
 2124
 2125
 2126
 2127
 2128
 2129
 2130
 2131
 2132
 2133
 2134
 2135
 2136
 2137
 2138
 2139
 2140
 2141
 2142
 2143
 2144
 2145
 2146
 2147
 2148
 2149
 2150
 2151
 2152
 2153
 2154
 2155
 2156
 2157
 2158
 2159
 2160
 2161
 2162
 2163
 2164
 2165
 2166
 2167
 2168
 2169
 2170
 2171
 2172
 2173
 2174
 2175
 2176
 2177
 2178
 2179
 2180
 2181
 2182
 2183
 2184
 2185
 2186
 2187
 2188
 2189
 2190
 2191
 2192
 2193
 2194
 2195
 2196
 2197
 2198
 2199
 2200
 2201
 2202
 2203
 2204
 2205
 2206
 2207
 2208
 2209
 2210
 2211
 2212
 2213
 2214
 2215
 2216
 2217
 2218
 2219
 2220
 2221
 2222
 2223
 2224
 2225
 2226
 2227
 2228
 2229
 2230
 2231
 2232
 2233
 2234
 2235
 2236
 2237
 2238
 2239
 2240
 2241
 2242
 2243
 2244
 2245
 2246
 2247
 2248
 2249
 2250
 2251
 2252
 2253
 2254
 2255
 2256
 2257
 2258
 2259
 2260
 2261
 2262
 2263
 2264
 2265
 2266
 2267
 2268
 2269
 2270
 2271
 2272
 2273
 2274
 2275
 2276
 2277
 2278
 2279
 2280
 2281
 2282
 2283
 2284
 2285
 2286
 2287
 2288
 2289
 2290
 2291
 2292
 2293
 2294
 2295
 2296
 2297
 2298
 2299
 2300
 2301
 2302
 2303
 2304
 2305
 2306
 2307
 2308
 2309
 2310
 2311
 2312
 2313
 2314
 2315
 2316
 2317
 2318
 2319
 2320
 2321
 2322
 2323
 2324
 2325

資料 13 ジャン・ピジェらにたいする恩赦状（1829 年 11 月 8 日）

シャルル、神の恩寵によりてフランスとナヴァール⁷の王なり。

現在と将来におけるすべての者に幸あれ。

朕は、ピジェ（ジャン）、トランシャル（エドム）、ヴニユア（ジャン）、ロブラン（ポール）、そしてブッサジョン（ジャック＝ジョセフ）の名におけるつつましき嘆願を受けた。その内容は、1827 年 7 月 8 日に、ニエーヴル県の重罪院により下された判決により、彼らは、略奪と動産所有物(*effets et propriétés*)への損害の罪のために、5 年間の懲役を言い渡され、また、この有罪判決以来、彼らはヌヴェールに収監されていた。これらの状況において、彼らは朕の寛恕を嘆願した。

これらの理由により、また、朕の司法大臣、すなわち司法省の国务大臣が、嘆願者たちについて行った予審と、彼らのために朕の仁慈の行為を決定しうる理由にかんして朕に行った報告に基づき、法律の厳しさよりも慈悲を好むことを望み、朕は、朕の特別な恩寵と、全権と王権をもって、前述のピジェ、トランシャル、ヴニユア、ロブラン、そしてブッサジョンにたいし、上述の判決により彼らに言い渡された刑罰の恩赦を行い赦免を行う。朕はこの刑罰を、彼らの破棄申し立ての棄却から数えて 5 年の拘禁に減刑したし、減刑する。ただし、これらの個人は、この期日の到来まで、有罪判決により定められた時間、高等警察による監視と、~~そのうえ有罪判決が保っているすべての効果~~ [原文ママ] に服さなければならない。また、朕のこの決定は、もしいれば、私訴原告人の権利を害し、またそれに損害を与えることもない。これらのことは、明示的に留保されたままとする。というのも、これが朕の嘉することだからである。

朕のブルジュの王立法院に、前述の法院における朕の検事長により、この人 [たち] に行われた書状の提出に基づき、嘆願者たちの出席の下、朕のこの減刑の書状を認可し、嘆願者たちにそれらの利益を享受させ、また、刑法典第 44 条に従い⁷、もし行われていなければ、彼らが納めるべき保証金を定めることを命ずる。 1829 年 11 月 8 日に与える。

(AN BB²¹ 51-66)

⁷ 刑法典第 44 条は、釈放後の高等警察による監視について規定している。これについては、第 5 章第 1 節 (2) 注 56 を参照。

609.
5771.
DIRECTION
DES
AFFAIRES CRIMINELLES
ET DES GRÂCES.

2.^e BUREAU.

N.^o 6076. S.

Le 20^e 9. 1829
fait envoi au Procureur général
d'Oran
Le même jour, donné avis de
la grâce à

CHARLES, par la grâce de Dieu, ROI DE FRANCE ET
DE NAVARRE,

A tous présens et à venir, Salut :

NOUS avons reçu l'humble supplication au nom de *Piget (Jean)*
Eranchard (Edme), *Vermeat (Jean)* *Problin (Jean)*
et *Bouffayon (Jean)* *ou Robelin*
contenant que, par arrêt du 8^e j^uillet 1829
rendu par la Cour d'assises du département de la Nièvre
il ont été condamnés à la peine de *sauf deuchison*

pour crime de *pillages de dépôts d'effets et*
propiété mobilières
que depuis cette condamnation il sont détenus à *Nevers*
Dans ces circonstances, il ont recours à notre indulgence.

A CES CAUSES, et sur le rapport que notre Garde des Sceaux,
Ministre Secrétaire d'État au département de la justice, nous a
fait des informations auxquelles il a été procédé à l'égard de, sup-
pliant, ainsi que des motifs qui pourraient déterminer en *leur* faveur
un acte de notre clémence ; voulant préférer miséricorde à la rigueur
des lois, nous avons, de notre grâce spéciale, pleine puissance et
autorité royale, fait grâce et remise aux dits *Piget*
Eranchard, *Vermeat*, *Problin* et *Bouffayon*
de la peine prononcée contre *celux* par l'arrêt susdaté ; AVONS
COMMUÉ ET COMMUONS cette peine en celle
de *sauf deuchison* à compter de ce jour
de *leur* pourvoi en cassation

à la charge par ce individu de rester, à l'expiration de ce terme,
sous la surveillance de la haute police pendant le temps déterminé
par l'arrêt de condamnation, tous les effets de la condamnation
~~tenant au surplus~~, et sans que notre présente décision puisse nuire ni
préjudicier aux droits de la partie civile, s'il en existe une, lesquels
demeurent expressément réservés : car tel est notre bon plaisir.

MANDONS à notre Cour royale de *Bourges*
d'entériner, en présence de l'impétrant, nos présentes Lettres
de *commutation* sur la présentation qui lui en
sera faite par notre Procureur général en ladite Cour ; de faire
jouir le dit impétrant du bénéfice d'icelles, et de fixer, si fait
n'a été, le cautionnement qu'il devra fournir, conformément
à l'article 44 du Code pénal.

DONNÉ le

9 — 1829
M. le 9^e 9
V. le 9^e 9

資料 14 クラリス・ロブフロにたいする恩赦状（1835 年 4 月 29 日）

ルイ・フィリップ、フランス人の国王なり。

現在と将来におけるすべての者に幸あれ。

朕は、マルティニックとフランス領ギアナの総督が、1834 年 7 月 6 日の王令を執行し、かの地で刑に服している受刑者のうち何人かのために朕にそれぞれ送った提案の名簿を検討した。

朕の海軍大臣と植民地大臣である国務大臣により、この主題について朕に行われた報告に基づき、

朕は、何らかの考慮が、その性質上、これらの受刑者にたいする朕の寛恕を引き起こすものであると認識した。

これらの理由により、また、憲章第 58 条に従って、

朕は以下のことを命じし、命ずる。

以下に指名される、自由人の身分にある(*de condition libre*)個人にたいし、マルティニックとフランス領ギアナの裁判所により言い渡された懲役刑と拘禁刑のいまだ服すべき期間を免除する。すなわち、

マルティニク

クラリス・ロブフロ 1833 年 12 月 6 日の判決により、文書偽造の罪のため 2 年間の拘禁刑を言い渡された。

サンタテリーヌ 1830 年 10 月 20 日の判決により、窃盗の罪のため 5 年間の拘禁刑を言い渡された。

アエラシー 1832 年 10 月 22 日の判決により、窃盗の罪のため 5 年間の懲役刑を言い渡された。

フランス領ギアナ

ピエール・コンスタン 1832 年 11 月 6 日の判決により、隠匿の罪のため、3 年間の拘禁刑を言い渡された。

免除は、さらに、自由人(*libre*)のシャセローという名の者にたいしても、罰金としての費用総額 607 フラン 43 サンチームの金額について行われる。彼は、その支払いを 1833 年 8 月 9 日に、窃盗と隠匿のため、マルティニックで言い渡された。同時に、彼は 18 か月の拘禁を言い渡されたが、その刑期は先の 2 月 9 日に満了している。

朕は命ずる、云々。

(AN F⁷ 10217)

2/ Police
Copie.

Paris, le 27 Avril 1835.

Enregistré
le 27, 9 h 1/2, 1835.

N° 9223.

Ministère
de l'Intérieur.

Louis-Philippe,

Roi des Français,

ARCHIVES
NATIONALES

A tous présents et à venir, Salut.

Nous avons pris connaissance des listes de propositions que les Gouverneurs de la Martinique et de la Guyane Française en exécution de l'ordonnance du 6 juillet 1834, nous ont respectivement fait parvenir en faveur de plusieurs condamnés qui subissent leur peine.

Nous le rapport qui nous a été fait à ce sujet par notre Ministre Secrétaire d'Etat de la Marine et des Colonies.

Nous avons reconnu que certaines considérations sont de nature à provoquer notre indulgence à l'égard de ces condamnés.

Ces causes, en vertu de l'art. 8 de la Charte Constitutionnelle.

Nous avons ordonné et ordonnons ce qui suit :

Il est fait remise aux Individus, de condition libre, ci-après dénommés du terme pendant lequel ils ont encore à subir les peines de réclusion et d'emprisonnement auxquelles ils ont été condamnés par les Tribunaux de la Martinique et de la Guyane Française, Sçavoir :

Martinique :

Clémence Roblot, condamnée pour faux, à deux années d'emprisonnement par arrêt du 6 Décembre 1833;

St^e Catherine, condamnée pour vol à cinq années d'emprisonnement par arrêt du 20 Octobre 1830;

Beracy, condamné pour vol à cinq années de réclusion, par arrêt du 22 Octobre 1832.

(Signature)

(Signature)

Guyane Française.

Pierre Constant, condamné pour vol et rébellion, à la prison de l'Imprisonnement pour vol et rébellion le 6 Novembre 1832.

Remise est faite en outre au nommé Chassereau, libre, de la somme de 600^{fr} montant des fruits et amendes, au payement desquels il a été condamné à la Martinique pour vol et rébellion le 9 août 1833; en même temps qu'à dix-huit mois d'Imprisonnement, peine qui expirera le 9 Février prochain.

Mandons & Ordonnons &c. &c.

Signé: Louis-Philippe.

Roi.

L'Amiral, Pair de France, Ministre, Secrétaire d'Etat de la Marine et des Colonies.

Signé: Duperré.

Duwigot.

Le Conseiller d'Etat, Directeur des Colonies.

Signé: F. B. L. L.

Pour copie conforme;

Le Conseiller d'Etat,

Secrétaire général du Ministère de l'Intérieur.

Amédée D.

I.
Celle
Le chef de Bureau, substitut
du Secrétaire général.

M. D.

資料 15 ジョゼフ・ヴェルデにたいする恩赦状（1863 年 6 月棄却）

ナポレオン、神の恩寵と国民の意思(VOLONTÉ NATIONALE)によりて、フランス人の皇帝なり。エクス¹の帝国法院を構成する院長及びその評定官へ。

朕は、ヴァラマン（アルプ＝マリティーム [県]）の農民ヴェルデ（ジョゼフ）の名におけるつつましき嘆願を受けた。その内容は、1863 年 4 月 15 日に、アルプ＝マリティームの重罪院により下された判決により、彼は、窃盗を準備し、円滑にする目的で行った故殺の罪により死刑を言い渡され、また、この有罪判決以来、彼はノス(Noce)に収監されていた。

これらの理由により、また、朕の司法大臣、すなわち司法省の国务大臣が、嘆願者たちについて行った予審と、彼らのために朕の仁慈の行為を決定しうる理由にかんして朕に行った報告に基づき、

法律の厳しさよりも慈悲を好むことを望み、

朕はヴェルデ（ジョゼフ）にたいし言い渡された死刑を終身労役刑に減刑することを宣言したし、宣言する。ただし、朕のこの決定は、もしいれば私訴原告人の権利を害しも損害を与えることもなく、これらの権利は、明示的に留保されたままとなる。

この書状が、帝国の玉璽を押され、嘆願者が連れてこられ、エクス²の憲兵隊の主任警部の出席の下、直立し、帽子をとってその読み上げを聞く公開の法廷で、前述の法院における朕の検事長から貴院に提出され、続いて、前述の書状が、同じ検事長の要請により、有罪の法院判決の原本の余白に書かれた注釈とともに、貴院の登録簿に写し取られることを命ずる。

朕の の宮殿において、18~~5~~⁶ [原文ママ] 63 年に与える。

(AN BB²⁴ 2032)

MINISTÈRE
de la Justice.

NAPOLÉON, PAR LA GRACE DE DIEU ET LA VOLONTÉ
NATIONALE, EMPEREUR DES FRANÇAIS.

Direction
Affaires criminelles
et des Grâces

2^e BUREAU.

76. 20381. 6.3

Aux Premier Président, Présidents et Conseillers composant
notre Cour impériale d'*Aix*

Nous avons reçu l'humble supplique au nom de *Verdet (Joseph)*
cultivateur à Vallauris (Alpes Maritimes)

contenant que par arrêt du *15 avril 1863* rendu par
la *Cour d'Assises des Alpes Maritimes* il a été condamné
à la PEINE DE MORT pour crime de *meurtre ayant eu pour objet de préparer*
et de faciliter un vol que depuis cette condamnation il est — détenu
à *Nice*

A CES CAUSES, et sur le rapport que notre Garde des sceaux, Ministre
Secrétaire d'État au département de la Justice, nous a fait des informations aux-
quelles il a été procédé à l'égard du suppliant, ainsi que des motifs qui
pourraient déterminer en sa faveur un acte de notre clémence ;

Voulant préférer miséricorde à la rigueur des lois ;

Nous avons déclaré et déclarons *commuer la peine de mort*
prononcée contre Verdet (Joseph) en celle
des travaux forcés à perpétuité

sans que notre présente décision puisse nuire ni préjudicier aux droits de la partie
civile, s'il en existe une, lesquels demeurent expressément réservés.

Verdet est né le
20 juillet 1804.

MANDONS ET ORDONNONS que les présentes lettres, scellées du sceau de
l'Empire, vous soient présentées par notre Procureur général en ladite Cour, en au-
dience publique où l'impétrant sera conduit, pour en entendre la
lecture, debout et la tête découverte en présence de l'officier commandant la gendar-
merie à *Aix* — que lesdites lettres soient
ensuite transcrites sur vos registres, à la réquisition du même Procureur général,
avec annotation d'icelles en marge de la minute de l'arrêt de condamnation.

Donné en notre palais de le
mil huit cent ~~cinquante~~ *soixante trois*.

Vu l'arrêt

主要参考資料

一次資料

Archives Nationales

Grâces accordées et réhabilitations

BB²¹ 28 ; BB²¹ 78 ; BB²¹ 124 ; BB²¹ 439-448 ; BB²¹ 527-533 ; BB²¹ 575-583

Grâces collectives et grâces politiques (jusqu'en 1856)

BB²² 12-14 ; BB²² 24-29 ; BB²² 51-66 ; BB²² 67-82 ; BB²² 101-111 ; BB²² 124-128 ; BB²² 131(1)

Grâces demandées et accordées ou refusées (depuis 1856)

BB²⁴ 724 ; BB²⁴ 795 ; BB²⁴ 876 ; BB²⁴ 2032 ; BB²⁴ 2037 ; BB²¹ 2047

Versement divers

BB³⁰ 44 ; BB³⁰ 45 ; BB³⁰ 46 ; BB³⁰ 47 ; BB³⁰ 48 ; BB³⁰ 49 ; BB³⁰ 50 ; BB³⁰ 51 ; BB³⁰ 52 ;
BB³⁰ 53 ; BB³⁰ 54 ; BB³⁰ 180

Police générale

F⁷ 10210 F⁷ 10211

Grande Chancelier

V¹ 545

法令集・議会議事録等

Archives Parlementaires, de 1787 à 1860. 1ère série, 1787 à 1799 : recueil complet des débats législatifs & politiques des Chambres françaises, Paris, 1867-1913 ; réimpression, Nendeln, 1969.

Bornier, Philippe, *Conférences des ordonnances de Louis XIV, roy de France et de Navarre, avec les anciennes ordonnances du royaume, le droit écrit & les arrêts. enrichies d'annotations et de décisions importantes*, t. 2, Paris, 1737.

Code Louis, t. 2, Louvain, 1700 ; réimpression, Milano, 1996.

Duvergier, J.-B. (éd.), *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements, et avis du Conseil d'État*, Paris, 1824-1891.

Gazette nationale, ou, Moniteur Universel, Paris, An 3, 4, 7 et 1834

Isambert et al. (éd.), *Recueil général des anciennes lois françaises : depuis l'an 420 jusqu'à la*

révolution de 1789, Paris, 1821-1833.

Journal officiel de la République Française, débat Assemblée Nationale, 28 juin 1995

Journal officiel de la République Française, n. 0136 du 13 juin 2012

Les Codes français collationnés sur les textes officiels, contenant la conférence des articles entre eux et sous chaque article les textes tant anciens que nouveaux qui les expliquent, les complètent ou les modifient : précédés des lois constitutionnelles ; suivis : 1. d'un supplément par ordre chronologiques renfermant, outre les lois les plus usuelles avec nombreuses références, les textes anciens encore en vigueur 2. d'une table alphabétique, par Louis Tripier et al., Paris, 1910.

Les documents de travail du Sénat, Série législation comparée, L'amnistie et la grâce, 2007

Locré, Jean-Guillaume, *Législation civile, commerciale et criminelle de la France*, tt. 24, 28 et 29, Paris, 1831.

Ordonnance de Louis XIV. roy de France et de Navarre : donnée à Saint Germain et Laye au mois d'aoust 1670 : pour les matieres criminelles, Paris, 1670 ; réimpression, Bruxelles, 1981.

Procès-verbal des conférences tenues par ordre du roi, pour l'examen des articles de l'Ordonnance civile du mois d'avril 1667; et de l'Ordonnance criminelle du mois d'aoust 1670, Paris, 1776.

Procès-verbaux des séances du Conseil des Cinq-Cents, Paris, An 4.

Recueil général des lois et des arrêts, en matière civile, criminelle, administrative et de droit public, rédigé depuis 1831 par L.-M. Devilleneuve et al., tt. 37 et 39, Paris, 1837 et 1839.

Réimpression de l'ancien Moniteur, t. 28, Paris, 1847..

統計

Compte général de l'administration de la justice criminelle en France, Paris, 1827-1902.

辞典類

Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres, mis en ordre & publié par M. Diderot ; quant à la partie mathématique par M. D'Alembert, tt. 1 et 7, Paris, 1751-1752 ; réimpression, New York, 1969.

Guyot, Joseph-Nicolas, *Répertoire universel et raisonné de jurisprudence civile, criminelle, canonique et bénéficiale*, t. 24, Paris, 1778.

Merlin, Philippe Antoine, *Répertoire universel et raisonné de jurisprudence, ouvrage de plusieurs jurisconsultes, réduit aux objets dont la connaissance peut encore être utile, et augmenté 1. des changemens apportés aux lois anciennes par les lois nouvelles, tant avant que depuis l'année 1814; 2. de dissertations, de plaidoyers et de réquisitoires sur les unes et les autres*, tt. 1 et 7, Paris, 1827-1828.

Répertoire général alphabétique du droit français, publiée sous la direction de Ed. Fuzier-Herman, t.

3, Paris, 1888-1895.

その他の著作

Barbier, Edmond-Jean-François, *Chronique de la régence et du règne de Louis XV(1718-1763), ou Journal de Barbier*, t. 4, Paris, 1858

Beaumanoir, Philippe de, *Coutumes de Beauvaisis*, texte critique publié avec une introduction, un glossaire, et une table analytique par Am. Salmon, t. 1, Paris, 1899. (邦訳『ボヴェジ慣習法書』塙浩訳、信山社、1992年)

Bentham, Jeremy, *Théorie des peines et des récompenses*, Rééditée en français, d'après les manuscrits, par M. Et. Dumont, de Genève, t. 1, Londres, 1811.

Id., *Traité de législation civile et pénale, Précédés de Principes généraux de Législation, et d'une Vue d'un Corps complet de Droit*, Publiés en Français par Ét. Dumont, de Genève d'après le Manuscrits confiés par l'Auteur, t. 2, Paris, 1802 (邦訳『民事および刑事立法論』長谷川正安訳、勁草書房、1998年)

Blondel, Jean, *Discussion des principaux objets de la législation criminelle ; Présentée au Conseil le 30 Juillet 1787, dans le Rapport de l'affaire des nommes Simarre, Lardoise et Bradier, condamnés à la roue par Arrêt du Parlement de Paris, et déclarés ensuite innocents par Arrêt du Parlement de Rouen*, Paris, 1789.

Bodin, Jean, *Les six livres de la République avec l'Apologie de R. Herpin*, Paris, 1576 ; réimpression, Aalen, 1961.(translation in English, *The Six Bookes of a Commonweale : A Facsimile reprint of the English translation of 1606, Corrected and supplemented in the light of a new comparison with the French and Latin texts*, edited with an Introduction by Kenneth Douglas McRae, Cambridge, 1962)

Brissot de Warville, *Théorie des lois criminelles*, Berlin, 1781

Carpzov, Benedikt, *Practica nova Saxonica rerum criminalium*, Wittenberg, 1635 ; Goldbuch, 1996.

Cicéron, *De l'invention* ; traduction nouvelle de Henri Borneque, Paris, 1932 (邦訳『キケロー選集 6』片山英男訳、岩波書店、2006年、所収) .

Code pénal, ou Recueil des principales ordonnances, édits et déclarations, sur les crimes et délits, 2e éd., Paris, 1755.

Collection complète des mémoires relatifs à l'histoire de France, avec des notices sur chaque auteur, et des observations sur chaque ouvrage par M. Petitot, t. 47, Mémoires de Pierre de L'Estoile pour servir à l'histoire de France et Journal de Henri III et de Henri IV, t. 3, Paris, 1825.

Colléction universelle des mémoires particuliers relatifs à l'histoire de la France, t. 20, Londres, 1786,

- Mémoires de Martin du Bellay.
- Constant, Benjamin, *Des réactions politiques*, An 5.
- Id., *Cours de politique constitutionnelle*, Paris, 1818 ; avec une introduction et des notes par Édouard Laboulaye, Paris, 1872 ; réimpression, Geneve - Paris, 1982.
- Id., *Fragment d'un ouvrage abandonné sur la possibilité d'une constitution républicaine dans un grand pays*, éd. Henri Grange, Paris, 1991.
- Desmoulins, Camille, *Le vieux cordelier*, édition complète et critique d'après les notes de Albert Mathiez ; avec une introduction et des commentaires par Henri Calvet, Paris, 1936.
- Discours miraculeux et véritable advenu nouvellement, en la personne d'une fille nommée Anne Belthumier, servante en l'Hostellerie du Pot d'Estain, en la Ville de Mont-fort entre Nantes et Rennes en Bretagne, laquelle a esté pendu III jours & 3. nuits sans mourir. Avec Confession de plisieurs dudit Mont-fort, comme l'on pourra voir par ce présent discours*, Douai, 1589.
- Filangieri, Gaetano, *La scienza della legislatione e gli opuscoli scelti*, Firenze, 1821.
- Discours de M. le Garde de Sceaux, Pour annoncer la Déclaration du Roi, relative à l'Ordonnance Criminelle*, Versailles.
- Garofalo, Raffaele, *Criminologia : studio sul delitto, sulle sue cause e sui mezzi di repressione*, Torino, 1885.
- Guérin de la Grasserie, Raoul-Robert-Marie, *Le droit de grâce*, Firenze, 1898.
- Gueullette, Thomas-Simon, *Sur l'échafaud. Histoires de larrons et d'assasins (1721-1766)*, Édition présentée et annotée par Pascal Bastien, Paris, 2010.
- Guizot, François, *De la peine de mort en matière politique*, Paris, 1822 ; réimpression, Paris, 1984.
- Hobbes, Tomas, *De cive*, A Critical Edition by Howard Warrender, Oxford, 1983. (邦訳『哲学言論 ; 自然法及び国家法の原理』伊藤宏之ほか訳、柏書房、2012 年)
- Id., *The English works of Thomas Hobbes of Malmesbury*, edited by Sir William Molesworth, London, 1966 ; reprint, t. 6, Aalen, 1966. (邦訳『哲学者と法学徒との対話』田中浩ほか訳、岩波文庫、2002 年)
- Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier (1515-1536)*, publié pour la Société de l'histoire de France d'après un manuscrit inédit de la Bibliothèque impériale par Ludovic Lalanne, Paris, 1854 ; réimpression, New York, 1965.
- Jousse, Daniel, *Nouveau commentaire sur l'Ordonnance criminelle du mois d'Août 1670*, Paris, 1763.
- Id., *Traité de la justice criminelle en France*, tt. 1-3, Paris, 1771
- Le Bret, *Les œuvres de messire C. Le Bret, conseiller ordinaire du Roy en son Conseils d'Etat et Privé*, Paris, 1643.
- Locke, John, *Two Treaties of Government, Preceded by sir Robert Filmer's "Patriarcha", with an Introduction by Henry Morley*, second edition, London, 1887. (邦訳『完訳統治二論』加藤節訳、岩波文庫、2010 年)

- Lombroso, Cesare, *Sull'incremento del delitto in Italia e sui mezzi per arrestarlo*, Torino, 1879
- Lyre, Nicolas de, *Postillae literalis et moralis, Biblia sacra sum Glossa ordinaria*, v. 6, Anvers, 1617..
- Mandrot, Bernard de, *Journal de Jean de Roye : connu sous le nom de chronique scandaleuse 1460-1483*, t. I, Paris, 1894-1896.
- Muyart de Vouglans, Pierre-François, *Institutes au droit criminel, ou Principes généraux sur ces matières, suivant le droit civil, canonique, et la jurisprudence du royaume, avec un traité particulier des crimes*, Paris, 1757.
- Id., *Mémoire sur les peines infamantes*, dans *Les lois criminelles de France dans leur ordre naturel*, t. 2, Paris, 1780.
- Id., *Lettre sur le système de l'auteur de l'Ésprit des Lois, Touchant la Moderation des Peines*, Paris, 1785.
- Œuvres complètes du chancelier d'Aguesseau*, Nouvelle édition, par M. Pardessus, tt. 10 et 11, Paris, 1819.
- Œuvres complètes de J. de Maistre: contenant ses œuvres posthumes et toute sa correspondance inédite*, tt. 1-2 et 3-4, Nouvelle édition, Lyon, 1884 ; réimpression, Hildesheim et al., 1984.
- Œuvres complètes de Montesquieu*, t. 1, Paris, 1758 ; réimpression publiée sous la direction de M. André Masson, t. 1, Paris, 1950. (邦訳『法の精神 (上)』野田良之ほか訳、岩波文庫、2008年)
- Œuvres de François Villon*, préface, esquisse biographique, et bibliographie par Jean Dufournet ; établissement du texte, gloses et notices sur tous les personnages cités et sur les particularités du temps, par André Mary, Paris, 1970
- Œuvres de M. chancelier d'Aguesseau, contenant les lettres sur les matière criminelle & matière civile*, t. 8, Paris, 1776.
- Œuvres de Michel Lepeltier Saint-Fargeau, député au Assemblée Constituante et Conventionnelle, assassiné le 20 janvier 1793, par Paris, garde du roi ; précédées de sa vie, par Félix Lepeletier, son frère, suivies de documents historiques relatifs à sa personne, à sa mort et à l'époque*, Bruxelles, 1826.
- Œuvre de Pothier*, rédigé par Siffrein et al., t. 14, Paris, 1821-1824.
- Opinion et projets de décret sur les lettres de rémission, de commutation de peine et de rappel des galères ou de prisons perpétuelles*, par L. J. Goujon, député de département de l'Oise
- Opinions des conventionnels sur le jugement des brochures conservées à la Bibliothèque de Michel Bernstein*, sous la direction de Tadami Chizuka, t. 1-6, Tokyo, 2008.
- De Peyonnet, *Pensées d'un prisonnier*, Paris, 1834.
- Pizan, Christine de, *Le livre du corps de police*, Édition critique avec introduction, notes et glossaire par Angeus J. Kennedy, Paris, 1998.
- Relation de la cérémonie du sacre et couronnement du Roi, faite en l'Église Métropolitaine de Rheims, le Dimanche 11^e jour de Juin 1775*, Paris

- Rousseaud de la Combe, Guy, *Traité des matières criminelles, suivant l'ordonnance du mois d'août 1670 & les édits, déclarations du roi, arrêts et réglemens intervenus jusqu'à présent*, Paris, 1768.
- Rousseau, Jean-Jacques, *Du contract social, ou principes du droit politique*, Amsterdam, 1762. (邦訳『社会契約論』桑原武夫他訳、岩波文庫、1961年)
- Salmon, Pierre, *Les demandes faites par le Roi Charles VI et les réponses*, 1833
- Seneque, *De la clémentia*, texte établi et traduit par François Préchac, Paris, 1967. (邦訳『セネカ哲学全集 2』大西英文ほか訳、岩波書店、2006年)
- Sept générations d'exécuteurs, 1688-1847 : mémoires des Sanson*, mis en ordre, rédigés et publiés par H. Sanson, t. 3, Paris, 1862.
- Serpillon, François, *Code criminel, ou commentaire sur l'Ordonnance de 1670*, Lyon, 1767..
- Discours parlementaires de M. Thiers*, publie par M. Calmon, troisième partie (1850-1864), t. 9, Paris, 1880.
- Voltaire, *Œuvres complètes*, éditées par L. Moland, t. 27, Paris, 1879.
- .

研究文献

欧語

- Abad, Raynald, *La grâce du roi*, Paris, 2011.
- Alline, Jean-Pierre, *Gouverner le crime. Les politiques criminelles françaises de la Révolution au XXI^e siècle. 1. L'ordre des notables 1789-1920*, Paris, 2011.
- Andrews, Richard Mowery, *Law, magistracy, and crime in Old Regime Paris, 1735-1789*, v. 1, The system of criminal justice, Cambridge, 1994.
- Antoine, Michel, *Les remontrances des cours supérieures sous le règne de Louis XIV(1673-1715)*, *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 151, 1993.
- Apostolidès, Jean-Marie, *Le roi-machine. Spectacle et politique au temps de Louis XIV*, Paris, 1981. (邦訳『機械としての王』水林章訳、みすず書房、1996年)
- Id., *Le Prince sacrifié. Théâtre et politique au temps de Louis XIV*, Paris, 1985. (邦訳『犠牲に供された君主』矢橋透訳、平凡社、1997年)
- Arendt, Hanna, *On Revolution*, Harmondsworth, 1990. (邦訳『革命について』清水速雄訳、合同出版、1968年)
- Armand, Frédéric, *Les bourreaux en France. Du Moyen Age à l'abolition de la peine de mort*, Paris, 2012.
- Astruc, Philippe et al., *L'abolition de la peine capital en France (9 octobre 1981)*, Paris, 2011.
- Aubry, Octave, *De la loi de pardon en matière pénale*, thèse pour le doctorat en droit, Paris, 1908.
- Aulard, François Victor Alphonse, *La société des jacobins*, t. VI, Paris, 1897 ; réimpression, New York, 1973.

- Baczko, Bronislaw, *Comment sortir de la Terreur : Thermidor et la Révolution*, Paris, 1989.
- Id., Briser la guillotine. Une amnistie thermidorienne, *Crime, Histoire & Société*, v. 8, 2004.
- Id., *Politiques de la Révolution française*, Paris, 2008.
- Bastien, Pascal, Erreurs et miracles judiciaires dans la France d'Ancien Régime (XVI^e-XVIII^e siècle), dans *L'erreur judiciaire : de Jeanne d'Arc à Roland Agret*, sous la direction de Benoît Garnot, Paris, 2004
- Id., *L'Exécution publique à Paris au XVIII^e siècle : une histoire des rituels judiciaires*, Seyssel, 2006.
- Id., *Une histoire de la peine de mort. Bourreaux et supplices 1500-1800*, Paris, 2011.
- Bée, Michel, Le spectacle de l'exécution dans la France d'Ancien régime, *Annales : économies, sociétés, civilisations*, n. 38, 1983
- Bernardi, Bruno, Le droit de vie et de mort selon Rousseau : une question mal posée?, *Revue de Métaphysique et de Morale*, n. 37, 2003.
- Blanquie, Christophe, Pierre de Villars : An Ormiste after the Fronde, *French History*, v. 20, n. 1, 2006.
- Bochana, Michael et al., Entre châtement et grâce royale : l'entrée de bordeaux dans la mouvance française (1453-1463), dans *Le châtement des villes dans les espaces méditerranéens (Antiquité. Moyen Âge, Époque moderne)*, sous la direction de Patrick Gilli et al., Turnhout, 2012.
- Boissy, Gabriel, *Les pensées des rois de France*, Paris, 1955.
- Boer, Edwig de, Gracier les jeunes au XIX^e siècle, dans *Le droit de punir du siècle des Lumières à nos jours*, sous la direction de Frédéric Chauvaud, Rennes, 2012.
- Boutier, Jean et al., *Un tour de France royale : le voyage de Charles IX, 1564-1566*, Aubier, 1984.
- Bryant, Lawrence M., *The King and the City in the Parisian Royal Entry Ceremony : Politics, Ritual, and Art in the Renaissance*, Geneve, 1986.
- Brière, Nina, *La douceur du roi*, Paris, 2012.
- Brown, Howard, G., Mythes et massacres : reconsidérer la « terreur directoriale », *Annales historiques de la Révolution française*, n. 325, 2001.
- Cabanis, José, *Le sacre de Napoléon*, Paris, 2007. (邦訳『ナポレオンの戴冠』安斉和雄編訳、白水社、1987年)
- Campbell, Peter R., The Politics of Patriotism in France (1770-1788), *French History*, v. 24, n. 4, 2010.
- Carbasse, Jean-Marie, *Histoire du droit pénal et de la justice criminelle*, Paris, 2000.
- Chartier, Roger, La pendue miraculeusement sauvée. Étude d'un occasionel, dans *Les usages de l'imprimé*, sous la direction de Roger Chartier, Paris, 1987.
- Id., *The Cultural Origins of the French Revolution*, translated by Lydia G. Cochrane, Durham and London, 2004. (邦訳『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳、岩波書店、1994年)

- Cheyette, Fredric, L., 'Suum cuique tribuere', *French Historical Studies*, Spring 1970. (邦訳「各人にその取り分を」 図師宣忠訳 (服部良久編訳『紛争のなかのヨーロッパ中世』京都大学学術出版会、2006 年、所収))
- Cohen, Deborah, La procédure de grâce au XVIII^e siècle : restaurer un ordre ou reconnaître l'innocence?, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 54, n. 2, 2007.
- Conan, Matthieu, Amnistie présidentielle et tradition, *Revue du droit public*, n. 5, 2001.
- Dainville-Barbiche, Ségolène, *Grâce collectives, amnistie, 1865, 1868-1928, BB²² 191 à 222. Répertoire numérique détaillé*, Paris, 2002.
- Dainville-Barbiche, Ségolène et al., *Grâce individuelles, grâce trimestrielles 1819-1955, répertoire numérique détaillé des articles BB/24/1124 à 1138*, Paris, 2004 et 2008.
- Danet, Jean et al. *Prescription, amnistie et grâce en France*, Paris, 2008
- Dautricourt, Pierre, *Les criminalités et la répression au parlement de Flandre au 18^e siècle* Lille, 1912.
- Dauven, Bernard et al., Introduction. « Préférant miséricorde à rigueur de justice », dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice. Pratiques de la grâce (XIII^e-XVII^e siècles)*, éd. par Dauven et al., Louvain, 2012.
- Davis, Natalie Zemon, *Fiction in the Archives : Pardon Tales and Their Tellers in Sixteenth-Century France*, Stanford, 1987. (邦訳『古文書の中のフィクション——六世紀フランスの恩赦嘆願の物語——』成瀬駒男・宮下志朗訳、平凡社、1990 年) .
- Desjardins, Albert, *Les cahiers des États généraux en 1789 et législation criminelle*, Paris, 1883.
- Delarue, Jacques, *Le metier de bourreau du Moyen-Age a aujourd'hui*, Paris, 1979
- Duparc, Pierre, *Origines de la grâce dans le droit pénal romain et français du Bas-Empire à la Renaissance*, thèse pour le doctorat en droit, Paris, 1942.
- Egrét, Jean, *La pré-révolution française(1787-1788)*, Paris, 1962.
- Id., *Louis XV et l'opposition parlementaire*, Paris, 1970.
- Engels, Jens Ivo, Dénigrer, espérer. Assumer la réalité. Le roi de France perçu par ses sujets. 1680-1750, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 50, n. 3, 2003.
- Esmein, Adhémar, *Histoire de la procédure criminelle en France et spécialement de la procédure inquisitoire depuis le XIII^e siècle jusqu'à nos jours*, t. 1, Paris, 1882. (邦訳「フランス刑事訴訟法史 (13 世紀から 1670 年刑事王令まで)」 塙浩訳 (塙浩訳著『フランス刑事法史』信山社、2000 年、所収))
- Farge, Arlette, *Dire et mal dire. L'opinion publique au XVIII^e siècle*, Paris, 1992.
- Farge, Arlette et al., Les théâtres de la violence à Paris au XVIII^e siècle, *Annales : Histoire, Sciences Sociales*, n. 5, 1979.
- Farge, Arlette et al., *Logiques de la foule. L'affaire des enlèvements d'enfants Paris 1750*, Paris, 1988. (邦訳『パリ 1 7 5 0 —子供集団誘拐事件の謎』三好信子訳、新曜社、1996 年)

- Fernandez-Lacôte, Hélène, *Le procès du Cardinal de Richelieu. droit, grâce et politique sous Louis le Juste*, Paris, 2011.
- Ferrone, Vincenzo, *La politique des Lumières. Constitutionnalisme, républicanisme, Droit de l'homme, le cas Filangieri*, Paris, 2009.
- Fierro, Alfred, *Histoire et dictionnaire de Paris*, Paris, 1996. (邦訳『パリ歴史事典』鹿島茂監訳、白水社、2011年)
- Flamerie de Lachapelle, Guillaume, *Clementia. Recherches sur la notion de la clémence à Rome, du début du I^{er} siècle A.C. à la mort d'Auguste*, Paris, 2011.
- Flammermont, Jules, *Remontrances du Parlement de Paris au XVIII^e siècle*, Paris, 1898.
- Floquet, A., *Histoire du privilège de Saint Romain*, Rouen, 1833.
- Foucault, Michel, *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, Paris, 1975. (邦訳『監獄の誕生—監視と処罰—』田村淑訳、新潮社、1977年)
- Id., *La volonté de savoir*, Paris, 1979. (邦訳『性の歴史 I 知への意思』渡辺守章訳、新潮社、2000年)
- Foviaux, Jacques, *La rémission des peines et des condamnations. Droit monarchique et droit moderne*, Paris, 1970.
- François, Michel, Notes sur les lettres de rémission transcrites dans les registres de Trésor des chartes, *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 103, 1942.
- Friedland, Paul, *Seeing Justice Done. The age of spectacular capital punishment in France*, Oxford, 2012.
- Furet, et al., *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Paris, 1988. (邦訳『フランス革命事典』河野健二ほか監訳、みすず書房、1999年)
- Garnot, Benoît, *Histoire de la justice. France, XVI^e-XXI^e siècle*, Paris, 2009.
- Gauvard, Claude, Grâce et exécution capitale : les deux visages de la justice royale française à la fin de Moyen Âge, *Bibliothèque de l'École des chartes*, t. 153, 1995. (邦訳「恩赦と死刑—中世末期におけるフランス国王裁判の二つの相貌—」轟木広太郎訳(服部良久編訳『紛争の中のヨーロッパ中世』京都大学学術出版会、2006年、所収))
- Id., L'honneur du roi. Peines et rituels judiciaire au Parlement de Paris à la fin du Moyen Âge, dans *Les rites de la justice. Gestes et rituel judiciaires au Moyen Âge*, sous la direction de Claude Gauvard et al., Paris, 1996.
- Id., « De grace especial. » *Crime, état et la société en France à la fin du Moyen Age*, Paris, 2010.
- Gobron, Louis, *Le droit de grâce sous la Constitution de 1875*, Paris, 1893.
- Godechot, Jacques, *Les institutions de la France sous la Révolution et l'empire*, Paris, 1968.
- Gontier, Nicole, *Le châtimement du crime au moyen âge XII^e-XVI^e siècles*, Rennes, 1998.
- Goraincourt, P.-A.-M., *Traité du droit de grâce sous la République*, Paris, 1881.
- Gruel, Louis, *Pardons et châtimements*, Paris, 1991.

- Guenée, Bernard et al., *Les entrées royales françaises de 1328 à 1515*, Paris, 1968 .
- Guérolld, Jacques Yves, *Le droit de grâce des évêques d'Orleans*, thèse pour le doctorat en droit, présentée et soutenue publiquement, Orleans, 1969.
- Guyon, Gérard, *Justice de Dieu, justice des hommes. Christianisme et histoire du droit pénal*, Bouère, 2009.
- Habib, Danis, *BB/24/2001-2084. Grâces des condamnés a mort (1826-1899)*, Paris, 1996-2006.
- Id., *Grâces des condamnés des commissions mixtes de 1852. Inventaire-index des articles BB/30/462 à 479*, Paris, 1997.
- Id., *État général des fonds des Archives nationales (Paris), Mise à jour 2007*, BB²¹ grâces accordées, Paris, 2006
- Ham, Bertrand, « Tuer contre la loi, tout le monde le peut, sauver, personne sauf moi » Le De clementia de Sénèque et l'idéologie stoïcienne du principat, dans *Le prince et la Norme. Ce que légiférer veut dire*, textes réunis par Jacqueline Hoareau-Dodinau et al., Limoges, 2007.
- Hampson, Norman, La patrie, in *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture*, v. 2, The Political Culture of the French Revolution, Edited by Colin Lucas, Oxford et al., 1988.
- Hanley, Sarah, *The Lit de Justice of the Kings of France. Constitutional Ideology in Legend, Ritual, and Discours*, Princeton, 1983.
- Harris, Robin, *Valois Guyenne : a study of politics, government and society in late medieval France*, Woodbridge and others, 1994.
- Hesse, Carla, The Law of the Terror, *MLN*, v. 114, n. 4, 1999.
- Id., La logique culturelle de la loi révolutionnaire, traduit par Marie-Pascale Brasier d'Iribarne, *Annales, Histoire, Sciences Sociales*, n. 4, 2002.
- Hoareau-Dodinau, Jacqueline, La jeune fille, le roi et pendu, dans *Le pardon*. Textes réunis par Jacqueline Hoareau-Dodinau et al., Limoges, 1999.
- Kantorowicz, Ernst H., *The King's Two Bodies : A study of Medieval Poilitical Theology*, Princeton, 1957. (邦訳『王の二つの身体 (上)』小林公訳、ちくま学芸文庫、2003 年)
- Kelly, G. A., From Lèse-majesté to Lèse-nation : Trahison in Eighteenth-Century France, *Journal of the History of Ideas*, v. 42, n. 1, 1981.
- Kennedy, Michael L., The "Last Stand" of Jacobin Clubs, *French Historical Studies*, v. 16, n. 2, 1989.
- Krynen, Jacques, *L'empire du roi. Idées et croyance politiques en France XIII^e-XV^e siècle*, Paris, 1993.
- Id., *L'idéologie de la magistrature ancienne*, Paris, 2009.
- Jackson, Richard A., *Vive le Roi! : A History of the French Coronation from Charles V to Charles X*, Chapel Hill and London, 1984.(traduction en français, *Vivat rex. Histoire des sacres et*

- couronnements en France*, Traduit par Monique Arav, Paris, 1984)
- Jacobson, David Yale, *The Politics of Criminal Law Reform in Pre-Revolutionary France*, Thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the Degree of Doctor of Philosophy in the Department of History at Brown University, 1976.
- Jandeaux, Janne-Marie, La révolution face aux « victimes du pouvoir arbitraires » : l'abolition des lettres de cachet et ses conséquences, *Annales historiques de la révolution française*, n. 2, 2012.
- Jaume, Lucien, *Échec au libéralisme. Les Jacobins et l'État*, Paris, 1990. (邦訳『徳の共和国か、個人の自由か ジャコバン派と国家 1793年 - 1794年』石埼学訳、勁草書房、1998年)
- Jeanclos, Yves, *Droit pénal européen : dimension historique*, Paris, 2009.
- Id., *Dictionnaire de droit criminel et pénal*, Paris, 2010.
- Lacey, Helen, *The Royal Pardon. Access to Mercy in Fourteenth-Century England*, York, 2009.
- Lacomme, Henri, *Comparaison entre le droit de grâce et la libération conditionnelle*, thèse pour le doctorat en droit, Toulouse, 1910.
- Lair, Adolphe-Émile, *De la réhabilitation des condamnés dans le droit romain et dans le droit français ancien et moderne comparée dans ses effets avec la grâce, l'amnistie et la révision*, Paris
- Lascoumes, Pierre et al., *Au nom de l'ordre. Une histoire politique du code pénal*, Paris, 1989.
- Lecoutre, Mattieu, *Ivress et ivrognerie dans la France moderne*, Rennes, 2011.
- Lecuir, Jean, Criminalité et 'moralité' : Montyon, statistien du parlement de Paris, dans *Marginalité et criminalité à l'époque moderne*, numéro spécial de la *Revue d'Histoire Moderne et Contemporaine*, t. 21, 1974.
- Legoux, Jules, *Du droit de grâce en France comparé avec les législations étrangères : commenté par les lois, ordonnances, décrets, lettres patentes, déclarations, édits royaux, arrêts de parlements, de la Cour de cassation et de cours impériales, avis du conseil d'état, décisions et circulaires ministérielles, instructions de l'administration de l'enregistrement, etc., depuis 1349 jusqu'en 1865*, Cotillon, 1865.
- Le Poulichet, Guy-François, *Le droit de grâce dans les trois derniers siècles de l'Ancien Régime*, thèse présentée en vue de l'obtention du doctorat en droit, Paris, 1956.
- Lifshitz, Felice, The privilege of St. Romanus : Provincial Independence and Hagiographical Legends at Rouen, *Analecta Bollandiana*, n. 107, 1989.
- Lucas, Colin, The Crowd and Politics between Ancien Regime and Revolution in France *The Journal of Modern History*, v. 60, n. 3, 1988.
- Maestro, Marcello, *Voltaire and Beccaria as Reformers of Criminal Law*, New York, 1972.
- Id., Gaetano Filangieri and His Science of Legislation, *Transactions of the American Philosophical Society*, new series, v. 66, 1976.
- Mari, Eric de, Grâce et politique. La grâce des condamnés de la commission mixte du département de l'Hérault : 1852-1859, dans *Les modes de résolution des conflits entre*

- gouvernants et gouvernés*, Bruxelles, 2009.
- Marion, Marcel, *Le garde des sceaux Lamoignon et la réforme judiciaire de 1788*, Paris, 1905.
- Martin, Jean-Clément, *La Révolution française, 1789-1799, une histoire socio-politique*, Paris, 2008.
- Merle, Louis, *Des causes de cessation des peines : de l'"Amnestia", de l'"In integrum restitutio damnatorum" et de l'"Indulgentia", en droit romain. De l'amnistie, de la grâce, de la libération conditionnelle et de la réhabilitation en droit français*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Poitiers, Poitiers, 1889
- Meyer, Julie, *Les mesures de grâce dans l'histoire du droit répressif romain. Réflexion sur les rapports entre la peine, la politique et la religion*, thèse pour le doctorat en droit, Paris, 2007.
- Michaud, Hélène, *La grande chancellerie et les écritures royales au XVI^e siècle*, Paris, 1967.
- Michelet, *Origines du droit français : cherchées dans les symboles et formules du droit universel*, t. 2, Bruxelles, 1840 ; réimpression, Paris, 2009.
- Milanesi, Claudio, La réanimation d'un condamné à Montpellier en 1745, dans *L'exécution capitale : une mort donnée en spectacle XVI^e-XX^e siècle*, sous la direction de Régis Bertrand et al., Aix-en-Provence, 2003.
- Mommsen, Theodor, *Histoire romaine*, traduit par C. A. Alexandre, t. 1, Paris, 1863. (邦訳『ローマの歴史 I ローマの成立』長谷川博隆訳、2005年)
- Muchembled, Robert, *La violence au village. XV^e-XVII^e siècle*, Turnhout, 1989.
- Muller, Christian Alain, Du « peuple égaré » au « peuple enfant » le discours de la révolte populaire en 1793, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 47, n. 1, 2000.
- Muller, Dominique, Magistrats français et peine de mort au 18^e siècle, *Dix-huitième siècle*, n. 4, 1972.
- Musin, Aude et al., Les récit de rémission dans la longue durée de l'Anjou XV^e au XVIII^e siècle, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, v. 57, n. 4bis, 2010.
- Nassiet, Michel, Brittany and the French Monarchy in the Sixteenth Century : the Evidence of the Letters of Remission, *French History*, v. 17, n. 4, 2003..
- Id. *Les lettres de pardon du voyage de Charles IX (1565-1566)*, Paris, 2010.
- Nikichine, Marie, Entre rémission du prince et conciliation. L'exemple de la ville de Douai à la fin du Moyen Age, dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice*.
- Ozouf, Mona, Thermidor ou travail de l'oubli, *L'école de la France. Essais sur la Révolution, l'utopie et l'enseignement*, Paris, 1984.
- Paresys, Isabelle, Pardonner et punir aux marges du royaume de France sous François I^{er}, dans *Le pardon*.
- Pasquier, Jean-Claude, *Le château de Vendôme, une histoire douce amère*, Vendôme, 2000.
- Phillipson, Coleman, *Three Criminal Law Reformers, Beccaria, Bentham, Romilly*, Montclair, 1970.

- Porret, Michel, Les « lois doivent tendre à la rigueur plutôt qu'à l'indulgence » Muyart de Vouglans versus Montesquieu, *Revue Montesquieu*, n. 1, 1997.
- Id., Attenuer le mal de l'infamie : le réformisme conservateur de Pierre-François Muyart de Vouglans, *Crime, Histoire et Sociétés*, v. 4, n. 3, 2000.
- Id., Maintenir mais modérer la mort comme peine au temps des Lumières, dans *Le droit de punir du siècle des Lumières à nos jours*, sous la direction de Frédéric Chauvaud, Rennes, 2012.
- Potter, David, 'Rigueur de justice' : Crime, Murder and the Law in Picardy, Fifteenth to Sixteenth Centuries, *French History*, v. 11, n. 3, 1997.
- Poujaud, Paul, *Des diverses formes du droit de grâce dans la législation criminelle de Rome, De l'amnistie en droit français*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Paris, Paris, 1885.
- Remy, Henry, *Principes généraux du code pénal de 1791*, thèse pour le doctorat, Paris, 1910.
- Renaut, Marie-Hélène, Le droit de grâce doit-il disparaître?, *Revue de science criminelle et de droit pénal comparé*, Nouvelle édition, juillet-sept 1996.
- Rosenblieh, Émilie, Entre grâce et peine de mort. Le cas d'une supplique enregistrée à la Pénitencerie apostolique sous le pontificat de Nicolas V (1447-1455), dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice*.
- Roux, Pierre-François, *La grâce amnistiante*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Paris, Paris, 1940.
- Rulleau, Charles, *De la grâce en droit constitutionnel*, thèse pour le doctorat de droit, Bordeaux, 1911.
- Sermet, Ernst, *Le droit de grâce*, thèse pour le doctorat ès-science politique et économique de l'Université de Toulouse, Toulouse, 1901.
- Shennan J. H., The Political Role of the Parlement of Paris, 1715-23, *The Historical Journal*, v. 8, n. 2, 1965.
- Sitze, Adam, No Mercy, *South Atlantic Quarterly*, v. 107, n. 3, 2008.
- Smagghe, Laurent, Plaisir de châtier, joie de pardonner : discours amoureux du prince aux villes rebelles du pays de Flandre à l'époque bourguignonne (XIV^e-XV^e siècle), dans Barbier, Josiène et al., *Amour et désamor du prince du haut moyen âge à la Révolution française*, Paris, 2011.
- Soen, Violet, La réitération de pardons collectifs à finalités politiques pendant la Révolte des Pays-Bas (1565-1598). Un cas d'espèce dans les rapports de force aux Temps Modernes? dans *Préférant miséricorde à rigueur de justice*.
- Soyer, Jacques, *Lettre de Rémission accordée par Charles-Quint lors son passage à Orléans (20 décembre 1539)*, Paris, 1909.

- Taïeb, Emmanuel, *La guillotine au secret*, Paris, 2011.
- Taine, Hippolyte, *Les origines de la France contemporaine*, La Revolution, t. 1, Paris, 1896.
- Thiers, Adolphe, *Histoire du consulat et de l'Empire*, t. 3, Paris, 1845.
- Van Kley, Dale K., *Les origines religieuses de la Révolution française 1560-1791*, traduit de l'anglais(États-Unis) par Alain Spiess, Paris, 2006.
- Vrabiesco, George G., *Contribution à l'étude critique du droit de grâce*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Paris, Paris, 1921.
- Wagner, Marie-France, *Les Entrées royales et solennelles du règne d'Henri IV*, t. 1, Paris, 2010.
- Wahnich, Sophie, Écrire l'histoire des violences politique ou les amnisties, dans *Une histoire politique de l'amnistie*, sous la direction de Sophie Wahnich, Paris, 2007.
- White, Stephen D., 'Pactum ... Legem Vincit Amor Judicium': The Settlement of Disputes by Eleventh Century Compromise in Western France, *The American Journal of Legal History*, vol. 22, no. 4, 1978. (邦訳「合意は法に勝り、和解は判決に勝る」轟木広太郎訳(服部前掲書、所収)).
- Yaya, Isabel, Napoleon as Lawgiver : The Renewal of an Enlightened Political Motif for the Iconographic Program of the Louvre's Cour Carrée, *French History*, v. 25, n. 3, 2011.

日本語

- 池田俊昭 『中世後期ドイツの犯罪と刑罰—ニュルンベルクの暴力紛争を中心に—』北海道大学出版会、2010年。
- 石井三記「一八世紀フランスの国王・法・法院」(上山安敏編『近代ヨーロッパ法社会史』ミネルヴァ書房、1987年、所収)。
- 同「フランス君主制の儀礼と象徴」『社会思想史研究』第15号、1991年。
- 同『18世紀フランスの法と正義』名古屋大学出版会、1999年。
- 同「フランス革命期の国王裁判における法的側面」『名古屋大学法政論集』第186号、2001年。
- 同「フランス民法典の運命」(石井三記編『コード・シヴィルの二〇〇年』創文社、2007年、所収)。
- 石井三記、福田真希共訳「ベッカリーア『犯罪と刑罰』(第五版)」『名古屋大学法政論集』、第228号、第229号、第321号、2008-2009年。
- 岩野英夫「グレゴリウス『歴史十巻』の中の紛争と紛争解決の仕方」『同志社法学』第64巻第1号、2012年。
- ジェイムズ・Q・ウィットマン『過酷な司法—比較史で読み解くアメリカの厳罰化—』伊藤茂訳、雄松堂出版、2007年。
- 内田博文、中村義孝共訳「資料 フランス一七九一年刑法典」『立命館法学』、第96巻、1971年。

川上洋平「ジョゼフ・ド・メーストルの反革命論—総裁政府期のコンスタン批判にみる政治的なものの諸相—」『法学政治学研究』第 80 号、2009 年。

木崎喜代治「18 世紀におけるパルルマンと王権—モープーの改革をめぐる— (1～3・完)」『経済論叢』第 134 巻第 5・6 号、第 135 巻第 5・6 号、第 136 巻第 2 号、1984 - 1985 年。

栗原真人『一八世紀イギリスの刑事裁判』成文堂、2012 年。

クロード・ゴヴァール「中世後期のフランス王のイメージ 至高の裁判官—理論と実践」渡辺節夫・青山由美子訳 (渡辺節夫編『王の表象』山川出版社、2007 年、所収)。

小山啓子『フランス・ルネサンス王政と都市社会—リヨンを中心として』九州大学出版会、2006 年。

佐々木毅『主権・抵抗権・寛容—ジャン・ボダンの国家哲学』岩波書店、1973 年。

沢登佳人「邦訳・大革命期フランスの刑事訴訟立法 (その一)、治安警察、刑事司法および陪審員の設置に関するデクレ (一七九一年九月一六—二九日)」『法政理論』第 17 巻第 1・2 号、1984 年。

沢登佳人ほか「邦訳・大革命期フランスの刑事訴訟立法 (その二) 罪刑法典 (一) (革命暦四年霧月三日)」『法政理論』第 17 巻第 4 号、1985 年。

沢登佳人校閲、藤尾彰訳「フランス一七九一年刑法典草案に関するルペルチエ報告」『法政理論』第 18 巻第 4 号、1986 年。

鈴木教司「ラモワニオン司法改革について」『愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編』第 16 巻、2004 年。

同編訳『フランス刑事諸王令』2008 年。

柴田三千雄ほか編『世界歴史大系 フランス史 2・3』山川出版社、1995 - 1996 年。

高澤紀恵『近世パリに生きる ソシアビリテと秩序』岩波書店、2008 年。

東京大学社会科学研究所『1791 年憲法の資料的研究』東京大学社会科学研究所、1972 年。

遅塚忠躬「王政復古期の「国王弑逆者」」(同『フランス革命とヨーロッパ近代』同文館出版、1996 年、所収)。

轟木広太郎『戦うことと裁くこと—中世フランスの紛争・権力・真理』昭和堂、2011 年。

中村喜美郎「フィランジェーリの立法思想—代立法学の原点—」『日伊文化研究』第 29 号、1991 年。

中村義孝「フランス革命初期の重罪陪審裁判」『立命館法学』第 225・226 号、1993 年。

同「資料 ルイ—四世一六七〇年刑事王令」『立命館法学』第 236 号、1999 年。

同編訳『フランス憲法史集成』法律文化社、2003 年。

同編訳『ナポレオン刑事法典資料集成』法律文化社、2006 年。

成瀬治「ジャン・ボダンにおける『国家』と『家』」『法制史研究』第 34 号、1984 年。

二宮宏之「「印紙税一揆」覚え書」(二宮宏之『フランス アンシアン・レジーム論—社会的結合・権力秩序・叛乱—』岩波書店、2007 年、所収)。

蓮實重彦『ゴダール マネ フーコー—思考と感性とをめぐる断片的な考察』NTT 出版、2008

年。

埴浩『フランス・ドイツ刑事法史』、信山社、1992年。

同『フランス刑事法史』信山社、2000年。

チェーザレ・ベッカリーア『犯罪と刑罰』小谷眞男訳、東京大学出版会、2011年。

正本忍「一七二〇年のマレショーセ改革：フランス絶対王政の統治構造との関連から」『史学雑誌』第110巻第2号、2001年。

松永寛明『刑罰と観衆 近代日本の刑事司法と犯罪報道』昭和堂、2008年。

宮下志朗『神をも騙す—中世・ルネサンスの笑いと嘲笑文学』岩波書店、2011年。

宮本弘典「刑事司法の原風景（二・完）—ドイツ刑法学の祖カルプツォフ—」『関東学院法学』第18巻第2号、2008年。

渡辺一民『ドレーフス事件 政治体験から文学創造への道程』筑摩書房、1972年。

渡邊文幸「法務省検察庁研究—恩赦制度と運用—」『月刊官界』第23巻第7号、1997年。

Histoire du droit de grâce en France

Maki FUKUDA

Introduction

- 1) Qu'est-ce que le droit de grâce?
- 2) Recherches antérieures sur le droit de grâce

Chapitre 1 : Le droit de grâce antique et médiéval

- 1) Le droit de grâce sous l'Empire romain
- 2) Le droit de grâce dans le Royaume de France au Moyen Age
- 3) L'opposition entre la justice et la miséricorde?

Chapitre 2 : Le droit de grâce sous l'Ancien Régime

Section 1 : Les lois monarchiques

- 1) Critique du texte de l'Ordonnance criminelle d'août 1670
- 2) Le droit de grâce dans l'Ordonnance de 1670
- 3) La procédure pour obtenir les lettres de grâce
- 4) Toute la miséricorde émane du Roi

Section 2 : De la grâce de Dieu à celle de Roi

- 1) L'erreur judiciaire et la grâce
- 2) Les rites royaux et la grâce
- 3) Le droit de grâce dans *Les six livres de la République* de Jean Bodin

Section 3 : La grâce et la formation de l'État moderne

- 1) Le Roi confie le droit de grâce aux sujets
- 2) Le droit de grâce comme un moyen pour régner sur la France
- 3) La grâce conditionnelle
- 4) Les prérogatives de grâce

Chapitre 3 : Le droit de grâce à l'époque des Lumières

Section 1 : Décadence du pouvoir royal et résistance du Parlement

- 1) Remontrance du Parlement contre la grâce du Roi
- 2) Le droit de grâce dans la réforme de Lamoignon

Section 2 : Dissentiments sur le droit de grâce et idéologie politique

- 1) Le mouvement d'abolition du droit de grâce
- 2) Les abolitionnistes et les partisans du droit de grâce

Section 3 : Le droit de grâce et la mutation de la société

- 1) Changement dans le moyen de recours
- 2) L'usurpation du droit de grâce par le peuple
- 3) Les mauvais discours contre le Roi et le droit de grâce

Chapitre 4 : Le droit de grâce sous la Révolution et l'époque napoléonienne

Section 1 L'abolition du droit de grâce et sa réapparition

- 1) L'abolition du droit de grâce
- 2) Tentatives de réapparitions
- 3) Retour du droit de grâce
- 4) Réhabilitation et grâce

Section 2 : Souveraineté et le droit de grâce

- 1) L'abolition du droit de grâce et monarchie
- 2) Le roi gracié
- 3) Du droit de grâce du peuple à celui du Parlement
- 4) Royalisme et discours sur droit de grâce après sa réapparition

Section 3 : L'établissement du nouveau régime et le droit de grâce

- 1) L'abolition du droit de grâce?
- 2) Grâce et amnistie
- 3) L'amnistie pour terminer la Révolution et son échec
- 4) Le Parlement n'a-t-il pas le pouvoir d'amnistier?
- 5) L'ouverture de l'époque napoléonienne et la clémence

Chapitre 5 : L'histoire contemporaine du droit de grâce

Section 1 : Le droit de grâce dans les lois et les constitutions

- 1) Le droit de grâce dans les Constitutions
- 2) Les procédures pour gracier

Section 2 : Les idées sur le droit de grâce au XIX^e siècle

- 1) Séparation du droit de grâce et pouvoir royale?
- 2) La grâce comme un élément de l'administration pénale
- 3) L'abolitionnisme du droit de grâce à la fin de XIX^e siècle

Section 3 : Les changements du régime et le droit de grâce

- 1) Les statistiques relatives au droit de grâce
- 2) Le droit de grâce dans le *Siècle de la réforme*
- 3) Le droit de grâce et République

Conclusion

Résumé

Jusqu'à aujourd'hui, il n'y a aucune recherche au Japon sur l'histoire du droit de grâce en France. Les études japonaises ne se sont intéressées qu'à la punition et son contraire, le pardon, n'a guère été mentionné dans les dissertations. En France, plusieurs thèses ont été présentées principalement entre la seconde moitié du XIX^e siècle et le début du XX^e siècle. Cependant, ces recherches n'ont éclairé que l'aspect institutionnel et sa réalité n'a pas encore été traitée. A partir des années 1980, de nouvelles études, comme *Les fictions dans les archives* de N. Z. Davis, ont dévoilé les actions du peuple relatives aux crimes en utilisant les lettres de grâce. Mais, de telles études, ayant pour le but de découvrir la criminalité ou la vie du peuple, n'ont pas beaucoup approfondi la question du droit lui-même.

Dans ce travail, nous explorons l'histoire du droit de grâce en lui-même. En cours de recherche, nous avons trouvé qu'il n'y avait que peu de mentions sur la question du régime quand le droit de grâce a été en 1791, l'année juste avant la suppression de la monarchie. Toutefois, en considérant le lien entre ce droit, qui a été tenu de toute antiquité pour « le droit divin », et les rois d'Ancien Régime, il semble que l'abolition du droit de grâce est le fruit de l'établissement de la République.

De ce fait, nous pouvons logiquement nous demander si, dans ce pays, le droit de grâce a évolué avec les mutations de la forme de souveraineté?

Pour répondre à cette question, il faut d'une part connaître le progrès de ce pouvoir dans le domaine du droit et, d'autre part mettre en considération les changements de régime politique. Nous discutons donc l'histoire du droit de grâce en France sous trois points de vue : celui de législation, des idées et de la réalité, selon une approche chronologique. Dans chaque chapitre, nous utilisons non seulement les recueils des lois et les œuvres des criminalistes mais aussi les procès-verbaux des séances de la législation pour découvrir les intentions ou les idées présentes sous les textes des lois. Nous avons aussi consulté les manuscrits conservés aux Archives Nationales et les journaux écrits par les contemporains afin de considérer le droit de grâce dans le contexte de la société de chaque époque.

Le premier chapitre présente l'évolution du droit de grâce depuis la République romaine jusqu'au Moyen Age. Nous y recherchons le changement de l'idée du droit de grâce en relation avec l'établissement du pouvoir de l'Empereur. Étant le « Droit des dieux », la grâce a eu un caractère religieux et politique. Sous l'Empire, ce droit a été attribué à l'Empereur, et, grâce à la notion de *clementia* considérée comme l'une des

vertus cardinales et sa similarité avec la *gratia* des dieux, ce droit s'est identifié au divin. Après l'apparition du Christianisme, la référence à Dieu a été tenue pour le dieu de cette religion.

Au Moyen Age, les pouvoirs du Pape et du Roi se sont disputés la grâce en tant que pouvoir suprême. Dans un premier temps, avec la faiblesse du pouvoir temporel, c'est le Pape qui l'a accordée face aux princes aux seigneurs. Au Haut Moyen Age, le pouvoir royal s'est élargi et le Roi a privé les autres pouvoirs de ce droit en modifiant en sa faveur les proverbes de droit romain ou canonique qui ont justifié sa souveraineté.

Dans le chapitre 2, nous examinons d'abord le texte du Chapitre XVI de l'ordonnance criminelle de 1670 sur le droit de grâce (cette loi a, pour la première fois dans l'histoire de France, prescrit systématiquement le droit de grâce) et nous expliquons la procédure de l'obtention des lettres de grâce.

Ensuite, nous montrons l'importance de ce droit comme idéologie de la monarchie absolue dirigée par le Roi qui est « l'image de Dieu sur terre » en comparant les scènes de « miracle judiciaire » au XVI^e siècle (c'est-à-dire la grâce après la « révélation de l'erreur judiciaire par Dieu au moment de l'exécution capitale ») de même qu'au XVII^e siècle la grâce royale au dernier moment du condamné. Cette idée a été utilisée aussi dans *Les six livres de la République* de Jean Bodin. Nous analysons également les usages de ce droit en relation avec les sujets pour savoir comment le Roi a réussi à acquérir leur appui.

Le chapitre 3 traite du changement du droit de grâce avec le déclin du pouvoir monarchique au XVIII^e siècle. Nous le discutons selon trois aspects : le conflit entre le Roi et le Parlement de Paris, le mouvement d'abolition du droit de grâce et la grâce forcée par le peuple.

Nous considérons dans un premier temps les remontrances de la Cour contre la grâce du Roi, qui a interrompu la procédure judiciaire. Dans un second temps, nous critiquons l'abolitionnisme des Lumières, par exemple *Le traité du délit et de la peine* (5^e éd. 1765) de Beccaria et ses oppositions. En apparence, l'abolitionnisme est le fruit de la modernisation de la société, mais la vraie différence entre les pros et les antis droit de grâce est ailleurs : la nécessité ou non de la modification du droit pénal par la grâce. Dans un troisième temps, nous voyons des cas dans lesquels les audiences ont obligé le Roi à donner la grâce juste avant l'exécution. Ici, nous observons que, pour le peuple, l'image du droit de grâce, mais aussi celle du pouvoir royal, a complètement changé.

Dans le chapitre 4, nous étudions l'abolition du droit de grâce et son

rétablissement sous la Révolution. Le droit de grâce a été aboli par le Code Pénal de 1791. Malgré la liaison présumée entre ce droit et le Roi, il n'y a pourtant aucune mention sur l'abolition de la royauté dans la discussion. Bien au contraire, les députés ont déclaré leur loyauté au Roi et la réapparition du droit de grâce en 1802, réalisée par Napoléon, a été décidée dans un tout autre contexte : l'inauguration de l'Empire napoléonien. En fait, les révolutionnaires ont aussi accordé la « grâce ». Ils ont proclamé beaucoup d'« amnisties » après la décision de l'abolition. Ils l'ont fait notamment pour établir un nouvel ordre après les conflits de la Révolution en oubliant tous les dissentiments politiques, ce qui pose la question de l'importance du droit de grâce pour la République.

Dans le chapitre 5, nous examinons enfin le droit de grâce au XIX^e siècle. Nous suivons d'abord les dispositions des Constitutions. Elles sont certes différentes selon le régime politique, mais le fond et la procédure de grâce est presque identique au cours du siècle. La grâce en ce temps-ci a revêtu de plus un plus de caractère juridique mais son image ancienne, la grâce comme pouvoir souverain, a aussi été maintenue.

L'abolitionnisme est réapparu en raison de sa similarité avec les moyens judiciaire comme la libération conditionnelle ou le sursis. Cependant, le droit de grâce n'a pas été aboli et la grâce a été très souvent accordée sous la Troisième République. Donc, nous pouvons dire que la grâce n'est pas nécessairement « royale ». La République a besoin de ce droit pour justifier son pouvoir qui a moins de légitimité que la religion ou la tradition.

Au terme de ce travail, nous démontrons donc que, paradoxalement, le régime républicain a plus en besoin du droit de grâce que la monarchie. Bien sûr, cela ne rejette pas la liaison entre cette dernière et le droit de grâce. Sous l'Ancien Régime, le Roi, avec l'intention d'exhiber son pouvoir, a parfois accordé la grâce dans les derniers moments de l'exécution publique de la peine de mort, mais la République a, en moyenne, beaucoup plus utilisé la grâce en raison de la nature de son principe de souveraineté. Le Président de la République, dont le pouvoir est issu du peuple, y a un rôle politique bien moins affirmé que celui du Roi, ce qui l'incite à plus avoir recours au « droit divin » pour justifier de sa légitimité.